艦隊決戦物語

オザワ一号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艦隊決戦物語

【Ｎコード】
Ｎ２６１８Ｆ

【作者名】
オザワ一号

【あらすじ】
１９４１年１１月、早期完成した世界最大最強の戦艦『大和』。その艦内で出会った少年兵と『大和』の艦魂、大和。二人の出会いが史実と違った世界を作り出す。そして海軍作戦のすべてを司る海軍組織、軍令部からも「真珠湾攻撃作戦」中止が連合艦隊司令長官である山本五十六大将に言い渡される。『航空機じゃ、戦闘行動中の戦艦を撃沈出来ない』と言うジンクスが生きる世界で起ったコメディー・シリアス・ドタバタ戦記。＊『艦隊決戦物語５２型』は執筆いたしません。しかし本小説の改訂版である『艦隊決戦物語２１

型』を執筆中です。よろしければどうぞ。

プロローグ（前書き）

はじめまして、小澤です。つたない文章ですがよろしくお願いします。

プロローグ

１９４１年１１月２１日瀬戸内海柱島沖

そこには日本海軍の軍艦たちが錨を下ろしていた。そんな中に山のような軍艦が1隻いた。

山のような軍艦――世界最大にして最強の超ド級戦艦『大和』。大和は早期完成が、スムーズに進み、連合艦隊の旗艦として山本五十六大将の将旗を掲げていた。

その艦内で1人の二等兵曹が危機に瀕していた。

「・・・・・・認めない」

その兵曹が呟く。

「・・・・・・こんなこと絶対」

思い詰めた表情のまま鉄の壁が続く通路をしばらく進む。そしてこの状況に対する答えがやと出てきた。いや、その答えは前からあったのだが、理性がそれを認めようとしなかった。だが、

「・・・迷った・・・・」

この二等兵曹――早川芳栄（はやかわよしえい）は認めたくない現実を受け入れることにした。

早川は1週間前、海軍兵学校を卒業して初めての艦隊勤務として『大和』に乗り組むことになった。

一応艦内見学などはやっているが、この『大和』のサイズは全長・高さともに東京駅ほどのサイズがある。新兵が乗れば迷子になってしまうことはあまり不自然じゃない。

（ヤバイ、ヤバイぞ。艦内放送で迷子のお知らせをやられる）

早川は今年で１８歳である。１８歳の少年が迷子放送される。シュールだ。

（とりあえず上に行こう、甲板に出れば何とかなる）

そう自分に言い聞かせる。

「・・・ん？」
少し離れたところにある倉庫の扉が開く。
（た、助かった～！）
とりあえず迷子放送の危機は去ったようだ。
「あの～すいません、甲板までの行き方を・・・」
そこで言葉が止まってしまう。出てきたのは、日本海軍の仕官が着る第１種軍装を着ているが、肩までの髪をポニーテールにした１４・５歳くらいの少女だった。
「・・・・・・」
少女はこっちを一瞥して歩き出す。
早川は助かりたいという理性よりさきに兵曹としての頭が回りだす。
「ま、待てっ！」
少女が振り返る。
「私？」
「お前以外いないだろ」
少女の顔が驚きに変わる。
「私が見えるの？」
「？意味がわからない、それより何でこの艦に乗ってる？！」
大日本帝國は女は徴兵されていない。しかし目の前にいる少女はなんだ？
「間諜（すぱい）・・・ではないよな。」
「何言ってんですか？　私はこの戦艦『大和』の艦魂、大和です。艦魂のことは聞いたことありますよね？」
艦魂、それは艦に宿ると言われる魂。早川も兵学校でその噂を聞いたことがあった。しかし、
「そっちこそありえない！　そんなこと信じられるか！」
「じゃ私はなんですか？」
「だからそれを聞いているんだ！」
そんな答えの出ない討論を繰り広げていると、

『達する、艦内で行方不明者発生、氏名階級は早川芳栄二等兵曹、特徴は・・・』
艦内放送が迷子放送を伝える。
「・・・・・・」
早川は頭を抱えてしまう。
「もしかして」
「言うな！　何も言うな！」
自称艦魂の少女は懸命に笑うのをこらえる。完全にパワーバランスが逆転した瞬間だった。
「あ～あ、早川二曹迷子になってかわいそうですね」
「う、うるさい！　それよりお前は誰なんだ！」
と怒鳴っていると、
「・・・もしかして早川二曹でありますか？」
振り向くとそこに黒ぶちメガネの水兵がいた。
「そうだ、それよりこいつが艦内にいたんだが」
いろんな意味で助かったと思った早川。
「多分その人、私のこと見えないと思いますよ。艦魂が見えるって人は少ないらしですし」
そしたら、
「こいつってどこにいるのですか？」
「いやここに」
と自称艦魂を指す。
「・・・もしかして」
「頭は打ってないし、精神も安定している」
かわいそうなやつを見る目で視線を送る水兵の出ばなを挫く。
「とりあえず上に行きましょう」
と水兵が言う。
「ほらね、私は『大和』艦魂の大和だって信じました？」
「・・・・・・ハイ」
どうやら自分にしか見えていないらしい、これは認めるしかない。

その時艦内放送で、
『達する、艦内で行方不明者発生、氏名階級は神永(かみなが)二等水兵、特徴は黒ぶちメガネをつけて・・・』

一緒にいた水兵も迷子とわかり、大和が道案内をする。
「着きましたよ」
「助かった」
「二曹殿、知っていたならなんで迷子なんかに・・・・」
神永は早川が道案内をしたと思っている。そんな神永を無視する形で早川は、
「大和、ありがと」
と微笑みかけ大和の手を握る。大和の顔がほんのり朱に染まる。
「べ、別にいいです。私の中で遭難者がでるのはいやですから」
それを不思議そうに眺める神永。

これが物語の始まりだった。

プロローグ（後書き）

ご意見・感想お待ちしています。

第1話　作戦中止（前書き）

プロフィール
早川芳栄（はやかわよしえい）
身長　１６８ｃｍ
体重　５６ｋｇ
年齢　１８歳
階級　二等兵曹
好きなもの　艦魂（友達として）・日本・戦艦
嫌いなもの　仲間が傷つくこと・戦争

大和
身長　１５６ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）　１４・５歳
好きなもの　早川（恋愛的に）・日本
嫌いなもの　ほかの艦を見ている早川・××日間△大会

第1話　作戦中止

・・・ここはどこだ？俺は確か最上甲板にいたはずだ。だけどここには天井がある。体が思うように動かない。それに頭の回転が恐ろしく遅い。

「気がついた？」

声がした方を見ると金髪碧眼の少女がいた。そいつを俺は知っている。

「・・・日進（にっしん）」

彼女は装甲巡洋艦『日進』の艦魂日進。日進の瞳には涙がたまっている。

「・・・俺、どうしたんだ？」

日進は必死で泣くのをこらえながら、

「あんた覚えてないの？　私の甲板で敵の至近弾を受けて・・・」

そのまま日進は俺の左手を握って泣きだした。左手には感覚がない。たぶんモルヒネかなんかを使ったんだろなぁ、そう思って日進が握る左手を見る。

「・・・えっ？！」

俺の左手、人差し指と中指のところが不自然にほかの指より短くなっていた。いや、なくなっていた。

俺の意識がそこから遠のいていく。その代わり別の男の声が聞こえてきた。

「長官、長官」

瞼（まぶた）が非常に重い。無視を決め込もうと思った矢先に、

「長官、山本長官、軍令部から客人です」

軍令部という単語で仕方なく目を開ける。

長官――連合艦隊司令長官、山本五十六（やまもといそろく）大将は大きく伸びをする。

「客？誰だ参謀長」

参謀長――宇垣纏(うたがきまとめ)少将は連合艦隊司令部1の無表情として知られている。その無表情のまま、
「軍令部次長の伊藤整一(いとうせいいち)少将です」
「伊藤君が？」

「中止だと？！」
山本は怒鳴り声をあげる。伊藤の顔が緊張に染まる。
「やめるぞ！この作戦が実行されないのなら俺はこの戦争に責任をもてない！」
伊藤は軍令部総長の永野修身(ながのおさみ)大将の命令で山本に『真珠湾攻撃作戦』の中止命令を持って来ていた。
山本が理由を尋ねても、
「投機的に過ぎます」
としか言わない。
「もうよい！総長に直接聞いてくる！」
伊藤が姿を消した後、
「東京に行ってくる！」
観念した表情の宇垣が、
「長官、港にいく内火艇(ないかてい)の準備があります、少しお待ちください」
「分かっている！俺は最上甲板に行ってくる」
山本は長官室の扉を乱暴に閉めて出て行った。長官室にため息が漏れた。

「うわ～やっぱいつ見てもすごいな～」
「じ～～！」
「・・・・・・大和、効果音言いながら睨まないでくれ」
「だって！早川二曹、他の・・・」
最後はゴニョゴニョと何を言っているのか分からない。

早川と大和がいるのは最上甲板から約４０ｍの高さにある早川の戦闘配置の１５ｍ測距儀の測的所である。
今は戦闘訓練も終わり、機器の手入れをしていた。だが早川が艦魂が見えることを知っている班長は気を利かせて休んでいろと言ってくれたのである。
「あ～？最後なんて言った？」
「な、何でもないです！」
首をかしげる早川。
「にしても『大和』もいいけど『長門』や『金剛』もかっこいいよな～」
「早川二曹！じろじろ長門さんを見すぎです！」
「私がどうかしたか？」
「「へっ？」」
二人が振り向くと１９・２０歳ぐらの大和と同じぐらいの髪をおろしていて腰に軍刀を吊った女性がいた。
「長門さんどうしてここに？」
大和の顔が青くなる。
「まさか『花札３日間不眠不休大会』のお誘いですか？」
「何だよそれ？」
「読んで字のごとく３日間不眠不休で花札だけをするんです」
大和の様子だと壮烈な戦いになるんだろうな～と想像していると、
「あれは楽しかったな～、今度みんなを集めて１週間ヴァージョンでやろう」
かなり幸せそうな長門。
「あれ長門さん以外みんな体調が・・・」
「それより大和、そこの人間は？」
長門が話題を切り替える。
「早川芳栄二等兵曹であります」
一応相手は仕官服を着ているから仕官なんだろう。俺は二曹だから下士官、階級的に俺のほうが下だ。

「そう硬くなるな！私は戦艦『長門』の艦魂、長門だ！」
なんか思ったのと違うなぁ～と思っていると、
「・・・印象が違うと思っただろ」
「べ、別にそんなこと」
だが、『大和』が完成するまで『世界最強の戦艦』と各国から言われ、あの『ワシントン軍縮条約』もこの『長門』の存在が引き金になったとされる。
そんな戦艦の艦魂はきっとものすごく威厳があり、堅物なんだろうと想像していた。だが目の前にいる長戸は口調こそ指揮官として威厳があるが、温和そうな感じがある。
「・・・まさか私のこと、無口な宇宙人と思っていただろ？」
「時代を超えた発言をするなー！」
長門の問題発言を聞いていた大和が、
「それより長門さんどうしてここに？」
大和が本題に入る。
「そうだったな、思った以上に脱線した。山本大将はどこだ？」
「長官なら長官室では？」
「それがいないのだ」
「いないんですか？」
考えこむ二人。早川が、
「・・・とりあえず防空指揮所にいくか？」
班員たちがさっきからこっちをちらちらと視線を送ってくる。

遮風板に囲まれた防空指揮所、戦闘時はここで艦長が指揮を執ることもある。だが今は見張り員の姿もない。そんな防空指揮所の一角に早川たちは陣取っていた。
「そういえば長官って私たちのこと見えるんですか？」
「うーん、そこなんだ」
大和は遮風板に腰を下ろしていて少し危なっかしい。

「日進殿が言うには見えたらしい」
「日進って海防艦の？」
日本海海戦を戦いぬいた『日進』は老朽化により装甲巡洋艦から海防艦と艦種を変更していた。そして現在、除籍の話も持ち上がっているらしい。
「あぁ、しかし長官がアメリカから帰って来たころから見えなくなってしまったらしい」
「じゃあ、なんで長官に会いに『大和』に来たんだ？」
「長官が私に乗っているときに声を掛けたんだがだっめった、でも『大和』に乗って見えるようになったのではと思ってな」
駄目でもともとだ、と言うと、
「長官に『真珠湾攻撃作戦』を中止してもらいたくてな」
早川が驚きを顔と声にだす。
「真珠湾ってハワイの？」
「そうだ」
アメリカとの外交は日増しに悪化しているが、アメリカの真珠湾を攻撃する、つまりアメリカと戦争をする。戦争はまだずっと先だと思っていた早川には衝撃だった。
「・・・でもハワイまで結構あるぞ！そんなの危険すぎる！」
「そうだ、それに我々には奇襲作戦をしなくてもこれだけの軍艦たちがいる」
長門は自慢そうに停泊している仲間を見る。
「だから長官に直訴して作戦中止を訴えに来たんだが・・・肝心の長官がいなくてはな・・・」
腕を組んで考える長門。
「そうだ！ポーカーでもやって時間をつぶしてからもう一度長官室にいこう！」
「そ、そんな」
青ざめる大和。
「ポーカーってなんか賭けるのか？」

「いいだろう、私が負けたら私の軍刀をくれてやる」
「いいのか？軍刀賭けて？」
軍刀は現代の価格で約３０万円くらいの高価なものである。（自衛隊の指揮官刀は１８万する・・・どっちも作者は手が届かない）
「もちろんだ！勝てば何を賭けても問題はない！」
自信満々な長門。
「よし！俺も男だ！負けたら俺が長官に直訴してしやる！」
「・・・早川二曹やめたほうがいいです」
大和の顔は真っ青を通り越して血の気がない。
「『花札３日間不眠不休大会』のとき長門さんは無敗だったんです」
「・・・・・・」
「どうした？早川、まだ勝負もしていないのに戦意喪失か？情けない」
「・・・なんかイカサマしたのか？」
「何回も花札交換したんですが、勝ちっぱなしで・・・」
長門を見ると目が怪しく光っている。
「・・・長門さん？」
「なんだ早川」
「負けたら３本ラムネおごるにしていいですか？」
「駄目に決まっているだろ」
さも当然そうにいう長門。
「そうだ、大和も参加だ！拒否権はないぞ！」
「えっ！そんな！いやです！ぜった・・・い・・・に！！」
と身振り手振りで拒否を示す大和だったが少しオーバーに動きすぎてバランスを崩して遮風板の外に体が出てしまった。
「きゃああぁぁぁ！」
大和は重力に引きずられ、落下し始めた。
「大和！！」
早川が慌てて大和をつかもうとするが、早川の手は空をきる。
遮風板から身を乗り出して下を見ると大和が落ちるとこが見えた。

その下には一人の仕官が歩いていた。
時間の感覚がいやに遅く感じられた。

第1話　作戦中止（後書き）

作者「『艦隊決戦物語』を読んでくださってありがとうございます」
大和「いいんですか？私出ちゃって」
長門「なに言ってるんだ？大和」
大和・作者「「長門さん！」」
長門「これは私たちの作品だ、これくらいゆるされる」
作者「・・・なんか横暴な艦魂がでてきましたが後書きはこれからこうしていこうと思います」
大和「大丈夫ですか？第1話書くだけで6時間くらいかかったのに」
作者「何も言わないで・・・」
長門「ただたんに草薙先生たちがやっている艦魂同盟に出たいだけだろ？お誘いもあったことだし」
大和「そうなんですか？」
作者「はい、この小説初の感想を書いてくださった草薙先生からのお誘いがありました」
長門「で、参加するのか？」
作者「・・・それはまた今度・・・」
大和「えーどうしてですか？凛ちゃんや向こうの私に会いたいです」
長門「私も向こうの艦魂と『ポーカー3日間不眠不休大会』をやろうと」
作者「同盟やるとしても長門さんは行かしません。迷惑かかりそうだから」
大和「で、なんでやらないんですか？」
作者「・・・だってまだ艦魂2人しか出てきてないし・・・」
大和・長門「「うっ！！」」
作者「と、言うわけでお誘いあいがたいのですが、今すぐに、とはいかない状態です。申し訳ありません」
長門「だがキャラが増えれば同盟に参加するんだな？」

作者「もちろん！参加します」
長門「この作者は結構へたれなので今しばらく待ていてほしい、迷惑を掛けてすまない草薙先生」
作者「では、次回予告、最上甲板から４０ｍの高さから落ちてしまった大和、そして山本長官は？」
大和「ご意見・感想待っています」

第2話　山本の決断（前書き）

プロフィール
長門
身長　１６９ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）　１９・２０歳
好きなもの　ギャンブル・日本・連合艦隊
嫌いなもの　ギャンブルで負けること・アメリカ

日進
身長　１６５ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）１７・８歳
好きなもの　山本・日本
嫌いなもの　待機・アメリカ・ロシア

第2話　山本の決断

山本は最上甲板を歩いていた。

（でもできることなら、アメリカとは戦争したくないな）

山本は2回アメリカに駐在経験がある。そのとき山本はアメリカの工業力を目の当たりにして、アメリカと日本が戦争すれば日本は負けると思っていた。

（しかし、実戦部隊の長官として戦争を遂行せねばならん）

そこで山本には秘策があった。

（アメリカに勝つことはできん、講和を引き出すしかない。そのために真珠湾に居る米太平洋艦隊を航空隊で撃滅させ、太平洋各地を占領。その返還を理由に講和。それ以外日本が生き残る道はない）

山本は立ち止まり東京の方を見る。

（軍令部総長は艦隊決戦を望んでいるようだが、日本海海戦のようなことはもうできんよ）

艦隊決戦だと大きな被害を受けるかもしれない。それに今の航空機や航空魚雷、爆弾の性能も高い。いつか航空機が戦艦を撃沈する時代がくる。山本は確信していた。

この泊地――柱島泊地を見渡す。大小それぞれの艦艇が見える。ちょうどそこに呉軍港から軍艦がやってきた。それは『日進』だった。それを見た山本は、

（そういえば日進は元気だろうか？）

山本はアメリカに行ってから日進が見えなくなりだした。霞ヶ浦の航空隊副長をした後、軽巡洋艦の『五十鈴』艦長をやったが、五十鈴の姿を見たがない。

（『赤城』にも乗ったが艦魂には会えなかったなぁ）

山本はその後、連合艦隊司令長官になるまでほとんど軍政畑を歩いてきた。

（長官に選ばれたのは軍内部にいる対米開戦論者から俺が暗殺され

ろのを避けるため。そんな理由で長官になるやつは見えなくなって当然か？）
感慨に耽っている山本は頭上から何か来る気がした。
「な、何だ？」
空を見ても雲が少し浮かんでいるだけである。
「気のせいっ！！」
山本は何かに叩きつけられた。

少し時間がさかもどる。
「大和！」
必死に手を伸ばす早川。
「きゃああぁぁ！」
落ちる大和。
「おい！下にいる士官に当たるぞ！」
その仕官がこっちを見上げている。
大和は爆撃機が落とした爆弾のように落ちる。
「大和・・・」
目をつぶる早川。大和は落ちる。士官目指して。
そして仕官は運が良かったのか大和の体全体がぶつかることはなかったが、手の甲が裏拳状態で炸裂する。
恐る恐る下を見る早川。そこにはしりもちをついた大和が腰をさすっていた。
「へっ？」
我ながら間抜けな声だと思った。
「あの仕官は大丈夫か？」
「いや、士官もそうだが大和の心配しろよ」
「艦魂ならこれくらいの高さから落ちても普通はなんともないぞ」
「・・・・・・」
もう絶句である。

「早く下に行くぞ！」
「・・・・・なんかなぁ」
早川は階段に向かおうとするが、
「どこ行く気だ？」
「どこって階段だよ、下士官の俺はエレベーターは使えないからな」
『大和』には艦橋にエレベーターがあるが、それは仕官用なので階段で降りるしかない。
「いいからつかまれ！」
手をだされる。
「・・・？」
「遅い！」
長門に手をつかまれる。暖かい手だった。その瞬間、長門の体が光に包まれる。そして自分も。
気がつくとそこは最上甲板だった。
「な、何がおこった？」
「瞬間移動だ！＜独立機動艦隊『紀伊』―連合艦隊大勝利！＞や＜艦魂年代史～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～＞を読んだことはないのか？！」
「まて！いいのか？草薙先生や黒鉄先生の許可ないぞ！」
「これを読んでいる諸君、この2作品もいいが、他の小説もすばらしいぞ！読み終わったら是非読んでみろ！」
「話聞け！」
「大丈夫だ！怒られるのは作者だ！」
横暴だ・・・作者はこんな子に育てた覚えはありません！
「・・・それより大和、大丈夫か？」
「はい、私は大丈夫ですが・・・」
仕官を見る。倒れこんでいた。青ざめる一同。
「・・・この人・・・長官だ！」
仕官――山本はぴくりとも動かない。
「い、急いで医務室に行きましょ！」

「そ、そうだな」
「待て、大和、長官の頭に裏拳しなかったか？」
「あ、あれは事故です！不可抗力です！」
アタフタする大和。
「責めているわけじゃない、頭を打っているなら動かさないほうがいい」
さすがもと連合艦隊旗艦である。落ち着いて指示をだす。
「早川は衛生兵をよんでこい、大和は艦魂の能力で氷と包帯は出現させろ！」
「「はいっ！」」

・・・ここはどこだ？俺は確か最上甲板にいたはずだ。だけどここには天井がある。体が思うように動かない。それに頭の回転が恐ろしく遅い。・・・と言うかかなり痛い。
「気がついた！」
少女の声。
「・・・日進？」
頭を動かして確認する。そこには一人の兵――下士官と二人の少女。
「・・・君たちは？」
「君たちとは私のことが見えるのですか？」
「艦魂だね、どこの艦だい？」
「私は『長門』艦魂、長門です、長官」
「私は戦艦『大和』の艦魂大和です！」
順に挨拶する大和たち。
「君は？」
早川を山本をさす。
「じ、自分は第１０分隊所属、は、早川芳栄二等兵曹であります！」
山本の存在は早川たち、二曹からすれば雲上人である。緊張するのも無理はない。
「俺はどうしたんだ？最上甲板に出て内火艇を待って・・・」

それからどうしたんだ？　首をかしげる山本。
「それより長官、連合艦隊艦魂代表としてお話が」
「なんだね？」
とりあえず自分が山本を攻撃（？）したことについての話がそれたので安堵する大和。
「『真珠湾攻撃作戦』を中止してください」
長門の発言に山本の顔色が変わる。
「ならん！航空隊による太平洋艦隊撃滅、真珠湾攻撃なしに対米戦はできない！」
「しかし長官！　我が海軍は何年も前から艦隊決戦用の作戦、『漸減邀撃作戦』を考えその考えを元に艦隊整備をしてきました！それを無駄にするおつもりですか？」
『漸減邀撃作戦』、それは出撃してくるだろう、アメリカ太平洋艦隊を潜水艦・航空機・駆逐艦たちに襲撃させ、敵主力艦の数を『漸減』、すこしでも減らしそれを戦艦部隊が迎え撃つ『邀撃』、する作戦。
「戦艦の君たちには悪いかもしれないがこれからは航空機の時代だ。この戦争に生き残るには戦艦による艦隊決戦より、航空機による戦いのほうが効率がいい」
長門の中で何かが切れた。
「つまり、私たちはもう用無しだと！」
長門は腰の軍刀を抜こうとする。
「長門さん！落ち着いてください！」
「放せ大和！悔しくないのか？大艦巨砲主義の頂点に君臨している貴様は？」
「長官！転進してください！」
長門を押さえる早川が言う。
「いや！総長を説得する前にこいつを説得する！」
もはや山本と長門の関係はアメリカとの関係よりも悪化していた。
そんな時、

「姉上なにをしている！？」
そこには１４．５歳くらいの綺麗な黒髪を腰までながした長髪の少女が長門を取り押さえ、首の後ろをトンッ！　と叩く。長門は糸の切れた操り人形のように倒れこむ。
みんなが唖然と見ていると、
「姉上が無礼を働いたこと、許してくだされ」
ペコリと頭を下げる。つられて早川たちもお辞儀する。
「あのー君は？」
早川が尋ねる。
「某（それがし）は『長門』型戦艦２番艦の『陸奥』艦魂の陸奥」
陸奥は長門を器用にベッドに寝かせる。
「・・・悪いが俺は出かける」
山本が立ち上がる。
「待たれよ」
陸奥が呼び止める。
「何だ？」
「どこに行くか知らぬが、某らが見えるなら日進殿に会われよ」
「日進に？」
予想もしていない名前が出てきて驚きを表す山本。
「長官室にいるはずだ」
山本は、長官室にむかって歩き出す。

長官室の扉を山本が開けると、金髪碧眼の少女がいた。
「日進！」
「高野（たかの）！」
山本はもともと高野五十六（たかのいそろく）という名前だったが山本家に養子に出され、『山本』を名乗るようになった。

二人は長官室を後に『大和』の防空指揮所で酒を飲んでいた。
「あん時もとこうやって星を見るは久々だね」
「そうだな日進、まさかその次の日に左指が2本もなくなるとは思わなかった」
山本は改めて日進を見る。艦魂は年をあまりとらないとういが、日進はあの時のままだ。でも俺は変わったなぁ、日本海海戦のときには連合艦隊の指令長官になるとは思わなかった。苦笑いを浮かべる山本に、
「どうした高野？私を見つめているとは」
「別に見つめているわけじゃないさ」
「海の上だからって浮気してんなよ」
「ちょっと待て！浮気だなんて」
「知ってるよ～高野に愛人がいることくらい～」
史実だと山本はミッドウェー海戦前に病身なのに愛人に会いに行くといったエピソードがある。
「まったく、油断ができんな」
「ふふふ、それより高野」
「どうした」
「聞いてるよ、戦争するんだね」
寂しげな日進の横顔。酒のせいかほんのり赤い。
「あぁ、そうだ、日本はこれから戦争をする」
「高野は飛行機が好きだからね、空母を主力に戦うのだろ？」
「そうだ、じゃないと戦争に・・・」
「みんな立派だねぇ」
泊地にいる軍艦たちを見渡す日進。
「あの時も日本をロシアから護るためにみんな全力で戦った」
「あぁ、みんなすごかった」
あの海戦の前日のみんなは刺し違えても日本を護ると言っていた。
俺もそうだった。それで帰ってこないやつもいた。
「私は老朽艦だから山本が言う飛行機のことはよく分からない」

日進は真っ直ぐ山本を見る。
「でも、『漸減邀撃作戦』は日本海軍の艦艇すべてが一丸になれる作戦だと思う。空母は凄いけど扶桑たちはあの速力についていけない。待機って私たち艦魂からすれば耐えられない屈辱、戦艦は主砲で敵艦を撃ってこそ存在意義が生まれる。彼女たちから存在意義をとらないで・・・」
「日進・・・」

翌日
「黒島主席参謀、ちょっといいか？」
急に声を掛けられた黒島亀人（くろしまかめと）大佐は、
「なんでしょう？長官」
奇人として知られる黒島はその奇行ぶりに『変人参謀』と言われることがある。学校のクラスにいる『頭はいいがなんか変人』というタイプの人間である。
「今日のよるはあいているか？」
「あいてますが・・・」
「ならいい、１１時ごろ長官室に来てくれ」
「長官・・・そのようなご趣味が・・・」
黒島が数歩引く。
「こんな奇人な大将が長官だったとは・・・世も末ですな」
しんみり言う黒島。
「主席参謀？勘違いをしているようだが、それに君に奇人と言われたくない」
「では何のために？」
「『日本を賭けた戦い』をする」
「日本を？」

長官室
「長官はおりますか？！」
長門が陸奥大和を引きつれて扉を開ける。
「ノックくらいしたらどうかね？」
昨日と違い優しげな表情の山本。
「長官！　『真珠湾攻撃作戦』を中止してください！」
「姉上それでは昨日と同じ様なことになりますぞ」
「そ、そうですよ」
陸奥と大和が長門を落ち着かせようとするが、
「ええーい、うるさーい！」
ガシッ！！　陸奥が長門の腕をつかむ。
「姉上、いい加減にしてください」
そのまま長門の腕を絞め上げる。
「あだだだだ！陸奥やめ、あだだだ！」
「実はそのことなんだが」
「中止で、あだだだだ！！」
「陸奥、まず姉を放してあげなさい」
陸奥が手を放す。
「俺は真珠湾をやる」
「長官！」
「だが戦うのはお前らだ」
「・・・・・・」
だまる長門。
「だから勝負だ！」
「勝負・・・ですか？」
「望むところだ」
長門が軍刀に手を掛ける。
「血なまぐさいことは嫌いだ。だから・・・」
そういいながら机の引き出しからカードを取り出す。それはトランプだった。

「日本を賭けたポーカーをしよう」
山本は自信満々に言った。
「・・・くふふ、はははは、面白い！私にギャンブルで勝負そようとは」
「長門さんは連合艦隊１のギャンブラーですよ」
大和が忠告をいれる。
「悪いが俺はアメリカにいた時、勝ちすぎてカジノへの出入り禁止をくらったんだ。負けるはずがない」
「でも～」
圧倒的に不利だと思う大和。
「この勝負、分からない」
「どうしてです？陸奥さん」
「姉上が賭け好きになったのは長官が長門に乗ってから」
「うっ・・・たしかに分からなくなりました」
「時間は今日の夜１１時、二人だけじゃつまらんから俺は黒島を呼ぶ！」
「黒島は我々が見えないのでは？」
陸奥が至極普通な質問をする。
「そのことなら大丈夫だ、そっちも誰か一人つれてこい！」
「わかた、じゃあ、大和お前だ！」
長門からの突然の指名。
「わ、私ですか？」
「そうだ、大和、貴様は連合艦隊の旗艦、日本を賭けた戦いにお前が出なくてそうする？」
「きまりだな」
山本と長門の目が怪しく光る。

第2話　山本の決断（後書き）

作者「みなさん今回も『艦隊決戦物語』を読んでくださりありがとうございます」
大和「じ～～！」
作者「・・・・・・・お願いですから、効果音言わないで、それと睨まないで・・・」
大和「私を防空指揮所から落としておいて何言ってんですか！？」
作者「まぁ、無事だったんだし・・・」
大和「・・・・・・」
ゴゴゴゴゴ・・・・・・。
４６ｃｍ主砲がこっちを睨む。
作者「え？ちょ・・・」
大和「いいですか？」
作者「話せば分かる！！」
大和「問答無用！！」
ズズーン！！
陸奥「よいのか、大和。草薙先生の後書きのようにやてしまって」
大和「いいんです！　落とした作者が悪いんです！」
日進「二人とも次回予告は？」
大和「そ、そうでした、次回は山本長官が言い出した『日本を賭けた戦い』の火蓋が切って落とされます！」
陸奥「作戦は山本長官が望む『真珠湾攻撃』か。それとも『漸減邀撃作戦』になるか」
日進「こんどこそ高野の決断が下ります」
陸奥「意見・感想を某たちは待っている、是非書いてくれ」

第3話　開戦（前書き）

プロフィール
陸奥
身長　１５３ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）　１４・５歳
好きなもの　長門・日本・早川（恋愛的？）
嫌いなもの　アメリカ・暴走した長門

第3話　開戦

柱島泊地

昼間の激しい訓練で疲労困憊の将兵達が寝静まったころ、戦艦『大和』の長官室は異様な空気に包まれていた。原因は山本が黒島にこれから始まろうとしている激戦について説明しているからだ。

「と、いうわけだ首席参謀。質問は？」

山本が机に置かれていた紙とペンを確認してから、引き出しを開け、トランプを手に取り、器用にスタンガンシャッフルを披露する。

「そう言われましても・・・・・・」

風呂に入らない黒島の顔は垢だらけである。その顔からは困惑しか映っていない。まぁ無理はない。いきなり艦の魂である艦魂と日本を賭けた戦いをする、そう言われても困る。

「なんだ？不満か？首席参謀」

「いや、長官が奇人であることがよく分かりました」

「君に奇人と言われたくないな」

山本の手の中をトランプがすべる。そのとき、

トントン

「開いているよ」

「「失礼します」」

長門と大和が入って来た。

「今回はちゃんとできたな」

感心したという感じの山本、

「なんだ？勝手に開いたぞ？」

訝しがる黒島。

「・・・長官、黒島大佐は艦魂が見ていないようだが・・・」

「そうですよ、見えていないのに勝負だなんて・・・」

「そこでだ。大和、長門、紙とペンを持って筆談してくれないか？」

「長官？」
訝かしんでいる黒島の目の前で紙とペンが空中に浮く。
「！　な、何んだ！？」
「艦魂だよ、まずは挨拶だな」
空中のペンが紙に文字を書き出す。『長門』・『大和』の文字が書き出され、
「・・・夢を見ているようだ・・・」
感心する黒島に、
「もういいか？　首席参謀」
「・・・・・・ハイ」

長官公室のテーブルに一組のトランプと大量のコインが置かれていた。
「ルールは簡単だ、ポーカーをしてコインが多いやつが言った作戦をやる」
「・・・しかし皇国の興廃がかかっていることを何もポーカーで決めることは・・・」
ペンが動く。
『黒島大佐、敵前逃亡ですか？―長門』
「・・・・・・」
だまる黒島。
「長門さん失礼ですよ！」
「さて、そろそろ時間だな」

２２００時――開戦

カードが５枚配られる。それぞれが、自分のカードを確認する。
大和はスペードのＡ・ハートのＡハートの６・ダイヤの６ダイヤのＫ。
（長門さんと長官、黒島大佐は顔をしかめている。それで私はいき

なり2ペア・・・よし！）
山本が、
「俺からだな、ビット」
山本がコインを5枚だす。山本の隣に座っていた黒島が、
「それでは、コール」
『コール―長門』
『レイズです―大和』
大和がコインを7枚だす。黒島が顔をゆがめる。
「俺は2枚捨てる」
「・・・・・・3枚捨てます」
『2枚―長門』
『1枚捨てます―大和』
そして、
「こりゃぁチェックだ」
「・・・同じく」
しかめ面の黒島。
『チェック―長門』
『チェックです―大和』
誰もビットしなかったから、カードが公開される。
「1ペアですな」
黒島がにがにがしげにカードを置く。
『私2ペアです―大和』
よし！と思ったとき、
「俺は5でスリーカードだ」
『7でスリーカード―長門』
「・・・・・・」
大和は、確信した勝ちを逃し意気消沈。黒島も初戦から敗退し顔が曇っている。さっきまで自分のコインだったコインは長門の所に集められる。

そしてまたカードが配られる。黒島の手札は、スペードの９・ハートの９・クローバーのＱ・ハートのＱとＪがある。
（よし、いいぞ）
ニヤリと笑う黒島。
『コール―長門』
『コールです―大和』
「・・・レイズだ」
山本がコインを１０枚だす。
（まさか、またスリーカードだすんじゃ・・・）
「・・・コールです」
そしてカードを引く。
（う！　さっきと状況は変わらんか・・・）
山本は余裕のある顔。長門と大和は見えないのでなんともならない。
（ここはしょうがない・・・）
『ビット―長門』
『ドロップ―大和』
「ドロップします」
戦略的撤退だな、黒島はこの結論に達した。だがゲームは進む。長門と山本はそれぞれビットとレイズを繰り返す。そして手札を公開する。
『ノウペア―長門』
「よし！ワンペアだ」
「「・・・・・・」」
レイズは欺瞞（ブラフ）だった。

そして優しさを湛えた月はいつの間にか太陽の光によって姿を消してしまった。

「山本長官、おはようございます」
長官室の扉の前で山本の従兵が山本を起こしに来た。しかし、

「・・・・・・」
いつまでたっても返事が来ない。
「長官？おはようございます！」
声を張り上げる従兵。だが、
「・・・・・・」
返事はない。
「長官！　ご返事を！　長官！」
「どうした？」
そこえ宇垣がやって来た。従兵の敬礼に宇垣は頭をそらしてそれに答える。
「実は長官のご返事がなくて・・・」
宇垣がノックをする。返事は、ない。
「どうしましょうか？」
従兵が聞く。
「・・・長官、　山本礼子（やまもとれいこ）殿がお会いしたいと」
山本礼子　は山本五十六の妻である。中で何かが動く音がした。
「　礼子がどうした？　」
現れた山本は目の下にクマを作っていた。
「・・・申し訳ありません、長官がなかなか起きなかったらしいので」
従兵を一瞥した宇垣は踵を返してしまった。
「あの～大丈夫ですか？」
長官室からは負のオーラが滾々（こんこん）と湧き出る。
覗き込むと黒島が椅子に座って寝ていた。だが、背中を床につけ、座るところに足を置いていた。従兵は艦魂が見えなかったので気づかなかったが、大和は長官専用の水が抜かれた風呂に入って寝ていた。
テーブルには高く積み重なったコインがあった。それと全部で１０枚のトランプ。
トランプはQのワンペアとKのワンペアだった。

「はぁ・・・」
ため息をつきながら山本は、
「参謀長に伝えてくれ・・・軍令部に入ってくるとな」
Qのワンペアのカードを手に取り残念そうにそれを見つめていた。

東京　霞ヶ関
この場所は現在、農林水産省が置かれているところである。農林水産省が置かれるずっと前、ここは海軍の軍政を司る『海軍省』があった。その『海軍省』の建物を間借りしている状態である『軍令部』。間借りと言っても組織としては『海軍省』と同等の力がある。
そんな『軍令部』に目の下にクマを作り、フラフラの山本が来ていた。
相手は『軍令部』のトップ、軍令部総長である永野修身（ながのおさみ）大将である。
「・・・山本さ・・・少し休んでは？」
「いや・・・大丈夫・・・です」
「そうは見えないのですが・・・」
「・・・・・・」
絶句としか言えない総長だったが、
「真珠湾のことなら・・・」
「真珠湾の中止なら知ってますよ」
驚く総長を置いて山本は話し出す。
「いや、昨日いろいろありましてな・・・『漸減邀撃作戦』をやろうと思いましてな・・・そのことを今日は伝えに来たのですよ」
「は～そういうことなら・・・」
山本が来たとき壮絶な議論は避けられないと思っていた永野はこの発言に目を白黒させていた。
「でも総長、俺はできることならアメリカとは戦いたくない」
「・・・分かっている、だが戦争は多分避けられないだろうなぁ」
しみじみと言った永野が見つめる先を木枯らしが吹いていた。

第3話　開戦（後書き）

作者「・・・終わった・・・」

　バタン！

大和「だ、大丈夫ですか？」

陸奥「仕方がない。作者はポーカーのルールを詳しく知らないのに『日本を賭けた戦い』を書こうとしていた」

大和「そ、そうなんですか？」

長門「だから、調べながら書くということをしていたそうだ」

陸奥「・・・姉上、大丈夫か？」

長門「心配するな、これしき・・・」

作者「もうだめだ・・・書けない」

陸奥「・・・休んだほうがいいな作者」

作者「うん・・・休みたい・・・」

陸奥「よし」

ゴゴゴゴゴ・・・

４１ｃｍ砲がこっちを向く。

作者「・・・？陸奥さん？」

陸奥「なんだ」

作者「４６ｃｍ砲もそうだけど４１ｃｍっていうのもやめません？」

陸奥「案ずるな、正式名称は『四十五口径三年式四十糎砲』・・・つまり４０ｃｍ」

作者「違うよ！正確には４１ｃ・・・」

陸奥「さらば」

ズズーン！！

長門「さすが我が妹だ、感想・意見待っているぞ」

第４話　壮行会（前書き）

今回は宴会です。結構、艦魂キャラがでます。

第４話　壮行会

１９４１年１２月８日

日本はこの日、アメリカ・イギリスとの平和の道を踏み外し、史実とは異なる太平洋戦争が幕を開けた。

フィリピン攻略部隊の陸軍第１４軍司令官を拝命された本間雅晴（ほんまま さはる）中将は出撃準備が忙しい中、何とか時間を作り自分の家でゆっくり休んでいた。が、

「海軍の山本さん？」

「はい、そう申しておりました。」

その休んでいた所に突然の来客。それも『海軍の山本』。『海軍の山本』と言えば連合艦隊司令長官の山本大将しか思いつかない。

「ご在宅ならお会いしたいと・・・・・・」

大将なら会わない訳にはいかない。本間が玄関にでると、

「やぁ本間さん」

「閣下！」

そこには紛れもなく山本大将がいた。それも私服で１人。

「ちょっと出師祝いに・・・どうです？」

あと手には１升瓶。

自分は中将、相手は大将。自分に拒否権はない。

家人には酒食の準備を指示する。

「いや～このような機会ができるとは・・・嬉しいですな」

「・・・・・・閣下、フィリピンの状況はどのような具合ですか？」

フィリピン攻略の長（おさ）だが初戦は台湾を基地にする海軍航空隊が主導になり、詳しい状況がつかめていない。

「上々ですよ・・・アメリカの航空隊は思ったより貧弱でした」

酒のせいか、それとも戦果のせいか山本の機嫌はこの上もなくよい。
「そうでしたか・・・・・・」
自分も酒を喉に流す。
「・・・フィリピンのことですがな・・・」
「何でしょう？」
山本はポーカーに負けてから練りに練った作戦を話す。

「そんなこと！　できません！」
「・・・陸軍の中でも知米派のあなたなら分かるはずですよ。このままなら日本は負ける」
「・・・ですが・・・それに神国日本が負けることなど・・・」
「本間さん、いい加減なこと言わないでください」
山本の頬は赤みがかっていたが目は酔っていなかった。
「そうですが・・・」
「日本のため・・・お願いしますよ」
「・・・閣下がそこまで言うなら・・・しかし東条閣下は・・・」
「東条さんはこの作戦は採用しないでしょうな」
「だったら・・・」
「だからここに来たんですよ」
山本は真っ直ぐに本間を見据える。その目は本間ではない何かを見ている感じだった。
この方は東条閣下より真剣に日本を思っている。何故だかそう本間は思った。
「それより、どうぞ」
酒が注ぎ足される。

そのころ柱島泊地では、
「俺が参加していいのか？」

「いいんじゃないんですか？」
「・・・・・・」
ここは戦艦『大和』の一室。壁には『南方部隊壮行会』の文字。読んで字のごとくこれから出撃する艦隊の壮行会が開かれていた。
本来は艦魂のみだが、特別にと、早川も誘われていた（大和に）。
「・・・やっぱ帰ろうか・・・」
「大丈夫ですよ！」
帰ろうとする早川を止める大和。そこへ、
「早川ではないか」
「陸奥もいたのか」
「連合艦隊の艦魂はだいたい参加している」
「ふーんそうなんだ」
「陸奥さん、早川二曹も壮行会に参加していいですよね？」
「某（それがし）に言われてもな」
「陸奥姉、そいつは誰だ？」
ツインテールのどう見ても陸奥より年上、１６・７歳くらいの仕官服を着た少女が近づいて来た。
「？『長門』型戦艦は３番艦はないはずだろ？」
早川が当然の疑問をだす。
「某の義理の妹の空母『加賀』艦魂の加賀だ」
『加賀』はもともと『長門』型戦艦の発展型として建造されていたが、『ワシントン条約』によって、戦艦として建造ができなくなり、空母に改装された。
「義理の妹って・・・」
艦魂も複雑なんだな～そう思っていたが、
「で、お前は誰だ？」
「俺は『大和』乗組員の早川、よろしくな」
ふーんと言いいながら、早川を見る（と言うより睨む）。
「にしても・・・陸奥より年上っぽいのに妹か・・・」
艦魂も見た目によらない。

「最初は断ったのだが、泣かれてしまってな。そう呼ばせいている」
「む、陸奥姉！　べ、別にそんなこと・・・」
「おい！　加賀！　また陸奥殿を困らせているのか」
そこへショウトカットの加賀と同い年くらいの少女が来た。
「あ、赤城さん今晩はです」
大和が挨拶をする。
「うむ、大和もいたか」
「誰なんだ？」
小声で早川は大和に尋ねる。
「空母『赤城』の艦魂の赤城さんですよ」
「何盛り上がっているの？」
赤城に続いて、金髪の長門ぐらいの年の少女が来た。その後ろには3人の少女たち。
「・・・もしかして『金剛』姉妹？」
「あなたは？」
「早川って言うらしいよ」
加賀が答える。
「ふーん、私は『金剛』姉妹の長女の金剛。ほら貴方たちも挨拶」
「姉貴、もう餓鬼じゃねんだ。言われなくても分かってる」
そう答えたのは１８・９歳くらいの陸奥までとはいかなものの長髪を下ろした少女。
「俺は、比叡。こっちは妹の榛名」
比叡は、顔はそっくりだが髪型が正反対、つまりショウトカットの少女を指す。
「ど、どうも、『榛名』艦魂の榛名です。えーっと・・・」
「榛名、落ち着いて」
大和が助け舟をだす。
「・・・・・・」
「こっちは末っ子の霧島。無口で無表情だけど仲良くしてあげて」
金剛に紹介されたセミロングの少女――霧島は１５・６歳くらい

の外見をしていた。
「よろしくな、霧島」
「・・・・・」
分かっていはいるが、なんか心が痛い早川だった。
「何々？　何で集まってるの？」
と続々と艦魂たちが集まりだし、お祭り騒ぎとなった。
「へー、早川ね～」
「私自己紹介しま～す！　『扶桑』型戦艦２番艦『山城』艦魂、山城。ただの人間には興味あり・・・」
「山城ストップ！　それ以上は駄目よ！」
そう話しているのは扶桑姉妹。扶桑は１５・６歳でボブカット。山城は同い年くらいでメガネをかけた長髪。
「お姉ちゃんこの小説、他の艦魂小説よりハ×ヒネタが多い気がする」
「気にするな日向、作者がオタクなんだ。しょうがない」
「うん、そうだね」
納得しないで日向。
「うるさいなぁ、早く紹介して！」
・・・・・・。この艦魂は『伊勢』型戦艦２番艦の『日向』艦魂の日向。１０・１歳くらいの短いツインテールの少女。その姉である１番艦『伊勢』艦魂の伊勢は１５・６歳くらいでセミロング。

「おいみんな！　遅れてすまない」
そう言って長門が扉を開ける。中ではみんな思い思いで酒やラムネを飲んだりしている。
元旗艦の私をほっといて先に飲んでいるとは、そう思ったがその和やかな空気に長門の怒りはかき消された。
（今、日本が戦争しているとは思えないな）
長門も和やかな空気の中に混ざって行った。

山本が『大和』に帰艦したのは昼ごろだった。
「話はできたのですか？」
宇垣参謀長が聞く。
「あぁ、本間さんは了承した」
「・・・では難関は後１つです」
「そうだ、こればかりは『大和』を使わなくてはな」
「そうですね」
山本の言う『難関』。それはマレー半島の南端にあるシンガポール軍港を根城とした、英国海軍東洋艦隊（さいだいのなんかん）。

第４話　壮行会（後書き）

作者「みなさんここまで読んでくださりありがとうございます。」
日向「ちょっと！　私とお姉ちゃんの紹介、超テキトーだったけど」
作者「いや、でも・・・」
比叡「そうだな、なんか後半はテキトーだった気がするぞ」
加賀「そうよ！　何あれ？」
作者「だって・・・」
金剛「みんないい加減にしなさい」
比叡「姉貴は甘い！」
金剛「プロローグを入れて５話。なのに主要艦魂キャラがなかなか出てこないし戦闘も始まらない。作者も焦ってるのよ」
作者「金剛さん・・・」
金剛「でもあれはないわよね」
作者「えっ？」
金剛「日向」
日向「はーい」
ゴゴゴゴゴ・・・
３５，６ｃｍ砲が旋回。
作者「なんか日常化してきたなぁ」
日向「いくよぉ」
作者「って、日常化しちゃ、だ・・・」
ズズーん！！

伊勢「この作者には高度な文章力を期待してなかったからあの程度でいいだろうと思っていたのだがな・・・。それよりこれを読んだ草薙先生、キャラはだいたいそろったのでそろそろ『連合艦隊極大権限保有最上級艦魂会』に参加したいと作者は思っているようだ」
加賀「意見・感想待ってるって作者が言ってたわよ。それとこれは

作者のためなんかじゃないんだから」

番外編　艦魂紹介

長門「・・・・・・。何なんだここは？」

作者「いや～、壮行会でたくさん艦魂キャラが出たのでここでまとめて一気に・・・」

長門「ほほー、少しは気が利くな」

作者「いえいえい、では早速・・・」

加賀
身長　１５８ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）１６・７歳
好きなもの　陸奥・長門・早川
嫌いなもの　アメリカ

赤城
身長　１６０ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢　１６・７歳
好きなもの　連合艦隊・日本・天皇陛下
嫌いなもの　規律が乱れているやつ

金剛
身長　１７２ｃｍ

体重　××kg
年齢　19・20歳
好きなもの　紅茶・午後の平和な一時・姉妹
嫌いなもの　お茶の邪魔をするやつ

比叡
身長　163cm
体重　××kg
年齢　18・9歳
好きなもの　日本・姉妹
嫌いなもの　アメリカ・軟弱なやつ

榛名
身長　163cm
体重　××kg
年齢　18・9歳
好きなもの　お茶・平和・姉妹
嫌いなもの　仲間を傷つけるやつ

霧島
身長　155cm
体重　××kg
年齢　15・6歳
好きなもの　???
嫌いなもの　???

扶桑
身長　160cm
体重　××kg
年齢　15・6歳

好きなもの　山城・日本
嫌いなもの　山城に深夜アニメの録画を頼まれること

山城
身長　１５５ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢　１４・５歳
好きなもの　アニメ・ラノベ・日本
嫌いなもの　初回特典を見逃した自分

伊勢
身長　１５７ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢　１５・６歳
好きなもの　日本・武道　日向
嫌いなもの　アメリカ

日向
身長　１３０ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢　１０・１歳
好きなもの　早川・伊勢
嫌いなもの　アメリカ

作者「まぁ、こんなもので・・・」

長門「せっかくこのような感じにしたのに、なんか味気ないな・・・」

作者「酷（ひど）い・・・」

長門「だからアクセス数が伸びんのだ。それに話別の読者数は2話から右肩下がり・・・」

作者「何も言わないで・・・」

長門「まったく、せっかく『極上艦魂会』に入ったのに、黒鉄元帥たちに面目がたたんぞ？」

作者「そうです、この小澤は『極上艦魂会』の兵曹長になりました！！　ドンドンパフパフ！！」

長門「効果音を自分で言うなあぁぁぁ！！」

ズズーン！！

４１ｃｍ砲発射

長門「まったく、こんな作者だがこれからも付き合ってほしい。意見・感想待っている」

番外編　艦魂紹介（後書き）

ご意見・ご感想待っています。それと読者数が伸びない作者をどうか救済してください。お願いします。

第5話　思い（前書き）

今回はマレー沖海戦突入前のお話です。艦魂しかでてきませんが最後までどうか読んでください。

第5話　思い

１９３７年ドーバー海峡

「あれが狼？」
「そうらしいよ」
ヒソヒソとイギリス戦艦『ネルソン』の甲板にいる艦魂の少女たちがある少女――日本海軍のオレンジのリボンで、髪をポニーテールにした足柄の噂をしていた。
『狼』、それはあるジャーナリストが『足柄』を見た感想だった。欧州では狼は羊などを襲う害獣。そんなあだ名を付けられた足柄は、
「・・・。本当に金剛さんが生まれた国なの？　ここは」
ハァーとため息を吐く。そこに、
「ハイル・ヒトラー。どうしたの？アシガラ」
金髪碧眼、アーリア人の相貌な少女が話しかけてきた。彼女はドイツ海軍のポケット戦艦の『アドミラル・グラフ・シュペー』艦魂のシュペー。
「・・・。シュペーさんに話すことなんてありません」
「そう？　でもお互い同盟国じゃない？　なんかあったら遠慮なく話してね」
日本は３６年にドイツと『日独防共協定』を結んでいた。
シュペーそう言ってと遠ざかって行く。
「・・・やっぱり、黄色人種は分からないな～。総統は何を考えてらっしゃるのかな～」
という声が聞こえたが無視する。
（まったく、とんだ貧乏くじだ）
足柄はドイツをよく思っていない。あんな国とつるんでいる陸軍の思考回路が全く分からない。きっとどこかショートしているんだ。そう思っていた。

「ハァー」
またため息を吐く。
(早く帰りたい。私には艦魂が見える将兵がいない。他の艦魂で仲がいいやつもいない)
「ハァー」
「そんなにため息吐くと幸せが逃げちゃうわよ」
そこには栗色の長髪のイギリス海軍の仕官服を着た少女がいた。
「・・・何でしょう？　服装から空母か戦艦の艦魂と見受けますが・・・」
「私は戦艦『レパルス』の艦魂よ」
「自分は大日本帝國海軍所属の重巡洋艦『足柄』艦魂です」
まぁ自己紹介しないと帝國の恥だと思った足柄が自己紹介を返す。
「これ、飲む？」
レパルスの手には紅茶の入ったカップ。
「いいんですか？」
「もちろん」
そう言って柔らかい笑顔を向ける。
「・・・ありがとうございます」
やっぱり金剛さんの生まれた国だ。そのことを再認識して紅茶を口に含む。
「！！　美味しい！」
素直な感想だった。
「よかった」
またあの笑顔。
「金剛さんは元気？」
「ハイ、ものすごく」
そんな他愛もない話をしていると、
「レパルスさん！　こっち来てくださ～い！」
足柄の顔が曇る。
「・・・、アシガラも一緒に行きましょう」

「えっ？　でも・・・」
「いいから、いいから」
「ちょっ！　待ってください！」
「早く早く！」
「待ってください！」
そう言うと自分のしていたオレンジのリボンをスルリと手に取ると、
「紅茶のお礼です」
リボンをレパルスに差し出す。驚いたようにそれを見ていたレパルスだが、
「ありがと」
レパルスは受け取ったリボンを自分の髪に付ける。
「私より似合ってますよ」
「それは日本人が得意な謙遜？」
「さぁ」
二人は笑いながら歩き出した。

１９４１年　シンガポール軍港

「戦争が始まったっていうのに待機だなんて・・・」
「待機も任務の内よ、ウェールズ」
「でも・・・」
ウェールズ――『プリンス・オブ・ウェールズ』艦魂。髪は金剛と同じく金髪でセミロング。ウェールズを諭したのはオレンジのリボンをした、レパルス。
「平和が一番、ねっ」
「でも、あの『ビスマルク』と死闘を繰り広げた私がこんな辺境（へんきょう）に・・・、絶対に左遷（させん）だわ」
「左遷って・・・、私も左遷されたってこと？」

「それ以外考えられないじゃないですか！　おまけに戦争が始まって2週間近くたつのに待機・・・、ありえません！」
「それはフィリピンのアメリカ軍航空隊にてこずっているからね」
この時、フィリピンにいるマッカサー大将は航空隊を使い、多大な被害を日本に与えていたが、これは別の話。
「ハァー、日本が枢軸国なんかにならなければ今頃・・・」
「そうね、日本とは正直戦いたくないなぁ」
「ですよねレパルスさん！　私たち大英帝国の敵はドイツのみ！」
「そうじゃないわよ・・・、日本とは師弟関係・・・いえ、よき同盟国だったのに・・・」
日本海軍はイギリス海軍を師として発展し、日露戦争のときは同盟国としてロシア帝国と対峙した。
そして第1次世界大戦では義勇艦隊として欧州に来てドイツのUボートと戦った。
そんな親友と言える国と戦う。レパルスはそれが悲しかった。
「レパルスさんは日本に友達がいるからってあの国をほっとくのですか？」
「別にそんなことないわよ。私は栄えある大英帝国海軍の巡洋戦艦。王室に誓って私は日本を討つわよ」
だがレパルスの顔は曇っていた。
「そうですよね、日本は悪なんですから」
そんな様子に気づかないウェールズ。
「にしても暇だなぁ」
「ならこれ読む？」
打って変わってレパルスのテンションが上がる。タイトルは『キ×の旅』。
「レパルスさん？　時代が・・・」
「気にしない、気にしない」
「まずいですよ」
「なら、＜新太平洋戦争＞は？」

「・・・・・・。名前出していいの？」
「面白いわよ～。あと＜護衛戦艦『神龍』　～護りたいものがそこにある～＞も」
「いいの？」
「いいのよ。これを読んでいるみんな～、これを読み終えてからよんでみてね～」
「さりげなく最後まで読めって・・・」
「何言ってるの？　アクセス数は日増しに悪化してるのよ？」
　そうなんです。どうか私を捨てないでください！
「・・・・・・まぁ他の小説のほうが・・・」
　何も言わないで・・・。
「まぁ、本当にこの2作品はいいわよ、みんな」
　厭(あ)きれた顔のウェールズは、
「・・・そういえばレパルスさんがオタクになってしまったのはいつなんです？」
「えっ？　そうねぇ、5年前かしら」
　またレパルスの顔が曇り、オレンジのリボンを握る。

　そのころ東シナ海

　そこには、戦艦2隻、重巡洋艦3隻駆逐艦11隻で構成された南方部隊本隊がイギリス東洋艦隊を撃滅すべく、南を目指していた。
編成は、
　旗艦『大和』戦艦『金剛』重巡洋艦『妙高』『那智』『足柄』など。
　そしてその魂である艦魂たちは今『大和』の会議室にいた。
「み、みなさん、し、質問は？」
　大和がガチガチに緊張しながら作戦の概要を説明し質問タイムに移ったところだった。
「大和、リラックス」

金剛が大和をサポートする。一同からは
「「「・・・・・・」」」
「な、ないですね？か、かい、解散！」
「もう・・・」
みんなが会議室を出て行く中、足柄はうな垂れて会議室をでる気配を見せない。
「どうしたの？」
姉である妙高が聞いた。頭に付けたオレンジのリボンがゆれる。
「山城さんに出撃中のアニメの録画頼んだんでしょ？　山城さんならちゃんとやってくれるわよ」
こう見えても足柄は山城と同じく生粋のアニメ好きである。正確的には山城のやつが伝染（うつった）のであるが・・・・・。
「アニメのことじゃないよ姉さん。平気だから心配しなくていいよ」
だが足柄の顔は曇ったままだ。
「足柄・・・もしかして、東洋艦隊のこと？」
足柄のもう一人の姉、那智が聞く。
「だから平気だって！　私は帝國海軍軍人の足柄！　敵東洋艦隊は私が撃滅する！」
「撃滅するのは大和長官でしょ？」
妙高が微笑む。
「しかしな～」
三人が見るさきには、
「落ち着いて、『人』って漢字をてに3回書いて飲むのよ」
「何回も飲んでるんですが・・・」
青ざめている大和。
「大和、よく聞きなさい。あなたはミスをしている」
「ミス・・・・・・ですか？」
「そう、薬を飲むときは何と飲む？」
「水ですよ」
「水・・・飲んだ？」

「あっ！！　忘れてました！！」
「じゃあ飲まないと」
「そうですね！　ありがとうございます！」
そんな会話をする大和と金剛。
「私たちが頑張らないといけなそうね・・・・・・」
「だな、姉さん」
「がんばろ」
決意を固める妙高姉妹だった。

「ふぅ」
大和が行った後金剛の顔は曇っていた。
「なんで・・・故郷と戦わないといけないの？」
金剛の疑問は誰にも聞こえなかった。

第5話　思い（後書き）

作者「飽きずにここまで読んでくださりありがとうございます」
大和「こ、この流れだと次話はもしかして・・・」
作者「なるべくネタばれは避けたいので詳しくはかたれません」
レパルス「ふ～んここが後書きか～」
大和「わっ！？だ、誰ですか？」
レパルス「レパルスよ、よろしくね」
大和「こ、こちらこそ」
足柄「あっ！レパルスさん！」
大和「知り合いなの？」
足柄「ハイ、１９３７年にイギリスで行われた観艦式のときに」
作者「このころに足柄は『飢えた狼』と不名誉なニックネームをもらったんですよね」
大和「不名誉？　でも狼ってかっこいいからてきな感じでつけられたんじゃ・・・」
足柄「いえ、本文にもあるとおりに狼は害獣ですから・・・」
レパルス「ごめんなさい、あっ！でも『美女と野獣』で知られているジャンク・コトーはあなたの機能美を絶賛しているわよ！」
足柄「ありがとうございます！」
作者「なんか友情って感動てきだなぁ」
大和「でも作者が言うと薄っぺらく聞こえるんですが・・・」
作者「どうせ友達はすくないよ、どうせ休日はＰＣにむかって・・・」
大和「言い過ぎてしまったなぁ・・・気を取り直して次回よ・・・」
レパルス「待って！恒例のやつがあるんでしょ？」
大和「恒例？」
足柄「そうですよ！」
作者「恒例って？」

レパルス・足柄「「これです！」」
ゴゴゴゴゴ・・・・・・
３５．６ｃｍ砲&２０ｃｍ砲旋回中

作者「なんかこの音に慣れてきたなぁ」
レパルス「いい？」
作者「まっ・・・・」

ズズーン！！

足柄「思わず撃っちゃいましたね」
レパルス「次回はいよいよ戦闘です」
足柄「運命の悪戯(いたずら)によって様々な思いを持った戦姫たちの戦いが開幕です」
大和「ご意見・ご感想お待ちしています」

第６話　マレー沖海戦（前書き）

プロフィール
プリンス・オブ・ウェールズ
身長　１６９ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）　１５・６歳
好きなもの　イギリス・紅茶
嫌いなもの　日本・ドイツ

レパルス
身長　１６８ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）　１７・８歳
好きなもの　イギリス・日本・足柄
嫌いなもの　ドイツ・アメリカ・戦争

足柄
身長　１５７ｃｍ
体重　××ｋｇ
年齢（見た目）　１７・８歳
好きなもの　日本・イギリス・アニメ
嫌いなもの　アメリカ・録画の時間設定を間違えた自分

第6話　マレー沖海戦

１９４１年

日本は国連が指示した満州国からの撤退を拒否したため、米英中欄は日本に対して経済制裁を実施する。いわゆるＡＢＣＤ包囲網である。

内容は石油輸出がストップ。石油資源が産油しない日本はこのとき喉元に白刃をつきつけられた。

日本に残されたカードは３枚。大人しく満州から撤退するか、座して死ぬこと。

満州は日本の生命線。失えば帝國に明日はない。座して死ぬのも同じ。

そして最後のカードは『アメリカ・イギリスとの戦争』、戦争となれば欧米の植民地が集まる東南アジア一帯を占領、そこで取れる石油を手に入れる。

日本は１２月８日、米英に宣戦布告。彼女たちにとって壮絶で悲惨な戦争が幕を開けた。

南方、それはもちろんアメリカの植民地であるフィリピンも攻略目標である。フィリピン攻略を任された精鋭部隊である、陸軍第１４軍指令官である本間雅晴（ほんまま さはる）中将は参謀に、

「で・・・フィリピンの状況は？」

少し不機嫌な感じだった。

「ハ、８・９日でのフィリピンに対する渡洋爆撃は大成功でした」

対してこの参謀はテンションが少しハイである。

それもそのはず、日本誇る最新鋭戦闘機『零式艦上戦闘機』、通

称『ゼロ戦』（レイ戦が正式という意見があるが作者の独断と偏見で『ゼロ』にしました。すいません）

この戦闘機の航続距離は３０００ｋｍ以上を誇る。

「マッカーサーはまだ台湾から『ゼロ戦』が離陸していることを知らずに偵察機を無駄に東に放て、空母を探していますよ」

「それはいい、俺が知りたいのはその後だ」

その後、初戦は長大な航続距離で護衛された『一式陸上攻撃機』などの爆撃により、多大な戦果を挙げたが、マッカーサーはフィリピンのルソン島に航空兵力を終結させ、『空の要塞』と言われる『Ｂ１７』爆撃機を護衛の戦闘機なしで台湾を空襲した。

結果は上々、日本はインドシナ（現ベトナム）に展開していた『海軍第２２航空戦隊』に配備された『ゼロ戦』を転進してこれを迎撃しようとしたが、多数の機銃によって、火達磨（ひだるま）になる機が続出、陸軍航空隊も動員された防空作戦が展開していた。

「はぁ～早く制空権がほしい・・・」

それは本間の切実な思いだった。

そのころ『海軍第２２航空戦隊』の本拠地であるサイゴン（現ホーチミン）

「・・・・・・」

ガタガタガタ・・・。

「指令？　少し落ち着いては？　指令の貧乏ゆすりはマグにチュード８．０はあるんですから」

指令――松永貞市（まつながさだいち）少将に参謀が話しかける。

「ふざけるな！　台湾に『ゼロ戦』をもって行かれて我が航空隊は被害続出だ！」

『一式陸上攻撃機』は航続距離を稼ごうと翼の中にも燃料タンクがある。それも装甲なし。

そのため、被弾すれば簡単に火を噴く。『Ｂ１７』とちがいこちら

の通称は『一式ライター』。なんとも雲低の差である。
「これじゃ、満足に陸軍の支援はできん・・・・・・はぁ、憂鬱だな」
今度は意気消沈。
「その気持ちをまとめて『松永サダイチの憂鬱』っていうのを作られては？　この小説より面白いかもしれませんよ？」
酷(ひど)い。
「それは当たり前だ、だがそんな暇がない。命拾いしたな作者」
当たり前って・・・・・・、
「指令！　大変です！！」
そこに一人の兵士が駆け込んできた。
「どうした？」
「偵察を行っていた部隊からシンガポールにいたはずの東洋艦隊が姿を消したそうです！！」
「！！　すぐに南方方面部隊に知らせろ！　それと索敵機のじゅん・・・」
「それは無理です。こんな悪天候じゃ・・・」
外は厚い雲に覆われていた。
「クソ・・・」

南方方面部隊、旗艦『大和』艦橋

「指令！　航空隊から入電！　『敵東洋艦隊ハシンガポール二在ラズ　貴艦隊ノ健闘ヲ祈ル』です！」
「いよいよか・・・」
そこには山本長官の姿はなく、代わりに近藤信竹(こんどうのぶたけ)中将の姿があった。
山本は『漸減邀撃作戦』を煮詰めるため、内地の『長門』にいた。
「いよいよですね、指令。おそらく敵が北上してくるな、夜中に会敵かと？」

「そうだな、見張り員には見張りを厳となせと伝えろ」
「ハイ」

そのころ早川の戦闘配置である測敵所

ガタガタ・・・
「・・・・・・」
「大和？　寒いのか？」
「いえ・・・そういうわけじゃ・・・」
大和は寒さとは別の理由で震えていた。
「・・・怖いのか？」
少し考える大和。
「おかしいですね・・・兵器なのに・・・怖いだなんて・・・」
大和にとって初めての戦闘、恐怖で押しつぶされそうだった。
「大和・・・」
確かに『大和』は兵器だ。だが大和は？
すっと早川の手が大和に伸びる。
「・・・早川二曹？」
急に早川は大和の手を握る。『大和』と違ってとても華奢な手、だけどとても暖かい。
「心配するなよ、俺が守ってやる。絶対に呉に帰れる！」
「・・・はい、でもどうやって守ってくれんですか？」
いたずらっぽい笑みを浮かべる大和。多少元気が出たようで安心するが、
「・・・・・・」
「何で何も言ってくれないんですか？　早川二曹！」
「それは、その・・・」
ヤバイ、考えてなかった。焦る早川。だが、
「・・・でもありがとうございます」
「いいよ、別に・・・」

「早川、男としてみっともないぞ・・・」
「班長」
さっきの早川だけの会話で内容を何とかつかんだ班長が、
「俺たちの配置はより正確な距離を測ることだ、そうすれば主砲が命中する。攻撃は最大の防　御だ、貴様がより正確に測敵すれば大和を守ることにもつながる。貴様たちもだぞ！」
「「ハイ！！」」
測敵所にいた全員が返事をする。
「みなさん・・・ありがとうございます」

夜中
月は雲によってこの戦いを観戦できないでいた。
緊張が高まる中、
「早川二曹」
「大和」
二人はお互いを確認するように堅く手が結ばれていた。
「早川二曹がいてくれるからもう怖くありません」
「俺も大和がいるから安心できる」
そんな時、
『敵艦見ゆ！！』
ついに東洋艦隊が姿を現した。

そのとき、東洋艦隊はまだ敵艦を発見できないでいた。それもそのはず、日本海軍の見張り員の能力は化けもじみていた。史実だとチャチなレーダーより先に敵艦を発見できたほどである。科学が精神主義に負けた一幕である。
少し話しが脱線した。そのころ足柄は、
「・・・どうして・・・こんな所で再開するなんて・・・」
目の前にいるのは多分１２月上旬に回航された『プリンス・オブ・ウェールズ』（以下ＰＯＷ）と『レパルス』である。

「なんで・・・」

「敵戦艦2見ゆ！！」

『金剛』の艦橋でも敵を視認していた。

「私は大日本帝國海軍の『金剛』あなたたちを・・・撃沈する！」

金剛の目は少女の目ではなく、一人の軍人の目になっていた。

暗い海面に太陽が写る。それは観測機が投下した吊光弾だった。

「観測機が吊光弾を投下しました！」

「よし！撃ち方用意！」

命令が反復される『大和』の艦橋。その一階上では、

「敵艦距離２５０００！」

早川が叫ぶ。大和を守りたい、そんな思いがこもった声だった。

そして、

ズズーン！！

低く質量間のある轟音と発射炎が闇を切り裂く。

観測機からは、

『遠弾２０００m、下ゲチョイ』

「な、何だ！？」

戦艦『ＰＯＷ』の艦橋にいるこの艦隊の司令官、フィリップス提督は驚きを声と顔に表す。

「前方に艦隊・・・おそらく日本海軍です」

部下の報告を聞いた艦長が、

「砲撃戦用意！」

「来たな、大英帝国新鋭艦の実力を教えてあげる」

不適に笑うＰＯＷ。そのときレパルスは、

「敵戦艦は2隻・・・ちょうど一騎打ちがだきる」

レパルスはそう言うと敵を見据える。その時、

「敵巡洋艦突っ込んでくる！」

艦隊に随伴していた妙高たちが駆逐艦を率いて突撃してきたのだ。
「くっ！　まずは巡洋艦からね」
『レパルス』の主砲が旋回し巡洋艦を狙う。そして轟音が響きわたる。

『大和』は苦戦していた。別に敵艦が強いわけだはない。ただ日本海軍の使っている光学測距儀は入ってくる光を取り入れ、それを使って距離を導き出す。夜戦の場合、昼戦の半分以下の命中精度になってしまう。つまり当たらないのだ（それは東洋艦隊も同じ）。
「ええ～い！　何をやってんだ！！」
「す、すいませ～ん！」
「私を守ってくれるんじゃないいんですか？！」
「ごめん大和～」
「謝ってないで測敵せんか！！」
「ハイィィ！！」
大和と班長に文句を言われ精神的に疲れた早川はついに、
「あ～もう、そんなに言うなら自分で測敵しろ！」
「いいです！　私がやります」
席を立つ早川、席に着く大和。大和は被っていた軍帽を逆さに被り直しレンズに目を当てる。
「距離２１５４１ｍ！」
「距離２１５４１ｍ！」
早川が復唱する。班長たちには大和が見えないから。そして、
「て、敵艦夾叉！」
「ええぇぇ！！」
その声に驚く早川、今まで月月火水木金金で頑張ってきたのはなんだったのか考えさせられる。大和はない胸を張って、
「どうですか？」
「今まで何やってたんだ？俺」
そんな疑問を抱く中、

「『足柄』被弾！」
「くっ・・・レパルスさんはやっぱり凄いなぁ」
腹と腕から鮮血を流す足柄。
「被害知らせ！」
「第３高角砲被弾！」
「機関室浸水！発揮速力２０ノット！」
「カタパルト使用不能！」
艦橋は命令と号令そして悲鳴が反復される。
「クソ、煙幕を張って退避する」
『足柄』は煙突からでる闇の中に姿を消した。足柄は今は『金剛』と撃ち合っている『レパルス』を最後まで見ていた。

「向こうは３８ｃｍ砲、私は３５，６ｃｍ砲・・・だけどお互い巡洋戦艦、口径のさはないわよ」
血に染まった金剛が『レパルス』に軍刀を向けたとたん、『金剛』の主砲が咆哮する。
「敵艦が進路を変更しました！　逃走するつもりです！」
「よし追激戦の始まりだ」
艦長がニヤリと笑う。
その時、主砲発射の音とは違う轟音が響いた。それは『大和』が被弾した音だった。
「大和！」
金剛が振り替える。火災は起こっていなかった。その時『金剛』が被弾した。
「うぐっ！・・・やってくれたわね」
『レパルス』を見つめる金剛。

「大和！　しっかりしろ！」
そこには早川しか見れない血溜まりが広がっていた。

「大和！」
「安心しろ！『大和』は同じ４６ｃｍ砲から撃たれても大丈夫なように造られている！」
だが、班長の声は早川には届かない。早川の耳に届くのは大和の苦しみを帯びたうめき声。
「早川・・・二曹・・・はや・・・かわ二曹・・・」
「なんだよ！　ここにいるだろ？　なぁ大和？　やま・・・」
「いい加減にせんか！！」
班長が早川を殴り飛ばす。
「俺たちはな、一人の人間である前に皇軍兵士なんだ！　陛下のために戦う、それが俺たちの仕事だ！　分かったら測敵をしろ！」
冷たい言葉だったがそうだ。自分たちは天皇陛下のために戦う・・・けどそれだけか？　俺は違う。俺は大和を守りたい。『攻撃は最大の防御』、
「距離２１０００ｍ！！」
早川はレンズを通して『ＰＯＷ』を睨む。
そして、
「敵艦に命中！　敵艦停止します！」
機関部をやられたのか『ＰＯＷ』は停船してしまった。

『ＰＯＷ』は艦橋に凶弾が飛び込みフィリップス提督以下は全員戦死。ＰＯＷは頭から血を流しながら、
「日本って・・・結構・・・強い・・・んだな・・・」
空を見ながら、
「死ぬのか？・・・私・・・やだなぁ」
そしてＰＯＷの意識がなくなった。

『レパルス』も『金剛』も小さくない損傷を受けていた。
「・・・どうしよう・・・アシガラからもらったリボンが・・・」
『レパルス』も艦橋が被弾し、頭から流れた血がオレンジのリボ

ンに赤黒い染みを作っていた。
「ごめんね・・・アシ・・・ガラ・・・」
そしてレパルスは気絶した。

「指令、『ＰＯＷ』『レパルス』は共に航行不能状態で、イギリス人将兵は離艦したようです」
「・・・長官にお見上げができたな」

「うーん・・・ここは？」
どうやら艦内のようであるが・・・、『自分』ではないようだ。
「レパルスさん・・・」
首を横にするとそこには、
「アシガラ！！　どうしてあなたが？　それにどうしたの？」
足柄は腕に包帯をしていた。近くには松葉杖。
「えへへへ・・・３８ｃｍ砲ってすごいですね。私の２０ｃｍ砲とは桁違いです」
レパルスはあの時巡洋艦を１隻中破させたことを思い出した。
「あなただったの？」
「・・・私でした」
ばつが悪そうな足柄。
「「・・・・・・」」
二人とも沈黙するなか扉が開いた。
「足柄さん大丈夫ですか？」
「お見舞いよ足柄」
「痛くない？」
「てか起きてることを確認しろよ」
順に、大和・金剛・妙高・那智である。
レパルスが起きていることに気づくと、金剛が、
「Ｈｏｗ　ａｂｏｕｔ　ｔｈｅ　ｆｅｅｌｉｎｇ？」

「はう？　あばうと？」
困惑する大和。レパルスに妹の仇！　と抜刀する那智を止める妙高。
「気分はどう？　って聞いたのよ」
「へー金剛さんって英語ができるんですね」
「嫌味？それ」
その光景を見て少し微笑みながら、
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ，ｉｔ　ｉｓ」
「なんて言ったんですか？」
「おかげさまでよ」
「わぁ！　日本語分かるんですか？」
「えぇ、アシガラから習ったわ」
「えへへへ」
と笑う足柄。
「アシガラ・・・ごめんね、リボンが・・・」
「気にしないでください」
「ちょっといい？」
金剛が真剣な顔でレパルスを見据える。
「あなたは・・・コンゴウさんですね？」
「ええ、私は金剛よ。『あなたたち』は今、呉に向かっているわ、これからは・・・」
「あなたたちと一緒に戦う、ですね」
「そうよ」
レパルスは足柄を見てあの観艦式で出会ったときのような笑顔で、
「あなたと一緒に戦えるのね」
「！！　ハイ、頑張りましょう！」
「いいの？　アメリカはイギリスと同盟国でしょ？」
「ええ、かまいません。この戦争はあの国に仕掛けられた戦争。日本とイギリスの友好を断っ　たのもアメリカ。正直あの国のことはよく思っていないの」

「なるほど・・・」
「それとさっき『わたしたち』って、私以外にも？」
「『ＰＯＷ』も拿捕されました」
「そう・・・あの子は？」
「まだ意識がありませんよ」
忘れ去られそうな大和が言う。
「あの子の説得は大変よ？」
「じゃあ大変なことは置いといて紅茶としますか」
金剛がどこからともなくティーセットをだす。

「いい香りね」
「光栄ですね」
ズズズズ・・・
大和が日本茶を飲むように紅茶を飲む。
「「・・・・・」」
「大和指令？紅茶は静かにのむんですよ」
「えっ？　そうなの？」
真っ赤になる大和。
「まったく・・・」
レパルスは日本語にあることわざを思い出した。

昨日の敵は今日の友。

第6話　マレー沖海戦（後書き）

作者「ここまで読んでくださり、お疲れ様でした」
金剛「今回は凄く長かったわね」
作者「二つに分けようか迷ったんですが、書いちゃいました」
大和「マレー沖海戦でこれだけなんですから日米決戦はもっと凄いんですよね？」
作者「・・・・・」
大和「作者？　どうしたんですか？」
作者「日米戦は分けます」
大和「ええー！　どうしてですか？」
作者「いや、普通に疲れたし・・・」
大和「・・・・・」
ゴゴゴゴゴ・・・
４６ｃｍ砲旋回

作者「！！　いや冗談ですよ？」
大和「本当ですか？」
作者「・・・ハイ」
大和「本当の本当ですか？」
作者「・・・ごめんなさい、やっぱ疲れ・・・」

ズズーン！！

金剛「あらあら・・・作者も結構板についてきたかんじねぇ。さて、次回は元東洋艦隊の子と連合艦隊についてよ」
大和「ご意見・ご感想お待ちしています」

第7話　決意　（前書き）

マレー沖で大海戦　敵戦艦2隻を拿捕

大本営海軍部発表　、帝國海軍は本日未明、マレー沖にて英東洋艦隊と交戦。戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』『レパルス』を拿捕せり。また敵艦隊の駆逐艦4隻中2隻撃沈、1隻大破の戦価をあげたり。

我が軍の損害は戦艦2隻小破、巡洋艦1隻中破と軽微。

スラバヤ沖にて米英豪蘭艦隊と交戦

我が海軍（高雄型重巡洋艦）はスラバヤ沖にて連合国軍艦隊と交戦、敵艦隊に大打撃を与え・・・

××新聞より抜粋

あと気付いたらアクセス数が1万を越えていました。（PVですが）

みなさま本当にありがとうございます。

これからも『艦隊決戦物語』をどうかよろしくお願いします。

第7話　決意

ある夜

ここはイギリス北部の北海。この海には軍艦が数隻うろついていた。ドイツ海軍の戦艦『ビスマルク』追撃のため、戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』・『フッド』はけたたましいウェーキを立て、漆黒の闇を切り裂く。

そんなとき、『フッド』の第二主砲塔の上に二人の少女がいた。

「海戦の心得・・・？」

質問をしたのはウェールズ。

「そうよ」

答えたのは、ウェールズと同い年くらいで、髪はセミロング。彼女は『フッド』の艦魂フッド。ウェールズの親友である。

「私たちは人を殺す兵器、戦争だからって理由じゃない。・・・・・・死んでしまった人は帰らない。だから私たちはその人たちの分まで生きないといけない。」

「・・・・・・」

「あなたもよウェールズ。どんなに辛くても、非難されても、生き恥だと言われてもどんなに大破しても港に帰る。ね？」　彼女の瞳は闇夜でも解るくらい強い決意が宿っていた。

だがその夜、彼女は死んだ。『ビスマルク』の砲弾が砲塔に直撃し弾薬庫に引火。轟沈(そくし)だった。

そこでウェールズは起きた。いやな汗をかいていた。傷が痛む。

「・・・生きているんだ・・・私・・・」

呉軍港

軍艦の出撃の時などかなり賑わうこの町は今日は、別の理由で賑わっていた　。

「おい！　来たぞ！！」

港に来ていた一人が叫びながら指を指す。そこにはマレーから帰ってきた南方方面部隊がいた。

「う～ん、日本に帰れた～」

手を前に出して伸びをする大和。見ているほうは何だかパワーを送っているように見える。

「失礼ですよ。私はパワーを送っているわけじゃありません」

そんなこと言われてもきっと勘違いされそうなのですが・・・・・・。

「そんなことありません！！」

「大和、何パワー送ってんだ？」

「・・・・・・」

大和を絶句させた早川は自分がしたことには気づかない。

「大和？　傷が痛むのか？」

『大和』はマレー沖海戦で元敵の『プリンス・オブ・ウェールズ』（以下ＰＯＷ）の攻撃で小破していた。小破と言えど『大和』の魂である大和も傷ついている。　着ている軍服の下は痛々しい包帯が巻かれていた。

「傷は平気です。それとパワーは送ってません！」

少し赤くなる大和。

「そ、そうか？」

ドキマギする早川。　そこに、

「あらあら、中がいいのね」

金剛がどこからともなく現れる。

「いちゃつくのは後にしたら？」
「那珂、本当のことでも言って良いことと悪いことがあるのよ」
「姉さん　それは・・・・・・」
順に那珂、妙高、足柄の妙高姉妹。　彼女たちも東洋艦隊によって怪我をしている。
早川は、
（・・・まだみんな子供なのに、なんで戦争で傷つかなくちゃいけないんだ？）
今、笑いあっている少女たちは東洋艦隊に傷つけられたのではなく、戦争に傷つかれた。俺は彼女たちが傷つくのに何もできなかった。

悔しい・・・。
　早川の手は自然と力がはいる。
「早川二曹？　どうかしました？」
大和が早川が急に黙ったのを気にして聞いてきた。
「えっ？　別になんでもないよ」
大和たちの笑顔を見ているとこっちの頬も緩む。
　この笑顔を守りたい。早川はあらためて決意をかため、
「・・・は、早川二曹！？」
大和の頭をなでる。
「帰ってこれたな、日本に」
「・・・はい」
　ここを桜色の空気が流れる。
「あらあら」
「お前ら人の話聞いてるのか？」
「こら、貴方もよ」「姉さんツッコムところ間違ってるよ」

　南方方面部隊は和やかな空気のまま、歓声の溢（あふ）れた呉の港に入港していった。
　その頃、２隻の戦艦が駆逐艦によって、洩航されていた。

２隻の戦艦――元東洋艦隊の戦艦『ＰＯＷ』と『レパルス』は帝國海軍の兵器として使用するため、ドックに入ろうとしていた。

戦艦『ＰＯＷ』のある１室

「ウェールズ、いい加減にしたら？」
「レパルスさんはいいんですか！？　私たちにはこれから猿が乗るんですよ？」
「私たちはそのお猿さんに負けたのよ」　「うぐっ・・・・・・」
言葉につまるウェールズ。彼女はマレーから帰還中に意識が戻り、『これから』のことを聞いた。
それいらい部屋に閉じ籠ってしまっていた。
「でも、私たちは栄光の大英帝国海軍の戦艦です。黄色い猿を乗せる艦じゃぁありません」
「今は日本海軍の戦艦よ、私たちが守る国はもう大英帝国じゃないの」
ウェールズは立ち上がりレパルスの胸ぐらを掴む。
「私たちは猿の国を守れと言うのですか！？」
「あなたは猿と言うけどこの国の人々はすごいわ、世界で初めて１６インチ砲搭載戦艦を建造したのは日本、あなたと撃ち合った戦艦は何インチ砲だと思う？　１８インチよ。これでも彼等を猿と言える？」
「・・・・・・」
黙りこんでしまったウェールズ。
「いい？　この国にいるのは猿じゃないの、大英帝国と同じ人々なのよ」
「同じ人？　なに言っているんです？　大英帝国の軍人は民間人を虐殺したりなんかしません」
日本軍が中国で何万もの罪のない人々を虐殺したことは世界中に報道されていた。

「民間人を平気で殺す国の奴らなんて人じゃありません」
部屋は沈黙にピッチリ閉ざされた。そこへ、
「お迎えに来ましたよ、レパルスさん、ウェールズさん」
足柄が現れた。

戦艦『大和』会議室

そこには長テーブルがあり、その周りを艦魂たちが座っていた。
一番奥には大和・長門・陸奥・霧島。戦艦・空母の艦魂も奥にいる。
部屋のドアがノックされる。
「おつれしました」
足柄がレパルスとウェールズを連れ来た。
「それではこれより『艦魂軍法会議』を始めます」
大和が会議の開始を告げる。（皮肉ね・・・戦争があんなにアタフタしていた彼女を育てるなんて・・・）
金剛の瞳が影る。
「まずは、自己しゅ、しょ、か、自己紹介お願いしまぁーす！！」
真っ赤になった大和は言葉の後半をヤケクソ気味に言う。
（ハァー、ここは育ってほしいわね）
金剛の思いに気付いた艦魂はいなかった。
「戦艦『ＰＯＷ』艦魂ウェールズ」
ウェールズのぶっきらぼうな自己紹介に周りの艦魂がシラケ始めた。
山城は小説を出すと会議中にもかかわらず読みだしてしまった。
まずいなぁ、金剛が大和たちを見る。長門は首を傾げ、大和の顔は不安一色に塗られていた。霧島は案の定の無表情。
そしてレパルス。
「私は茶髪・黒眼の打ち手、名前は・・・」
「ストオオォォプ！！」

扶桑が叫ぶ。
「・・・扶桑、黙れ」
（（（霧島が喋った！！））））
艦魂たちは今日が厄日だと悟った。

「・・・すいません、癖で・・・・」
すると突然山城が立ち上がり、
「×ヤナを知ってるの？」
「えぇ、ちょっと」
山城が手を差し出す。
「あなたのＳＯＳ団入団を許可してあげる。拒否したら死刑よ！」
「ＳＯＳってまだ存在してたのか・・・・・・・」
「ＳＯＳ団ってなんですか？」
「あぁ？　作者に聞け」
説明しましょう。ＳＯＳ団とは、
Ｓｅｋａｉｗｏ『世界を』

Ｏｈｉｎｉｍｏｒｉａｇｅｒｕｔａｍｅｎｏ『大いに盛り上げるための』

Ｓｈｉｐ　ｓｏｕｌ『艦魂（ここでは艦魂と訳）』
の団。略して、
「ＳＯＳ団！！」
山城、台詞とらないで・・・。
「うるさい、うるさい、うるさい！！　」
あぁ、と頭を抱える扶桑。
「まだってどういうことですか？」
「姉貴から旗艦が山城になった時に『組織改革だ！』ってな具合にな」

「すみません、本当にすみません」「気にすることじゃないわ、扶桑」
「・・・・・・どういう団なんですか？　やっぱりきちんとした組織なんですか？」
「いや、１日８時間はアニメ見ろとか限定品は同じやつを３つは買えっていう意味不明なやつだった」
「・・・・・・」
「そうそう、だから私がクーデター起こしたのよ」
「・・・成功しましたか？」
「していなかったら連合艦隊はなくなっていたわよ」
自慢気な金剛。絶句な大和。
「それより、あなたの歓迎会をするわ、早く私に来なさい、１０秒以内！」
「やれやれ」
レパルスが出ていこうとするのを、
「待ってください！」　足柄が止める。
「私も団員です、一緒に行きます！」
すると、
「私も」「私こそ！」
と半分くらいの艦魂が席を立つ。
「成功したんですか？」
「・・・ごめんなさい、まだうまく日本語が話せないみたい」
長門が立ち上がり、
「待て！　まだ会議は・・・」
「これって東洋艦隊の子が信用出来るか出来ないかを調べるのよね？」
「まぁそうだ」
山城は悟ったように、
「長門・・・、オタクに悪い奴はいない」
「なんだその確信！」

そうです！　オタクに悪い奴はいません。作者のオタクな友達には悪い奴はいません。
「・・・・・」
「行くわよ！」
山城の号令で半分くらいの艦魂がいなくなった。
それと行き違いになる形で早川が入室してきた。
「なんか随分少ないいなぁ」
「？　誰です？
ウェールズが質問する。
「えっ？　あぁ、俺は戦艦『大和』乗組員の早川芳栄二等兵曹。君は？」
「ふーん・・・日本人って思ったより人間ぽいのね」
早川は大和を見る。大和は早川に助けを求める目線を送る。・・・・
早川は気付かなかったが。
「ウェールズよ」
金剛が早川の疑問に答える。
「ウェールズ？　『ＰＯＷ』の？」
「そうよ、あなたが私を殺そうとした日本人？」
「べつに殺そうだなんて・・・」・
「嘘ね、どこの戦闘配置か知らないけど、あなたは戦場で敵のことを殺そうと思わない？　そもそも実感がない？」
「・・・・・・」
黙る早川。今まで考えたことが無かった。あの時は大和を守りたい。そう本当に思った。
でも守るために俺はこの子を殺そうとした。いや、砲弾が命中した時、イギリス人が死んだ。でも・・・、
「引き金は引いていない？　自分には関係ない？」
「・・・・・・」
「どうなの？　ねぇ？　人殺しさん」
大和が何か言おうとしたその時、

「いい加減にしろ！！」
長門がキレた。
「姉上！」
「うるさい陸奥。そもそも貴様らが石油などを輸出禁止にしなければ、あだだだだだ・・・」
陸奥が長門の腕を締め上げる。
「陸奥やめ、あだだだだだ・・・」
「陸奥、お姉さんを放してあげな」
早川が力なく言う。

――陸奥ビジョン――

「陸奥・・・『お義姉さん』を放してあげな」
（義姉・・・義姉・・・義姉・・・）
陸奥のなかで『義姉』という言葉が反復される。

「分かった、主人の命を聞くのは日本女児の本懐・・・」
「？　陸奥？」
「放せ陸奥、あだだだだだ・・・」
ボキッ！
いやな音が聞こえた。（後日『長門』の主砲の発射訓練のとき、砲塔が旋廻しないという原因不明のアクシデントが発生してドック入りとなった）
「まぁ、いいわなんか進展がないみたいだから帰るわ」
ウェールズが立ち上がる。そこに加賀が、
「逃げるの？」
加賀とウェールズはお互いに殺気を滲ませた視線を送りあう。
一触即発、その文字がよく似合う。
「お前ら少し落ち着け、加賀もそんなに睨むな」

――加賀ビジョン――

「加賀そんなに睨むな（だって君は笑顔が可愛いから）」

（可愛い・・・可愛い・・・可愛い）

加賀の中で『可愛い』と言う言葉が反復される。（注：「可愛い」は加賀の妄想です）

「しょ、しょうがないわね、分かったわ。でもあんたのためじゃないんだからね」

心なしか加賀の頬が赤い。

「加賀？」

「それじゃ」

「待ってくださ！」

「そうだ、待てよ」

大和・早川が叫ぶが無視された。

「霧島もなにか言ったら？」

早川が言う。

――霧島ビジョン――

「霧島・・・（君の思いを）何か言ったら？」

（思い・・・思い・・・思い・・・）

霧島のなかで『思い』という言葉が反復される。（注：「思い」は霧島の妄想です）

「・・・早川・・・好きだ・・・」

「えっ？　そう」

早川はこの『好き』を愛の告白とは受け取っていない。

「まぁいいや」
早川はウェールズの後を追って行ってしまった。
「あっ！　早川二曹！」
「某も行くぞ」
「しょ、しょうがないわね」
「・・・ウェールズめ・・・撃ちてし止まん」
「ちょと霧島！　なんで九六式軽機関銃もってるの？」
大和・陸奥・加賀・霧島・榛名が飛び出していく。
「お、おい！」
会議室には長門の苦痛の叫びと金剛の苦笑いが残った。

ウェールズは『大和』の第三副砲塔の脇から祖国の方角を見つめる。
（フッド・・・私は・・・）
ウェールズの頬を涙が伝う。

早川は走っていた。ウェールズから言われたことを考えながら。
（確かに俺は人殺しかもしれない・・・、でもこれは戦争だ。人を殺すのはしょうがない。でもそれだけで片付けたくない・・・）
どれくらい走ったか分からない。それくらい答えを探していた早川は、副砲塔の近くに出るラッタルを駆け上がる。そこにウェールズはいた。
血のついたイギリス海軍の士官服の袖を濡らしていた。
「ウェールズ・・・」
「！　なに？　人殺し」
慌てて冷たい言葉を吐くウェールズ。
「・・・ほら」
早川はポケットからハンカチを出す。ウェールズは何が何だか解らないようでハンカチと早川の顔を見比べる。
「・・・ほら」
差し出されたハンカチを手に取る。

ウェールズは考える。元敵兵になんで？
「？　涙拭けよ・・・それともハンカチの使い方わからないのか？」
イギリスじゃぁハンカチをどう使ってるんだ？　と半分パニック状態の早川に、
「それくらい解るわよ」
少し頬が緩んでしまう。そんな自分に驚く。あれほど嫌っていた日本人なのに・・・。
「・・・・・・あのさ」
「・・・？」
「確かに俺は人殺しかもしれない。でも俺はどうしても『あいつら』を守りたいんだ。でもそうだとたくさんの人が死ぬ。」
「戦争だからって言い訳はしない。俺は引き金を引いてないなんて言わない」
「だから、死んでしまったやつの分まで俺はどんなに辛くても、非難されても、生き恥だと言われても俺は生きる。それが俺にできることだから」
早川の瞳には強い決意が宿っていた。
フッドの顔が被る。親友の顔に・・・。
「それが・・・あなたの決意？」
愚問だ・・・そう思った。
「そうだ」
力強い返事だった。しばしお互い見つめあってしまった。夕日がそれを見ていた。
ウェールズの顔が赤いのは夕日のせいばかりじゃなかった。
そこを夕日以外に見ている連中がいた。

「早川二曹！　なに見つめあってんですか！？」
「某がいるのに」
「なにやってんのアイツ！」
「・・・鬼畜米英」
「みんなぁなんでそんな武器もってるの？」
大和は銃剣付きの三八式歩兵銃、陸奥は九七式自動砲（対戦車ライフル）、加賀は、霧島が持っていた機関銃、霧島はパンツァーファウストになっていた。
「そもそも霧島、それはまだ日本に伝わっていないというかまだ実用化されていないよ」
「・・・黙れ」
その後、赤城に海軍精神注入棒での制裁を受けたのは言うまでもない。（榛名も）

第7話　決意　（後書き）

作者「やったー！　1万だ」

大和「ユニークは・・・」

金剛「大和、ダメよ」

大和「どうしてですか？」

山城「禁則事項で・・・」

扶桑「山城ダメ！　それ以上はダメ」

長門「なんにせよ、めでたい事だが・・・随分と投稿が遅れたな」

作者「1万～♪1万～♪私の1万～♪」

長門「・・・・・・」

バキッ

ドカッ

バゴッ

グシャッ（？）

作者「すんません浮かれてました。反省します」

長門「で、なんで遅れた？」

作者「ハイ、我が家のＰＣが不調でスペースやＮキー押したりすると＼＼＼・・・て出てきて文字の変換ができなくなちゃって、ケータイで書いていたらこうなりました」
長門「それは貴様の大和魂がたらんからだ」
陸奥「姉上、それはちょと無理がある気がするのだが」
大和「そういえば他の先生がたの艦魂呼ばないんですか？」
作者「呼びたいです」
大和「じゃあ・・・」
作者「でもＰＣ不調だし・・・」
長門「だから大和魂がたらんのだ」
作者「無理言わないで」
長門「貴様に大和魂を叩き込んでやる」
ズズーン！！
榛名「う～赤城さんの制裁からみんな逃げて私だけ、って後書き終りですか？」
金剛「そうよ、それと海戦で榛名は？と思った人、榛名は座礁してドックにいました」
大和「ご意見・ご感想待ってます」

第8話　上陸（前書き）

小澤です。

更新が遅くなり申し訳ありません。

前回の『あとがき』でも書いたように、ＰＣが大破です。

南太平洋海戦の『ホーネット』のようです。

いっそのこと自沈させたいです。いや、させましょう。

と言うことで県内最大の浜、九十九里に行ってきます。

第8話　上陸

広島県呉軍港のとあるドック

冬の厳しい風、西に傾いた優しい太陽、それらと一緒に、マレー沖で傷付いた艦体(からだ)を横たえた戦艦『大和』が静かにいた。　その『大和』の１５m測距儀の測敵所には『大和』の艦魂、大和と『大和』の測敵手の早川(はやかわ)二等兵曹がいた。

「早川二曹！　ダメです！」

「別にいいだろ？！」

「いえ！　ダメです！！」

喧嘩をしていたが・・・。

事のなり起こりはまだ太陽が東に傾いた時

「早川二曹、お手紙です」

「おう、ありがとう」　水兵が早川に手紙を渡す。綺麗な封筒の手紙。封を開け、中身を確認する早川。その文書に苦笑いする。

「どうしたんですか？」

「おわっ！！」

ポニーテールが穏やかになびく大和がいた。

「何ですか？！　お化けが出たみたいに驚かないでください」

早川の反応が気に入らなかったのか頬を膨らます、早川は、「そんなこと無いって、それよりも急に話しかけるなっていってるだろ？」

そう言えば艦魂ってお化けと違うのか？　と疑問に思う早川。

「す、すいません・・・それ何ですか？」

大和の目が早川の手紙に止まる。

「あぁ、これは・・・」

「早川、第１４分隊で班長から話があるから早く行くぞ」
「わかった、すぐ行く」
　大和との会話を強制終了し、手紙を寝床に置いて戦闘配置を目指す。
「は、早川二曹！　　もう」
　大和は早川の背中をうらやましそうに見送る。そして、置いていかれた手紙に、
「・・・・・・検閲です」
　何の躊躇(ためら)いも無く手紙を手にとり、中身に目を通す。
「・・・女の人の文字」
　封筒には人目で女の人が書いた思える美しい文字。
　だが、中身は無粋な墨でほとんど塗られていた。
「・・・・・・うん！？」
　そして大和が目にしたのは『さびしい』という文字。
「なんですかこれ！？」
　殺気が宿る。
『切符が取れたから××日に呉に行く』
　そして、
「うん？」
　手紙の下には、『姉より』の文字。

　その後、大和が測敵所に突撃し、早川の上陸のことで喧嘩になってしまった。
「なんでダメなんだ？！　上陸くらいいいだろ！」
「ダメッたらダメです！！」
　終わりのない討論。
　だが物事には終わりがある。
「何しているんですか？」

「なになに？　ケンカ？」
「・・・下らないな」
やって来たのはショートカットで優しそうな少女――榛名と、ピョコピョコと動く１０歳くらいのツインテールの日向。そしてセミロングの頭に大きめの軍帽を被った伊勢の三人。
大和は三人を一別すると、
「早川二曹が上陸するって言うから・・・」
「上陸くらい良いだろ？　何で駄目なんだ」
「そ、それは・・・め、命令です。私は士官で早川二曹は下士官。上官の命令は天皇陛下の御命令です。早川二曹は陛下の御命令が聞けないのですか？」
「何で陛下が出てくるんだ？　それにお前がやってんのは職権乱用って言うんだ」
「そ、そうだよ、早川さんにも上陸させてあげたら？」
「そうだよぉ、マレーでも頑張ったごほうびだよ」
榛名・日向の迎撃にあう大和。
「くっ！　伊勢さん」　連合艦隊でも古参組の伊勢に救援を要請する。
「・・・別に良いだろ」
面倒だ、話をふるな、と言いたげな瞳が大和を眺める。
「それとあまり人間に肩入れするな、損するぞ」
そう言うと伊勢の体が光に包まれ消えた。
「お姉ちゃん・・・」
日向が不安げに伊勢が消えたところを見つめる。
「？　それより上陸は駄目です」
「あ～、そんなに言うなら一緒に行くか」
早川の負けた顔があった。
「・・・・・・」
しかし大和の顔は曇る。
「大概の艦魂小説はできるんですが黒鉄先生の作品同様に私達は上

陸出来ないんです」
「・・・、って説明でマズイ所が入ってないか？　榛名」
いろんな意味で気まずくなる。
沈黙を破ったのは大和だった。
「上陸・・・するんですか？」
上目使いで半泣き状態。
「そ、それは・・・」
ヒシッ、大和が早川の右腕に抱きつく。腕には小さいが柔らかい物が当たる
（軽巡、いや駆逐艦くらいか？）
右の鼻から鮮血がしたたる。
それに気付かない大和と榛名。
「大和ちゃん！　泣きおどしは反則です！」
早川さんは上陸するんです！、そう言うと早川の左腕に抱きつく。
（ド級戦艦は軽くある！）
今度は左の鼻から鮮血が・・・。
「なんで鼻血だしてんのぉ？」
心底不思議な感じで日向が訪ねる。何と言うか・・・無垢である。「・・・・・日向、トコロテンを押すとウニュ～って出るだろ？　アレと同じと言うか、逆らえない力と言うか・・・」
「じゃあ、私も抱きつくともっとウニュ～ってなるのぉ？」
言うなり抱きつく日向。測敵所が戦闘が有ったみたいに血で染まる。
そこに、
「テメェー！！　この早川ぁぁ！！」
ズバアアァァン！！　視認出来ないくらいの速さの鉄拳が早川に叩き込まれた。
「ひ、比叡お姉ちゃん！」
「早川ぁ！　俺の妹に何てことすんだ！！」

「べ、別にあれは・・・それに俺は被害者だ」
「黙れ！」
　そのままガダルカナルを越える激戦が数分展開した。
「ハァ・・・ハァ・・・そういえば、何で比叡は、ここに？」
　床には力尽きた早川・大和・榛名の三人。
「そうだ、榛名、姉貴が茶、飲むから来いって」
「そ、そう、なの？」

　測敵所には大和と早川。しばしの沈黙。
「・・・どれくらい陸（おか）に居るんですか？」
「・・・・・・一泊くらい」
　大和が起き上がり小指を立てた小さな手を差し出す。
「約束ですよ」
「解った、約束だ」

次の日（××日）

「また明日な」
「絶対ですよ」
　早川が舷門をくぐる姿を悲しそうに見つめる大和だった。

その頃

　大和があるドックの工廠の近くの道に人ざかりが出来ていた。
　中央には１８・９くらいの比叡のような長髪の女性と憲兵上等兵が二人。一人は２０代、もう一人は同じくらいで背が高い。
周りから哀れむ視線が注がれていた。
「で・・・女、何をしている？」

憲兵の一人が睨みながら言う。
「・・・私は待ち合わせです」
「嘘だっ！！！」
「ひぐらし×なく頃に？」
「だ、黙れ」
女性に突っ込まれた背の高い憲兵は少し、あっこの人ネタ解ってくれた、と言う感じで頬が緩む。
もう一人はため息をしてから、
「貴様、本当は諜報員だろ？　偵察でもしてたんだろ？」
「違います。私は横須賀で看護婦をしているもので、切符が取れて、海軍にいる弟に・・・」
「おい、連行するぞ」
「了解」
女性の手が捕まれる。
「！！　離してください」
「いいから来い！」
「いい加減にして下さい！」
人ざかりが減りだし、工廠の入り口に黒い下士官服をきた人が見えた。
相手も見えたらしく駆け寄ってきた。
「早く姉さんを離せ！」
「？　何だ？」
「さぁ・・・」
疑問に思う二人。
「殺されるぞ！！」
「「へっ？」」
そのとき重量感ある風を感じた。

第8話　上陸（後書き）

榛名「ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます」

金剛「紅茶、もう一杯いる？」

比叡「まさか・・・」

霧島「・・・伏線」

金剛「ネタが無かったんじゃない？　だから九十九里に」

霧島「・・・現在（１４日）雨」

榛名「でも作者さんいませんよ」

比叡「それにしても他の艦魂いつくんだ？」

金剛「うーん、年越してからじゃない？」

榛名「遅いです」

金剛「しかたないわ、ＰＣがホーネットなんだから」

榛名「お姉ちゃん、日本語が」

金剛「気にしない、それにテスト期間中よ」

比叡「・・・ん？　テステ期間中？」

霧島「・・・赤点確実」

作者「ただいま」

金剛「おかえりなさい、ホーネットは」

榛名「お姉ちゃん・・・」

作者「愛着あるから捨てるの辞めました」

比叡「何でホーネットで通じんだぁぁ！！」

ズズーン！！

金剛「あらあら、読者のみなさん、ホーネット（ＰＣ）の状態は前回の『あとがき』にあります。技術のあるかたは、コメント・メッセージよろしくお願いします。ホーネットのために」

榛名「・・・ご意見・ご感想待ってます」

番外編　二一型～戦場にメリークリスマスを～（前書き）

作者「いきなりだけどさ・・・」

大和「？　なんですか？」

作者「１０話記念とアクセス数２万突破記念を兼ねたクリスマス会をやろうと思って、ゲストに＜独立機動艦隊『紀伊』―連合艦隊大勝利！＞から凛様呼んだよ」

扶桑「・・・へっ！？　またいきなり！！」

作者「だからさぁ、メイドな凛様が浮くのを阻止したいんだけど・・・」

加賀「赤眼黒龍のようにブレスレットつけたら軍服に戻るようにしたらいいじゃない」

作者「技術と時間的に無理」

山城「・・・・・・私に任せて」

作者「いいの？」

山城「任せなさい！　足柄、団員を召集して」

足柄「あ、ハイ」

扶桑「大丈夫かしら・・・」

番外編　二一型～戦場にメリークリスマスを～

作者
「まずは報告です。『艦隊決戦物語』のアクセス数が2万突破しました」

扶桑
「作者さん、2万で祝賀会やっていいんですか？　零戦先生は10万ですよ？」

作者
「いやいやいや、零戦先生と比べたら何も出来なくなっちゃいますよ」

扶桑
「まぁ、そうですが・・・」

作者
「扶桑、それより」

扶桑
「あっ、ハイ」

作者・扶桑
「「読者の皆様、これからも『艦隊決戦物語』をよろしくお願いします！！」」

作者
「これで終わりでいいよね？」

扶桑
「そんなわけありません！！」

作者
「スンマセン、お願いだから睨まないで、お願いだから着剣した三八式歩兵銃捨てて」

扶桑
「もう・・・そういえば、凛ちゃんの歓迎会&クリスマス会の準備できたのかなぁ」

作者
「山城はしっかりしているから大丈夫かと」

扶桑
「あの子だから心配なんです。みんなに迷惑かけてないかなぁ」

ガチャ！
→扉が開く音

凛

「ふーん、ここが小澤の番外編？」
→メイド服でネコミミな凜様登場

作者
「凜様よくお越しくださいました（噂には聞いていたけど・・・・・・痛いなぁ）」

扶桑
「はじめまして、扶桑です（なんというか・・・可哀そうだなぁ）」
→哀れむ目線を送る作者・扶桑

凜
「・・・私は戦艦『紀伊』の艦魂、真名は凜よ、服のことは聞くんじゃないわよ！」

小声←
扶桑
「そういえば、なんで私達には真名が無いんですか？」

作者
「それは、めんd・・・スンマセン、サンパチを捨ててください」

凜
「何やってんのよ？　　それより他の艦魂は？」

作者
「となりの部屋で準備を整えています」

凜
「ふーん、そう？」

ガチャ

全員
「「「お、お帰りなさいませ、ご主人様」」」
→メイド・サンタコスな艦魂たち

凜
「な、何なの？！」

扶桑
「す、すいませーん！！！　本当にすいません！！」

山城
「どうしたの？　お姉ちゃん」
→何故か第三種軍装（戦闘服）

扶桑
「これはどういうこと！？　それにせっかく凜ちゃん呼んだのに！！」

山城
「フフフ・・・凜が浮くのを止めたい、しかし赤眼黒龍先生のようにはいかない。木を隠すなら森の中、メイドを隠すならメイドの中」

扶桑
「ごめんなさい、ごめんなさい、みんなごめんなさい」

山城
「お姉ちゃん、ひぐらし？」

扶桑
「もう、いや」

凜
「なんかすごいことになっているわね」

大和
「は、はじ、はじめましゅ、はじゅめまして！！　大和です！」
→サンタで真っ赤な大和

金剛
「もう、戦闘じゃないんだから落ち着いて、私は金剛よ」
→メイドな金剛

加賀
「あなたが凜？」
→またまたメイドな加賀

凜
「そうよ、あんたは？」

加賀
「加賀よ」
→睨みあうツンデレメイドたち

緊張が高まり、ついに。

加賀
「日向って艦長が好きなら、好きって言えばいいじゃない」

凜
「べ、別にそんなことないんだからね、それよりあんたは早なんとかってやつにコクったら？」

加賀
「私は早川のことそんな風に思ってないんだから」

遠くから見守る作者・山城・大和

作者
「ツンデレｖｓツンデレだと講和なんて有り得ないな」

大和
「見てないで止めましょう」

山城
「うーん、ねぇ作者」

作者
「ハイ？」

山城
「ヒロインはツンデレの方が良かったんじゃない？　　シ×ナにハ×ヒ、ル×ズ・・・人気作品はツンデレばっかり」

大和
「それより喧嘩止めないと！！　加賀さんが自分に搭載されるはずだった４０ｃｍ砲を撃ったり、凜さんが噴進砲(ミサイル)撃ったりヤバイですよ」

作者
「確かに・・・そうだ！　『大和』は事故で爆沈、早川は『加賀』の測敵手に」

大和
「いい加減にしてください」
→九九式軽機関銃を構える大和

作者・山城
「「スンマセン」」

その後、喧嘩を仲介

作者
「お、遅れましたが、（クリスマ）プレゼントです、ハイ」

凜
「使えないヤツだったらゆるさないわよ」

作者
「腕時計です（日向艦長の写真入り）」

凜
「ど、どうしてもてって言うならもらうわよ」

作者
「さすがツンデ・・・」

ズガアァァン！！
→４６ｃｍ速射砲発射
大和
「さ、作者・・・」

ガチャ！！

足柄
「大変です！！　大和（伊）さんが侵攻してきました！！」

凜
「うっ！　　マジ？」

山城
「被害は？」

足柄
「索敵中の戦車1個中隊から決別電が・・・。団長、迎撃命令を！！」

山城
「かく団員は全ての火力を持って迎え撃ちなさい！
そもそも、ハァハァしたいというやつの気がしれないわ！　ネコミミ・メイド・セーラーそれに巫女さんは確かに可愛らしい。
それは、イヤラシイことをしなくてもそれは可愛らしいのだ！！
癒されるのだ！！　それだけで満足なのだ！！　服を破る、蹂躙する、奉仕させるのは正統派のやることではない！！

そう！　ただそこにいるだけでいいのだあぁぁ！！」
→なんか演説する山城

足柄
「団長！　第５連隊から通信途絶えました！！」

山城「今行くわ！　何としても止めるわよ！！」

大和
「と、とりあえず凛さんは撤退してください」

凛
「まぁ、そうするわ」

大和
「あんまり話せませんでしたね・・・またいつかお会いしましょう、しょう！」

凛
「なんか締まらないわね・・・まぁいいわ、また今度きてやってもいいわよ」

凛は自分が来た扉の中に消えてった

山城率いるＳＯＳ団と『艦隊決戦物語』の艦魂たちはどうなるか？

多々疑問がのこるがこれでいいのだろう（「イヤイヤ、これはマズイ」って人、気のせいです）

今夜（２４日）は聖夜、艦魂・飛魂・先生方・読者の皆様。右も左解らない初心者作家の私の小説をアクセス数２万（ＰＶですが・・・）まで引き上げてくださり、まことにありがとうございます。

最後に一言

メリークリスマス

番外編　二一型～戦場にメリークリスマスを～（後書き）

草薙先生、まずＰＣの件からお礼を申し上げます。
しかし、キーボードに原因があるらしく、修理に出しました。今は１週間前にネットにつないだヤツで書いています。

伊藤先生、なんか大和（伊）さんが、かなり脇役しでしたが本当にありがとうございました。（スンマセン、かなり脇役にしてしまいスンマセン）

何か問題があればなるべく早く修正・削除いたします。

ご意見・ご感想お待ちしております。
（ふぅ～今回は砲撃されないよう・・・なんだ？空に凄い煙出しながら飛んでくるアレは・・・サンタさんの新型ソリか？・・・いや・・・ハープーン？）
ズドオオォォン！！

第9話　再開（前書き）

今回は『壮行会』で出しそびれたキャラもでます。

第9話　再開

二人の憲兵は、宙に舞っていた。
（エッ？　何された？　俺）
背の高い憲兵が薄れゆく意識の中で考える。殴られた？　いや、蹴り上げられた？　疑問が渦巻いていた頭は急に闇に閉ざされた。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　姉さん！！」
駆け寄って来た下士官――早川は、憲兵を殴り飛ばした（？）女性――早川多恵子（はやかわたえこ）に駆け寄る。多恵子は優しく微笑みながら、
「姉さん！！　舌を出すな！！　やっちまったー、なんてやらなくていいから！！」
「海軍に入ってから冷たくなったわよ、昔の芳栄なら・・・」
「姉さん、待って。お願いだから待って」
そんな早川にクスリッと笑うと、
「少し、大きくなったんじゃない？」
「姉さん・・・」
そういえば俺、『大和』に乗ってから手紙とかもやってなかったな、と反省する。　だが、家族との再会を堪能する時間はなかった。
「お、おい！！　しっかりしろ！　何があった！？」
どうやら、別の憲兵が来たようだ。新しく来た憲兵はこっちに視線を飛ばす。
「姉さん」
憲兵が歩み寄る。
「なに？」
「逃げよう！！」
早川は多恵子の手を掴（つか）むと全力で駆け出す。

「ちょっと！　見敵必戦の精神は？　軍人でしょ？」
「無理言ワナイデ、相手は憲兵だよ。いくら階級が上でも無理！」
「もう、役にたたないわね」

二人がピンチのころ、大和の所にもピンチが訪れようとしていた。
「タッカー操練・・・ですか？」
「あぁ、そうだ、準備しろ」
戦艦『大和』の１室、そこには不貞腐(ふれくさ)れていた大和、ショウトカットで、皺(しわ)一つない軍服を着こんだ１６・７位の少女――赤城。
「でも・・・私、士官ですよ？　連合艦隊艦魂司令部の長官ですよ？」
「知ってる・・・本来なら竣工２週間後くらいにやるはずだったんだがな・・・開戦とかいろいろあってずるずると来てしまっただけだ」
「でも・・・」
「うん！？　初代長官だった松島閣下が各艦が親交を深め、艦隊運動をスムーズに行えるよう考案されたのだぞ！！　それに体力作りにもなる」
「艦隊運動って航海科の人によるんじゃないんですか？　それに体力作りしても航続距離は変わりませんよ」
ウダーと机に突っ伏す大和。
「貴様ああぁぁぁぁぁぁ！！」

大和に死亡フラグが立ったころ、早川たちは、憲兵から逃れるために乗った呉線の中にいた。
「・・・・・・そういえば」
「？　何？　姉さん」
窓の外、本来は冬の海が広がっているのだが、今は戦艦『大和』

の姿を隠すために作られた壁が広がっていた。秘密兵器である『大和』の存在は軍事機密であり、軍人を合わせた国民の1握りしか『大和』を知らない。そして知られてもいけない。だからこの壁があるのだ。
「芳栄・・・何の艦(ふね)に乗っているの？」
「えっ？」
前にも書いたように『大和』は秘密兵器、家族にも喋ってはいけない。
「『長門』？　それとも『陸奥？』
「えーと・・・『金剛』」
「『金剛』ってマレー沖海戦でイギリスと戦った？　怪我はなかった？」
「う、うん平気だよ」
「なら・・・・・・よかった」

そのころ、艦魂の力で出現したタッカーに7人の戦妃がいた。
「あの～赤城司令？　なんで私が・・・」
そう言ったのは、青いリボンで髪をポニーテールにした15・6歳くらいの下士官服を着た少女――『高雄』型重巡の高雄。
「私・・・一度やりましたよね・・・呉から佐世保まで」
「問題があるのか？」
「・・・・・・イエ」
その後ろには、
「どうしよお姉ちゃん・・・ボクたち佐世保まで行くの？」
そう聞いたのは、大和と同い年くらいのショウトカットで士官服を着ている。彼女は空母『瑞鶴』の艦魂、瑞鶴。
「瑞鶴、今日は厳島までだぞうだ・・・・・話聞いていたか？」
瑞鶴の隣、後頭部におだんごの翔鶴が答える。
「あ、赤城さん？　高雄と同じことを聞くのですが・・・」

「却下だ」
「・・・・・・」
質問をしようとした左向きのサイドテールの空母『飛龍』の艦魂。
「まぁまぁ、私は飛龍さえ居ればそれだけでいいけどね」
「ちょ・・・・」
スッと飛龍に近ずく右向きのサイドテールの蒼龍。
「何でもいいが、私はこれから訓練のため出港する、飛龍に指揮権を渡す。しっかり厳島まで行ってこい」
「！　飛龍、いただきます！！」
「よし」
その後タッカーは厳島目指して進みだした。

早川たちの方に戻る。何とも忙しい、チキショウ・・・・・・。
「文句言わないで書きなさい！」
「姉さん地の文に突っ込まない」
「私、突っ込むのは地の文だけって決めてるの」
「イヤ、おかしいだろ？　ちょっと」
ちょっとだけかよ！
「それより、せっかく広島に来たんだから行ってみたいところがあるんだけど・・・」
「どこ？　姉さん」
無視サレタ・・・。
「原爆ドーム」
「無いね、それ無いね」
うーんと漏らしながら少し考える多恵子。
「じゃ厳島にしましょう」

厳島

全国に５００社ある厳島神社の総本山の厳島神社があるこの島は
『安芸の宮島』と日本三景に数えられている。
そこには早川たちの姿があった。
「姉さん何、願ったの？」
「もちろん、武運長久よ・・・・・・芳栄と、お父さんの」
「・・・・・・」
早川は中国に出征中の父の顔を思い出す。
「そういえばお父さんから手紙が来ていたわ」
「本当？　　何て」
「それがね、検閲が入ってて中は真っ黒だったんだから」
　思いだし笑いをする多恵子。
「またか・・・それじゃ生きてることしか解らないじゃないか」
俺の家族はまともに手紙が書けないのか、と呆れる早川だった。
「それより、鳥居の近くまで行ってみない？　潮も引いてるし」

「ふ～、やっと着いた」
大和が伸びをする。
「ふふふ・・・飛龍、私たちもゴールしましょう、人生（かんせい）の」
「蒼龍待って、みんなが居るのにそんなこと言うんじゃない」
「じゃ、ボクたちが居ないと言っていいの？」
「コラ、そういうことは黙ってる」
目的地に着いたことに安堵するみんな。しかし、
「てか、この道のりをまた帰らないと・・・・・・」
凹んでいる高雄だった。
「うん？　あれあそこに下士官がいる」
瑞鶴が指さす。
「そりゃ、居るでしょう」
「誰が居ようと飛龍さえいれば・・・」
「待って、すんごく待って」

う～ん、と大和が目を凝らす。見覚えのある人影、それに下士官・・・・・・。
「・・・あっ！　早川二曹！！」

「そう言えば、横須賀でね。電波少女に会ったの」
「電波？」
潮が引いたとはいえ、あたりは少し海水がある。油断していると後でいやな思いをするのは目に見えていた。
「休みをもらった時にね、記念艦『三笠』に行ったの。軍艦ってどういうのか気になってね」
「ふ～ん、そうだったんだ」
「そしたらね、軍服着た女の子がいたの。それで自分は艦魂だってね」
「・・・えっ！」
面白かったなぁ、と感想を述べている多恵子を無視して、この人も見えるのか？　と疑問が顔にも出てしまう。
「あっ、信じてないでしょ」
「いや、別に」
信じるよ姉さん、でもなんて言えばいいんだよ、そう考えていた時、
「早川二曹！　早川二曹！」
「そうそう、あんな感じだったなぁ、軍港には必ずいるのかしら？」
「何でいるんだ？」

「お～い！！」
「大和、揺らすな！　転覆する！」
「安心して、恋にはそういう局面もある、だけどね私は飛龍がいれば・・・」
「蒼龍しつこい！！」

「どうしよお姉ちゃん！」
「う～ん、ダメだろ？」
「厄日だ・・・赤城司令と目があった時から厄日だ」
頭を抱える高雄。
その後なんとか浜までタッカーはついた。

「えーと、姉さん。実はかくかく云々（しかじか）で・・・」
一応自己紹介の前に説明をいれる。
その間多恵子は黙って聞いており、大和は多恵子をじーっと見ていた。
話終えると、
「弟がお世話になっております」
礼儀正しく言われたので、みんな自然とお辞儀してしまう。
「えーと、私は大和です。早川二曹が乗っている艦の艦魂です」
「大和？　金剛じゃないの？」
早川の顔がバツが悪そうになる。そんな早川と多恵子の目があう。
「軍機だからあまり・・・」
大和に助を求めるように大和を見る。
「え？　その、あの」
言葉が見つからない大和。そこを高雄が、
「何と言うか・・・世界最大最強の戦艦・・・としか」
「そう・・・」
そして大和を見つめる。
（うっ！！　もしかして黒鉄先生の瑠璃さんみたいに独占欲強いんじゃ）
警戒する大和に、
「弟をよろしくお願いします」
「・・・・・」
早川を取られる、そう思ってしまった自分が恥ずかしかった。だから、

「まかしてください」
そして敬意をこめた敬礼をした。
「それより姉さんも憲兵には気をつけてよ」
早川が照れ隠しともつかないタイミングで発言する。
「確かにアノ手紙は・・・」
「どんな手紙？」
翔鶴が聞く。
「中がほとんど墨塗りでなんて書いているのか解らないんです」
大和の説明を聞いて高雄が、
「じゃ、憲兵や警察に睨まれているのでは？　非国民とか呼ばれてしまうのでは？」
心配ぎみな翔鶴。
「・・・・・・まぁ、ちょっと」
「呼ばれてんですか？！」
呆れる大和。
「私はただ単に思ったこと手紙に書いているだけ、この思いは誰にも消すことはできない。
いくら墨で塗りつぶされても、書いた手紙が捨てられても、思いは消えない」
いつの間にか太陽はオレンジの光を空に投げるようになっていた。
「・・・・・・ねぇ、貴女が世界で一番すごい兵器なら、早くこの戦争を終わりにして」
それはとても切実な願。
「・・・がんばります」
「戦艦だけには任せておけないな」
「そうだねお姉ちゃん。5航戦の力を見せてあげよ！」
「2航戦だって」
「傑作空母と言われる私と飛龍がいれば大丈夫」
「だ、第4戦隊だってがんばります！！」
決意を表す戦妃。

「頼もしいわね、でも芳栄もみんなも死なないようにね」
「「「ハイ！」」」

大和たちが呉に向けてタッカーを漕ぎだし、その姿を見送る2人。
「いい子たちね」
「・・・そうだよ・・・姉さん。帰ろうか」
「そうね」
前を行く弟の背中に多恵子は、
（お父さん、芳栄は立派になったよ、早く帰ってきてね）
心の中の便せんに筆をはしらせた。

第９話　再開（後書き）

作者「いてて・・・ハープーンはマジで痛い」

大和「それにしても冬休みなのに更新スピード遅くないですか？」

作者「それは、某海戦アクションオンラインゲームやってるから」

大和「要は遊びすぎってことですか？」

作者「いや、別に・・・それより新キャラがでました」

大和「話そらされた」

高雄「どうも、重巡洋艦編のメインキャラとなる高雄です」

大和「あれ？　足柄さんじゃ」

作者「いや、足柄は山城とともにＳＯＳ団として頑張ってもらいます」

高雄「と、言うことでお願いします」

作者「まぁ、単に『妙高』型より『高雄』型の方が好きなだけですが・・・」

→ボソッと呟く作者

ヒュー、ズガーン！！

→どこからともなく着弾した２０ｃｍ砲弾

高雄「・・・そういえば次回は欧州戦線です」

大和「作者曰く、日本編は2月まではフィリピンがほとんど手に入る以外何もないらしいから欧州戦線にしようとのことです」

高雄「感想と意見待ってます」

第１０話　アワビの咆哮（前書き）

えーと別にふざけてる訳じゃありません。

本当です。・・・・・・たぶん。

第１０話　アワビの咆哮

１９４１年１１月、地中海マルタ島沖合、イギリス海軍Ｈ部隊所属、戦艦『ヴァリアント』防空指揮所

「・・・・・・」

「司令、もう少しで作戦海域に突入します」

「えぇ、そうね」

部下の報告を聞いた金髪でセミロングの少女、ヴァリアントは憂鬱そうに前方を眺める。

「まったく、空軍は何をしているのでしょうかね？」

部下――軽巡洋艦『アリシューザ』の艦魂がヴァリアントをチラッと見る。

「しょうがないわ。ドイツとは持ってる戦闘機の数が違うのよ。それにイタリア空軍も出張ってきてるしね」

「でもたかが要塞ひつにですよ？」

「だから私たちが終わらせるのでしょう？　たよりにしてますよ、アリシューザ」

「了解ですよ・・・・・・それにしてもフランスはあっけなかったですね」

この時、とてもやる気のあったイタリアとドイツの共同戦線により、フランスは史実より早く3月に占領された。

その勢いのままドイツはアフリカにロンメル中将率いるドイツアフリカ軍団（以下ＤＡＫ）が英軍を駆逐しようとしていた。

ドイツはかねてからアフリカ進出を狙っていたらしく、開戦と共にシチリア島とチェニジアの中間にあるパンテレッテリア島を大物資集積所にすることを計画した。その結果ＤＡＫには滞りなく補給

を行うことに成功。

イギリスとしては何としてもこの補給線を断ち切りたい。イギリス空軍は必死の攻撃を敢行したが、ドイツ空軍によって阻止され続けた。そこで戦艦『ヴァリアント』を旗艦に軽巡1・駆逐艦5隻の艦隊を派遣した。

つまり通商破壊である。だがもう一つ、この艦隊は任務を言い渡されていた。

『パンテレッテリア島の近海にある敵要塞を撃破せよ』

ドイツ空軍とその要塞の影響で輸送船が次々と撃沈され、スエズからの補給が途絶えそうだった。そのため『ヴァリアント』以下の艦隊は要塞にたいし艦砲射撃を食らわし撃破するよう命令されたのだ。

パンテレッテリア島近海

そこには海底の火山活動によって地上に押し出された花崗岩の無人島があった。

外縁は標高８０ｍの断崖になっているこの島の頂上は平たく楯状台地で、その形から『アワビ（アバロン）』と呼ばれていた。

ドイツ軍は海に向って広がる扇形の１６ヵ所の砲門が設置、開口部は砲と共に稼動する分厚い装甲扉がある。固い花崗岩をくりぬいた要塞内部の天井・側面には５ｍの重鉄筋コンクリートの鎧で覆われ、天蓋となる楯状台地には徹甲爆弾の貫通力や炸裂力を弱める緩衝層として、固く締まった砂が１４ｍも盛られた。さらに砂中には爆弾の信管を誤爆させるため２ｃｍの鋼板を３層にわけて敷いてある。

このここで、イギリス空軍の最新鋭爆弾である１０トン貫徹爆弾でも『アバロン要塞』の天蓋は打ち抜けない。つまり航空攻撃では『アバロン要塞』は完全に破壊できない。

その『アバロン要塞』の天蓋に一人の少女が昼寝を楽しんでいた。少女は緑色の軍服は砂で茶色にそまっており、顔には迷彩っぽいデザインだった、底の平な帽子お被っていた。

その至福の一時はすぐに崩れてしまう。

「ちょっ！　何やってるの？　ハンブルク」

寝ていた少女と同じいでたち、１９歳くらいの黒髪でセミロングの少女。

「・・・・・・」

「起きなさい！！　早く！　敵襲よ！　て・き・しゅ・う！！」

そうするとやっと、

「う～ん、あと６時間」

「・・・・・・いいから起きなさい！！」

そこでやっとむっくり起き上がる。ショウトカットで髪は黒、瞳も黒であるが肌はとても白い。歳は１６くらいだ。

「・・・おはよう、ミュンヘンお姉ちゃん。朝ごはん・・・」

ショウトカットの少女――ミュンヘンは、どこからともなく拳銃の銃口をハンブルクのおでこに、ニコニコ笑顔で突き付ける。ミュンヘンの背中にはどす黒いオーラが湧き出していた。

「さぁ、今日も張り切っていこね。ハイル・ヒトラー！！」

「・・・・・・哨戒中のＵボートが敵艦隊を見つけたわ、頼むわよ」

「ハイ、解りました」

そのとたん、『アバロン要塞』の天蓋に、１６個の光の塊が現れ、光は緑色の軍服を着た少女へとなる。

「イギリス艦隊が来ているのか？」「数は？」

矢継ぎ早に質問がくる。そこに新たに光が現れる。新たに出てきた少女はドイツ海軍の士官服を着こなした金髪碧眼――つまりアー

リア人の外見で１６・７歳くらいの少女。
緑の軍服を着た少女たちは士官服の少女に敬礼をする。
「Ｕボートの報告だと敵の数は戦艦１隻、巡洋艦１隻、駆逐艦５隻ほどの艦隊らしい・・・我が海軍ではこの間、地中海入りしたばかりで補給がまだだ。それに動けるのは私だけだ。私一人では何ともならない」
「心得ています、シャルンホルスト閣下」
彼女はなんとか妹の『グナイゼナウ』とともに地中海入りした。
他にもフランス海軍からを摂取した戦艦とイタリア海軍の戦艦が地中海にはいたが、どれも傷ついており実戦どころではない。
「お任せお、敵を必ずや撃破いたします」
そう言うと同時に開口部が開き、中から触手を思わせるように硬質な塊が出てきた。

「司令目標まで約９０ｋｍです」
「はいはい、そろそろ戻りなさい」
「了解しました！」
アリシューザが帰ったので静かになる。地中海の太陽はさんさんと照りつける。１１月なのに、少し忌々しい。
艦隊は潜水艦を気にして『アリシューザ』を先頭に『ヴァリアント』、駆逐艦の順番。
「早く基地に帰りたいなぁ」
基地にいるフッドやレナウンと紅茶を飲みたい、きっとレナウンは妹のレパルスのことを話すだろう。それでフッドに『このシスコン』って言われるんだ。その後もレナウンはレパルスの性格（オタク）を直したいって嘆くんだろうなぁ。
そんないつもと変わらない、とても温かい日々。
目標までは時間がある。頭の回転を緩くしてみる。

ズバアァァン！！

「何！？」

突然艦隊の近く、『アリシューザ』の右、１５００ｍくらいに高々と水しぶきが立ち上る。

要塞との距離はまだ８０ｋｍはある。

「磁気機雷？」

機雷は海上版の地雷、艦船が機雷と接触すると爆発する兵器。

だが、艦が機雷と接触しなくても金属に反応に反応し爆発する磁気機雷。全身金属でできた艦体（からだ）は近づいただけで爆発してしまう。

艦隊に混乱が生まれた。

だが、機雷の真っただ中に突っ込んだ訳ではないらしく、爆破は起こらない。

その後、艦隊は航空機を発艦、偵察に向かわせた。

「ふ～驚かせて」

この言葉はアリシューザの最期の言葉となった。

ズバアァァン！！

突然『アリシューザ』が爆発、しかも機雷による爆発ではない。

砲撃によるものだった。

「アリシューザ！！」

アリシューザは高く火柱を上げ、消えてしまった。

「どうなってるの？！」

今の状況が全く理解できないヴァリアントはただ目標の方角を睨むしかなかった。

「命中♪」
ハンブルグが呟く。
彼女は寝そべり、ごっついスコープをつけたライフルを構えていた。
ライフルと言っても小銃ではない、自分の身長より大きい対戦車ライフル。

彼女は艦魂ではないし飛魂でもない。

クルップルK5E『ハンブルク』、それが彼女の名前。彼女は、『砲魂』
大砲の大手メーカーであるクルップル社は高性能列車砲である、『K5』を改良したのが『K5E』。
性能は、76口径28cm砲（ちなみに戦艦『大和』は45口径46cm砲）、その砲身の長さは21，28m。
最大射程は255kgの通常弾でも62km（『大和』の最大射程は42km）に上る。

ドイツ陸軍はそれだけでは満足せず、『陸軍兵器局』はペネミューンデに『K5E』専用の対艦砲弾の製造を命じた。
その砲弾は、『ペネミューンデ高速弾（以下PHG）』と呼ばれ、全長2m、そのうち1／3は耐熱軽金属の筒に入った装薬だ。
PHGが撃ちだされる時、この装薬が1／700の単位で燃焼、そのおかげでPHGは常識外の速度と射程を手に入れた。
また、この『アバロン要塞』に搭載されている2基の射撃指揮レーダーと4基の8m測距儀（『大和』は15m）、弾道計算用リレー電算の力で90kmの射程に達する。
だが、PHGを使用した後は砲身の冷却、次弾（PHG）の装填、通常装薬の装填。と、順番を踏まなければならない。

そのため、次弾の発射まではどうしても6分近くなってしまう。しかし、戦艦(かのじょ)たちがそのリーチを縮めるには1時間はかっかてしまう。

そのため、『アバロン要塞』撃破に向かっているイギリス艦隊は音速の3倍で飛来するＰＨＧの洗練を受け始めた。

「早く！　早く！　早く！」

焦るヴァリアント、そして彼女にも、

ズバアァァン！！

「グハッ・・・・・・」

ヴァリアントの右腹が爆ぜた。体は『Ｋ５Ｅ(たいせんしゃらいふる)』の衝撃で壁におもいっきり叩きつけてしまった。

「ゲホッ！　ゲホッ！」

血の塊が防空指揮所に色をつける。

「よだよ・・・死にたくないよ・・・」

そのとたん、ＰＨＧが艦橋に直撃した。

「敵艦、停止したみたいだね、お姉ちゃん。撃沈するの？」

さすがに弱り果てた相手に撃ち込むのも躊躇われる。

「・・・しょうがないわ、これは戦争なんだから」

「・・・・・・うん、早く終わるといいな」

「そしたら私たちはようなしよ」

「それでも、早く終わってほしい」

ハンブルクがスコープをのぞく。そこには撤退して行く駆逐艦たち、停止したイギリス戦艦。

（ごめんね、本当にごめんね）

引き金をしぼる。今まで蓄積された射撃データならはずすことは

ない。
「まった！」
後ろを振り返ると、シャルンホルストがいた。
「あの戦艦はドイツ海軍が摂取することにした、だから撃ち方やめ！」
その言葉に安心するハンブルグだった。

この戦闘の結果、戦艦『ヴァリアント』、軽巡『アリシューザ』を喪失したイギリス海軍はスエズ運河からの補給を断たれ、ドイツ陸軍のアフリカに対する補給線を断てなかった。
おかげで、『マレー沖海戦』で壊滅的打撃を受けた東洋艦隊を再建するための増援が送れなくなってしまい、極東での軍事作戦を展開できなくなってしまった。
連合艦隊は少数の艦艇をのこし、ほぼ全戦力でアメリカとの決戦ができるようになってしまったのだ。

第１０話　アワビの咆哮（後書き）

シャルンホルスト「ここまで読んでくださり感謝する」

作者「ということで欧州編でした」

大和「なんか凄い超兵器がでましたね」

ハンブルグ「凄いでしょう、４２ｋｍなんて短いね」

大和「う～日本一なのに」

作者「ちなみに日本で一番長い射程を誇るのは陸軍がフランスに発注した『九〇式二四ｃｍ列車加農砲』の五〇，一二ｋｍですね」

大和「列車砲ばかり・・・・・・」

ハンブルグ「まぁまぁ、それより作者」

作者「何でしょう？」

ハンブルグ「ＰＨＧでどう？」

さく・・・

スバァァァン！！

大和「名前のところで・・・早すぎですよ」

ハンブルグ「しょうがないって、『ペネミューンデ高速弾』なんだ

から」

シャルンホルスト「（私の出番が・・・楽しみにしてたのに）それより感想・意見まってるぞ」

第１１話　妹（前書き）

作者「明けましておめでとう御座います」

大和「去年から読んでいる読者さん、今年から読みだした読者さん、今年も『艦体決戦物語』をどうか」

作者・大和「「よろしくお願いします！！」」

大和「そう言えば、黒鉄先生と草薙先生の作品がランキングの上位にありましたね」

作者「そうですね。こんな形で申し訳ありませんが、黒鉄先生・草薙先生、おめでとうございます」

大和「ところで・・・」

作者「あーー！！　何でしょう？　聞こえませ・・・許してください、本当、マジで」

大和「で・・・この小説、何位だったんですか？」

作者「それは、後書きで・・・」

第11話　妹

１９４２年２月、柱島泊地

連合艦隊の軍艦たちが集うこの泊地は、戦時とは思えないくらいの静けさに包まれていた。

今、この泊地に投錨しているのは第１戦隊を構成する戦艦『大和』『長門』『陸奥』、第２戦隊の『伊勢』『日向』『扶桑』『山城』。空母を集中運用するために作られた第１航空艦隊の第１航空戦隊『空母赤城』『加賀』第５航空戦隊空母『翔鶴』『瑞鶴』、決戦当日の索敵を担う第８戦隊の重巡『利根』『筑摩』。

それと、この主力部隊の護衛を務める第１水雷戦隊（軽巡１、駆逐艦１４隻）。と駆逐艦が数隻。

では他の軍艦は？

『金剛』型戦艦を基幹とした第３戦隊と第４航空戦隊の空母『龍驤』『龍鳳』はマリアナ沖に集結している。

フィリピンの海上封鎖を行っている『高雄』型重巡・『最上』型重巡の『第４戦隊』・『第５戦隊』、マレー方面の陸軍の支援作戦を展開する第５戦隊（主に『妙高』型）と第２航空戦隊の空母『飛龍』『蒼龍』。

マーシャル諸島方面の警戒部隊、第３水雷戦隊。

ギルバート諸島方面は第９戦隊の軽巡『北上』『大井』と第４水雷戦隊。

他にも陸上の航空基地を有する第１１航空艦隊の１部はまだ、マレーと台湾で南方作戦の支援空襲を行っていたが、ほとんどはトラ

ック諸島、マリアナ諸島に移動し、ウェーク島のアメリカ軍との航空戦をしていた。
そして、潜水艦を主力とした第6艦隊は開戦から、インド洋での通商破壊、イギリスのインド洋艦隊、東洋艦隊の監視と、ハワイからギルバート諸島にかけてアメリカ太平洋艦隊の監視を行っていた。
それとマレーで鹵獲されたレパルス、プリンス・オブ・ウェールズ（以下ＰＯＷ）は修理と改装が完了し、公試運転が終わりしだいに高速性を活かした第3戦隊に編入されることになっている。
（注：この部隊配置は大まかのものであり、他にも連合艦隊の艦艇たちが各地に展開しております）

この日、泊地はにぎわっていた。新造艦が就役したのだ。その艦（こ）の歓迎会をするため、戦艦『大和』の甲板には艦魂たちが集まっていた。
「・・・・・・」
「どうした？　大和」
マレーでの傷を癒した大和は、少し緊張していた。
「だって早川二曹、武蔵（いもうと）が来るんですよ。緊張します」
『大和』と同様に工期短縮が命令されていた『大和』型戦艦二番艦の戦艦『武蔵』。史実だと6月5日――ミッドウェー海戦が起こった日に艤装工事が完了したことを考えると工兵の努力がうかがえる。
「どんな妹かなぁ」
心ここにあらず、そんな感じの大和。
「変な趣味を持っていないことを強く願うわ」
しみじみと言った扶桑。
「ふ、扶桑さん？」

「可愛い妹を望んでいたのに・・・・・・」
「お姉ちゃん？　妹いるよ、隣にいるのにそんなこと言っちゃう？」
扶桑のまわりに黒いジメジメとしたオーラが漂う。
「・・・・・・どうしよう、私の妹が山城さんみたいだったら」
「大丈夫、『ＳＯＳ団』にもれなく入れてあげるから心配しないで」
それは励ましているのか？　疑問が湧く早川。
「金剛姉妹のようなのは？」
聞いたのは日向。
「う～ん、榛名のような艦魂だったら、比叡さんは・・・ちょっと」
「ほほ～じゃ、マリアナにいる比叡にそのことを打電するか？」
「えっ、あの、長門さんすいません。それだけは」
悪戯っぽい笑顔の長門。
「でも、やっぱり気になるな。どれだけの運を持っているか。手合せしてみたい」
「姉上、某がその陰謀、阻止させていただく」
「まぁ、今回はいいだろ陸奥、昔のことを根に持つな」
「昔？　なんかあったのか？」
早川はこの空間の疑問を片付けようとする。
「陸奥の歓迎会の時にな、脱衣ポーカーで勝負して完勝してしまってな」
陸奥の顔が赤くなる。
「・・・・・・もしかして歓迎会のたびに？」
「それが陸奥があの手この手で阻止をはかって本当に困っている。そうだ早川、手伝ってくれるか？」
そう言うと顔をよせて、小声で、
「私はただポーカーがしたいだけだ。だが、歓迎会で自分だけ浮かれるのは気が引ける。だから脱衣ポーカーだ。で、貴様はうまくいけば・・・見れるだろ？　利害が一致するとは思わないか？」
「・・・ッ！！」
真剣に悩む早川、答えを迫る長門。

二人は気づかない。陸奥が自分の身長の半分以上ある大太刀を構えているのを。
「ねぇお姉ちゃん、ボクの予想だと霧島さんみたいのだったり」
「コラコラ、本当のことでも言っていいことと悪いことがあるんだ」
瑞鶴と翔鶴がボソッと言う。ちなみに、翔鶴に突っ込んではならない。
「・・・・・・」
大和の顔が、サーと青くなる。
山城が思い出したように、
「そう言えば榛名、霧島と初めて会った時・・・泣いたらしい」
「・・・・・・」
もう青を通り越して白い。
「イヤです!! それだけはイヤです!! なんとかしてください早川二曹!!」
「スンマセン、もう2度と変な誘いに引っ掛かりません。本当にスンマセン」
「まぁ、アレだ、スマン」
そんな時、
「あっ! 来た!」
誰かが叫んだ。

そこには『軍艦マーチ』の一節にもある『浮かべる城』、ソレがあった。

今までの戦艦と比べると洗練された艦体、無骨だった艦橋は洗練され、円塔型のものへ。そしてソノ軍艦の存在意義の3連装主砲塔。
(ちなみに『大和』もそうです)
『大和』の甲板に光が集まり人の形へとなる。大和たちは一斉に姿勢をただす。
(霧島さんはダメ、霧島さんはダメ、霧島さんはダメ・・・)

なんかいろいろ怒られそうなことを考える大和。
光がはじける。
「戦艦『武蔵』の艦魂の武蔵です。よろしくおねがいします」
現れたのは、クリっとした瞳、ショウトカットの髪型、歳はまだ9・10くらい。
「・・・った」
えっ？　と早川が大和に聞く。
「やったあああぁぁぁあぁぁぁああ！！！」
「「「！！！」」」
その叫びに集合していた艦魂たちが驚く。
「大和？　武蔵が脅えてる」
「うっ・・・」
周りを見回し真赤になる大和。咳を一回してから、
「連合艦隊艦魂司令部、司令長官の大和・・・あなたの姉です」
「・・・お姉ちゃん」
しばし見つめあう。声は掛けてはいけないのだろう、そんな空気が広がっていた。
早川は姉の多恵子のことを考えた。
「天城姉さん・・・」
「えっ？　赤城さん」
早川が聞く、赤城は空を見ながら、
「なんでもない」
加賀はうらやましそうに大和たちをみていた。

「さて、艦魂の自己紹介は終わったな」
もう、空はオレンジと紺のグラデーションが支配していた。
「う～まだよくわかんないよぉ」
「大丈夫よ、そのうち覚えられるって」
「うん、お姉ちゃん・・・そう言えばあの人だぁれ？」

武蔵の小さい指が早川をさす。
「おれは『大和』の測敵手の早川芳栄二等兵曹、よろしな」
「・・・じゃお兄ちゃんってよんでいい？」
「ブハッ・・・」
「ちょ・・・山城、鼻血が・・・」
「大丈夫、お姉ちゃん」
「・・・別にいいけど」
「やったぁ、お兄ちゃん」
そう言うと早川に抱きつく武蔵。
「あっ！！　こら！！　私だって抱きついたことないのに！！」
「ハハハ、それより歓迎会だ！　ポーカーだ！！」
「ポーカー？」
「そうだ、面白いぞ」
「姉上、やめてください」
「長門さん、武蔵に変なこと教えないでください！！」
わいわいと騒ぐみんなが行った後、加賀と赤城が残った。
「行かないのか？」
「・・・・・」
「土佐のことか・・・・・・」
「赤城は？」
「天城姉さんのことを思いだしそうになるからな・・・・・帰って南雲（なぐも）と一杯やる」
そう言ったが赤城は動く気配がない。
二人とも空に出始めた星を見ていた。今はもういない大切な家族を思って。
「よし、私の所にこい！」
「えっ！　どうして」
「いいから来い、命令だ」
赤城たちは光に包まれ、消えた。

夜空の下には楽しい声、それはまるで日本がアメリカと本当に戦争しているのか疑うくらい平和な夜だった。

第１１話　妹（後書き）

作者「去年はよく、飽きずに読んでくださりありがとうございます、今年も飽きずに読んでください、ハイ」

大和「で、何位ですか」

作者「・・・位、ハイ！　言った！」

大和「じー」

比叡「おい、テメェ」

榛名「ドキドキ」

霧島「・・・」

作者「なんで比叡たちが・・・」

比叡「文句あんのか？　いいから順位言え！！」

作者「その、えーと、評価の高い順で・・・」

榛名「評価の高い順で？」

作者「２４８位です（1月2日）」

全員「・・・・・・」

――――――――――――――――――――これより下は『後書き』ではなく、『反省会』です――――――――――――――――――――

作者「この小説に足りないものは？」

大和「文章の正確さ」

榛名「文章力」

霧島「・・・作者」

作者「ちょ・・・いますよ、作者ですよ」

霧島「・・・お前だからダメ」

作者「・・・・・・おそらくですが、『妹キャラ』がいない、だから武蔵」

武蔵「なぁに？」

山城「日向は？」

作者「設定はそうです、でも出す機会が・・・それと、もう1つ」

大和「なんですか？」

作者「そりゃあ、サービスシーンですね、大和（伊）さんのようにハァハァと」

艦魂全員「・・・・・・」

→無言で真赤。

山城「今度こそ絶対にアノ雪辱を・・・それより、そんな外道なことに手を出していいと思ってるんですか?!　ダメです。他の人がなんて言おうとダメです!!
　ハァハァは特攻と同じ!!　鬼畜のすることだ!!　いいですか?・・・」

→山城の固有結界（?）発動

作者「・・・で、どう思う?　サービスシ・・・」

ズズーン!!

大和「え〜サービスシーンを期待している読者さん、申し訳ありませんんね。ご意見・ご感想待ってます」

第１２話　海戦前１（前書き）

今回はほぼ、日本軍側です。（今までも日本軍側でしたが）

第１２話　海戦前１

１９４２年４月フィリピン

アメリカ軍と日本軍の戦闘は膠着していた。破竹の勢いで侵攻してきた日本軍に圧倒され、アメリカ軍はバターン半島・コレヒドール島に転進、持久態勢にはいった。

このころ、アメリカの対日戦の作戦計画は『レインボー５』がまとまらず、その前に立案された『オレンジ・プラン』がまだ生きていた。

内容は簡単にすれば『フィリピンは米太平洋艦隊がくるまでバターン半島コレヒドール島を保持せよ』。

まさしく、この通りになった。それを指揮したのは、マッカーサー大将。史実だと戦後のＧＨＱなどで色々やらかしてくれた人物だ。

さて、日本軍はと言うと、本間雅治（ほんまま さはる）中将率いる第１４軍は海軍との協調をとり、確実にアメリカ軍をあと一息まで追い詰めた。

が、１４軍はバターン半島入口のサンフェルナンドに陣地を構築。それ以後まったく動かなくなった。

「中将！　東條閣下から『早急ニバターン二進出セヨ』です」

「またか・・・・・・」

「よいのですか？　首相からのですぞ？」

近衛内閣が解散し、できた東條内閣。１国の首相兼陸軍大臣でもある東條はさっさとフィリピンを落とせとうるさい。

「いいんだ。１４軍（おれたち）はここでポーカーフェイスをしていればいい」

「は～」

参謀が呆れたように返事をする。

「ですが・・・せめて変電を何とかしては？」

東條にはいつも『弾薬不足ニヨリ進撃スルスベ無シ』つまり『弾がないから進撃したくてもできないんだ！！』と、返している。

「なんか・・・挑戦状のようなんですが・・・」
「気にするな、事実だろ？」
陸軍は大陸での戦いで砲弾を大量に消費、慢性の弾薬不足に陥った。
一応はフィリピン攻略に際し、定数は用意されていた。
しかし、使い切ってしまったら、いつ補給がくるか解らない。それはマレーを攻略する第２５軍やジャワ攻略の第１６軍も同様である。
「それと山本閣下の御意志だ」

その夜は月がいなかった。

夜陰にまぎれ黒鉄（くろがね）が蠢（うごめ）く。米駆逐艦『グリーブス』級。５隻はいる。
艦隊（かのじょたち）はフィリピンの航空基地が奪われてしまったため、ドラム缶に食糧を入れ、に食糧を入れ、それを何個かひもでつなぎ、海岸近くでそれを投棄、海岸にいる部隊がそれを揚陸する。史実でいう『鼠輸送』をしていた。
そんな中、月が急に現れた。
「うそ・・・」
アメリカ海軍の水兵服を着た少女が目を見張る。
そこには１０隻ほどの軍艦。友軍では、無い。見るからにソレは重巡洋艦。
先頭の艦橋がやけに大きいヤツが発砲する。とても落ち着いた射撃。
「まさか・・・この闇のなか私たちが見えていたの？」
バカな・・・、絶望が広がる。
「敵１番艦にさらに命中！　沈んでいきます！！」
見張りが興奮気味に報告する。

「おし！　やったぞ高雄！」
「やったわ！　初戦果よ！」
そこには興奮気味のポニーテールの少女、優しげな長身の少年――小松明徳（こまつあきのり）航海少尉。
「おい、騒ぐな。戦闘中だぞ」
航海長が咎めるが、顔から嬉しさがにじみ出て説得力は皆無だ。
「・・・本艦隊はこれより帰還する」
重巡洋艦で構成された第2艦隊の指揮を執るのは近藤中将――『マレー沖海戦』の指揮を執った提督だ。
「ハッ、『第7戦隊』の栗田司令にもつたえます」
艦長が矢継ぎ早に指示を飛ばし、『高雄』型特有の大型艦橋に号令と命令が反復された。
『高雄』の艦体（からだ）が漆黒の世界に白い弧を作り出す。後続の艦（こ）たちもその弧をたよりに進路を変更していった。

次の日、瀬戸内海の柱島泊地、戦艦『大和』測敵所

「・・・暇です」
「平和だなぁ」
「この言葉が、瑞鶴の命取りとなるのであった」
「えっ？　お姉ちゃん？」
「お兄ちゃん遊ぼうよ～」
順に大和・瑞鶴・翔鶴、最後に武蔵。
「お前ら・・・なんで測敵所に集まるんだ？」
機器を磨いていた早川が呆れたように言う。
「暇なら手伝ってくれ」
手にした布を差し出す。
「そういうことは、早川二曹の仕事です」
「私は瑞鶴とセットだ。それと保護者役でもある」
「お姉ちゃん、保護者はあんなナレーションしないよ」

「瑞鶴、セットは突っ込まないのか？」
翔鶴は何がしたいのか本当に解らない。
「ちなみに、お持ち帰りする場合は私も付いてくるぞ。お得だぞ」
「いや、しないし」
「じゃ、瑞鶴の単品か？　それは許されないな」
「お前は何がしたい！？」
誰か翔鶴のことが理解できる方が『翔鶴』に着任しますように、祈らずにはいられない早川だった。
「早川！！　艦魂と話してないで手を動かせ！！」
「すいません班長！」
慌てて作業を再開する。周りのヤツはクスクス笑っている。
「チキショウ・・・」
「そう言えば潜水艦の艦魂（こ）は大丈夫かな・・・」
瑞鶴が呟いた。

ウェーク島近海

「へ、ヘックション！！」
「バカ！　敵の聴音員に聞こえたらどうすんだミヨ！！」
「清水（きよみず）！」
ここは帝國海軍が、敵地偵察に向かわせた巡洋潜水艦乙型――巡潜乙型の『伊３４』。
姉には史実だと、彼女はドイツに行き、ジェット戦闘機の部品などを運んでいたが、途中でアメリカの潜水艦に撃沈されてしまう。
だが、今は別の理由で撃沈されそうだった。
「クソォ、何でタイミングで駆逐艦がくるんだ」
艦長が悪態をつく。
『伊３４』はウェーク島の近海を潜航してハワイ近海でアメリカ太平洋艦隊の動向をうかがう任務に就こうとしていた。

が、たまたま通りかかった駆逐艦と出会い、一方的にドラム缶のような対潜兵器――爆雷を撒かれていた。
「敵艦！　来ます！！」
「ミヨ、お前がクシャミするから・・・」
「違う！　清水が大きい声だすから・・・」
ドオン！　ドオン！
もめているのは、清水喜久雄（きよみずきくお）と長髪のミヨ――『伊３４』の艦魂である。ミヨとはニックネーム。清水が『伊３４』と呼ぶのがイヤだったかだ。
「早くどっか行かないかな」
不安げなミヨ。
「そのうち行くよ」
天井を見上げる清水。

「敵艦、遠ざかります！！」
その言葉に安堵する一同だった。
そして、『伊３４』はハワイを目指すため、機関がうごきだすのだった。

第１２話　海戦前１（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、本当にありがとうございます」

大和「あの～ちょっとダラダラ書いてませんか？　中だるみはよくありません」

作者「とは言っても・・・この小説、そろそろ折り返し地点だし・・・伸ばそうとすると・・・」

大和「もうですか？！」

作者「ハイ、次は『海戦前２』で・・・」

大和「その次は？」

作者「ネタばれは禁止です」

大和「ケチですね」

作者「・・・・・・。さて、次回は・・・」

大和「無視しないでください！！」

ズズーン！！

大和「人の話は最後まで聞くべきです。ご意見・ご感想お待ちしております」

第１３話　海戦前２（前書き）

今回はアメリカ側です。

第１３話　海戦前２

１９４２年４月ハワイ

アメリカ太平洋艦隊の根拠地、太平洋艦隊の司令部は軍艦の上ではなく、陸上に設置されている。

その司令部には悶々（もんもん）とした空気が漂っていた。

「・・・・・・これだけの戦力があるのに・・・彼女たちも望んでいるのに」

彼はアメリカ太平洋艦隊司令長官のハズバント・キンメル大将。

フィリピンでの戦況ははっきり言って悪い。艦魂からそう聞いていた。

独断で太平洋艦隊を出撃させようと考えたこともある。

だが、合衆国艦隊司令長官であるアーネスト・キング大将の苦虫をかみつぶしたような顔を思い出すたびに、はたと自制する。

現在、太平洋艦隊の戦艦は以下の通り

『ネバタ』級戦艦『ネバタ』『オクラホマ』

４５口径３５．６ｃｍ砲１０門

速力２０．５ノット

『ペンシルバニア』級戦艦『ペンシルバニア』『アリゾナ』

４５口径３５．６ｃｍ１２門

速力２１ノット

『テネシー』級戦艦『テネシー』『カリフォルニア』

５０口径３５．６ｃｍ砲１２門

速力２１ノット

『コロラド』級戦艦『ウエストバージニア』
４５口径４０，６ｃｍ砲８門
速力２１ノット

『ノースカロライナ』級戦艦『ワシントン』
４５口径４０．６ｃｍ砲９門

（兵装は主砲のみ）
この９隻のうち、『テネシー』までは、日本でいう『扶桑』や『伊勢』型戦艦と同様に旧式であり、『コロラド』は本来、３５．６ｃｍ砲を搭載する予定だったが、日本の『長門』型戦艦に対抗するため４０，６ｃｍ砲を装備している。最後の『ワシントン』は軍縮条約が切れた後に作られた新鋭戦艦。
他にもアメリカには戦艦を保有しているが、アメリカの海は一つだけでは無いので、大西洋にも艦隊を置かなくてはならない。
欧州ではイギリス海軍がバルト海以外の海域の制海権を握っていたが、地中海にできたドイツの要塞のせいでインド、スエズ運河経由の戦略物資の輸送ができなく、その対策に頭を悩ましている。それにＵボートやポケット戦艦が北海やアイスランド沖合まで出現した。このこともあり、大西洋から戦艦を太平洋に回航することができないでいた。

「長官、早く艦隊を出すべきだ！　フィリピンの将兵の救援は急務です！！」
積極攻勢はのウイリアム・ハルゼー中将。猛牛として知られるハルゼーは、平穏な真珠湾（パールハーバー）では窮屈そうだった。
「フィリピンはそんなに悪いのか？」
艦魂だけの情報だと心もとない。
「マッカーサー大将は作戦道理にバターンやコレヒドールを堅持していますが、食糧が足らないらしいです。切りつめても３か月が限

度しか持たないらしいです。あと弾薬も不足しているっぽいです」
「・・・・・・何で不確定なんだ？」
『らしい』とか『～ぽい』だと説得力が半減する。
「エンターから聞きました」
「『エンタープライズ』の艦魂か？」
ハルゼーも自分も情報源は同じらしい。
「・・・それは本当ですか？」
今まで黙っていたレイモンド・スプールアンス少将が発言する。
「・・・おかしくないですか？」
「ほう、何がだね？」
「いくら資源の乏しい日本でもフィリピンへの補給は簡単にできるはずです。補給も万全ならさっさと占領してしまえばいい。なのにそれをしない」
スプールアンスの言葉よりこんな発想をするヤツが身近にいたのかと驚く。
「じゃ、何か目的でもあんのか？」
いぶかしがるハルゼー。
「・・・おそらく、フィリピンの将兵を飢えさせるためでは？」
「どうして」
「将兵が飢えれば我々は救援に行かなくてはならない、そこを日本海軍は待ち伏せをする。あとは各個撃破すればいいのですから」
スプールアンスは立ち上がり、壁に張られた太平洋の地図に指を滑らす。
地図ぶはハワイからウェーク、マーシャル諸島の北方、トラック諸島とマリアナ諸島の中間、パラオ諸島をへてフィリピンに進撃する道――オレンジルートが記されていた。オーストラリアからのルートもあるが時間がかかりすぎる。
「だが、いずれは救援艦隊を出さねばならない。艦隊（ちから）があるのに仲間を見殺しにはできない」
「もちろんです。つまり、各個撃破される程度の戦力を派遣するの

ではなく、太平洋艦隊の全力をあげて行く、ということです。ただ・・・」
「なんだ？」
「まだ我々は戦力不足です」
「９隻もの戦艦がそれっているのにか？　それに空母だって４隻もいるんだ！」
弱腰め！　ハルゼーの目が訴えていた。
「トーゴーのこともあります」
日本海海戦ではバルチック艦隊の主力艦の数より劣っていた日本海軍が完勝した海戦。その指揮を執った東郷平八郎大将。スプールアはそのことが気がかりだった。
「君には妙案があるのか？」
「食糧は３か月はもつのですね？　だったらそうしてもらいましょう。３か月あれば準備が整います」
「３か月・・・そうか、『サウスダコタ』だな！」
戦艦は対応防御として自らが搭載する主砲の攻撃と同等以上の装甲を張る。だが、『コロラド』は元が３５．６ｃｍ砲搭載戦艦なので防御も３５．６ｃｍ砲。『ノースカロライナ』級戦艦も次の軍縮をにらんで、３５．６ｃｍ砲を搭載予定だったので『コロラド』と同じである。
それにくらべ、『サウスダコタ』はもとから４０，６ｃｍ砲搭載予定なので、防御もすぐれている。
それに『サウスダコタ』は日本が新鋭の４０，６ｃｍ砲搭載戦艦を建造中との情報が入ったため、集中防御方式が取り入れられ、艦体も前後が短縮され、被弾面積の減少――小さく作るので弾が当たりにくく設計されている。
ちなみに４０，６ｃｍ砲搭載戦艦とは『大和』たちのことである。アメリカはまだ、『大和』が４６ｃｍ砲だとは知らないのだ。
「それに最新のレーダーを搭載できます」
今まで使っている対艦レーダーは精度が悪く、荒天時はまったく

役に立たなかった。だが、次期のレーダーは管制射撃を行えるまでの精度を誇ると聞いている。3か月もあればこれが搭載できる。
他にも大西洋の『ノースカロライナ』など少数の戦艦を回航できるかもしれない。
「よし、彼女たちにも伝えなければな」

そのころ、広島県、柱島泊、地戦艦『大和』防空指揮所

そこには、連合艦隊の長官、山本大将と参謀長の宇垣、首席参謀の黒島の三人がいた。
「長官・・・太平洋艦隊は来るのでしょうか？」
『漸減要撃作戦』に消極てきな黒島が聞く。
「来る、アメリカ軍は絶対来る。フィリピンの制空権を手に入れてから航空機による食糧の補給線を断たれ、駆逐艦の輸送は下火になりだしたしな」
駆逐艦の被害が多発し、そのためかアメリカ軍はこの方法を取らなくなってきた。
「・・・時期もそろそろかと」
宇垣は泊地にいる軍艦たちを見渡す。
「・・・頼もしい限りです」
大艦巨砲主義者である宇垣は顔には少し喜色がにじむ。
「・・・・・・そうだな」
山本には、
「武蔵！！　早川二曹から離れなさい！！」
「いーやーだー！！　お兄ちゃんと離れたくなーい！！」
「大和やめろ！！　武蔵が嫌がってるぞ！」
「早川二曹は武蔵の見方なんですか？！　このロリコン！！」
「早川、そうだったのか」
「違うからな陸奥」

「隠さない、小さい子は確かにいい、うん、そうだ」
「山城、扶桑がいないからって犯罪者っぽいことというな」
本当に大丈夫か？　真珠湾攻撃をやった方が良かったのではないかと考える山本だった。

7月3日

キンメルは就役したばかりの『サウスダコタ』に将旗を掲げていた。1週間後には出撃の予定だ。
『サウスダコタ』の会議室は混雑していた。太平洋艦隊の司令部と太平洋艦隊艦魂司令部がいるからだ。と、いっても狭く感じるのは艦魂が見える人くらいだが。
「ここまでで質問は？」
今は作戦の最終確認をしている最中。
スッと手が挙がる。
「エンター」
16・7歳くらいの金髪の髪をツインテールにした空母『エンタープライズ』の艦魂をしめす。
「空母を分散した配置にするより集中運用したほうがいいんじゃないんですか？」
「そうだ！　エンターの言うとおりです！」
空母部隊の指揮を執るハルゼーも同意する。
「空母の集中運用か・・・みんなはどう思う」
キンメルが会議室に呼びかける。
「ハルゼー、艦隊は輸送船団を含めると先頭から殿(しんがり)までは100マイルくらいになるだろ？　艦載機には制空のほかに対潜護衛もしてもらわないと困る。現にハワイ周辺には日本の潜水艦がうようよしている」
重巡洋艦部隊の指揮するトーマス・キンゲート中将が提案する。
「航空機にとって100マイルなんて目と鼻の先だ！！　それに指

揮もしやすくなる！！」
「そうです！！　演習でもいい成績だったんだし、これを使わすいつ使うのですか！！」
　二人とも顔を真赤にしてどなり散らす。
「ハルゼーの言うとおりかもしれません。海戦時には役に立たない空母は後ろに下げなくてはならんのですから、まとめておいた方がいいかもしれません」
　ハルゼーと同じく癇癪もちのリッチモンド・ターナー少将が言う。
「んだとテメェ！！」
　エンターがキレた。
「すいません、でも・・・空母じゃ・・・」
　笑いをこらえる軽巡洋艦『ナッシュビル』の艦魂、エンターと同い年くらいで、癖のある黒い長髪の少女。
「ナッシュビル！！」
　殴りかからんとしたハルゼーを従兵として参加した駆逐艦の艦魂たちが取り押さえる。
「離せ！！　ぶん殴ってやる！！」
　艦魂が見えないターナーは愉快げに見つめる。
「ハルゼー、艦魂といえ、少女を殴るな」
　スプールアンスがなだめようとする。
「黙れ！！　航空機でも戦艦は撃沈できる！！」
　飛行機にほれ込み、パイロットの資格をわざわざとったほどである。それも５０歳を超えてからである。人間、何かをするのに歳は関係ないという証拠である。
　そんなハルゼーは航空魚雷や爆弾の著しい発達から航空機が戦艦を撃沈できる日は近いと思っていた。
「まぁまぁ、それはまた今度に議論しましょう」
　セミロングの金髪、茶色い瞳、１４・５歳くらいの少女――戦艦『サウスダコタ』の艦魂。
「長官、空母は集中運用すべきです。使える戦力はすべて使ったほ

うがいいです。分散すれば各個撃破の対象かと」
大和と違い落ち着き払っている。
「そうだな・・・よし！　分かった。空母は集中運用する、だが、日本海軍は空母を１０隻も持ってるから戦闘機を多めにした編成としたいんだが・・・」
「長官！　それでは攻撃力力は持てませんよ！」
エンターが反対の声明をだす。
「エンター、輸送部隊を含めると２００隻ちかい大艦隊なのよ。日本海軍は空母を１０隻近く持ってるらしいし、それが大挙して襲ってきたら大きな被害が出るかもしれないのよ」
サウスダコタが説得する。
「・・・せめて『ワスプ』を回航してください」
大西洋にいる空母『ワスプ』のことだ。
「大西洋ではドイツ海軍のＵボートがいる。船団護衛に彼女たちは外せないよ。それに時間に余裕がないからな、スマンが耐えてくれ」
「分かりました」
「じゃ、他に質問は？　無いな」
キングは一同を見回し、
「正義の国である我が合衆国は東洋の平和と秩序を取り戻し、領土拡大というエゴを追及する日本をたたきつぶす！！」
「そうです！　ジャップは皆殺しだ！」
「エンターの言うとおりだ！　キル・ジャップス！　キル・ジャップス！」
士気が高揚する会議室。
決戦の時期もそう遠く無くなってきた。

第13話　海戦前2（後書き）

作者「ここまで読んでくださりお疲れ様です」

サウスダコタ「太平洋艦隊艦魂司令部の長官のサウスダコタです」

大和「うわっ！！　敵じゃないですか！！」

サウスダコタ「後書きでは関係ないですよ」

作者「そうです、草薙先生の所のエリーゼ様だって凛様と一緒に後書きに出られていますし」

大和「それなら・・・よろしくお願いします」

サウスダコタ「こちらこそ」

作者「ここは平和だな・・・」

エンタープライズ「あっ！！　長官！　何ジャップと握手してるんですか！？　手が汚れますよ！」

赤城「大和！　アメ公から手を離せ！　何されるかわからないぞ！！」

作者「まぁまぁ、ここは平和的に・・・」

エンター・赤城「「こいつらは敵だぁ！！」」

ズズーン！！

→１２，７ｃｍ砲・２０ｃｍ砲の砲撃

赤城「ふん、１２，７ｃｍとは・・・小さいな」

エンター「空母に砲撃力を持たせる？　バカバカしい」

大和「赤城さん、落ち着いて」

サウスダコタ「まったく・・・みなさ～ん！　ご意見ご感想待ってますよ～！」

第１４話　覚悟（前書き）

いよいよ戦闘が始まります。

第１４話　覚悟

１９４２年７月１０日

真珠湾から大規模な艦隊が姿を現す。大西洋から回航された戦艦『ノースカロライナ』『コロラド』『メリーランド』を加えた戦艦１２隻で構成される第１７任務部隊が１列になって――単縦陣で航行する。そのあとを、第１８任務部隊の空母『エンタープライズ』『ホーネット』『レキシトン』『ヨークタウン』が太平洋に放たれた。

ハワイ周辺では日本海軍の潜水艦を警戒して大規模な対潜掃討作戦が展開していた。おかげで太平洋艦隊が出撃したことはまだ知られていない。

翌１１日ミットウェイ東南東沖

ハワイからギルバート諸島に掛けて第６艦隊が敷き詰めた潜水艦による哨戒線は掃討作戦のせいで上手く機能していなかった。だが、

「・・・・・・間違いない。敵艦隊だ」

『伊１６８』が哨戒中に多数のスクリュー音を探知、潜望鏡を上げて潜航していた。

「イロハ、いよいよだな」

「ハイ、鷹一（たかかず）さん」

イロハ――それはミヨと同じくニックネーム。長い髪の１８・９くらいの少女。

鷹一――『伊１６８』の艦長の木梨鷹一（きなしたかかず）中佐。史実だと空母『ワスプ』を撃沈した潜水艦の艦長を務めたりしている。

「艦長、報告をしましょう！！」

「・・・・・・」

副長の声に悩む鷹一。
「進路を・・・」
「私なら構いません」
キッパリとしたイロハの声。
「艦長！　早く山本長官に伝えなくては！！」
「だが・・・イロハが・・・」
ここで通信をすれば、アメリカ軍に気づかれる。もちろん暗号で通信するが、電波を出せば電波の強弱で位置を知られる。あれだけの数の駆逐艦からは逃げられない。撃沈される。
「私はいいんです。鷹一さん。いつかこうなることは覚悟していました」
「覚悟なんて言葉は使うな！」
もう一言しゃべろうとするがそれは形にならない。
「艦長！　スクリュー音２つ！　接近します！」
慌てて潜望鏡にかじりつく。
「駆逐艦か・・・発見された・・・」
駆逐艦に搭載された聴音義――海中の音を拾い潜水艦や魚雷がどこにいるのか判断する艦の耳。それに『伊１６８』のスクリュー音が探知されたようだ。
「艦長！」
副長の叫び。
「・・・連合艦隊司令部に打電、我戦艦ヲ含ム大艦隊ト接触セリ
ミットウェイ東南東５２海里ヲ西南西二向カッテ航行中」
一息溜息をつき、
「雷撃戦よーい！」
「雷撃戦よーい」
命令が反復される。
「浮上深さ（メインタンクブロー）１５」
天井の管を水と空気が駆け抜ける。
「艦長！　打電完了」

「駆逐艦との距離およそ１５００ｍ！」
「魚雷！　撃てぇ！！」
ゴトン、鈍い、間抜けな音が響き、魚雷に命が吹き来れる。
「・・・イロハ、スマン・・・」
「いいんですよ。鷹一さん」
優しく微笑むイロハ。何故笑える？　艦魂だから？　分からない。
「あの、最期に・・・き、キスしてください」
「はぁ？」
呆れてしまう。こんな時に。だがこんな時だからこそか？
命を吹き込まれた魚雷は駆逐艦に吸い寄せられる。
「だって、私が鷹一さんに告白したとき以来してくれてませんよ！」
「・・・そうか？」
「そうです」
オホン！　咳をついて。
「い、イロハ！」
「・・・ハイ」
二人の唇がふれあう。
そうか・・・だから笑えるのか？
鷹一の顔には微笑。
どこかで爆音が轟いた。あの駆逐艦だろう。あの駆逐艦にもたぶん好きな人がいるんだろう。それは恋人か姉妹か。
早く戦争が終わってほしい。彼女たちが傷つけあう理由はないのだから。

その後『伊１６８』は２度と帰還しなかった。

柱島泊地

『伊１６８』の最期の通信はしっかり届いた。

「出港用意！！」
待機していた軍艦たちに活気がわく。向かうは金剛たちがいるマリアナ。
「あの、参謀長」
松田が宇垣に話しかける。松田には1つ、気になることがあった。
「潜水艦の索敵に引き続けて11航空艦隊の索敵と作戦はなってましたが、11航空艦隊が消耗しすぎでは・・・」
南方方面の作戦中に11航空艦隊は連合国と連日航空戦を展開中だったため、その数を大きく減らしていた。
「空母の艦載機を11航空艦隊に送れないでしょうかね？」
「・・・無理だ。攻撃のための艦載機を使うわけにはいかない」
宇垣はそのあと何か言いたそうな松田を睨み口が開かないようにしていた。

7月15日マリアナ諸島サイパン沖夜

そこには柱島を抜け出した戦艦たちが投錨していた。
「長官・・・我々も参加してよいのでしょうか？」
話しかけるのは今回、第1航空艦隊を率いる南雲忠一（なぐもちゅういち）中将。
「ん？　大和たちは早川君を誘っていたようだし・・・問題ないだろ？」
「艦魂が見える下士官でしたか？」
二人はとある会議室の扉を開ける。ちょうど大和が演説していた。
「皆さん！　私たちは天皇陛下や内地にいる人たちを守るために・・・えーと・・・違うなぁ・・・うーん」
ぐだぐだな演説だった。
「やってるな」
「や、山本長官！　敬礼！」
部屋にいる艦魂が叫んだ。みんな慌てて敬礼する。山本たちも答礼する。

「えーと・・・最後に皇国の興廃この1戦にあり、各員一層奮励努力せよ！　以上！」
金剛が溜息をつきながら、
「続いては、長官、よろしいですか？」
「俺か？　俺は訓示のときやるからいいだろ？　南雲は？」
「いや・・・私は遠慮します」
「では・・・第1航空艦隊艦魂司令の赤城」
うむ、と言うと前にでる赤城。
「大和が言ったとおりこの1戦に我が皇国が滅びるか栄えるかが決まる！　天皇陛下のため、各員は刺し違えてもアメ公を倒せ！」
「まぁ、私たちはそうじゃないと戦果でないからね」
山城の呟(つぶや)きを聞いた山本の顔が山城を見る。噂だとアメリカとの戦争よりアニメの方が大事だと考えるヤツと聞いていた。
そんな彼女がそんな決意をしているなんて・・・。
「次は第1航空艦隊艦魂参謀の翔鶴」
翔鶴がぺこりとお辞儀する。
「え～赤城さんの言葉は無視してください。刺し違えるなんて今時はやりません。はっきり言ってダサいです」
「なんだと！　貴様！　上官に向かって」
赤城が翔鶴に殴りかかる。翔鶴は向かってくる赤城を背負い投げにして床に難なく倒す。
「刺し違えるのは勝利ではありません。バカのすることです」
「お姉ちゃん！　よしてよ！」
瑞鶴が止めようとする。
「翔鶴さん！」
大和も止めようとする。
「私たちが死んだら誰が戦うのです？　大破しても帰ってこれれば修理してまた戦ええます。死んで栄誉を手にするより生きて戦う。そして戦争の早期講和、私たちは天皇のためじゃなくて日本の国民のために戦うんです」

厳島で会った多恵子。戦争によって家族と離れて暮らしている多恵子の願い。翔鶴はあの時言った言葉を曲げたくはなかった。
「以上です」
山本と南雲は驚いていた。まだこんなに幼いのに。自分たちの半分も歳行かない少女たちなのに。
「南雲・・・」
「分かっています、この戦争、この1戦で終わりにしましょう」

翌日

索敵を続ける11航空艦隊。そのうちの1機から入電があった。
『我敵艦隊ヲ発見　戦艦12　重巡15　駆逐艦多数　ナオ敵グラマンノ攻撃ヲ受ケツツアリ』
司令官の塚原中将は、
「攻撃隊の準備だ！」
「しかし・・・敵との距離は1500kmはあります。ゼロ戦の航続距離外です。攻撃隊は出せますが戦闘機の護衛が・・・」
「かまわん、我々は主力との決戦前に敵の兵力を漸減、すなわち削らなくてはならない。ゼロ戦の航続距離内に入ってこられたら漸減できん！　攻撃隊をだせ！」

11航空艦隊はこの後、レーダーにより戦闘機の待ち伏せにあい壊滅的打撃をうけた。
「・・・なかなかうまくいかないな」
「長官・・・明日は決戦かと？」
「分かっている松田」
戦艦『大和』の艦橋から外を見る。この地平線の向こうにアメリカ太平洋艦隊がいる。
「皇国の興廃この1戦にあり・・・か」

あの時、自分がこの命令を出すとは思わなかったよ、日進。
左手を押さえる山本だった。

第１４話　覚悟（後書き）

作者「ここまで読んでくださり本当にありがとうございます」

サウスダコタ「ねぇ、どこかで聞いた名前が・・・」

作者「それとこれは違います！　断じて」

イロハ「あの～」

大和「わっ！　生きてたんですか！？」

イロハ「死んでますよ～」
→頭に輪を装備

大和・サウスダコタ「「・・・・・・」」

作者「いよいよ明日は決戦です」

イロハ「それより、よくも殺してくれましたね」

作者「別にそんなこと・・・」

イロハ「問答無用です！」

ズバアァァン！
→魚雷の命中音

イロハ「感想と意見待ってますよ」

第１５話　晴空の少女達１（前書き）

今回は航空戦（の開始前）です。

第１５話　晴空の少女達１

１９４２年７月７月１７日午前３時

日本海軍は前日の１１航艦の攻撃で敵艦隊の距離が以外と近いことが判明したため、このまま進撃を続けると夜明けに会敵してしまう恐れがあったので主力艦体と真珠湾攻撃用に編成された１航艦――南雲機動部隊は一時反転、距離をとっていた。

同じころ、アメリカ艦隊は逆に進撃の手を止めようとはしなかった。

「長官、明日の夜明けごろが会敵かと？」

「それじゃ、ハルゼーたちを前進させろ」

キンメルはハルゼーから秘策があると言われていた。

「ハルゼー、頼むぞ」

ハルゼー率いる機動部隊――第１８任務部隊がけたたましいウェーキを上げ、速力を上げた。

アメリカ軍はこの時、『ＳＢＤドーンとレス』爆撃機に対艦レーダーを搭載していた。日没から続けられたこの索敵は確実に日本海軍（ジャップ）を捉えていた。敵はどうやら戦艦部隊と機動部隊に分かれていることが分かった。

「司令、悔しいですが航空戦力が少ないです。先に機動部隊を叩くのが得策です」

「そんくらい分かってる！　海軍兵学校（アナポリス）じゃ落第寸前だったがそんなことくらいは理解できる！」

（本当に大丈夫かな？）

胃が痛くなる参謀だった。

南雲機動艦隊

日本海軍は駆逐艦２隻をを先頭に４列で航行していた。

一番左の列は先頭から、

戦艦『薩摩』重巡『利根』

駆逐艦『吹雪』『白雪』『初雪』（第１１駆逐隊）

駆逐艦『磯波』『浦波』『敷波』『綾波』（第１９駆逐隊）

一番右の列は先頭から、

巡洋戦艦『伊吹』重巡『筑摩』

駆逐艦『叢雲（むらくも）』『東雲（しのめ）』『白雲』（第１２駆逐隊）

駆逐艦『天霧』『朝霧』『夕霧』『狭霧（さぎり）』（第２０駆逐隊）

戦艦『薩摩』は旧イギリス戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』

兵装

４５口径４０，２ｃｍ連装砲３基

６５口径１０ｃｍ高角砲６基

２５ｍｍ３連装機銃６基

１３ｍｍ連装機銃４基

巡洋戦艦『伊吹』は旧イギリス巡洋戦艦『レパルス』

兵装

４５口径３５．６ｃｍ３連装砲３基

６５口径１０ｃｍ高角砲６基

２５ｍｍ３連装機銃６基

１３ｍｍ連装機銃４基

（２隻とも速力は変わら無い・・・はず？）

中央の２列、

空母『赤城』『飛龍』『翔鶴』

空母『加賀』『蒼龍』『瑞鶴』
となっている。
空母『赤城』の飛行甲板には南雲機動艦隊の艦魂たちが整列していた。
その前には赤城。
「いいか！　明日はいよいよ待ち焦がれた決戦だ！　我々の目的は敵空母の撃破並びに敵戦艦の漸減！　1隻でも多く敵艦を葬るんだ！」
大声で演説する赤城。この場には翔鶴はいない。壮行会から国交断絶状態である。
「それでは、最後に万歳三唱！　天皇陛下！　万歳！」
「「「万歳！」」」
「万歳！」
「「「万歳！」」」
「万歳！！！」
「「「万歳！！！」」」
「以上！　解散！」
飛行甲板に光が溢れ消えていく。その光景を見つめる赤城。だがまだ加賀が残っていた。
「加賀？　どうした？」
「・・・この向こうに土佐を殺したやつらがいるんだよね」
土佐――八八艦隊で計画された『加賀』型戦艦2番艦。ワシントン条約により、処分された加賀の妹。
「そうだ・・・高雄や愛宕の命を奪った連中が・・・」
『天城』型巡洋戦艦3番艦『高雄』4番艦『愛宕』、赤城の妹たち。
赤城の拳が自然と強く握れれる。
「アメ公だけは絶対に許さない」
加賀が呟く。加賀の周りには殺気が漂う。それは赤城も同様だっ

た。

空母『飛龍』艦内

「いよいよか・・・」
「ねぇ・・・飛龍・・・」
「やだよ」
「一緒に寝たくないって言おうとしたのに・・・そうか、じゃしょうがない」
少し強引な蒼龍。けっこう呆れている飛龍。
「・・・明日の夜はまたこんな風に会話できないかもしれないじゃない」
蒼龍の顔には不安がある。
「蒼龍・・・」
「・・・・・・最悪、明日はもうお互い会えないかもしれない」
「！！　蒼龍！　そんなこと」
「飛龍は否定できるの？」
「・・・・・・」
お互い初めて会ってから結構一緒にいる。明日はもしかして一緒にいれないかもしれない。
はっきり言って怖い。
「飛龍」
「！！」
いきなり蒼龍が唇を近づけ、自分のと触れ合う。
「わっ！！　何するのよ！！」
真赤になる飛龍を楽しそうに見つめる蒼龍。
「いーじゃん、何回もしてるんだから♪」
「あれはカウントされないからね！」
「またまた～照れちゃって」
まったく、そう思うが自然と嬉しくなっている自分がいる。さす

がに自分も『百合』であること認めるべきか？　いや、認めたらなんか・・・負けそうだ、そう思う飛龍だった。

空母『翔鶴』艦長室

そこにはコップに入った酒を飲む翔鶴と艦長の有馬正文（まさふみ）大佐。ベットには瑞鶴がすやすやと寝ていた。

「翔鶴、いいんですか？　赤城さんが演説するようですが・・・行かないんですか？」

日本海軍には珍しい低姿勢将校である有馬は部下にも敬語を使う。もちろん艦魂にも。

「酒がまだ残ってるから行けない」

そう言うと一升瓶から酒をコップに注ぐ。

「・・・あんまり飲まないでください。二日酔いで決戦なんて・・・」

「心配するな、これで最後だから」

しばしの沈黙が降り注ぐ。聞こえるのは瑞鶴の寝息くらいだ。

「・・・・・・なぁ、有馬」

「なんです？」

「私を、被害担当艦にしてくれ」

「！　そんな！」

「別に死ぬ気は無い、でも・・・」

翔鶴が瑞鶴を見つめる。たった1人の妹。

「瑞鶴が死ぬのは自分が死ぬのよりイヤだ」

瑞鶴のそばまで歩み寄りたった1人の妹の頭を撫でる。

「・・・お姉ちゃん・・・」

「・・・寝言か・・・・・・私は家族の温かさを知ってる、どうしても守りたい」

「でも・・・翔鶴が死んだら・・・」

翔鶴は瑞鶴の頭を撫でるのをやめると、優しく微笑みながら、

「いや、死なない・・・最近同じ夢を見るんだ」
「夢？」
「夢の世界は真珠湾攻撃が成功してな・・・世界最強の機動艦隊として進撃するんだ・・・・・・そんな中でサンゴ海で私と瑞鶴が敵の空母と航空戦をしてるんだ。そこで私が瑞鶴の代わりに被弾するんだ。そのあとミッドウェイで『赤城』『加賀』『飛龍』『蒼龍』がやられてしまうんだ・・・その後の海戦も瑞鶴を守るために被害担当艦をした・・・・・・でも私は沈まなかった」
「翔鶴・・・」
「最期はマリアナだった、負けていた・・・でも私は満足だった、瑞鶴を守れたから・・・・・・だから私は死なない、そんな気がする」
「だが・・・」
「頼む」
「お姉ちゃん・・・」
「「！！」」
「・・・・・・」
「寝言か・・・」
「翔鶴・・・さっきのは保留でいいですか？」
「・・・そうだな、そうしよう」
「・・・お姉ちゃん・・・私のラムネ飲んだでしょう・・・」
「！　何で知ってる！？」
「飲んだのですか？」

空母『エンタープライズ』

「いいか！　ジャップは1人残らず殺せ！　情けをかけるな！」
「ジャップは皆殺しにするのよ！　生かしてはいけない！」
夜なのに明るい『エンタープライズ』の飛行甲板にはずらりと艦載機が並んでいた。今は最後の訓示をハルゼーとエンターがしてい

た。

「攻撃隊！　発艦！！」

アメリカ海軍はアノ３か月を無駄にはしなかった。ハルゼーは航空戦力の劣性を補うため、夜明けと同時に攻撃隊が敵艦隊に到達するよう、夜間発艦練習をしていた。

その結果、重巡２隻分の探照灯があれば発艦でえきるようになった。そのため重巡部隊の指揮官であるキンゲード中将から無理やり重巡をパク・・・もとい拝借したのだ。

「攻撃隊発艦終了、事故ＴＢＤ３機、ＳＢＤ２機」

空母『エンタープライズ』『ホーネット』『レキシトン』『ヨークタウン』の攻撃隊の内訳は、

Ｆ４Ｆワイルドキャット戦闘機９６機

ＴＢＤデバステーター雷撃機５６機

ＳＢＤドーントレス７２機

「合衆国のために・・・・・絶対に・・・」

史実と異なる『マリアナ沖海戦』が始まった

第１５話　晴空の少女達１（後書き）

小澤「ここまで読んでくださりありがとうございます」

大和「あれ？　作者帰ったんですか？」

→包帯だらけの大和

小澤「そうです、この状況が分からない人は草薙先生の＜独立機動艦隊『紀伊』―連合艦隊大勝利！＞へ」

大和「金剛さんたちは大丈夫かな？」

小澤「『アバロン』要塞もいるので簡単にはやられないでしょう」

大和「ちなみに私たちの敗因ですが・・・」

小澤「ハイ・・・」

大和「戦力の逐次投入のせいでは？」

小澤「そんなこと・・・」

大和「責任とってください！」

ズズーン！！

大和「ご意見・ご感想待ってます」

第１６話　青空の少女たち２（前書き）

お待たせしました。いよいよ戦闘開始です。

第１６話　青空の少女たち２

１９４２年７月１７日午前３時空母『エンタープライズ』

艦載機が去った飛行甲板は広々とし、静寂に、

「ええーい！！　何度言ったら分かる！　前進だ！」

包まれていなかった。

「でも・・・それでは・・・」

知らない人が見ればおっちゃんが少女を怒鳴っているという犯罪じみた光景。

「雷撃機（デバステーター）の航続距離だと帰還できなくなるんだ！　距離を詰めるんだよ！！」

おっちゃん――ハルゼーは攻撃隊を出したあと、さらに敵と間合いを詰めると言い出した。

「でも・・・距離が近づくと・・・敵に発見されちゃいますよ・・・」

もう３／４泣きの少女――空母『ホーネット』の艦魂、１６・７歳くらいのショウトカットで金髪。

「ゴラァァ！　ハルゼー！！　妹になんてことぉ！！」

「はっ？！　○×△※・・・」

ハルゼーは突如現れたエンターの飛び蹴りが被弾、重症（たいは）させられた。

「まったく・・・こんな時に貴方達は・・・」

ホーネットやエンターと同じ金髪で、セミロングの髪が潮風によってなびく１９・２０歳の少女――空母『ヨークタウン』の艦魂にしてホーネット・エンターの姉である。

「そうだ、ホーネット！　攻撃隊が必ずジャップを叩き潰す！　だから近づいても問題はないからな！　安心しろ！」

ハルゼーを撃沈したエンターはホーネットの慰めにすぐ転属する。

「いつも愉快だな」
「あら、レックス」
レックス――空母『レキシトン』の艦魂。レックスとは『レディ・レックス』――つまり愛称だ。レックスと呼ばれた少女はヨークタウンと同い年くらい、髪はブラウン。
「複雑なの？　アカギと戦うのが？」
レックスも赤城と同様、元は巡洋戦艦として建造されていたが、ワシントン条約によって空母に計画変更されたのだ。
「イヤ、フィリピンや中国から変な噂を聞いたんだ」
「噂？」
「我々の戦闘機を凌駕するスピードと小回りが利く新鋭戦闘機が採用されたそうだ・・・・・・」
「そんなこと・・・日本は航空機後進国じゃ・・・」
「私も戦闘の恐怖と緊張が見せる戦場伝説だと思う・・・だが・・・もし本当だったら」
「でも、エンターの言うとおり、攻撃隊がジャップを皆殺しにしてくれるわ」
「そうだと良いがな」
レックスの顔は曇ったままだった。

午前5時

日本海軍は反転をやめ再進撃を開始していた。
天気は晴朗、波も穏やか。その時、
『敵大編隊見ユ』
夜明けから索敵をしていた重巡『利根』の水上偵察機がアメリカ海軍の艦載機と鉢合わせしたのだ。この通信を受けた南雲機動部隊、旗艦『赤城』。
「！！　制空隊、発艦！！」
南雲中将の命令が反復され、制空隊――空母を守るゼロ戦たちが

飛翔する。
「先手を取られるとはな・・・南雲、攻撃隊は？」
「まだ準備中だ・・・今は格納庫の中だが」
空母のつくりは単純、船体の上に格納庫を置き、その上に飛行甲板がある。艦載機は格納庫や飛行甲板で爆弾や魚雷の装着が行われる。今、ほとんどの空母は格納庫内で一生懸命それが行われていた。
「遅い」
赤城が艦橋から飛行甲板を見る。最後のゼロ戦が舞い上がる。合計で８機、すべての空母から８機ずつ制空隊が空に出る。
「敵編隊接近、３時方向！　１００機以上！！」
見張り員が叫ぶ。

空母『加賀』

艦橋に１人の少女、少女は彼方にある黒点――敵の攻撃隊を睨みつける。
「土佐・・・」
土佐は最期、泣き叫んでいた、死にたくない、と。こんな無茶苦茶な条約を押し付けて・・・土佐は何も悪くないのに・・・・・・。殺された。アメリカのエゴで土佐は殺せれた。
殺す。
加賀は軍刀を引き抜く。白刃が太陽の光を反射させギラリと憎しみが反射する。
「絶対に・・・殺す！」

空母『飛龍』

「敵か！？」
「山口中将、制空隊が迎撃に向かってます」
飛龍が第２航空戦隊司令官、山口多聞（やまぐちたもん）中将に報告する。

「そうか、蒼龍は早く戻るんだ！」
「え～、やだよ。グッチは私が居なくなったスキに飛龍とるつもりでしょ。そうわいか・・・」
「やめ！　恥ずかしい！」
「否定はしないのか？　それとグッチはやめてくれ」
「その、えーと・・・とりあえず敵が来てるんですから！　早く戻って！　艦魂が居るのと居ないのじゃ結構士気とかに影響するんだから！」
「冗談よ・・・また会えるよね」
「・・・もちろん」
お互い抱きしめ合う。
「・・・・・・」
「司令？　どうしました？」
黙ったまま一点を見つめる山口に『飛龍』艦長の加来止男中佐が聞く。
「・・・何でも無い」

空母『翔鶴』

「お姉ちゃん！　お姉ちゃん！」
「う～ん、ラムネ～、ギロチンだけは勘弁してくれ～」
「お姉ちゃん！？　何の夢見てるの？」
瑞鶴の努力でやっと翔鶴が目を覚ます。
「う～ん、酒が残らないと気持ちのいいものだな」
床には空になった一升瓶が5本くらい落ちていた。
「・・・・・それより敵が来てるよ！」
「そうか・・・瑞鶴は早く自分に戻るんだ・・・」
「うん・・・お姉ちゃん、本当に大丈夫？」
「問題ない・・・ラムネに襲われるまではな」
ダメかもしれない、瑞鶴の胸の中にそんなことが浮かんだ。

空では激戦が繰り広げられていた。４８機のＦ４Ｆと４８機のゼロ戦が入り乱れる。中にはＦ４Ｆに一撃食らわしただけで爆撃機（ドーントレス）の群れにとびかかるやつもいる。
「うおおおぉおぉおおぉ！！」
Ｆ４Ｆのパイロットが叫びながら撃つ。Ｆ４Ｆに搭載された１２．７ｍｍ機銃が火を噴く。しかし俊敏なゼロ戦は軽々と機銃の雨をよける。
「当たれぇぇぇぇぇ！！」
しかし当たらない。その時突如、ゼロ戦が消えた。
「！！　なんだ！？　どこ行った！？」
必死に探す。急に後ろから殺気が向けられる。振り返ると、ゼロ戦。ゼロ戦特有の高機動力で宙返り、機体は斜め左を向き、恐ろしいくらいの小回りでＦ４Ｆの後ろについた。俗に言う『左ひねり込み』。
今度はゼロ戦に搭載された２０ｍｍ機銃が火を噴く。Ｆ４Ｆはなすすべなく火を吐きながら海と激突する。

その奮戦を見守る南雲。
「制空隊もやってくれる」
安堵の息を吐く。が、急に戦艦『薩摩』と重巡『筑摩』の高角砲たちが唸りだす。

巡洋戦艦『伊吹』

「好き勝手に改装しちゃって！」
そう言うレパルスの顔は怒りがにじみ出ていた。いくら９門の３５．６ｃｍ砲が搭載されたといえど、口径が小さくなりそのことにムカついていた（逆にウェールズは口径が増大し上機嫌）。
手にしたサーベルを敵の爆撃隊に向け、斬る。その１撃は砲弾と

なり爆撃機を爆散させる。
この攻撃隊は『レキシトン』・『ヨークタウン』の攻撃隊。編隊を組むのに手間取り遅れて南から来たのだ。それをたまたま南にいたレパルスと筑摩が発見、攻撃しているところだ。
雷撃機が高度を落としレパルスに接近する。数は7機。
必死の対空砲火が立ち上る。しかし、
「敵機魚雷を投下！　右舷より接近！！」
「くっ」
見張り員の悲鳴が上がる。そして艦が旋回するが、
ズバアァン！！
ズバアァン！！
2本の魚雷が命中する。
「ぐはっ！！」
思わず膝をつく。日本海軍のまっ白い軍服が赤黒く変色する。
雷撃機（デバステーター）は軽くなった機体を浮き上がらせ上昇する。その時レパルスは雷撃機が日本海軍の陸上機――1式陸攻とかぶさる。
「レパルスさん、大丈夫ですか！？」
ウェールズが転移してくる。彼女はまだイギリス海軍の士官服を着ている。
「レパルスさん！？」
「ウェールズ、日本機が！」
「？　猿の航空機でしたらアメリカ軍のヤツらと戦ってますよ、それより傷を見せてください」
そうだ、今は日本じゃなくてアメリカと戦っている。さっきのイメージはなんでったんだろうかと疑問が浮く。が、
「敵機！　赤城に殺到！！」
すぐにそのことは霧散してしまった。
14機の魚雷を抱いたデバステーターが赤城に接近していた。対空砲火も弱い。

雷撃隊の隊長であるバクスター中佐が叫ぶ。
「目標、敵空母『アカギ』らしき艦、よーい！　撃て！」
１４本もの魚雷が海に落とされ、『赤城』に吸い込まれる。

「無理です！！　かわせません！！」
２６０ｍという巨大な質量は慣性によって舵をきっても直進を続ける。航海長の悲痛な叫びを聞き、赤城は、
「これまでか・・・」
艦橋から１階上の防空指揮所に上がる。
「・・・天城姉さん、すぐ逝きます」
死の覚悟くらいできていた。皇軍兵士らしく潔く死ぬ。
そう思った時、壮行会での翔鶴の発言が蘇る。――死んで栄誉を手にするより生きて戦う――死を恐れる戦意の低いヤツめ。大破して生き恥をかき仲間たちの戦力から護衛用の戦力を奪いそれで海戦が負けたらどうする。艦魂達（わたしたち）は御国のため、天皇陛下のために戦う。それに生き残ることは考えてはいけない。
赤城は自分に殺到する魚雷を静かに見つめる。
だがここで珍事が起きた。
「・・・・・・？　何で爆発しない」
バクスター中佐は撃沈されるはずの『アカギ』を見る。
だが、いくら待っての爆発がないのだ。
危険を犯して確認すべく『アカギ』の上空を旋回する。
魚雷は確かに『赤城』を衝突コースにあった。
しかし魚雷は『アカギ』の艦底を通り抜けていた。
「！！　くっそ！　整備の連中！！」
魚雷とは、内部に深度計などを搭載している。その深度計により自身に調停された深度を保ち疾走する。その深度の調停が誤ったため、『赤城』の艦底を通り抜けたのだ。
「助かった・・・のか・・・」

赤城に冷や汗が流れる。それと同時に恐怖が湧きでてきた。生きたい。そう思ってしまったから。その気持ちはすぐに膨れ出す。そしてそれは死への恐怖となる。
「どうして・・・覚悟はで来ていたのに・・・」
赤城の体は恐怖で震えだす。
だが戦争は非情だった。
「敵急降下！　直情！！」
敵の爆撃隊がまっさかさまに落ちてくる。
「来るなあぁあぁぁあぁあぁ！！」

ズガァァン！！
ズガァァン！！

1発はかろうじてよけたが、2発目が直撃する。爆弾は飛行甲板を貫き格納庫で爆発する。
格納庫には攻撃隊用の魚雷や爆弾、航空機用のガソリンがある。
それらも次々と爆発する。

「『赤城』被弾！！」
見張りの報告に翔鶴の頬が反応する。
「・・・翔鶴、行ってあげなさい」
「有馬、いいのか？」
有馬の顔は曇っていた。
「喧嘩したまま別れるのはお互いいやでしょう」
有馬の言ってること、『赤城』はもう、沈没する。
「有馬、貴様の思ってるようにはさせない、私を頼んだ」
翔鶴が消えた後、少し対空砲火が減少したように有馬は感じた。
これで良かったのか？　自分に聞いてみるが答えは返ってこない。
「左より雷撃機！」
「爆撃機！　来ます！」

遊離しかけた意識を引き戻し命令を下す。翔鶴、どうやら被害担当艦になってしまったようですね。

赤城は苦しんでいた。自身の内部で起こる火災によって体がとても熱い。

ボチャーン！

何か大きなものが水に落ちる音。突如見張り員が、

「なんだ？！　艦載機が勝手に海に・・・」

艦載機？　そうか、艦載機が海に落ちた・・・、

ボチャーン！

ボチャーン！

「なにが起こってんだ？！」

赤城はまさかと思い、格納庫に転移する。

そこには翔鶴がいた。艦載機を触ると光に包まれ転移する。そとから水に何かが落ちる音がする。

「どうして・・・」

大型空母である翔鶴も敵から狙われやすい。艦魂がいれば士気も上がり、対空砲火も強化される。と言っても気休め程度だが。

「翔鶴！　何して・・・」

「！　手伝え！　早くしないと火災が大変なことになる！」

「待て！」

転移しそうになる翔鶴の腕を掴む。

「私は・・・私は・・・」

そこで言葉が止まってしまう。潔く死ぬ。それが言えない。

「私は・・・覚悟は決めてたのに・・・なのに・・・なのに・・・死ぬのが怖い」

本音が出てしまう。翔鶴は赤城を見つめ、

「なら生きろ、死ぬのが嫌なら生きるしかなぞ」

「・・・・・・」

翔鶴たちは必死に艦載機や爆弾、魚雷を海に投棄する。
「翔鶴・・・壮行会のときだが・・・」
「ッ！」
突然翔鶴の軍服が血でそまる。

「『翔鶴』・『加賀』被弾！！」
「お姉ちゃん！！」
姉に爆弾が激突する。
ズガァァン！！
「『蒼龍』被弾！」
この海域で無傷の空母は『飛龍』と自分しかいない。『加賀』と『赤城』は大火災を起こし速度が落ちていた。『蒼龍』『翔鶴』はまだ全力で走ってる。
「お姉ちゃーん！！」
瑞鶴の悲鳴は艦載機の爆音によってかき消されてしまった。

第１６話　青空の少女たち２（後書き）

作者「皆さん、ここまで読んでくださりありがとうございます。今回は皆様にお願いがあります」

大和「なんですか？　艦名の募集ですか？」

サウスダコタ「この小説は『薩摩』と『伊吹』くらいしか架空艦でないわよ？」

大和「じゃ、何ですか？」

作者「実はこの小説、『ー小説家になろうー』での検索で『艦魂』と打ってもヒットしないのです！」

大和「それですか？　それ前から分かってた事じゃ」

作者「しかし、『艦魂』でヒットしないから読者数鵜が・・・」

大和「読者数は作者の文章力がないせいでしょう！！」

ズズーン！！

サウスダコタ「まぁまぁ、それより『艦魂』でヒットできるようになるやり方がある場合は教えて下さい」

大和「ご意見・ご感想まってますよ～」

第17話　青空の少女たち3（前書き）

航空戦の最終章です。

第17話　青空の少女たち3

空母『飛龍』

「蒼龍！！」
「敵、雷撃機！　本艦の右４０度！　雷撃体制に入った！！」
「取り舵１３０度！！　急げぇ！」
「と～りか～じ、１３０度～いそ～げ！！」
艦橋に響く飛龍の悲鳴。交錯する命令と号令。
「『蒼龍』の被害は！？」
山口の怒号が飛ぶ。
「攻撃隊の準備に手間取り、爆弾などの誘爆の恐れは低いでしょうが、爆弾が3発は命中しているはずです」
遠くからは艦載機と爆発、対空砲の唸り声が聞こえる。
「司令・・・」
泣き出しそうな飛龍。
「行ってきてやれ、お前は蒼龍の大切な艦魂（ひと）なんだからな」
「ハイ！！」

空母『赤城』

「ガハッ！」
翔鶴の口からどす黒い塊が吐き出される。純白の軍服は赤く染まっている。
「おい！　しょ・・・」
ズバアァン！！
「グハ、ゲホッ、ゲホッ！」
「赤城・・・」
『赤城』の中では必死の消火活動が続けられていた。だが、まだ

魚雷などが爆発する。そのたびに『赤城』は自らの攻撃力で己を傷つけていた。
「長官・・・本艦の最大速力１２ノット・・・戦闘海域からの離脱を具申します」
第１航空艦隊の航空参謀である源田実（げんだみのる）が南雲に撤退するよう説得する。
南雲は艦橋から外を見渡す。黒煙を噴き上げる『加賀』と『翔鶴』『蒼龍』。
「・・・・・・『赤城』は速やかに海域を離脱するよう伝えろ、『加賀は』は・・・・・・」

空母『加賀』
「く・・・まだまだ・・・」
頭から血を流す加賀。実は艦橋の近くにあった航空機ガソリンを満載した給油タンク車に爆弾が命中、大爆発を起こし、その爆風によって艦橋が吹き飛ばされ艦長以下の艦橋職員が戦死、または重体。被害復旧や航海の指揮を執る指揮官が居なくなってしまった『加賀』はただただ炎上しながら直進するしかない。
「まだ・・・土佐の仇が・・・」
加賀の握る軍刀には折れ、光をなくしていた。
ズガアァン！！
「グハッ！」
『加賀』も『赤城』同様、魚雷と爆弾の誘爆により血まみれだった。速力もだいぶ落ちてきた。
もう、加賀には立つ力もなくなりかけていた。
「・・・・・・」
加賀はふと、このようなことが前にもこんなことがあった気がした。たしかミッドウェイだ。あの時は『真珠湾攻撃』で太平洋艦隊の主力を全滅させて、土佐の仇をとったと思った。だがミッドウェ

イで自分は死んだ。
（・・・・・死ぬのか）
ふと思いついた一番近い未来。自分はアメ公に自分が受けた傷と同等の痛みを与えることができたのだろうか？
「ちょっと！　何寝てるのよ！」
首だけを動かし声の主を探す。
金髪に相変わらず、イギリス海軍のウェールズ。
「何しに来たのよ、敵機が・・・」
「うるさいわね、少しは黙れないの？　猿」
少し冷戦状態になるが、すぐにウェールズが包帯をポケットから取り出す。
「イ、イギリス人に手当される覚えなんて・・・」
「そんなに血を流しててよく言うわね」
黙々と包帯を巻くウェールズ。
「包帯巻くならキングストン弁を開けなさいよ・・・」
「悪いけど今時キングストン弁を開けただけじゃ軍艦は沈まないわよ。それと私はキリスト教徒だからそう言うのは嫌いなの」
会話はあまり続かない。
「あんた・・・伝言があるなら伝えるわよ・・・」
「伝言？」
きょとんとするウェールズ。
「・・・親友が居るんでしょ？　天国に・・・」
「・・・何で知ってるの？　まさかあの時盗み聞きしてたの？」
お互いいろいろな理由で真赤になっている。
「べ、別にあんたのためじゃ・・・」
「ハヤカワに話したとき、聞いていたのね？」
かなり気まずい雰囲気。
「・・・・・伝言なんてないわよ・・・それに死ぬと決まったわけじゃ・・・」
しかし『加賀』の火災が収まる気配は、無い。

空母『蒼龍』

火災はまだおさまらない。

「蒼龍！！　蒼龍！！」

転移してきた飛龍が蒼龍をさがす。飛行甲板に倒れている彼女を飛龍が見つけた。

「蒼龍、しっかりして！　蒼龍！」

「ひ・・・龍・・・」

「蒼龍！　嫌！　死なないで！」

必死の叫び。甲板には兵士たちのどなり声。

「何で・・・そんな顔して・・・るの？　飛龍は・・・笑っているほうが・・・」

「バカ！　こんなに心配かけて・・・笑えないよ・・・」

飛龍の頬に涙が伝う。

「飛龍・・・」

「死なないで！　お願いだから・・・お願いだから・・・」

だが、蒼龍は力なく、

「それ・・・無理・・・そうだよ」

「！！　そんな・・・」

「ごめんね・・・・・・最期のお願い・・・聞いて」

「・・・・・・」

無言の公定。

「キス・・・して・・・」

飛龍はそっと蒼龍に口づけをする。

（この時間が永遠だったら・・・）

飛龍がそっと口を離す。ぐったりとした蒼龍。

「蒼龍・・・嫌だよ・・・死ぬなんて・・・嫌だよ！！」

飛龍が大粒の涙を流しながら叫ぶ。嫌だ、自分が愛した艦魂（ひと）の死なんて・・・。

「私も嫌だよ」
え？　慌てて蒼龍の顔を見つめる。脂汗がでているが、顔はいつものいたずらっぽい笑顔。
「うふふ、これでカウント1だね♪」
「蒼龍？」
「私・・・攻撃隊の準備に手間取ってて爆弾とかガソリンとか航空機にほとんど積んでなくてね、誘爆の恐れも無いし・・・消火の見通しも立ってるし・・・・・・いや～やっぱり飛龍は私のことを～、このまま『××禁』表示しないといけないようなステキイベントに突入・・・・・・飛龍？」
飛龍は蒼龍をお姫様抱っこして舷側まで連れてゆく。
「戦場から愛の逃避行？　大胆だ・・・ねっ！！」
飛龍は舷側から蒼龍を海に投げ飛ばす。
「早く私に戻ろう・・・」

空母『飛龍』

山口は艦橋から飛龍と蒼龍が口づけしようとしていることと現状から、蒼龍の最期（間違いであるが）を悟った。

ブチン。

山口の中で何かが切れた。
「各艦に打電！！」

『我　航空戦ノ指揮ヲ執ル』

「各艦の被害状況を知らせろ！！」
山口はこの時、飛龍が蒼龍を海に投げ込んだことを知らない。
「どうやら『赤城』『加賀』は大破、戦場を離脱する模様、『蒼龍』

は中破なるも航行できます、しかし航空機の発艦は不能、『翔鶴』は発艦可能とのことです！」
　参謀の返事に山口の目が鋭さを増すが、頭に血が上り『蒼龍中破』の情報は伝わっていない。
「全艦は全機を持って攻撃隊とせよ！　『利根』『筑摩』は残りの水偵で敵攻撃隊を追尾、敵空母の居場所を探せ！」
「しかし・・・敵の第2次攻撃隊の来る恐れもあります。直援もゼロ戦隊は？」
「飛行甲板を復旧させた『翔鶴』から発艦させればいい。」
　今、反撃の狼煙が上がった。
　攻撃隊の編成は以下の通り。

ゼロ戦３０機
９７艦攻５７機
９９艦爆６１機

　午前９時３０分、空母『エンタープライズ』艦橋

「何でこんなに少ないんだ？」
　ハルゼーは信じられなかった。帰ってきた攻撃隊の数が少なすぎる。
「きっとジャップの悪あがきに攻撃隊が手こずってんだ。もう少ししたら戦果を手土産に帰って来るって」
　エンターが言うが、ホーネットの顔色は良くならない。
「だがこれほどの被害・・・・・・噂の新鋭機か」
「まさか・・・これほどの被害を与えら得るような戦闘機を作れるはずは・・・」
　レックスとヨークタウンは資源と国力に乏しい日本が自分たちの戦闘機を上回る戦闘機を作れるはずがない、と思っていた。
「うん？　・・・帰ってきた！」

エンターが指し示す方角。彼方に黒点がある。
「どこだ？　俺には見えないぞ！」
それもそのはず、人間より艦魂の方が身体能力が高い。見えなくても当然だ。
だが、それは青空に映えるネイビーブルーの機体ではなかった。
「待て・・・あれは合衆国（われわれ）のじゃないぞ！！」
緑に深紅の日の丸をつけた機体。
「日本機（ジャップ）！」
すでに防空用の直援隊のＦ４Ｆ５６機はすでに空を駆けている。
約２倍の戦闘機隊に突っ込むゼロ戦。後に『ジーク』の異名で呼ばれる日本海軍の傑作戦闘機、零式艦上戦闘機――ゼロ戦の実力がアメリカ海軍に証明される。
Ｆ４Ｆに搭載された１２．７ｍｍ機銃６挺が滝のような弾幕を作り出す。
「死ね！　ジャップ！」
パイロットの意思に反してゼロ戦に弾が当たらない。そして消えるゼロ戦。
「どこだ！　どこ逃げた！！」
パイロットが後ろを見る。ちょうどゼロ戦が真後ろに着いた。ゼロ戦の両翼から火花――２０ｍｍ機銃の発砲炎が見えた。それがパイロットの最期に見た光景だった。

ばたばたと落ちるＦ４Ｆ。ハルゼー達は信じられなかった。正義の合衆国の戦闘機が悪（にっぽん）の戦闘機になすすべなく撃ち落とされる。
「敵！　雷撃隊！」

「目標、敵空母『ヨークタウン』級！　雷撃用意！」
海面１０ｍの低空を波と対空砲火を気にしながら接近する雷撃の神様、村田重治（むらたしげはる）少佐率いる雷撃隊が『エンタープライズ』の右から接近する。

機体はもっと低空を切り裂く。後続の機体もそれに倣う。波が翼と重なるのを無駄の無い動きで交わす。だが、後続の機体は村田のようにいかず、ついつい高度を上げてしまった。
パンパンパン・・・。
鳴りやまない『エンタープライズ』に搭載された1，1インチ機銃が97艦攻を捉える。
ズバァァン！！
弾幕に絡みとられた機体が海面に激突する。
「くっそぉ！！　よーい！　撃てぇ！！」
機体から魚雷が海面に落とされる。魚雷は白い航跡を残して走り去る。自分の機体が軽くなり、ふわりと浮く。

「右舷より魚雷！！」
「だめだ！　間に合わない！」
「何かにつかまれ！！　衝撃に備えろ！！」
「機関最大戦速！！」
悲鳴と命令が溢れる艦橋。
「そんな・・・」
エンターにとって嫌な時間が始まった。粘りつくほど遅い時間。
ズバァァン！！
ズバァァン！！
「グハッ！」
エンターの軍服に血が広がる。
「敵！　急降下！」
エンターの顔色が悪くなる。
ズガァァン！！
ズガァァン！！
「ゲホッ、ゲホッ！」
吐血するエンター。
「エンター！　しっかりしろ！　被害復旧（ダメージコントロール）！！」

「あっ！！　そんな・・・」
「どうした！！　報告は明瞭にしろ！！」
猛牛のあだ名の通り、真赤になり、怒鳴るハルゼー。
「『ホーネット』が・・・被雷、発光信号で、『我　被害復旧ノ見込ミ無シ　総員退艦ノ命令ヲ下ス』です・・・」
「そんな・・・姉貴・・・」
「『ヨークタウン』被弾！！　火災発生！！」
「『レックス』がやられた！！」
「重巡『ノーザンプトン』被雷！　戦場を離脱する模様！」
「クソっ！　なんでジャップがこんな艦載機持ってんだ！！」
『エンタープライズ』の艦橋に混乱が生まれる。
「『ヨークタウン』より、『我　被害復旧ハ絶望的』！」

「ジャップめ！　よくもヨーク（ヨークタウンの愛称）を！！」
憎しみに満ちたレックスの瞳が日本機を捉える。腰のホルスターから拳銃を抜く。
「死ね！！」
銃弾はくすんだ緑――日本機を捉え、日本機の翼が折れ、重力に負けた機体が海に激突し、高々と波しぶきが上がる。
「まだ・・・」
レックスは一瞬見た海面に白いラインが見えた。白いライン――魚雷の航跡がまっすぐ自分に接近して・・・。

ズバアァン！！
ズバアァン！！
ズバアァン！！

「『レックス』被雷！　『レックス』より、『我　傾斜増大中　戦闘ノ続行　不能』です！」
「そんな・・・バカな・・・」

「しかし、我々は敵機を多数撃破・撃墜してます。ここは引いて体制を立て直すべきづす」
「・・・・・・くっそぉおおぉぉおぉお！！」
ハルゼーの怒号が悲痛な空気を震わせた。

空母『加賀』

『加賀』の火災は一向に収まらない。それどころか総員退艦の命令がなんとか命令され、消火に励む兵士はもう、居なかった。それに、誘爆のせいで機関が損傷、完全に前にも後ろにも動けなくなった。
航行不能、火災の鎮火する恐れ無し、曳航不能。『加賀』の運命は、尽きた。
「カガ、命令が来たわ」
散々言い争いしたのに、とても悲痛な顔。
「誰が・・・私を撃沈するの？」
兵器としての価値を失った『加賀』はこのまま漂流させておく訳にはいかない。つまり、自沈させる。
「私よ」
遠くから『薩摩（ウェールズ）』が近づいてくる。主砲は『加賀』を向いている。
本来は駆逐艦が搭載する魚雷で自沈させるが、今後の決戦のため、温存するよう司令部が判断したのだ。
「暗い顔するんじゃないわよ、イギリス人」
「うるさい、猿」
別れの時が迫る。
「・・・・・・フッドに会ったらよろしく言っといて、優しい子だから、仲良くしてもらえるかも」
「フン、イギリス人と仲良くなる気なんて・・・ないわよ・・・でも・・・一応、伝えとく」
ウェールズは立ち上がり、

「その性格、なおしなさいよ」
「本当にうるさいわよ、さっさと消えて」
光に包まれるウェールズ。
「あと・・・日本を・・・・頼むわよ」
「私は日本が嫌いよ・・・・でも一応そうしてみるわ」
加賀に敬礼するウェールズ。加賀もそれに答礼する。
静寂に包み込まれた飛行甲板。どこかからか砲声。
「土佐・・・今逝くよ」
ズガァァン！！
ズガァァン！！
数発の砲弾が『加賀』を貫く。そして、ゆっくり、『加賀』はマリアナに沈んでいった。

この航空戦での損害は以下の通り。

日本

沈没
空母『加賀』

大破
空母『赤城』『蒼龍』（飛行甲板を復旧させた『エンタープライズ』の攻撃隊の攻撃により大破）

中破
空母『翔鶴』巡洋戦艦『伊吹』

小破
空母『飛龍』『瑞鶴』戦艦『薩摩』

稼働機

ゼロ戦２２機
９７艦攻１３機
９９艦爆１７機

アメリカ
沈没
空母『ヨークタウン』『ホーネット』（自沈）『レキシトン』

大破
空母『エンタープライズ』重巡『ノーザンプトン』

稼働機
Ｆ４Ｆ５機
ＴＢＤ２機
ＳＢＤ３機

この戦いにより、両軍はほとんどの主力航空戦力を喪失。両艦隊はこれ以上戦場に留まると危険と判断し反転することになった。

第17話　青空の少女たち3（後書き）

大和「ここまで読んでくださり、ありがとうございます。作者は草薙先生の所で反乱をおこしたので憲兵の拷問を受けています」

作者「くそ！　作者に人権を！　いつも砲撃されてたまるか！！作者に自由を！！」

憲兵1「黙れ！　この社会主義者（あか）め！」

憲兵2「私たちをもう1度出させろ！！」

憲兵3「いや、それ関係ないだろ？」

→いつか多恵子に殴り（？）飛ばされた憲兵たち

金剛「問題だが・・・拷問を作者が受けている間、更新はどうなるの？」

長「心配するな、私が書く」

大和「長門さんが・・・」

長門「こんな感じだ

『さっそうと『サウスダコタ』の艦上に現れた長門。

キンメル「なんだ！　貴様！」

長門「私は帝国海軍所属、長門だ！」』」

大和「待ってください！！　それ国際艦魂法に違反してますよ！！」

長門「
『キンメル「長門だと!?　もしや!」
長門「そうだ!　ポーカーで勝負だ!　負けれた方が撤退する、どうだ?」』」
大和「聞いてないし、そんな勝負受け入れられませんよ」
長門「
『キンメル「いいだろう、受けて立つ!」』」
大和「受けるんですか!?」
霧島「・・・下らない」
長門「なんだと!　どこが下らない!」
霧島「・・・私ならさっさと講和して、早川と私の愛の物語にする。・・・もちろん邪魔な大和は死んでもらう」
大和「え?　そんな!　嫌ですよ!!」
榛名「なんかぐだぐだな内容になりそうだよ!」
金剛「しょうがないわね」
作者「本当だ!　やっぱり私が書く」
長門・霧島「「お前は拷問を受けていろ!!」」
ズズーン!!

榛名「やっぱり砲撃されちゃった・・・」

大和「ご意見・ご感想まってます」

第１８話　決戦（前書き）

「エンター達が？」
艦橋に響くキンメルの声。
「そんな・・・あんな猿に？」
東洋の猿に空母を簡単に沈められた。こっちは敵の空母を大破させたと聞いたが撃沈したとは聞いていない。
「キンメル・・・・・・」
不安そうなサウスダコタ。このまま突っ込んだらもっと大きな被害が出るかもしれない。
被害――それは艦魂が傷つくということ。
（どうする？　このまま行くか撤退するか・・・）
「悩んでいるようだな？」
「！？　誰？」
急に光が集まり、人の形となる。
「！！　お前は！！」
そこにいたのは真白い日本海軍の軍服を着た少女。
「私は戦艦『長門』の艦魂！　長門だ！」
「ナガト？　何の用だ！　降伏勧告は受け付けない！」
「違う！」
すっ、とポケットから、トランプを出す。
「降伏とは言わない。私と勝負して負けたら・・・撤退してもらう。こっちが負けたら・・・降伏しよう、どうだ？」
「・・・・・分かった！」
「キンメル！　でも負けたら・・・」
「大丈夫だ！　ダコタ！　心配するな！」
こうして、世界最大のギャンブル『マリアナ沖賭博』が始まった。

――――――――――――――――――――――――

作者「長門さん？　なんですか？　これ」

長門「だから『マリアナ沖賭博』の序章だ」

作者「・・・・・これは本編に絶対関係ありません」

第18話　決戦

１９４２年７月１７日１５時

機動部隊同士の決戦は、アメリカ軍の油断とゼロ戦の圧倒的な性能で終わりを迎えた。

アメリカ軍は戦闘行動がとれる空母が『エンタープライズ』のみとなったため撤退。日本軍は艦載機の稼働率が足りず戦場を離脱した。

この海域に残る空母は、日本海軍の『龍驤』『龍鳳』の第４航空戦隊（主力艦隊の制空用の部隊）のみとなった。そのため偵察以外の航空戦力を喪失、両艦隊は純粋な艦隊決戦に突入することになった。

「長官、以上が機動部隊の損害です！　現在、戦艦『薩摩』重巡『利根』『筑摩』などが機動部隊と分離、『薩摩』の最大戦速２８ノットで本隊に接近中、巡洋戦艦『伊吹』は敵雷撃機の攻撃で中破、目下応急修理と排水が終わり次第、本隊と合流するとのことです！！」

参謀の１人の報告が終わる。

本隊――山本が指揮を執る第１艦隊。編成は以下の通り。

第１艦隊旗艦戦艦『大和』

第１戦隊『武蔵』『長門』『陸奥』

第２戦隊

旗艦『伊勢』

『日向』『扶桑』『山城』

第３戦隊
旗艦戦艦『金剛』
『榛名』『比叡』『霧島』『薩摩』『伊吹』
注：『薩摩』『伊吹』は機動部隊の護衛のため分離中。

これらの部隊は１列――単縦陣で２０ノットの速力で東に向かっていた。

「・・・・・・そうか、参謀長」
長官――山本が参謀長（うたがき）を見る。
「・・・何でしょう」
相変わらずの無表情。
「現時点で潜水艦を含めた敵戦艦への漸減の効果は？」
「・・・皆無です」
先任参謀、と山本は黒島を呼ぶ。
「現時点で敵にはどれほどの被害を与えることになっていたかね？」
「ハ、現時点では敵空母は壊滅ないし航空機の発艦不能、戦艦には１～２隻大破のみこみでした！」
その垢だらけの顔には『真珠湾攻撃作戦』をしていればと訴えている。
「ポーカーも戦も思い通りにはならん・・・か・・・」
「長官、臆することはありません。我々は大和武蔵（ジョーカー）を握っておるのですから」
『大和』艦長の松田が自身満々に語る。
「当たり前だ」
「右１３５度！　巡洋艦！　艦影から友軍第４戦隊所属の『高雄』！」
「来たか」
日本海軍はこの時、重巡主力の第２艦隊（近藤中将指揮）が２０

ノットの速度で東北東に重巡と駆逐艦に分かれ、単縦陣を形成し進んでいた。戦力は以下の通り。

第２艦隊（遊撃部隊）
旗艦重巡『高雄』
第４戦隊『愛宕』『摩耶』
第５戦隊『足柄』『羽黒』『那智』『足柄』
第５戦隊『最上』『三隈』『鈴谷』『熊野』

第２水雷戦隊
旗艦軽巡『神通』
第８駆逐隊『朝潮』『満潮』『大潮』『荒潮』
第１５駆逐隊『黒潮』『親潮』『早潮』『夏潮』
第１６駆逐隊『初風』『雪風』『天津風』『時津風』
第１８駆逐隊『霞』『霰』『陽炎（かげろう）』『不知火（しらぬい）』

第６水雷戦隊
旗艦軽巡『夕張』
第２９駆逐隊『追風』『疾風』『朝凪』『夕凪』

戦艦『サウスダコタ』

「エンター達が？」
サウスダコタの顔が青ざめる。そんな、と呟く声が聞こえた。
「現在、第１８任務部隊からは空母『ホーネット』の自沈が終了、『レキシトン』は浸水が止まらず転覆、『ヨークタウン』は先ほど大爆発を起こし艦体が２つに折れて海に没したそうです。」
キンメルは信じられなかった。東洋の猿に、空母３隻が撃沈された、悪夢だ、そして・・・。

「しかし、戦艦は無事、フィリピンの救援を辞めるのは・・・」
「・・・・・心配するな、撤退はしない・・・ジャップは我々U.S.Navyを本気で怒らせた」
そして、大きな屈辱を与えてくれた。
「観測機を発艦させろ！」

戦艦という艦種は誕生時から主砲の射程を長くしてきた。その結果、射程は地平線を超え、着弾の修正が目視でできなくなった。そのため、海軍は軍艦に航空機を搭載、これを着弾修正に使うこととなった。
アメリカ海軍の『ヴォートOC2Uキングフィッシャー』、日本軍の『零式水上観測機』が空に舞い上がる。
普通、観測機は空戦をしない。なぜならその仕事は着弾の観測。空戦は戦闘機の仕事。そのため観測機は戦闘機ように小回りやスピードは要求されない。
普通の観測機は。

『キングフィッシャー』の横を『ゼロ観（零式水上観測機の愛称）』が通り過ぎる。ここまでは良かった。
「？　うわぁ！！」
『ゼロ観』は素通りすることなくUターン。自身に搭載された7.7mm機銃2挺が火を噴き上げる。
日本海軍は戦前から制空権を握り、一方的に着弾観測を行うことを考えていた。そのため、観測機でもそれなりのスピード・機動力が求めれらた。結果として旧型の戦闘機並みの機動力を『ゼロ観』は手に入れた。
戦闘機並みの機動力を持った『ゼロ観』は次々と普通の観測機である『キングフィッシャー』を撃墜する。おかで日本艦隊の上空にたどり着けた機体はほんの一握りとなった。

「生い先のいい戦闘ですな」
松田が言う。観測ができなければそうそう主砲弾は命中しない。それが日本軍の常識だった。

「『キングフィッシャー』が落とされます」
艦長が、落ち着いて報告する。何の問題も無いように。
「ダコタ、問題は？」
キンメルがサウスダコタに聞く。
「いえ、ちゃんと”見えて”ます」

出撃までの3か月、太平洋艦隊は、巡洋艦以上の艦種は１６海里の距離を探知できる対艦用レーダー『ＣＸＡＭ－１』を搭載していた。それに『ＣＸＢＦ』と呼ばれるレーダーも積み込まれていた。これは１５海里程度の探知距離だが、レーダーでとらえて目標数値をそのまま射撃指揮装置に伝達し、目標設定を人力に頼らなくても行えるようにした。
つまり、光学測距儀より正確に敵の位置がわかる。観測機は、いらない。
「レーダー室、敵巡洋艦がスピードを上げました！！」
「砲撃戦用意！！」
キンメルの号令が響く。
サウスダコタは腰に吊ってあるリボルバータイプの拳銃を引き抜く。
「私たちは・・・・・・負けられない。フィリピンには私たちの到着を待ち望む将兵がいる、それに・・・・・・私はヨークたちを殺したことを、許さない！！」

「観測機より、『敵艦隊発見　本隊ヨリ1時方向　２７海里』」

艦内放送が騒ぐ。
「来たぞ！！　しっかり敵を捉えろ！！」
班長の命令が測敵所に響き渡る。早川は測敵員だが、今は他のヤツがレンズをのぞいている。
「大和、大丈夫か？」
心配そうな早川。
「はい、あの時のように居てくれますから。それに昨日もそれ、言いましたよ」
昨日、『大和（じぶん）』の第３主砲塔の上であったこと。
「大和・・・」
「私は怖くありません。それに守りたいです。多恵子さんや平和を願っている人のために。それにそれが多恵子さんとの約束ですし」
優しく微笑む大和。
「そうだな、姉さんと約束したからな」
「いいか！！　俺たちは天皇陛下のため！！　大切な人のため！！
死力を尽くして戦う！！　死ぬ気で戦え！　１４文隊が壊滅しても生き残ったヤツは測敵しろ！　絶対に勝つぞ！！」
「「「おおぉぉおおぉぉおぉぉお！！」」」
測敵所の士気が限りなく高ぶる。
「！　Ｚ旗だ！」
誰かの叫びに外を見る。赤と青と黒と黄色の旗がなびく。

『皇国ノ興廃　此ノ一戦ニ在リ　各員一層奮励努力セヨ』

『日本が栄えるか滅びるかは此一戦で決まる、各員最上の努力をしろ』を現すこの旗は、日本海海戦で乗員の士気を上げるため掲げられた旗。
それが上がる。日本を守るため、大切な人を守るため。
その時、後ろに引っ張られるような感じが起こる。
２０ノットの速力から『山城』の最大戦速である２４ノットに増

速したのだ。
「第４戦隊たちが速力を上げました！」
高雄たちがけたたましい波を上げ、『大和』達を追い抜く。
高雄たちは『妙高』の最大戦速の３３ノットで敵に突っ込む。

重巡『高雄』
「速力３３ノット！」
「速力３３ノットようそろう！」
『高雄』の大型艦橋に命令が反復される。
「ごめんね高雄、私が遅いから」
妙高が誤る。
「いえ、そんなぁ」
「ま、気にしてないけどね♪」
開き直る妙高。
「妙高お姉ちゃん？　気にしようね？　私たちのせいなんだから！」
足柄が言うが効き目は無い。
「相変わらずだな、妙高」
小松が困ったように言う。
「姉貴は人を困らせるのが好きだからな」
那智は艦橋の外を眺めながら言う。
「妙高？　貴方達は戻った方がいいわよ」
そう言ったのは青いカチューシャで長い髪をとめた１９・２０歳くらいの少女――『高雄』型重巡２番艦の『愛宕』。２番艦と言うと高雄の妹となるが、愛宕は高雄より早く竣工したので高雄が次女である。
「そうね、じゃ、帰りましょ」
「しゃーねぇな」
妙高と那智が光に包まれる。
「足柄？」

足柄はまだ消えない。
「高雄・・・またね！」
「うん、またね」
足柄の体が光に包まれる。
「それと小松少尉、無茶しないでね」
「おう、分かってるよ」
少し顔が赤い足柄。
「べ、べつにあんたのためじゃ無いんだからね！！」
「無駄にツンデレにならなくていいから！」
高雄の突っ込みに微笑むと足柄は消えた。
「高雄・・・絶対生きて日本に帰るぞ」
「分かってる。それで上陸したらなんか買ってきてね」
「・・・・・上陸するたびに貧乏になるんだよなぁ」
２人はまだ見えない敵艦隊を見る。海は青く澄み、空が移ってるようである。

重巡『アストリア』

キンケード中将は不機嫌そうな顔を外に向けていた。
「機嫌直したらどーですか？」
１３．４歳くらいの髪がブラウン、瞳は水色のアストリアが手に２つコーヒーを持ってやって来た。
「不機嫌にもなる。１３隻いた重巡をハルゼーのヤツが強引にとったんだ」
夜間での発艦のため、重巡の探照灯を使い、飛行甲板を明るくするという案は良かった。しかしその結果８隻もの重巡を拉致られた。空襲で損傷した艦もある。
数的には圧倒的に劣性。しかしこちらにはレーダーがある。それが唯一の希望だった。
「敵巡洋艦！　来ます！」

レーダー員が叫ぶ。
「速力を上げろ！！　戦艦部隊の負担を減らすために巡洋艦は私たちが始末する！」

後に第1次世界大戦に起こった世界最大の艦隊決戦――『ユトランド沖海戦』をしのぐ砲撃戦が始まる。

第１８話　決戦（後書き）

作者「ここまで読んでくださりありがとうございま・・・ぐはっ！」

憲兵「おらぁ！！　さっさと本拠地を言え！！　この赤！！」

憲兵２「なんでもいいからまた出させろ！！」

憲兵３「だからそれ関係ないだろ？」

拷問を受ける作者

そのころ、

大和「いいですか？　いくらなんでも作者のＰＣ勝手に見ちゃって」

山城「平気、平気♪」

瑞鶴「何があるんだろうね？　お姉ちゃん」

翔鶴「きっとＲものだな」

蒼龍「ドキドキするね、飛龍」

飛龍「見ていいのかなぁ？」

陸奥「大丈夫だろ？　あいつは友達に『大正の戦艦は萌える！！』と豪語する変体、戦艦の画像しかないのでは？」

扶桑「でも、関心できることじゃないわよ」

山城「・・・？　なんだこれ？」

そこには『マリアナ沖海戦戦没艦2型』・『戦没艦表2型改』と書かれたファイル。

全員「・・・・・・・」

山城「・・・・・・・2型開くよ・・・」

扶桑「・・・！　赤城さんや加賀さんってが書いてある！」

蒼龍「あっ！　私も！！」

山城「じゃ、改」

そこには、『赤城と翔鶴でなんかやるから赤城の撃沈はなし』・『蒼龍と飛龍でセットだから大破』など。

他にも『赤城』は綺麗な空母だから撃沈するのはもったいない、とも。

全員（・・・もしかして高感度上げれば生きて終戦迎えられるんじゃ・・・）

憲兵「ほら！　さっさと出ろ」

作者「いいんですか？」

憲兵「うるさいヤツだ！！」

解放された作者。

作者「どうしたんだ？」

大和「さ、作者！　肩凝ってるでしょ？　もんであげる！！」

作者「えっ？　別にそんなこと・・・」

山城「作者！　遅れたけどバレンタインのチョコ！」

作者「いいの？」

扶桑「作者さん、クッキー焼いたのでどうですか？」

作者（な、何だ！！　何があった！？　て言うかすごくフラグが立ってる予感！　でも）

大和「？　どうしました？」

作者「なんか・・・・・・みんな優しくて・・・・・・気味が悪・・・」

ズズーン！！

大和「失礼です！！」

山城「意見と感想待ってるわよ！！」

第１９話　海駆ける少女（前書き）

１９４２年７月１７日

「なに？　大統領が？」

『サウスダコタ』の艦橋にキンメルの緊迫した声が響いた。

「そんな・・・大統領が・・・亡くなった・・・」

そう、日頃の激務がたたり、大統領――フランクリン・ルーズベルトが無くなったという無電が届いたのだ。

ドイツの新型列車砲の登場により、欧州での敗退。あのアメリカでも太平洋まで手が回らなくなってきた。

それから数年。戦争は終わり、また平和が戻ってきた。

「霧島、どうした？」

そして、早川は『霧島』の測敵手になっていた。

「・・・別に」

瀬戸内海が青く輝く。

彼が居てくれるだけでいい。もうすぐ私は老朽化のために解体される。だから、このひと時を楽しみたい。

「霧島・・・」

「・・・早川」

２人の唇が・・・。

――――――――――――――――――――

作者「霧島さん？」

霧島「・・・」
→無言でＲＰＧを構える霧島。
作者「上のヤツは本編に関係ありませーん！！」
霧島「・・・消えろ」
ズバァァン！！

第１９話　海駆ける少女

１９４２年７月１６日重巡『三隈』１８時５５分

決戦を明日に控えた日本海軍の第２艦隊は本隊との合流のため、２０ノットの速度で東北東を目指していた。

そして各艦は決戦前の無礼講とばかしに宴会が行われていた。そんな時、

「無い！　足柄から借りたラノベが無い！！」

１６・７歳くらいで、白いリボンで髪をツインテールにし、メガネを掛けた少女が叫ぶ。

「だから片付けをやれって言ったんだ！　宴会７時からだったよな？　今何時だ三隈？！」

少女――三隈は同い年くらいの少尉に、

「分かんないよ～成美（なるみ）」

少年――高須成美（たかすなるみ）少尉はため息をつく。

「・・・そういやお前、俺の部屋によく小説とか同人誌忘れて行くけど・・・・・・俺の部屋か？」

「分かんない！！　こうなったら私は足柄から何も借りてない！」

つまり借りパク宣言である。

「ふ～ん・・・無かったことにするんだ～」

「「・・・・・・」」

噂をすれば何とやらである。

重巡『高雄』会議室

「え～では、そろそろかん・・・」

「ぷは～、やっぱり暑い日のお酒は美味しいわね」

「ちょ！　姉貴！　何飲んでんだよ！」

「妙高は飲みっぷりがいいわね♪　ほらほらどうぞ～」
順に高雄・妙高・那智・愛宕。
乾杯の音頭を取る前に巡洋艦の宴(うたげ)は始まった。ほとんどの艦魂はお酒よりラムネを飲んでいるが、何時になくテンションが高い。何故ならこれが家族との最期になるかもしれなかったから。
「「・・・・・・」」
だがテンションの低い艦魂が2名いた。
「妙高さん・・・私が・・・私が乾杯って言ってから飲んで下さいよ・・・」
「三隈～私のラノベ返して～」
高雄と足柄である。
「何やってんだ？」
「さぁ？」
小松と三隈につれて来てもらった高須は持ってるラムネのビンをあおる。喉に冷たく甘い液体が流れる。
「小松少尉！　こ、こ、こ、今晩！！　い、い、い、！！」
「そんなに緊張するなら今晩一緒に寝るとか言わない」
前者は高雄姉妹の三女、ショウトカットの頭に青いカチューシャがある１４・５歳の摩耶。後者は三隈の妹、摩耶と同い年くらいで白い髪飾りが付いている鈴谷。
「？？」
「う～！！」
「泣くな、泣くな」
涙ぐむ摩耶。
「よ～し、いい感じにみんなテンションが上がってるわね」
ニヤリと笑う妙高。
「「「・・・・・・」」」
その場の空気が凍りつく。

バタン！！　ガチャ！　ガチャ！　ガチャ！

愛宕が扉を閉め、鍵をかける。
「ちょ！！　姉さん！？　そんなに鍵あったっけ？」
半泣きの高雄。
「てか、高雄、鍵閉めるとこは突っ込まないのか？」
呆れている那智。
「あ～！！　私まだひぐ×しの『澪×し編』やり残してたのに！！」
「私は第2期のハ×ヒ見たかったのに～！！」
足柄と三隈の泣く頃に、である。
「むっふふふふ、そうね、今回は『撃ってかわしてじゃんけんぽん』をしましょう」

『撃ってかわしてじゃんけんぽん』――それは簡単かつシリアスなゲーム。

ルールはまず、じゃんけんをやり、勝った方が『二十六年式拳銃』で負けた相手を撃つ、負けた方は死ぬ気でそれを回避する。銃弾に当たれば負け、避ければ勝ちというシンプ・・・。
「おかしい！！　死ぬって！！　人間の俺は死ぬって！！」
小松の絶叫。だが作者は止まらない。読者の皆様が期待しているから。
「要らねえよ！　このナレーション要らねえよ！！」
「小松君がそんなに言うなら競技を変えるわよ、妙高」
愛宕がちらっと妙高を見る。
「『投げてかわしてじゃんけんぽん』にしましょ」

『投げてかわしてじゃんけんぽん』――それは（中略）なゲーム。

ルールはまず、（中略）勝った方が『九九式手榴弾』を相手に投げつける（中略）というシンプ・・・。

「無理無理無理！！　逝くって！　絶対逝くって！！」
「もぅ、それでも皇軍兵士？」
「そうよ、お姉さん達が気を使ってるのに・・・何がしたいの？」
「「普通に『叩いて被ってじゃんけんぽん』がいいです！！」」
わがままだね～、うなずき合うお姉さんたち。
「最上もなんか言ってあげて～」
１８・９歳くらいで三つ編みにメガネ――委員長さんスタイルの最上に話がふられる。彼女は三隈や鈴谷の姉でもある。
「私ですか！？　えーと・・・あまりハメを外さないように！　以上です！！」
それは求めている答えでは無かったらしくしょげる二人。

『叩いて被ってじゃんけんぽん』――以下略

「略ししすぎだ！！」
「まぁまぁ那智姉さん、トーナメント表作ったから貼るの手伝って～」
「早！　作るの早いって足柄！！」

摩耶ＶＳ那智

「わ。私だ！！」
「いきなりかよ」
テーブルに置かれたピコピコハンマーとヘルメット。
「（年下だからって手を抜くつもりわねぇ、やるんだったら本気だ！！）いくぞゴラァァァァ！！」
「ひっ！！」
だが周りからは冷たい目線が注がれる。
「「じゃんけんぽん！！」」
摩耶、グー。那智、パー。

（もらったぁ！！）
「ひぐっ」
叩いてもいないのに泣く摩耶。
「・・・・・・」
どうしろってんだ！！　そのままフリーズする那智。カップ麺があれば美味しくなるくらいの時間が流れた後、摩耶は慌ててヘルメットを被る。
「お、お姉ちゃん！！　やったよ！！　愛宕お姉ちゃん、高雄お姉ちゃん！！」
「よく頑張ったわ」
「摩耶いいわよ！！」
「棄権していいか？」
こうして長い戦いは終わった。

鈴谷ＶＳ小松

「私？」
「小松少尉がんばって！！」
向かい合う２人。
「じゃ、はじ・・・」
高雄が言おうとした時、
「「じゃんけんぽん！！」」
もう２人は始めていた。
「また・・・また・・・無視された・・・」
２人の動きはどんどん加速する。まるで２人ともヘルメットを常に被り、常にハンマーを持ってるようだった。
「・・・？　あれ？　２人とも常にヘルメットとハンマー持ってね？」
高須が呟く。
「本当だ」

足柄も同意する。
「とー！　やー！」
「・・・！！」
もうチャンバラである。
「おりゃ！」「！！」
小松が鈴谷のハンマーを投げ飛ばす。
「覚悟！！」

ズガァァン！！

「ルールは守りましょう」
銃口から煙のでる『二十六年式拳銃』を構える最上。
「「す、スイマセン」」
２人とも失格。

足柄ＶＳ三隈

「・・・ラノベの仇」
「へ？」
不穏な空気が充満する。
「「じゃんけんぽん！！」」
三隈、チョキ、足柄グー。
「おーと！！」
急いでヘルメットを被る三隈。だが、
「天翔×閃（あまかける×のひらめき）！！！」
「ちょ！　ヘルメット被って・・・・」
ズバァァァァン！！
「・・・悪は滅びた」
満足そうな足柄。
「・・・あれ？　第６艦隊の・・・潜水艦・・・の・・・かんこ・・・

・手まねき・・・てる」
（（（ルール関係ねぇ！！））））
「え、衛生兵！！」
「姉さん、逝ってらっしゃい」
「す、鈴谷・・・」
「ルール違反ね」
「最上、突っ込みどころ間違うな」
楽しい、そこにいる殆どの人はそう思った。しかし、この楽しさが続くとは誰も思わなかった。明日にはもう2度と生きて会えないかもしれない。

「・・・・・・ぐす」
「泣くなよ三隈」
「だって・・・」
月が2人を照らす。『三隈』の艦内はまだ騒がしい。
「・・・・・・」
今の夜空のように静かな沈黙。三隈は少しドキドキしていた。
でもそれは悪くない。
「寝るか？　三隈」
「う、うん、お休み」
「おう」
笑って艦内に戻る高須。三隈のドキドキはまだ伝えられるものにはなっていなかった。

「・・・・・・」
「くあ～、疲れた・・・何書いてんだお前ら？」
「那智さん、お邪魔してます」
足柄の部屋、ここに高雄が来ていた。

那智が足柄の机に近ずく。そこには書きかけの便せんと『遺書』と書かれた封筒。
「那智姉ちゃん・・・妙高お姉ちゃんは？」
「あ？　あぁ、酔いつぶれて愛宕と寝てるよ・・・寝させるまでが地獄だったが・・・」
那智の視線は『遺書』しか見てない。
「？　なかなか書けないね、この小説と違って」
半日くらい掛かってますが・・・この小説。
「そういや、書いてないな『遺書』」
大概の艦魂は決戦前に『遺書』を書く。
「高雄は書けたか？」
「まだです、鳥海に出すんですが・・・なんて書いていいやら」
鳥海――『高雄』型重巡４番艦の鳥海は現在、シンガポールにいる南遣艦隊の旗艦を務めていた。だから開戦以来ほとんど会っていない。
重い沈黙、それを破ったのは足柄だった。
「あ～あ、書けない。そもそもまだひぐらしのエンディング見てないから死ねない！　あとハ×ヒの２期とか見たいからやっぱり無理！！」
「・・・だよね、鳥海とはまた会えるだろうし・・・いいや」
「面倒だからパス」
「「・・・クス・・・あはははは」」
「また明日ね！」
「お休み高雄～」
「うん」

１９４２年７月１７日重巡『高雄』

「高雄・・・またね！」
「うん、またね」

足柄の体が光に包まれる。
「それと小松少尉、無茶しないでね」
「おう、分かってるよ」
少し顔が赤い足柄。
「べ、べつにあんたのためじゃ無いんだからね！！」
「無駄にツンデレにならなくていいから！」
高雄の突っ込みに微笑むと足柄は消えた。
「高雄・・・絶対生きて日本に帰るぞ」
「分かってる。それで上陸したらなんか買ってきてね」
「・・・・・上陸するたびに貧乏になるんだよなぁ」

天気は晴朗、世界最大の海戦が始まるにはいささか穏やかな天気と時間が流れていた。

第１９話　海駆ける少女（後書き）

大和「ここまで読んでくださり、ありがとうございます」

作者「やっと砲撃戦だ・・・長かったなぁ」

大和「そうですね、で、戦艦の出番はいつですか？」

作者「戦艦？」

大和「わくわく！」

作者「当分先かと・・・欧州編も書かなくては」

長門「時間がかかるようだな、よし！」

大和・作者「「ダメ！！　絶対ダメ！！　賭けはしません！！」」

長門「そう言うな」

大和「二等海士長先生の所だけでは飽き足らず・・・」

作者「今、運気が低迷中だし・・・」

長門「いつも低いだろ？」

作者「だからこれを温存してテストに生かすんです！！」

→テスト１週間を切りました。

長門「つまらん」

作者「うーん！　書き終えて疲れたから気晴らしにオンラインで海戦やろうかな♪」

大和「勉強はどうしました！！」

ズズーン！！

ナガト「このままだと来週の更新は無いようだな、意見・感想待ってるぞ」

第２０話　海駆ける少女２（前書き）

どうもです、小澤です。
本編とは関係ありませんが、忌々しい定期テストが終わった時、友人に、
「なぁ、テスト終わったし一緒に横須賀でも行こうぜ！！」
と言ったら場の空気が凄く悪くなってしまいました。

第２０話　海駆ける少女２

１９４２年７月１７日午後３時３０分

太陽の光が突き刺さる真夏の太平洋はまだ気温を下げる気配を見せない。そんな海を主隊と分離した巡洋艦たちが颯爽と駆け抜ける。

「水偵より、敵巡洋艦が突撃を開始したと言ってます！！」

「敵艦隊見ゆ！！　数は５！！」

「主砲撃ち方用意！！」

『高雄』の艦橋は緊張で満たされていた。

「・・・艦長、手筈どおりやってくれ」

第２艦隊の司令官、近藤中将が『高雄』艦長の朝倉大佐をちらりと見る。

「司令、お任せください。必ずや敵巡洋艦を１撃で葬ってやります」

自信に満ちた返答。たった１撃で敵艦を撃沈する確信が朝倉にはあった。他国の重巡に無く、日本の重巡にあるもの。それが朝倉の自信だった。

「・・・距離？」

「敵艦との距離、およそ２万！」

「とーりかーじ！！」

『高雄』の体が右に傾き出し、左に転舵していく。後続の足柄たちの第５戦隊、三隈たちの第７戦隊が『高雄』が作った白い道を追う。上空から今の日米両艦隊を見るとアルファベットの『Ｔ』を連想させられる。

第１７任務部隊『アストリア』

「ジェネラル！　ジャップが左回頭します！　トーゴーターンです

！！」

トーゴーターン――『T字戦法』や『丁字戦法』とも呼ばれているそれは、日露戦争の日本海海戦の時、東郷平八郎大将率いる連合艦隊がロシアのバルチック艦隊に対して今のように『T』字を書いたのだ。結果として連合艦隊は艦の前後にある主砲を撃てたが、バルチック艦隊は前部にある主砲しか撃てなかった。しかも先頭の艦に攻撃が集中するなど一方的な攻撃をすることに連合艦隊は成功したのだ。

「ふふふ、ハハハハ！！　バカの一つ覚えが！　右に回頭だ！」

アメリカ艦隊は『T字戦法』を避けるために右に回頭、同航戦なった。

「ジャップ、貴方達が中国でしてきたことを合衆国は許さない、絶対に・・・」

「お姉ちゃん無理してかっこいいこと言わなくていいよ♪」

アストリアと同じくブラウンの髪、クリっとした青い瞳の少女――アストリアの妹の1人、ミネアポリスが現れた。

「・・・なぁ！！　別にそういうのじゃないんだから！！」

「まぁ落ち着け」

真赤になって叫んでいるアストリアにキンケートが少しほほ笑む。

「・・・で？　どうしたの？　これから戦闘なのに・・・」

そういうとミネアポリスは少し顔を曇らせた。

「うん・・・あのね・・・とっても・・・とっても怖い・・・」

艦魂（かのじょたち）にとって初めての戦場。今まで訓練では無かった死への恐怖。

「・・・・・・大丈夫、お姉ちゃんが居るよ、絶対守ってあげる」

優しく呟くアストリア。

「うん、ありがと。お姉ちゃんが守ってくれるなら、私もお姉ちゃんを守るよ！！　・・・あれ？　これじゃやられるのはジャップだけだね！」

「そうね、私たちは必ず勝てる。この戦いは中国、いえ、アジアをジャップから守る聖戦、合衆（せいぎ）国が負けるはずないわ」

アストリアの瞳には強い輝きがある。・・・私も負けてはいられないな、キンケードはおもむろに自分の軍帽を深く被りなおす。
「て、敵艦発砲！！　いきなり全門斉射です！！」
「何だと！？」
普通の砲撃は砲身が敵艦を向き、仰角をつけて敵艦に砲弾を投げ出す。だが艦載砲は波によって絶え間なく揺れている。もし仰角を３０度にした場合、波の影響でそれは３２度や２７度など変化する。そうすると敵艦に砲弾が当たらない。だから各砲塔から１門ずつ射撃、着弾の観測と修正を行う交互射撃を行う。
（何故だ？　何でいきなり・・・）
キンケードがその理由を考える。またジャップが斉射する。しかし後ろについてきた４隻は転舵中で発砲しない。
撃ちだされた砲弾は自身の運動エネルギーを使い果たし、重力により引きずられ海水を切り裂き水柱のカーテンを作り出す。少しの間だけ敵艦がカーテンにさえぎられる。
「・・・何をたくらんでいる？」
「・・・嫌な・・・感じがする・・・」
さっきと打って変わって真剣な表情を浮かべたミネアポリスが言う。
「まさか・・・魚雷？」

――日本海軍の重巡は雷装されている――

アメリカでは重巡は魚雷などの水雷兵器より砲撃力に重点が置かれる物だとと考えていた。それは欧州の海軍も。だから彼らの常識からすればそれは考えられなかった。
しかし、１９３７年の『ジョージ６世戴冠記念観艦式』の時に日本海軍から重巡『足柄』が観艦式に参加した。そこで『足柄』を取材したジャーナリストは甲板上に魚雷発射管は見られなかったが中

甲板に『謎の開口部』を見たと話している。

「まさか・・・」

「・・・だが、もし雷装されていても心配無い、この距離なら魚雷の射程に入らないだろ」

キンケードは自分たちが使っている魚雷――『ＭＫ．１５魚雷』の最長射程が９千１ｍだから敵の魚雷も大体同じくらいだろうと判断した。

だが完全にこの悪寒を払拭し切れないでいた。

「・・・考えても埒が明かない、撃て！　撃ち続けろ！！　ジャップが何かを仕掛ける前に撃沈しろ！！」

「サーイエッサー！！」

ズズーン！！

『アストリア』に搭載された２０ｃｍ砲がレーダーと連動した射撃指揮装置によって光学測距儀による測敵よりも正確に敵艦を捉えて咆哮する。

重巡『高雄』艦橋

全門斉射の後に『高雄』たちは通常の交互射撃をしていた。

ズバァン！！

「きゃ！！」

『高雄』の周りに水柱を作り出し高雄の短い悲鳴が艦橋に響く。

「大丈夫か！？　高雄！」

小松が心配そうに叫んでしまう。

「これくらい平気です」

「弾着１５秒を切りました！！」
「・・・敵艦隊は進路を変えていないな」
「はい、雷撃成功ですよ、司令」
日本海軍の重巡はキンケードが思ったとおり雷装されていた。第２艦隊は回頭と同時に前門斉射の爆煙で雷撃を視認されないようにしたのだ。
それにこの魚雷は他国が使ってる普通の魚雷ではなった。
普通の魚雷は自身に搭載された空気と燃料を燃焼させて機関を動して進む。だが空気のほとんどは窒素でできている。窒素は燃焼されないし水にも溶けないから白い雷跡がでる。
しかし日本軍の魚雷――『九三式酸素魚雷』はその名の通り空気の代わりに酸素を積んだ魚雷を作り出した。結果として窒素が無くなった分、航続距離とスピードの増大、弾頭の大型化などにも成功したのだ。その航続距離は３６ノットで４万ｍ――『大和』の射程なみに長くなった。
「弾着１０秒前！！」
「やったぁ！！」
「よし！！」
高雄と小松の声。
「おいおい、まだ着弾してないんだ、手前で爆発するかもしれないんだから気を抜く・・・」
「着弾５秒・・・あ！！　多数の魚雷が敵の手前で爆発します！！」
あの参謀の顔がみるみる青くなり、暑さとは無関係な汗を流す。
艦橋の人間がさっきの参謀に『お前が言ったから』と言いたげな視線を突き刺す。

重巡『アストリア』

その悲劇はいきなり起こった。

ズバアアァァァん！！　ズバアアァァァん！！　ズバアアァァァん！！

「な、なんだ！！」

いきなりそそり立つ水柱。その時、

ズバアアァァァん！！

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ミネアポリスの腹部が爆ぜ、鮮血をあふれた出せる。

「グアッ！　・・・痛い・・・痛いよ・・・おねえ・・・ガハッ！！」

「ミネアポリス！！」

「『ミネアポリス』が被弾！！　傾斜増大中！！」

艦魂を見れる人間にとってここは地獄になった。

「しっかり！　ここよ！　お姉ちゃんはここに居るよ！！」

ミネアポリスをどす黒い海からアストリアが抱き起こす。彼女の軍服も赤黒く変色していく。必至に止血しようとするが意味は、無い。

「・・・お姉・・・ちゃん・・・ぐあぁぁぁぁぁぁ！！」

遠くで爆発の音。

「ジェネラル！！　『ミネアポリス』より発光信号、我　航行不能被害復旧ノ目途立タズ　我　総員退艦ヲ命令ス」

「そんな・・・」

アストリの顔に絶望がさす。

「何があった！？」

「分かりません！！」

酸素魚雷の利点、それは酸素を燃焼――燃やすと水に溶けやすい二酸化炭素になる。水の溶けやすい、つまり航跡が発見されにくくなる。今回は信管の調整ミスでこうなってしまった。

「やだよ・・・死にたく・・・グハッ」
ミネアポリスが口から赤い塊を吐く。
「大丈夫！　大丈夫！」
アストリアは必死に叫ぶ。
「まだ・・・生きた・・・い、死にたく・・・死にたく無い」
涙と血で染まった顔を恐怖が覆う。
「『ミネアポリス』が急に傾斜を増大させます！！」
そう見張り員が叫ぶと、ミネアポリスの体も透け始める。
「やだよ・・・お姉ちゃん・・・おねえ・・・」

ズバアアアアアアアアアアン！！

『ミネアポリス』が大爆発を起こした。それと同時にミネアポリスの体が光の粒となり天に昇って行く。
「ミネアポリスウウウウウウウウウウウ！！」
『アストリア』の艦橋に悲鳴が上がる。

重巡『高雄』

「・・・1発だけ！　か」
近藤が『だけ』を強調して言う。あの参謀は艦橋の隅で空気になっている。
「す、水偵より、遠弾　下ゲチョイ」
『高雄』の砲弾はまだ敵を捉えてはいなかった。
「そんな・・・」
意気消沈の高雄。
「だ、大丈夫だって、まだこれからだろ？」
その時、

ズバアァン！！

バリン！！
「きゃあぁぁ！！」「ッ！！」
突如、『アストリア』の砲弾が『高雄』の艦橋手前にある第３砲塔を直撃する。幸い砲弾は砲塔を貫通しなかったが衝撃で艦橋に張られている窓が割れ、破片が艦橋にいる者に突き刺さる。
「高雄、怪我は・・・」
「これくらい・・・それより小松少尉こそ肩が！」
高雄の頬に１筋の血が伝う。小松はガラスの破片が肩に刺さっていた。
「俺だって平気だよ」
そう答えるが額には脂汗。
「・・・クソ、何故当たらない・・・訓練だと２万ｍから敵にあったのに・・・」
近藤中将の顔に血と怒りがにじむ。

重巡『アストリア』

アストリアはもう艦橋に居なかった。彼女は自分に搭載されている第２砲塔の上にいた。その目にはたった一つだけ、復讐の光があった。
「・・・・・・」
無言で空間から拳銃を出現させる。
「・・・す・・・」
大型の艦橋をもつ巡洋艦――高雄を睨み呟く、拳銃のスライドを引き弾を薬室に押し込む。
「・・・ろす・・・殺す、殺す！　殺す！！　殺す！！！」
呟きはいつか叫びとなり空気を震わす。そしてトリガーを引く。
乾いた発砲音とともに２０ｃｍ砲弾が飛翔する。
その時、ジャップの後続の４隻が進路を変えて突撃してきた。それを一瞥すると銃口をそっちに構える。妹を殺した奴ら。

許さない、許さない！　許さない！！
「1人も残らず殺してやる！！　ジャップ！！」
おだやかなマリアナに狂気のびが叫響いて行った。

第２０話　海駆ける少女２（後書き）

作者「飽きずに読んでくださり本当に感謝します」

大和「アストリアさん・・・敵ながら可哀そうです」

サウスダコタ「無用な心遣いは逆に彼女を傷つけるだけよ・・・」

作者（・・・空気が重い・・・後書きが始まって以来たぶん１番重い）

→その空気を作った人

しばらくして、

大和「そう言えば横須賀行くんですか？　もの好きですね」

作者「・・・横須賀はいいとこですよ、駅の近くの喫茶店がとても美味しんですよ！！　他にも『横須賀軍港めぐり』って言う１２００円かかるクルージングがあって、第７艦隊や自衛艦隊を間近に見れるんです！！　・・・そう言えば前回行った時に、二等海士長先生の＜『たちかぜ』と二等海士長～ＤＤＧ１６８『鋭き剣』～＞にでてくる『たちかぜ』さんを見ました・・・速射砲の砲身がとられて白い斜線が書かれていました・・・」

大和「・・・あの・・・私、思うんですが・・・」

作者「はい」

大和「１２００円もつぎ込む価値あるんですか？」

作者「（またＫＹなことを・・・）あります・・・財布が限りなく軽くなりまずが・・・」

サウスダコタ「・・・重症ね」

作者「！！　何だと！！　あれはな！！」

ズズーン！！

サウスダコタ「ふ～、スイッチが入ると面倒だから撃っちゃった♪」

大和「意見・感想待ってますよ」

第２１話　海駆ける少女３（前書き）

巡洋艦編の最後です。・・・・・・長いです。『艦体決戦物語』始まって以来、１番無駄に長いです。

・・・・・・この前まで長門や霧島の書いたものを前書きにしていたら、何を書いてよいやら分からなくなって来た小澤です（汗。

第２１話　海駆ける少女３

１９４２年７月１７日午後３時４０分、重巡『最上』

「司令！　突撃するべきです！！　４・５戦隊の発射した魚雷が外れたのなら、我が第７戦隊が突撃、アメ公に徹鎚を加え、これを殲滅させるべきです！！」

最上たち第７戦隊は回頭が遅れたため、魚雷の発射のタイミングを逃してしまい、魚雷発射管にまだ魚雷が横たわっていた。

「だが・・・それでは・・・」

「ご決断を！！　指令！！」

参謀に突撃を迫られる司令――栗田健男（くりたたけお）中将。彼は史実だと、主目標を敵上陸船団の撃破としたレイテ沖海戦で、戦艦『武蔵』以下２０隻もの艦艇を失い、上陸地点の近くで反転。撤退する『謎の反転』をしてしまい戦後は、愚将・弱将と罵（ののし）られ、架空戦記作家から早々に戦死させられたりしている評判の悪い提督だ。

「・・・指令、突撃するべきです」

そう進言した最上。

「最上・・・だが・・・」

突撃を渋る栗田。

「ではいつ突撃するのです？」「指令！　敵は我々を待ってません！」

「・・・しかし・・・」

口論の熱と太陽からの熱で艦橋が熱くなる。

「た、『高雄』が被弾！！　被害は軽微のようです！！」

見張り員が上（うわ）ずった声を上げる。

「指令！　敵の攻撃は恐ろしく正確です！　きっと新兵器を投入したのでしょう。長引けば数の優位を失いかねまあせん。突撃して一気にけりを付けるべきです！」

詰め寄る参謀。
「だが・・・」
栗田が突撃をする理由。それは艦魂だ。
(私たちは戦争をしているのだ。ここは戦場だ・・・子供が居るべきでは無い戦場だ)
何故、彼女たちが傷つかなければならない。だから突撃を渋る。
「指令、お願いします。このままだと高雄が・・・」
そんな目で見るな・・・私は・・・怖い。艦魂(かのじょたち)が傷つくのが・・・。
「指令!!」「我々に早く突撃の命令を!!」「栗田指令!!」
参謀や艦橋職員の叫び。
「・・・・・突撃しよう、各艦に伝えてくれ」
苦渋の決断。栗田は心配そうに最上を見つめる。

重巡『三隈』

「成美、これから突撃だって」
「え? そうなの?」
ここは『三隈』の魚雷発射管の前。高須は『三隈』の水雷士。
「そういや、足柄のラノベあったか?」
「うん、あったよ。成美の部屋だった」
ほら、とラノベを見せる。
「たく・・・借り物なんだから丁重にしろよな」
はいはい、と生返事で返す三隈。
船体が左に傾き、進行方向が右にずれていく。
「・・・・・」
しばらく続く沈黙。三隈は高須の横顔を見てみる。その顔は引きずり込まれそうな青をたたえる海を見ている。
昨日のドキドキが蘇る。
「なぁ、三隈」

「な、何？」
心臓が1度、普段の倍くらい動いた気がした。
「その・・・海戦がさ・・・終わったら・・・どっか一緒に行かないか？」
顔を紅潮させて言う。まさかこれは、
「・・・もしかして・・・デート？」
「・・・そうかもしれない・・・」
いや、そうなんです。
「う、うるさい！！　後書きで砲撃されるよう頼んでおくぞ」
本当にすいませんでした。
「・・・い、いいよ」
三隈は混乱していた。ゲームや小説でそう言うのを読んだことはある。しかし誘われたことはない。だがとても嬉しかった。
「約束だよ、忘れたら、嫌だよ」
「ひぐ×し？　じゃ、指きりだ」
三隈の小さな指と高須の指が結ばれる。
ここは本当に戦場なのか疑問になる。
「で？　行きたいとこあるか？」
「・・・・・・そう言えば艦っから降りれないんだった・・・」
「・・・・・・」
2人のデートに早くも暗雲が立ち込める。

重巡『アストリア』

怒りで血走った眼が突撃してきた4隻――第7戦隊を睨む。
「殺す！　ジャップは1人残らず殺してやる！！」
ミネアポリスの最期の叫び。まだ一緒にいたかった。まだ一緒に話したかった。まだ一緒に笑いたかった。
だがそれはもう出来ない。
「死ねぇぇぇぇぇぇぇ！！」

拳銃がパン！　と撃たれ、２０ｃｍ砲弾が突撃してきた第７戦隊を襲う。
キンケードはそれを艦橋から見ていた。
その目はミネアポリスの復讐には燃えていなかった。逆に哀れを含めた目だった。

彼女は壊れた。日本軍が、戦争が彼女を壊し、狂気を植えつくた。彼女はもう笑わない。笑ってもそれはさっきまでの優しさを湛(たた)えたものじゃない。きっともう彼女は・・・。

「Ｇｏｄ，　ｗｈｙ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｔａｋｅ　ｈｅｒ？（神よ、何故彼女を奪うのだ？）」
誰にも聞こえることのない呟き。遠くでの砲声。飛び交う命令。あんな少女を壊しておいて我々は正義を名乗れるのか？

重巡『最上』

「敵艦隊との距離１万５千！」
「雷撃用意！！」
さっきのことを踏まえ、アメリカ艦隊の集中攻撃を受ける第七戦隊。
「ぎょらい・・・」

ズバアアァァアァン！！

艦の中央よりやや後方に着弾する砲弾。
「きゃあああぁぁぁぁあぁぁあぁぁあ！！」
響き渡る最上の悲鳴。
艦橋におびただしい血が舞い、最上の体が床に吸い寄せられる。
「最上！！」

栗田が最も恐れていた事。それが起こった。
「グッ・・・アッ・・・」
最上が血の海をもがく。
「しっかりしろ！　最上！」
脇腹からの出血は彼女が脈打つたびに勢いが増す。
「被害ほうこーく！！」
艦長が叫ぶ。
「飛行甲板及び魚雷発射管にも命中！！　魚雷が誘爆を起こしています！」
「なに！？」
魚雷発射管に収納された『九三式酸素魚雷』とまだ装填されていない予備の酸素魚雷が爆発する。巡洋艦程度なら1撃で葬れる牙が自分に向く。『加賀』や『赤城』の格納庫のように爆発が起き、兵士だった腕や足が宙を飛ぶ。
「うわあああぁぁあぁぁあ！！」
ある兵士は火が服に付き熱さにのた打ち回り命を落とす地獄絵図が広がる。
その地獄は艦橋でも起きていた。
「最上！　おい！　しっかりしろ！」
血の海で溺れる最上を必死で抱く。
「私は・・・へい・・・きです。艦隊の・・・指揮を・・・」
「艦長、ダメです！！火災が消えません！！」
「なんとしても消せ！！」
「しかし、火災が第4砲塔付近まで回ってます！！」

ズガアァン！！

「あああぁぁあぁぁあぁぁあ！！」
爆発と同時に最上の右足が爆ぜ、新たな出血を生む。

「どうした！？」
「さっきの爆発で機関が損傷！！」
『最上』はガクンと速力を落し、海面を這(は)うように進む。
「艦長・・・もう『最上』は・・・」
その言葉に栗田が固まる。そしてこのようなことが1度あった気がした。

そこは、真珠湾攻撃があった。それからミッドウェイで我々は空母4隻を喪った。連合艦隊指令部は最後の悪あがきと、第7戦隊にミッドウェイ島の砲撃を命じた。島につく前に指令部は作戦中止を伝え、反転しようとした時、『最上』『三隈』が衝突。『最上』は艦首が大破してしまい、今のように血まみれになった。『三隈』は損傷が酷く・・・・・・彼女を捨てて撤退した。
その時、最上が泣きながら三隈を曳航するよう頼んだ。だが私は・・・それをしなかった。すれば艦隊の速度は下がり、航空機の攻撃で全滅させられるかもしれなかったから。
それから2年後のレイテ沖海戦。『武蔵』の小さい少女の軍服は赤黒く染まり、本来の白が無くなっていた。姉の大和は彼女を抱きながら必死に何かを叫んでいた。
たくさんの少女がアノ海に散った。著作権に引っ掛かりそうなことを言う『山城』とそれを止める『扶桑』も、1人称が男の子ような『瑞鶴』も、あの『武蔵』の少女も。

――死んだ。

だから私は・・・私は御国を・・・天皇陛下のご命令を裏切って反転した。彼女たちが傷つかなくなるのなら、裏切り者や愚将の汚名くらい甘んじて受けようと思った。だから・・・。
「指令・・・この艦はもうダメです。総員退艦を発令するので将旗

を『三隈』に・・・」

ズバアアァァァン！！

突如響きわたる爆音。

「『三隈』被弾！　火災発生！」

重巡『三隈』

『最上』が集中砲火を受けている最中に後続の『三隈』『鈴谷』『熊野』が魚雷を無事に発射したが、『最上』を大破させたアメリカ艦隊は『三隈』に的を移す。

三隈は悲鳴を上げる前に吹き飛ばされた。『三隈』も魚雷発射管に砲弾が命中、爆発を起こす。

「・・・ゲホ！」

三隈が口から暖かい液体を吐きだす。脇腹からもの凄い勢いで液体が流れでる。

「・・・な・・・るみ？　・・・どこ？」

ズガアァン！！

「ぐあああぁぁあぁぁぁあ！！」

砲弾が彼女を切り裂くたびに悲鳴が上がる。彼女の血が手にしたラノベの文章を汚していく。

「三隈！！」

転移の光と共に足柄が現れる。

「しっかり！！　今手当するよ！！」

布を傷に当てるがすぐにそれと足柄の軍服を染め変えた。足柄の額に焦りが流れる。

「あ・・・しが・・・ら・・・ごめん・・・ラノベ・・・」

「・・・もう、許さないんだから、内地に帰ったら弁償してね」
「・・・・・・うん」

ズガァァン！！

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
三隈の体がビクッと動き、どっと出血がひどくなる。
足柄は感じていた。三隈はもう・・・・・・。
「ねぇ・・・なるみ・・・は？」
足柄が当たりを見回す。煙の向こうにうつ伏せになった彼を見つけた。
「待ってて」
高須に駆け寄る足柄。だが彼を見て絶句してしまう。
「・・・・・・！」
彼は火傷をしていた。それは背中のほとんど、皮膚は黒く焦げてしまっている。辺りに漂うう血と何かが焼けた嫌な匂い。
「た、高須！！」
慌てて彼を抱きあげる。
「・・・あし・・・がら？　三隈・・・は？」
「これから連れてくよ」
足柄は高須の腕を担ぐと三隈の所に連れてゆく。
この火傷だと高須も・・・。
足柄の頬に透明な液体が1筋這う。
「・・・な・・・んで泣く・・・んだ？」
「・・・・・・」
その疑問には答えることは足柄にはできなかった。彼を三隈の近くに下ろし、手を繋げてやる。
「連れて来たよ・・・」
「あり・・・がと・・・ねぇ」
「・・・・・・何？」

激痛の顔が少し和らぐ。
「もう・・・わたしは・・・ダメ・・・だから・・・ゲホッ・・・・ラノベ・・・本当に・・・」
「もういいよ！　ラノベのことはいいって！　・・・もう・・・許すよ」
つい声を荒げてしまう。
「ありがと・・・・・・ゴメン・・・2人きりに・・・して」
「・・・・・ッ！！」
足柄は無言で敬礼をすると転位の光に包まれ、消えた。
「みく・・・ま・・・デート」
「覚えてる」
「天国でも・・・いいか？」
「うん・・・艦内、よりいい」

ズバアァン！！

艦内で爆発が起き三隈の体が爆ぜるが、彼女は少し顔を歪めただけで、
「忘れたら、許さ・・・ないよ」
「約束だ」
2人は微笑み、お互いの手に力がこもる。

ズガアアァァァン！！

重巡『最上』

「『三隈』が大爆発！！　沈みます！！」
「指令！　退艦してください！！」
艦橋に響く声、だが・・・私は・・・。
「・・・すまん・・・私には退艦する権利は無いよ。みな良くやっ

てくれた、君たちは生きて御国に尽くしなさい」
参謀や艦橋職員に沈黙が降る。
「さぁ、早く退艦だ」
栗田の言葉にある者は栗田や艦長に敬礼して出て行く。またある者は艦と運命を共にするのか最期の煙草を吸いだした者もいた。
それを見た栗田が歩きだし艦橋の扉から司令官室に向かおうとする。
「姉さん！！」
鈴谷が転移してきた。
「すず・・や」
「鈴谷・・・すまん・・・私が、私が突撃しなけなれば」
「・・・もう、遅いですよ」
憎しみの視線が栗田を射る。だが、
「鈴谷・・・謝って・・・突撃を・・・しんげ・・・ん、したの・・・私だから」
「でも・・・」
「私の・・・最期の・・・頼み」
「・・・・・・申し訳ありません」
その言葉に最上が苦笑する。
「最上、だが・・・私は・・・」
「指令は・・・お優しいで・・・ゲホ！」
血の塊が床に落ちる。
「最上！！」「姉さん！！」
慌てて駆け寄る栗田と鈴谷。
「だから・・・退艦を・・・」
「・・・ダメだ、私が適切な判断をしていれば、こんなことには・・・私は、愚将だ。生き残るなど・・・」
「・・・指令は・・・めいしょうです」
「その『めい』は『迷う』か？」
東郷元帥のように自分が『名将』だとは到底思えない。

「はい、艦魂(わたしたち)のために・・・何が最善・・・迷って・・・・らっしゃる」
「・・・・・・」
その言葉に栗田は目を大きくする。
「・・・鈴谷・・・熊野を・・・よろしくね」
「・・・・・・分かった」
「あと・・・」
「それも分かってる」
そう言うと栗田の腕を掴む。
「！　何をするんだ？！」
とたんに2人は光に包まれる。
「あり・・・がとう」
離せともがく栗田ごと鈴谷は消えた。
「これで・・・いいんです」
最上の視界を急に闇が覆いだし、意識が遠くに遊離していく。

ズガアアァァァン！！

重巡『アストリア』

「敵、1・2番艦！　沈みます！！」
艦橋に響く歓声。だがキンケードは直に喜べないでいた。
「やった！！　ジャップを殺した！！　たくさんジャップを殺したんだ！！」
アストリアの歓声。手にした拳銃のマガジンを砲塔の上に落とし、新しいマガジンを装填、金属音を響かせて弾を装填する。
慌てて逃げる残りの2隻に狙いを付ける。
「逃げるんじゃないわよ！　ジャップ！」
あははは、と壊れた笑いが響きわたってゆく。

重巡『高雄』

近藤中将は焦っていた。月月火水木金金でこのために鍛えてきたのに一向に敵艦に砲弾が当たらない。そればかりか、重巡を2隻も失った。だから、

「面舵２０度！！　敵艦隊と距離を詰めろ！！」

距離が近づけば命中率は高くなる。

「敵艦との距離！　１万５千！！」

「テェー！！」

ズズーン！！

「お願い！　当たって！！」

高雄の必死の願い。

ズバアァン！！

「『妙高』被弾！」

「妙高さん！！」

「アイツなら大丈夫だと思う！」

小松が返答になっているのか疑問に思うことを言う。

「・・・妙にしっくりきてしまう気が・・・」

「て、敵艦挟叉」

やっと『高雄』の砲弾が敵艦を捉えた。

「全門斉射！！」

ここでやっと交互射撃を終了して全門斉射に移る。

ズズーン！！

１２６キログラムの砲弾１０発が『高雄』から飛び出す。

「敵艦に命中３発！！」

「やったぁ！！」「よくやった高雄！！」

歓声が艦隊に起こりだした。

重巡『アストリア』

今までの有利をアメリカは手放し始めた。そもそも5隻の艦隊が12隻の艦隊と戦って勝てるわけがなかった。

「被害報告！！」

艦長の叫び。

「第3砲塔に命中！！　旋回不能！！」

「カタパルトが吹き飛ばされました！！　それと火災発生！！」

「ダメージコントロール！！」

「後続の『ヴィンセンス』『ニューオーリンズ』『ポートランド』被弾！！　・・・あッ！！『ポートランド』が大爆発！！」

さっきまでの歓喜からの逆転。アメリカ艦隊にランチェスターの法則が急に浸透する。

第2砲塔にいたアストリアは血まみれになっても立っていた。彼女を立たせるもの、それは妹の復讐。

「・・・これくらいで私が殺せると思ってんの！？」

第1・第2砲塔が咆哮する。だが運命は悲惨だった。

ズバアァン！！　ズバアァン！！

新たに被弾する『アストリア』。それが新しい火災を生み出す。その時、

ズバアァァン！！

『アストリア』の艦体に激震が走る。転倒者や壁に頭を打つものがでる。

「ど、どうした！？」
キンケードが怒鳴る。
「被雷です！　艦尾の方です！！」
副長が返答する。だがそれだけでは終わらなかった。
「『ニューオーリンズ』被雷！！　傾斜増大！！」
「！！　・・・？　速度が、下がってる？」
キンケードが慌ててアストリアがいる第２砲塔を見る。彼女は足から大量の血を出している。
「こちら機関長！　スクリューがやられたようです！！　航行できません！！」
「復旧はできるか！？」
「・・・復旧は、できません・・・」
三隈たちが放った魚雷だ。それがたまたま『アストリア』のスクリューを捉えて推進力を奪った。もう『アストリア』は前進も後進も出来ない。
「指令、『アストリア』はもう的です。総員退艦をさせます」
「・・・頼む」
静かにそう言うとキンケードは艦橋を出て行った。

あわただしく『アストリア』に搭載された内火艇に乗員が乗り込んでいく。
キンケードは1人、第2砲塔の上で倒れているアストリアのもとに向かう。
「アストリア・・・」
キンケードが顔を出すと彼女は睨んできた。
「どうして・・・退艦命令なんて・・・私はまだ、カハ！」
口から小さく血がこぼれる。
「もう、やめにしないか？　復讐も、戦争も・・・」
諭すように言う。
「嫌だ！　まだミネアポリスの・・・」

「それはお前の自己満足だ！！」
しばらくの沈黙。
「・・・・・・でも・・・・私は・・・・」
「なぁ、自己満足で戦うな。俺たちは正義のために戦っているんだ。そんな欲望のために戦うなんてジャップと同じだよ」
その言葉にアストリアは何も言い返せなかった。自分たちの使命、それはアジアの解放。正義のための戦い。
「な？」
「私は・・・・！」
いきなりキンケードがアストリアを抱く。
「何も言うな・・・俺も何が正義なのか分からない、それをこの海戦で学んだ」
遠く、ジャップの重巡が発砲する。
「俺たちは、何のために戦っているんだろうな？」
砲弾が空を切り裂く。それが第2砲塔周辺に着弾。1発が砲塔の天蓋を撃ち抜き、大爆発をおこし、火柱が立ち上った。
それが収まった後、『アストリア』の姿はなくなっていた。

この海戦での損害は以下の通り

日本

沈没
重巡『最上』『三隈』

大破
『妙高』

中破
重巡『高雄』（戦闘行動に支障なし）

アメリカ

沈没

『アストリア』『ミネアポリス』『ニューオーリンズ』『ポートランド』『ヴィンセンス』（『ヴィンセンス』は大破後、駆逐艦によって自沈）

第２艦隊以下の巡洋艦達は取舵を取っていたため、主隊から大きく北方に出てしまっていたために反転、戦場に戻るような形になっていく。

第２１話　海駆ける少女３（後書き）

作者「ここまで読んでくださり本当に感謝している小澤です」

サウスダコタ「本当に長かったと思うサウスダコタです」

大和「最後のほうはまとまっていない気がする大和です」

作者「・・・・・・」

サウスダコタ「次回は確か欧州編ね？」

大和「え？　戦艦の砲撃戦は？」

作者「まだ先ですね、内地のことも書きたくなってきましたし」

大和「メインヒロインなのに後書きしか出れないなんて」

作者「出番が来れば嫌というほど出れます」

大和「それはいつなんですか！！」

　ズズーン！！

サウスダコタ「ご意見と感想待ってま～す！」

第２２話　巡洋戦艦『シャルンホルスト』の憂鬱（前書き）

本編に関係ありませんが『ひゅうが』が就役しました！！
これは横須賀に見に行かなければ！！（でもお金が・・・）

第22話　巡洋戦艦『シャルンホルスト』の憂鬱

１９４２年４月、タラント

４０年１１月に行われたイギリス海軍の空襲の傷が癒えてきたこのイタリア海軍の主要軍港には戦艦『ビットリオ・ヴェネット』、その妹の『リットリオ』。ドイツから派遣された『シャルンホルスト』『グナイゼナウ』や元フランス海軍の戦艦『リシュリュー』や『ダンケルク』、去年に鹵獲した『ヴァリアント』などが停泊している。

戦艦『ビットリオ・ヴェネット』艦内

黒い軍帽についた金色の鍵十字が朝の光をうけて輝き、ぴしりとしわの無い黒いドイツ海軍の軍服を身にまとったシャルンホルストが歩いていた。その手には分厚い書類。顔はとても疲れている。

（・・・『黒作戦』の書類を読んでたら地平線が明るくなっているなんて・・・）

『黒作戦』――ドイツは伝統として攻勢作戦に色を付ける。これもそうである。

（だが私はドイツ海軍地中海艦隊の指令だ、ここはビシッとしなくては）

気合を入れるが顔には疲労がにじみ出ていた。だがこの状態は悪いわけでは無い。国のために尽くす。それでの疲れなら納得がいく。

廊下にコツコツと音が響く。『ビットリオ・ヴェネット』の会議室の前まで歩いて行った時、急に光の塊が現れる。それは人の形になり、光が消えていく。

そこに現れたのは金髪でセミロングの少女――ヴァリアント。

「・・・・・・」

「・・・・・・」
お互い目を合わしただけで何も言わない。こうやって穏やかな朝が来てもドイツとイギリスはまだ戦争をしている。フランス海軍などの鹵獲艦の連中もそうだ。だからどうしても士気が低くなってしまう。
「・・・先に行かせてもらう」
相手は鹵獲(ほりょ)艦、下手に出るのも面白くない、体が疲れていてもプライドを捨てる気にはなれない。
「今度はスエズ？」
憎しみが光る瞳がシャルンホルストを捉えていた。
「軍機だ、時が来れば教える」
相手は鹵獲艦、今後の作戦を教えれば作戦が連合軍に漏れるかもしれないからギリギリまで教えられない。
「まぁ、いいわよ。そのうち私たちH部隊が貴方達を倒すために出撃する。それが貴方達の最期よ」
「そのH部隊だが、我が軍のUボートやイタリア海軍のマルチェロ級の潜水艦たちや空軍がH部隊の拠点、ジブラルタルを包囲して身動きが取れないようにしてある」
他にも港に機雷なども敷設され出入港ができないようにもなっている。
「質問はそれだけか？」
ちらりとヴァリアントを見る。さっきの瞳はまだ生きている。
「・・・あと、私たちの待遇はいつ改善されるの？」
神妙な顔
「それはイタリア海軍の連中に言ってくれ」
私も困っている、本当に困っているらしい。
ガチャと音ともに扉を開ける。
（（うっ・・・この匂い・・・ナポリタンか？））
朝からナポリタン？　作者は罰ゲームですか？　と思ってしまう。
「お！！　シャルンにヴァリちゃん！！　おはよう！！」

少しブラウンがかった髪をショウトカットにした15．6歳くらいの彼女は戦艦『ビットリオ・ヴェネット』の艦魂。口の周りがオレンジに染まっている。
「ヴェネット・・・ヴァリちゃんはよして・・・」
「・・・あの・・・また麺類ですか？」
おずおずとシャルンホルストが聞く。
「それが？」
いえ、と返す。朝食で最後に麺類じゃないの食べたのいつだ？記憶をあさるシャルンホルスト。
「お姉ちゃん！　好き嫌いはダメだよ～」
シャルンホルストと同じく金髪碧眼、金髪の髪はポニーテールになっている16・7歳の少女。
「グナイゼナウ、お姉ちゃんはやめろ。指令と呼べ。それと2人ともまずその服装を何とか・・・」
2人ともネクタイを緩め、第1ボタンを開けている。ワイシャツも疲れ果てている。ここは軍隊だぞ、もっと服装には気を付けるべきだ、などと自分の意見を心の中に羅列する。
「まぁ、そんなにカリカリするな！」
「そうそう♪」
この小春日和どもが（と言うかもう4月か・・・）。
「それより朝ごはん食べな～朝ごはんは大切なんだよ」
「でもナポリタンはよしてよ・・・」
ヴァリアントの問いに露骨に顔をしかめて答えるヴェネット。
「ちょっと、ちょっと！　ナポリタンの『ナ』も知らないのに何言ってるの？
ナポリタンは第2次世界大戦の戦後、日本の横浜山下町にある『ホテルニューグランド』の総料理長だった入江茂忠が進駐軍が食べるパスタとトマトケチャップを和（あ）えた軍用食からヒントを得て創作された日本料理。
今でこそ大衆食として名を馳せるナポリタン。でも誕生したころ

はうどんや蕎麦の食感に慣れ親しんでいた日本人にとってアルデンテ（パスタなどの理想的な茹で上がりの状態のこと）は若干固く、嗜好には合わなかった。
そこで7割がた茹でた麺を冷蔵庫に1晩おいてうどんのようにもっちりとした食感にしたんだ。その麺が今は主流となっている。
また、具も時代とともに・・・」
「えぇーい！！　止まれ！！　読者が飽きる！！　読者がこの小説を避ける！！　作者が書かなくなる！！　そうすれば私たちはどうなる！！　それに戦後って何だよ！！　まだ戦中だ！！！」
もうここまで来るさすがに怒鳴るシャルンホルスト。
「知ったことか！！　表現の自由だ！！　ナポリタンに関する質問は『何で戦隊ヒーローは5人組なの？』って聞くくらい無謀なこと、作者は三ノ城先生に変わってもらえ！！」
負けじと怒鳴るヴェネ・・・って後ろ！！　作者変えないで！！
「黙れ！　ナポリタンを侮辱するやつは許さない！！」
いや、侮辱してないし・・・。
「それより・・・なんとかならないの？　朝食・・・」
フォークを手にするヴァリアント。だがそれは手にしただけでナポリタン掃討作戦は進展しない。
「国際艦魂法の鹵獲艦に対する待遇に批准してない気が・・・」
「気じゃない、して無いんだ・・・」
シャルンホルストの皿からナポリタンが消える気配を見せない。
「ところで『黒作戦』の内容は知ってますよね？」
ヴァリアントが少し反応する。内容は言うなという目でシャルンホルストがヴェネットを見る。
「何それ、美味しいの？」
「何でナポリタンの歴史知って作戦知らないんだ！！」
「知らないものは知らないから説明して、」
「まぁまぁ、2人とも落ち着いて」
「お前もそうだぞ！！　地中海に入ってから腑抜け追って！！」

そうかなぁ、と首を傾げるグナイゼナウ。
「それで『黒作戦』って何？」
ここにはヴァリアントがいて機密漏えいに繋がる恐れが・・・、
そこで、
「作戦書があるはずですから読んでください」
これで丸く収まる、
「あぁ、捨てちゃった♪」
はずだったのにいいいいいい！！
「あ！　私持ってますよ」
グナイゼナウがポケットからしわ1つ無い書類を取り出す。
「お前のポケットは未来から来たロボットのポケットか」
我が妹ながら分からないと考えるシャルンホルスト。
「どれどれ・・・え？　スエズまで行くの？　遠くない？」
「スエズ！？」「待て待て待て！！」
2人の声が重なる。
「ふーん・・・なんかめんどくさいな。それに準備できてないから出撃できまいし、そういや燃料もなかったなぁ、てかそもそも撃沈されたくないからタラントに引きこもりたーい！！」
あー、どうしよ。イタリアの連中は士気が低い。頭が痛くなってきた。
「うん？　どうしたのお姉ちゃん。どうせ後で伝えるつもりだったんでしょ」
今まで秘密にしてきた意味がないじゃないか、それに胃のあたりも痛い。
ふらふらと立ち上がり、転位することにした。ここに居ると疲れる。
「お姉ちゃん！！」
残されたのは食べかけのナポリタン。
「・・・敵ながら大丈夫かしら」
ヴァリアントはナポリタンと睨めっこしてから食べ出した。

『アヴァロン要塞』

ここに据え付けられた１６基の超長射程列車砲『Ｋ５Ｅ』の砲魂たちも朝食を食べようとしていた。そこに転移の光が現れる。

「誰だ？」

「Ｕボートの艦魂？」

「当直のハンブルクたちか？」

光が薄れそれが自分たちの上官が現れる。

「Ｈｅｉｌ　ｍｅｉｎ　Ｆｕｈｒｅｒ　！！（我らが指導者万歳！！）」

それに敬礼で答えるシャルンホルスト。

「楽にしてくれ」

ここに来ると空気が引き締まっていていい。母港のヴィルヘルムスフェーンにいたころを思い出す。

「状況は？」

「？　閣下、Ｕボートの報告を聞いていないのですか？」

ミュンヘンがシャルンホルストに聞き返す。

「いや、レーダーの方が確実だからな」

「では閣下、朝食は食べられましたか？　よかったら・・・」

そう言えばまだ朝食をとっていない、だがなんか言い出しにくい。

「いや、いい。警戒を怠るな」

そう言い残して踵をかえす。後ろでは、

「そう言えばこの小説って艦魂の上陸できないんだよな」

「じゃ、『アワビの咆哮』はミス？　てか現在進行形で上陸してるよね」

「作者曰く『これは上陸とは言わない！！』って」

「ふーん」

などと騒いでいる。

（このまま帰るのはな・・・・・）

自分の部屋は書類などが山脈を形成しているから食事をしたくない。
（それに・・・料理を出すのは苦手だからな・・・）
通路の曲がり角にさしかかったとき、辺りに空腹をしめす音が響く。
（う・・・以外と響くな）
一応シャルンホルストも女の子、やはり恥ずかしい。通路を曲がったとき、
「「・・・・・・」」
ハンブルクともう1人、１６歳くらいで短く黒い髪をツインテールにした少女――『Ｋ５Ｅ』の砲魂の1人、ヴィルヘルムスハーフェーンが立ち止まっていた。
「・・・・・・」
急に時間が止まったような錯覚。
「「Ｈｅｉｌ　ｍｅｉｎ　Ｆｕｈｒｅｒ　！！！」」
慌てて叫ぶハンブルクとヴィルヘルムスハーフェーン。
「貴様・・・ハンブルクにヴィル・・・」
シャルンホルストの顔が赤い。とたんに気の抜ける音。
「・・・閣下、あの・・・」
ヴィルがおずおずと口を開く。

「あの～ミュンヘンさん？」
「シャルンホルスト指令の次はグナイゼナウ参謀長ですか？」
グナイゼナウは姉を探しに来ていた。
「お姉・・・じゃなくて指令は？」
「？　お帰りになられたでは？」
『シャルンホルスト』を見てきたが居なかった。礼を言ってミュンヘンと別れる。

（どこ行ったんだろ・・・まぁそのうち見つかるだろうし・・・せっかく来たんだからハンブルクたちと遊ぼうかな）

今、シャルンホルストは倉庫にいた。ここがヴィルとハンブルクの部屋。

「お、お待たせしました」

ハンブルクの手にはシュラハトプラットが乗った皿。

「・・・・・・」

まだプライドがあるシャルンホルストはなかなかフォークを取らない。

「あの・・・お口にあいませんか？」

ヴィルの心配を滲ました問。

「いや・・・それは・・・」

これは・・・食べなくては、無理やり理由をつけて理性を抑え込む。

「！！！」

いつも麺類ばかりの朝食が・・・。自然と涙ぐんでしまう。

「か、閣下！？」

「・・・・・・帰りたい・・・ヴィルヘルムスハーフェーンに帰りたい。」

「え？　私？」

いつもは冷静沈着なシャルンホルストが・・・。

「私はパスタを食べに地中海に来たんじゃない！！　戦争をするために来たのだ！　死に物狂いでジブラルタルを突破してきたのに・・・・・イタリアの連中はやる気無いし、グナイゼナウはキールだともっとしっかりしていたし、身なりもドイツ海軍に恥じないものだったのに・・・・・・」

どんどん不満が出てくる。

「「・・・・・・」」

ハンブルクとヴィルは黙ってそれを聞いた。
「総統が・・・総統が戦争をしなければ私はビスマルク閣下やシュペーたちとキールで過ごせたのに！！」
「！！　閣下それ以上はやめてください！！　党批判で艦魂親衛隊に反逆罪で捕まります！！」
ヴィルが叫ぶ。だがシャルンホルストはそれを止めずに話し続けた。

扉の外、そこにもシャルンホルストの声は響いていた。
「・・・・・・お姉ちゃん」
いつもの姉とは違い、自分の不満を並べる姉。
しばらくしてそこに転移の光が灯った。

「・・・・・・今回のことは他言無用だ、喋ったら・・・分かっているな？」
「「は、はい！！」」
拳銃を片手に持っているから迫力がある。
「・・・・・・シュラハトプラット、美味しかったぞ」
「！　あ、ありがとうございます！」
シャルンホルストはほのかに頬笑み、ハンブルクが嬉しそうに微笑む。
（さて、ヴェネットさんの所に行くと疲れそうだし自分に帰ろうか）と考え、『シャルンホルスト』転位する。

巡洋戦艦『シャルンホルスト』

均整のとれた艦影が世界で最も美しい軍艦ということを納得させる。その倉庫に『シャルンホルスト』の艦魂の部屋がある。
「・・・・・・」
シャルンホルストが見つめる書類――『黒作戦』の書類。それは

北アフリカに展開しているロンメル中将率いるドイツアフリカ軍団（ＤＡＫ）がエジプトを攻略、その勢いでスエズ運河を手に入れ、同時にエチオピアに駐留するイタリア陸軍がアデン港一帯を攻略、地中海艦隊はスエズのイギリス陸軍の守備隊に艦砲射撃を加えることが書かれていた。

（この作戦が成功すれば日本軍と本格的な合同作戦が執れる。それにインドからイギリスへの補給を断ち切ることもできる）

この戦争に勝つにはスエズ攻略以外に方法は無い。

そんなことを考えていた時、トントンと扉をたたく音。

「？　入れ」

ヴェネットか？　いや、アイツならきっと料理でもしているのだろう。ヴァリアントは・・・ありえない。まさか・・・親衛隊か？

党批判がばれたか？

シャルンホルストに嫌な汗が流れるが、指揮官として威厳を持った態度をしていようと結論を作り出す。

「Ｈｅｉｌ　ｍｅｉｎ　Ｆｕｈｒｅｒ　！」

扉を開け、右手を掲げるグナイゼナウ。

「・・・どうした？　参謀長」

彼女は朝と違ってしわの無い黒いドイツ海軍の軍服を着ていた。

「あの、お姉ちゃん。『黒作戦』だけど、もうばれちゃったし・・・だから、『ビットリオ・ヴェネット』の会議室にみんな召集かけておいたから・・・」

また仕事が回ってきた。

「お姉ちゃんはやめろ、指令だ」

鍵十字の輝く軍帽を被り2人は転位の光に包まれた。

第２２話　巡洋戦艦『シャルンホルスト』の憂鬱（後書き）

作者「ここまで読んでくださり！！」

ヴェネット「ありがとー！！」

グナイゼナウ（あれ？　セリフ無い？）
→波に乗れなかったグナイゼナウ

大和「なんで欧州編を書いたんです？」

作者「愉快なイタリア海軍を書きたかったんです。あの国の軍隊は凄いですし」

サウスダコタ「凄い？」

作者「例えば・・・オーストラリアの捕虜収容所での日独伊の兵士たちの話」

大和「あ！　知ってます。日本兵は自決してしまって・・・」

シャルンホルスト「ドイツ兵は協力して脱走用のトンネルを掘ってたな」

ヴェネット「イタリア兵は女の子をナンパしまくってついには出来ちゃった♪」

サウスダコタ「・・・・・・」

ヴェネット「まぁ、砲弾よりワインの備蓄の方が多かった国だからね」

作者「・・・今更だけど『黒作戦』が失敗しそうだなぁ。イタリアは論外だし・・・『シャルンホルスト』級は２８ｃｍ砲だ・・・」

ズズーン！！

グナイゼナウ「２８ｃｍ砲なめるんじゃないわよ！！」

大和「ご意見とご感想待ってますよ」

第２３話　気持（前書き）

遅くなりました、小澤です。
書いては止まり、ゲームして読み返して消してゲームして書いては止まり・・・を繰り返していました。本当にスイマセン。
では本編を読む前に、いったん『マリアナ沖海戦』の戦況を書きます。読まずに飛ばしてもかまいません。

現在の戦没艦
アメリカ海軍
空母『レキシトン』『ヨークタウン』『ホーネット』
重巡『アストリア』『ミネアポリス』『ニューオーリンズ』『ポートランド』『ヴィンセンス』

日本海軍
空母『加賀』
重巡『最上』『三隈』

大破
アメリカ軍
空母『エンタープライズ』
重巡『ノーザンプトン』

日本海軍
空母『赤城』『蒼龍』
重巡『妙高』

中破

日本海軍
戦艦『伊吹』
空母『翔鶴』
重巡『高雄』

小破
日本海軍
戦艦『薩摩』
空母『飛龍』『瑞鶴』

第２３話　気持

ブウゥウウゥウン

空を騒がすエンジン音。甲高く悲鳴を上げる機銃。だがそれに勢いは無く、最期のあがきのように虚しく空に消えていく。

「総員退艦！！」

遠くで伝令兵が叫ぶのが聞こえた。この艦は大きく左に傾き、誰が見ても沈没することは定かだった。

「・・・・・・早く・・・・退艦・・・・てください」

俺の腕の中には血まみれになった少女。そおの顔には精気が無く、頭からの出血が彼女の左目を見えなくしていた。

「・・・・・・俺はお前を１人で逝かせたくないんだ、大和」

「ダメ・・・・です。多恵子さんに・・・・やく・・・・そくしたん・・・・げほげほ！！」

「大和！！」

大和の口からこぼれる熱い液体。

「もう、ダメです・・・・早く・・・・」

「・・・・俺も遅いよ、海に出れてもお前の沈む勢いに飲まれて俺も死ぬ。死ぬんだったらお前のそばがいい」

「だから・・・・ダメです。生きてください。早川二曹・・・・いえ、芳栄さん」

「大和・・・・」

「私は芳栄さんを愛しています。私の愛した人が死ぬのは嫌です」

顔に激痛のゆがみがでるが一気に喋った大和。

「でも！　俺は沖縄で戦死するはずだった、ここで死んでも同じだ。俺も逝かせてくれ！」

「ダメです。芳栄さんは生きて・・・・くだ・・・・げほげも！」

「おい！　大和！」

「芳栄さんは・・・生きて・・・・ください」
苦痛の表情からニッコリと笑顔を作り、
「私は・・・それを・・・願っています」
「でも俺はお前と離れたくない！　お前と一緒にいたいんだ」
ありがとうございますと大和が言い、少し何かを考えるように視線がさまよったあと、
「・・・・・・私も・・・・芳栄さんと・・・・居たいです」
「なら！」
「あの・・・今じゃなければ・・・なりません・・・・か？」
弱々しい大和の声、え？　と早川の間抜けな声。
「生きて、生きて・・・後ろ指を差され・・・生き恥だと・・・馬鹿にされても・・・生きて・・・寿命をまっとうして・・・最期に・・・骨に・・・なって、私の所に・・・来るのは・・・ダメですか？」
「・・・そんなのいつになるんだか・・・」
「それでも・・・私は・・・待ちます」
「・・・もし、生き残れても本土決戦で俺の体がバラバラになってしまったら・・・」
「芳栄さん・・・の骨が・・・砂になって・・・ここまで・・・流れて来るのを・・・待ちます。芳栄さんが、ここに来るまで・・・ずっと・・・ずっと・・・私は・・・待って・・・ます」
外の機銃もいつの間にか静かになっていた。不思議と大和と早川以外の音が消えていた。
「・・・・・今更かも・・・しれませんが・・・私を・・・愛して・・・くれますか？」
少しの沈黙、早川は大和の問いに答えるべく大和に優しくくちづけをした。
その味は、鉄の味がし・・・。

「どぁ○×△※◎Д！！」
背中に激痛が走った早川、辺りを急いで見渡す。どうやらベットから転落したようだった。
（・・・夢？　・・・にしては・・・）
意識すれば口に鉄の味が蘇りそ・・・。
「！！！」
急にもだえる早川。俺が？！　大和に？！　いくら夢でもこれは？！
「お、おい早川大丈夫か？」
落ちてから15分くらいはもだえていた、と言われ、軍医を呼ばれそうになった早川。

１９４２年7月１６日

「・・・・・・」
あの後、一睡も出来なかった早川。現在、『大和』艦内では宴会が至る所で行われていた。早川たち第１４分隊も例外ではなく行った。その後に大和に会議室に来るよう赤紙が来ていた。
（・・・やばい・・・疲れた・・・休みたいけど・・・）
休めない。これが主人公の運命。
「・・・なぁ、作者最近でしゃばってないか？」
気のせいです。会議室の扉の前に着いた早川。中からは楽しげな会話が漏れ聞こえる。
「悪い、遅れた」
「あ！　早川二曹！！」
大和がうれしそうな微笑を浮かべる。ちなみに空母の艦魂や南雲中将は大和の演説の後、空母『赤城』で騒いでいた。
「お、おう」
・・・なんだか夢のせいか話しかけずらい。
「？　どうしたんですか？　なんか疲れているようですよ？」

そんな早川にお構いなしと近づく大和。
「いや、変な夢を見て、そのあと寝れなくて・・・」
一応真実を話す。
「ゆ、夢ですか？！」
何故か焦る大和。
「？　どうし・・・」
「うん？　早川君か」
「ちょ、ちょ、ちょ、長官！！」
そこに居たのは連合艦隊司令長官の山本。手にはトランプを握っている。
「そうだ、早川、一緒にやらないか？」
目から妖しい光を放つ長門。もちろん手にはトランプ。長官と一緒にトランプ！？
二曹にとって長官は雲上人。緊張の汗がダクダク流れる。
「やるだろ？」
長官の声、拒否権は、無い。

『ブラックジャック』をする早川、長門、山本、武蔵。
『ブラックジャック』はプレイヤー同士の戦いではなく、プレイヤー全員VSディーラーの戦い。
まずは、掛け金を出し合い、山札からカードを引き、手札の合計がディーラーより『21』に近くすれば勝ち、逆に遠かったり『21』を超えたら負け。
「ふん、ナチュラルブラックジャック」
『ナチュラルブラックジャック』――配られた手札の合計がいきなり『21』をたたき出した長門。さすがである。
「どうする武蔵（ディーラー）？」
「えーとね、あ！　長門お姉ちゃん、私もそれだぁ」

今回ディーラーを勤めるのは武蔵。この場合、掛け金は1．5倍に跳ね上がる。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「いやぁ、武蔵は強いな」
「わーい！！　ありがとおじいちゃん」
順に連合艦隊1のギャンブラーとしてののプライドが傷つけられた長門、掛け金がいきなり消えてショックを受ける早川、苦笑いの山本、そんな山本を『おじいちゃん』と呼ぶ武蔵。
「・・・私の武蔵が・・・」
早川たちと少し離れた所でラムネを喉に流していた大和。
「そうやって妹は姉の想いを裏切っていくものなのよ、大和」
しんみりと語る扶桑。説得力がある。彼女の視線はゲームに熱中する自分の妹に注がれるが、妹の山城は何も無いようにコントローラーを操作する。
「ねぇねぇ大和」
ヒソヒソと話しかける榛名。
「？　何です？」
榛名の口が大和の耳のところに近づき、
「早川さんとはどうなんですか？」
「は！？　いや、それは・・・って！　何で霧島さん睨むんですか？」
「・・・別に」
だが霧島の視線は大和を睨んだままだ。
「・・・ただ、大和は早川に対してどのような感情を抱いているか気になっただけだ」
今まで一番長く喋った霧島。
「え？　それは・・・」
『ブラックジャック』に燃える早川を見る。カードを山札から引いて一喜一憂している。

「・・・大和、お前にとって早川は何だ？」
矢継ぎ早に質問をする霧島。
「と、友達です！」
だが、大和にとって早川はそれ以上の存在だった。だが大和にはそれを口から出す勇気をまだ持っていなかった。
「・・・なら良い」
え？　と大和から漏れる声。
「霧島は早川さんにお熱だからね」
「そう言う榛名はどうなのよ？」
「わ、私ですか！？　私は・・・それより扶桑さんはどうですか？」
「私は妹がアレだから恋とかはね・・・」
「お姉ちゃん、アレってなに？」
大和と霧島を取り残して弾む会話。
大和の中には言葉に出来ない気持が渦巻いていた。
「だ、ダメです！！」
思わず叫んでしまった大和。
「・・・なにがダメなんだ」
「え？　それは・・・ダメです！　長官命令です！」
霧島の問いの答えになっていない。

「？　どうしたんだ大和？」
「それより早川の番だ、カードを引くのか？　引かないのか？」
長門の催促に手札を確認する早川、手札の合計は１８、強運（むさし）が相手では引くかどうかちょっと微妙である。しかもコインの枚数がヤバイのでとても真剣に考える。

「・・・私は早川が好きだ。その気持はたとえ貴様（ちょうかん）でも否定はできない」
「そ、それが本当なら告白してください！！」
トランプとにらみ合う早川を指し示す。霧島は少し考えた後、す

くっと立ち上がり、
「・・・早川」
「どうした霧島？」
大和に嫌な汗が流れる。
「・・・好きだ」
「へ？　俺も霧島やみんなは好きだよ」
「・・・違う。私は早川を愛している」
とても簡潔な告白に早川はフリーズしてしまう。回りの艦魂たちもそうだが、山本は何か意味がありそうな微笑みをたたえていた。
「え？　あの？」
かなり困惑している早川。
「・・・早川は嫌なのか？」
「か、考えさせてくれるか？」
苦し紛れにやっと声が出た早川。
「・・・ダメだ。明日は生きている保障が無い。だから今答えてほしい」
明日はアメリカ太平洋艦隊との決戦。戦没艦もでる。とくに建艦されて３０年近くなる『霧島』がアメリカの戦艦と戦って生き残れるか分からない。
だが、頭に大和の顔が一瞬流れる。
「ごめん、今その答えが出せそうに無い」
「・・・なら宴会が終わるまでに考えといてくれ」
そう言うといた場所に戻る霧島。
「・・・懐かしいねぇ。明治のころを思い出すなぁ」
「ほぉ、長官もこんなことが？」
山本の顔には懐かしさがあった。
「日本海海戦を思い出すよ・・・早川君、ゲームを続けるかい？」
「あ、はい」
だが早川の頭はカードと霧島について行ったり来たりしていた。

『霧島ガ早川二曹ニ告白シタ』

大和の心にさっきの気持があふれ出してくる。嫌だ、早川二曹をとられたくない。
「は！　早川二曹！！　何で考えるんですか！？」
一刻も早く否定してほしかった。
「考える必要なんて無いのに、何で考えるですか！？」
「や、大和？」
それで大和が好だって言ってほしかった。
「でも・・・こういうのはよく考えないとお互い嫌な思いそするかもしれないだろ？」
「だから考える必要なんて・・・」
「いい加減にしろよ！　そんに簡単に答えが出せるか！！」
つい怒鳴ってしまった早川。大和は、泣いていた。
「・・・・・・なんで・・・断らないんですか・・・」
「大和・・・」
「早川二曹のバカアァァアァァ！！」
バタン！！　と扉を開けて走り去る大和。
「お、おい！」
急に静寂に包まれる会議室。
「私の時のように追わないの？」
沈黙をはじめに脱したのはウェールズだった。
「でも・・・」
なんだか追いにくい。なんというか気まずさもある。
「早川、この山札にはいろんな可能性がある」
長門がテーブルに置かれたトランプの束を持ち上げる。
「だがその可能性に手をつけずに手札だけで戦うのか？」
「俺は・・・」
「お前には選択する義務がある。お前の気持はどうなんだ？」
「霧島・・・ごめん」

そう言うと会議室から走りだす早川。

「日本人はとろいわね」

「あら？　ウェールズも早川君が気に入っていたんじゃないの？」

ニコニコと笑うレパルス。

「ただ・・・親友（フッド）に似ているだけよ」

北海に散った彼女の目を似ていた。

「長門お疲れ様ね」

金剛が長門に歩み寄る。

「ふん、ギャンブルの醍醐味を教えたまでだ・・・だからやめられない」

長門が山札をめくる。そのカードは3だった。長門の顔がニヤリとなる。

「霧島ドンマイだね」

榛名が霧島を見た時、

「・・・大和を抹殺して早川を手に入れる」

「ちょ！　霧島！」

そのままどこかに転移する霧島だった。

早川は広い『大和』を走りまわっていた。いろんなところで楽しい声が聞こえるがそれは早川の耳には入らなかった。

（俺の気持か・・・）

大和はもしかして俺のことが・・・。よく考えたら初めて上陸した時、いや、もっと前。初めて会った時から大和は・・・。

走っているうちにここがどこだか分からなくなってきた。

（や、ヤバイぞ。大和を探しているはずがまた迷子になってしまった）

見渡す限り鉄の通路が続く。

「・・・ん？」

少し離れたところにある倉庫の扉が開く。
（た、助かった～！）
そこから現れたのは、大和だった。
「大和・・・」
「？　は、は、は、早川二曹！！」
予想外の出会い。大和の目は少し赤くなっていた。
予想外だったからお互いに心の準備というものができていなかった。
「・・・・・・あの・・・最近夢を見るんです・・・私が・・・沈む」
大和がやっと搾り出した言葉にドキリとする早川。
「それで夢の最後は・・・私が聞くんです」
そこで一息ついて、
「私を愛してくれますか？　って」
早川と同じ夢。
「早川二曹は・・・芳栄さんは・・・今の私を・・・愛してくれますか？」
少しの沈黙、早川は大和の問いに答えるべく大和に優しくくちづけをした。
夢と違い、その味はとても、

甘いものだった。

戦艦『大和』第3主砲塔

駆逐艦1隻分にも相当する重量を誇るこの砲塔の上に早川と大和がいた。何も言わず、ただ夜の海を見ていた。南洋の海はとても静かで優しそうだった。

大和は今までのことを考えていた。もし、長門さんが長官にポーカーで負けていたら・・・、もし、長官がもともと艦魂が見れなかったら・・・、もし、あの時に私が防空指揮所から落っこちなかったら・・・、もし・・・。

そう思うと口元が緩んでしまう。

「どうしたんだ大和？」

不思議そうに大和の顔をのぞく早川。

「もし、どこかで何かが違っていたらここには居なかったのかなぁって思っていました、はや・・・芳栄さん」

「何言ってんだよ、それと言いにくかったら早川でいいぞ」

「もし、どこかが違っていたら艦隊決戦や・・・私たちがこうして一緒に居られなかったかもしれません。それと早川二曹より、芳栄さんと呼びます。黒鉄先生の大和さんのように名前で『さん』付けです」

「・・・そうもしれないな。・・・じゃ、あの夢はそうしたどこかが違った世界を見ていたのかもな。それより黒鉄先生の大和に対抗しなくても」

「そうかもしれません。はや・・・・・・やっぱり早川二曹にします」

とても小さな大和の対抗心だった。

「他にもいろんな世界があるのかもな」

空を仰げばおすそ分けしてもあまりそうな星たち。その星の数、いやそれ以上の世界があり、そこに物語があるのだろう。

「・・・・・・大和、大丈夫か？　怖くないか？」

「早川二曹が・・・私が一番大好きな早川二曹がそばに居るから平気です」

「大和・・・」

またお互いの顔がちか・・・。

パン！

「うお！」「きゃ！」
突然乾いた発砲音と弾丸が砲塔の天蓋に火花が散る。
「・・・何をする」
「何をするって霧島こそ何をしているのよ！？」
ここは後部艦橋の上部、副砲用方位盤の中。その観測窓から伸びる細い筒――九七式狙撃銃を握る霧島とその肩を握る榛名がいた。
外を見ると転移の光に包まれて消えた早川たち。
そこで安堵の息をつこうとする榛名。
「・・・貴様、分かっているな」
「え？　なに？　きりし・・・」

１９４２年７月１７日戦艦『大和』測敵所

「観測機より、『敵艦隊発見　本隊ヨリ１時方向　２７海里』」
艦内放送が騒ぐ。
「来たぞ！！　しっかり敵を捉えろ！！」
班長の命令が測敵所に響き渡る。早川は測敵員だが、今は他のヤツがレンズをのぞいている。
「大和、大丈夫か？」
心配そうな早川。
「はい、あの時のように居てくれますから。それに昨日もそれ、言いましたよ」
昨日、『大和（じぶん）』の第３主砲塔の上であったこと。
「大和・・・」
「私は怖くありません。それに守りたいです。多恵子さんや平和を願っている人のために。それにそれが多恵子さんとの約束ですし」
優しく微笑む大和。

「そうだな、姉さんと約束したからな」
「いいか！！　俺たちは天皇陛下のため！！　大切な人のため！！
死力を尽くして戦う！！　死ぬ気で戦え！　１４文隊が壊滅しても生き残ったヤツは測敵しろ！　絶対に勝つぞ！！」
「「「おおぉぉおおぉぉおぉぉお！！」」」
測敵所に響き渡る声、そこには１人の少女とその少女を愛した少年の声が混じっていた。

第２３話　気持（後書き）

作者「ここまで・・・」
ヒュン！
→作者に寸止めで降り落とされた日本刀。

作者「む、陸奥さん」

陸奥「なぜ某を出さなかった。忘れていたのか」

作者「忘れていたとかじゃなくて、ただ、普通に書いていたら・・・」

陸奥「普通に忘れたと？」

作者「いや、そうじゃなくてですね・・・」

陸奥「某も早川を愛している。なのに何故霧島だけなのだ」

霧島「・・・それがヒロインと脇役の差」

陸奥「誰が脇役だ」

作者（どっちも脇役とは言えない）

陸奥「こうなったら早川と一緒に第３主砲塔に火をつけて爆沈して靖国で一緒になる」
タタタ・・・。

→走りさる陸奥。
作者「あれ？　陸奥の目・・・病んでなかったか？」
霧島「・・・今頃ヤンデレになっても遅い。早川は私のものだ」
作者「いや、大和で・・・」
ズズーン！！
霧島「・・・意見・感想を待つ」

第２４話　宴（前書き）

今回はアメリカの艦魂も出ます。

第２４話　宴

１９４２年７月１７日

会議室から大和と早川が飛び出した後も艦魂の宴は続いていた。
「１水戦の連中のとこ行って来たぞ」
「姉上、ただいま戻った」
そこには本隊を護衛するためについて来た第１水雷戦隊に激励しに行っていた陸奥と比叡。
「ご苦労だったな」
「おう・・・そういや榛名と霧島が居ないな・・・それに扶桑はもう沈没か」
妹２人が居ないことと扶桑が寝てしまっていることを確認した比叡。
「姉上、早川は来ないのか？」
だが連合艦隊（じょうかん）艦魂長官の大和の行方を聞かない２人。
「３人は飛び出して行った大和を追いかけに行ったわよ。残念ね、比叡」
「んで俺なんだよ姉貴」
眉をひそめる比叡。
「早川が大和を？　某の早川が・・・」
「陸奥よ、いつから早川はお前のものになったんだ？」
苦笑いの長門。
「早川・・・某の早川・・・某の早川が・・・」
トコトコと擬音するよりスーという感じで歩き出す陸奥。
「だ、団長！　ムツさんがこの前の後書きからヤンデレ状態です！
もしかしたら早川君のこと刺しちゃうんじゃ・・・」
心配しているのか疑問に思ってしまう発言したレパルス。
「やんでれってなぁに？」

何も知らない武蔵がレパルスに聞く。
「う～ん・・・ムサシちゃんにはまだ早いかなぁ」
「確かに武蔵には早いわね副団長、それよりヤンデレ＝主人公を刺すというのは間違っているわ」
メガネのテンプルを掴み、メガネの位置を調整する山城。ちなみに副団長とは『やっぱり鹵獲艦(てんこうせい)が副団長だろ？』と言う意見がＳＯＳ団であったからレパルスが副団長に就任したのだ。
「そもそもヤンデレはストーリーの進行に従って明らかになる何らかの事情によって、精神的に病んでしまう女性、もしくはその状態を指し、具体的には主人公や対抗するヒロインに対して物理的な行動を起こしてしまうことが挙げられる。
キャラの持つ背景設定が感情的な行動として強く表現され、そこがヤンデレの魅力となる。
よってヤンデレの行動の本質には『主人公への愛』、当初に『恋愛への正常なステップ』が含まれており、単に『想いが叶わないから主人公を刺す』といった短絡的な行動は本来のヤンデレ行為ではない。つまり病むに到るプロセスが重視される。
それがヤンデレなのだよ副団長！！」
ドガーン！！　と効果音が鳴り響く。
「おおぉぉ！！　さすが団長！！」
「他にも、ただ単に病んでいるがごとくデレデレした状態でＰＣの画面に向かい、日々を過ごしている人間を指していたという説や、『ややツンデレ』の略がヤンデレとなったなどの説がある。
だから意味が不確定な面があるから使うには十分な注意も必要なんだ」
満足げに顔が染まる山城。
「・・・・・・うん！？　ツッコミが居ない！？」
ウェールズがほぼ山城とセットの存在である扶桑を思いだす。
「お姉ちゃんには少し黙っていてもらうために薬を盛ったからね」
メガネのレンズに光が反射して山城の瞳を隠し、怪しい雰囲気を

生み出す。ウェールズはそれに絶句している。
「いや、それより陸奥が・・・」
長門が当初の問題を思い出させる長門。
「ナガトしょうがないわ。２話から出て来てメインキャラに入るかと思わせてあまりフラグ立ててないし・・・病んでもしょうがないわ♪」
肩をすくめてしょうがないを強調するレパルス。
「開き直るな！！」
「・・・てかよ、そのヤンデレ？　萌えるのか？　ただの変体じゃねぇか」
「比叡も興味あるんだ」
ニヤリと笑う山城。
「そ、そんなんじゃねよ」
「団長！　ヒエイは『ややツンデレ』のヤンデレです！！」
「テメェー表出ろ！！　俺はオタクじゃねぇ！！　てか萌えとかって何なんだよ！？　意味かんねぇ」
その時に山城の顔が真剣になる。
「？　どうした山城？」
「山城はな、まだ世界が平和だったころ、アメリカ海軍と合同演習をしたときにだな、向こうの艦魂と喧嘩したんだ。その理由が・・・」
長門が山城の変わりに答える。
「あいつは、カリフォルニアはオタクを分かっていなーい！！」

戦艦『サウスダコタ』会議室

そこには日本の艦魂と同様に宴が開かれていた。
「あいつは、ヤマシロは絶対私が倒す！！」
年は１４・５歳、金髪の長髪、その長さは腰に届きそうなくらい

長い。顔にはアバタがある。
「ど、どうしたのカリフォルニア？」
同じく金髪に茶色の瞳でカリフォルニアと同い年くらいの少女――サウスダコタが苦笑いしながら聞く。
「明日のことでテンションが高いんだろ？」
その声は明らかに少年の声。茶色い髪で１８歳の少年――ジミー・ハワード三等兵曹。
「ハワード三曹殿はカリフォルニアに甘いのね」
「・・・姉さん落ち着け」
茶髪をショウトカットにした１６・７歳の少女、その少女と同じく茶髪、髪は三つ編みにし、顔にはテンプルの細いメガネをかけた１４・５歳の少女。
前者は大西洋から回航された戦艦『ノースカロライナ』の艦魂、後者はその『ノースカロライナ』級戦艦の２番艦、戦艦『ワシントン』の艦魂。
「はぁ、これで明日が海戦だと思うと憂鬱ね」
ため息をつくのは癖のある黒い髪を短いツインテールにした１９・２０歳くらいの少女。
「コロラドさん大丈夫ですよ、ジャップの持つ１６インチ砲は『ナガト』と『ムツ』で１６門、それと新鋭戦艦は１隻あたり９門を搭載して、それが２隻らしいですから全部で３４門。それに対して私たちは全部５１門で勝ってますから完勝だと思いますよ」
コロラドにサウスダコタが微笑みかける。
「・・・だがトーゴーのことがあるからな」
だがサウスダコタの答えに疑問があるようなワシントン。
「いい！？　絶対にヤマシロは私が撃沈する！！　みんなは一発も撃たないでね！！」
「いやそれは無理が・・・」
「第１に私たちは敵を選べないだろ？」
サウスダコタたちをおいて盛り上がるカリフォルニアたち、なん

だか真剣に話している自分たちがバカらしく思える。
「もぉ、ちょっとは明日のことを考えたら？」
サウスダコタが注意を呼びかけるがそれは意味をなさない。
「明日？　明日は絶対にヤマシロを！！」
「何があったんです？」
ひそひそとコロラドに話しかけるサウスダコタ。
「ヤマシロと萌えとハァハァについて大論争をしたの・・・」

戦艦『大和』

「そもそも全裸には萌えがない！！　いい！？　そもそもホモサピエンスと動物の違いは何？　そう、それは衣服の着用、つまり人は衣服を着て初めて人でありえると言っても過言ではない。
それをカリフォルニアたちは否定する、衣服を脱がすような連中は人以下！　動物と同じだあぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「おい、複数形にすんなよ」
比叡があきれるが山城を止めるはずの扶桑はまだ夢の中である。

戦艦『サウスダコタ』

「そもそもハァハァしたり愛でたりして何が悪い！？　欲望とは神が与えた私たちの生きる理由！　それをヤマシロは否定する。それは神の教えに背く行為！　可愛いものに対して愛情表現を表すのは人の世の理、あいつはそんなことも分からない人以下！　動物と同じだあぁぁぁぁぁ！！」
「太平洋艦隊にカリフォルニアを止められる艦魂は居ないの？」
サウスダコタがあきれるがカリフォルニアをとめる艦魂は残念ながら太平洋艦隊には居ない。

戦艦『大和』

「たとえばコスプレエッチビデオ、そもそもコスプレは『コスチューム・プレイ』を語源とした和製英語で『仮装』を意味する。つまり衣服を着ることこそがコスプレである。

それなのにその衣装を脱いだりしてはもう、コスプレでは無い！！　それなのに衣服を脱ぐというのは正(まさ)しく鬼畜だあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「そんなこと俺に講義すんなよ、てか扶桑起きろ」

比叡が扶桑をゆすって起こそうとするが、うーんとうなるくらいである。

戦艦『サウスダコタ』

「コスプレエッチビデオのどこがいけない！？　大好きなキャラがピーと言う擬音が無ければいけないような行動をする。テレビでは見れないような××××なことをする。ドキドキするだろサウスダコタ？　そんな胸の高鳴りが分からないヤマシロは正しく鬼畜だあぁぁぁぁぁぁ！！」

「そんなこと言われても困ります、それにみんなが盛り上がっているのに××××って・・・」

「てか男の俺が居るのにそんな恥じらいを持てよ・・・」

戦艦『大和』

「いい比叡？　想像してみて、自分の好きなキャラが・・・カテゴリが広いな。そうだ、軍服のコスプレをした大和を想像して、ハイ3秒！！」

「団長！　私は出来ました！！」

「レパルス？　てかいつもあいつ軍ぷ・・・」

「黙れ遅いそれでも貴様は軍人か！！」

戦艦『サウスダコタ』

「サウスダコタいい？　今すぐにコスプレをしたワシントンを想像・・・ジャンルが多いわね。そうね・・・軍服姿のワシントンを想像して、その衣服を上から順に脱がしていく、ハイこれ3秒でやる！！」

「・・・私？」

「てかいつも着てるで・・・」

「黙れ遅いそれでも貴様は軍人か！！」

「「妄想くらい自在にしろ！！　気合が足りん！　やり直せ！！今日は貴様に萌え魂を叩き込んでやる！！！」」

山城の周りは唖然とした比叡、付いて行きます！！　とやる気全開のレパルス。

カリフォルニアの周りは唖然としたサウスダコタ、脱ぐのか？と聞くワシントン。

戦艦『大和』

山城たちんの外では山本が、

(懐かしいな・・・あの時もこれくらい盛り上がっていたな)

戦艦『サウスダコタ』

カリフォルニアたちの外ではコロラドが、

「ロシアのバルチック艦隊もこんな風に騒いだのだろうか？」

と小さく呟く。

第２４話　宴（後書き）

作者「ここまで読んでくださりありがとうございす」

大和「ねぇ、作者」

作者「？　何ですか？」

大和「そろそろ新しい上半期が過ぎたのでランキングが更新されてますよね？　何位ですか？」

作者「・・・・・・明日は米軍基地解放で基地内に入れるんでその準備を・・・」

大和「何位ですか？」

作者「準備・・・」

大和「遠足に行く小学生ですか？　何位ですか？」

作者「・・・位！！　はい・・・」

大和「この前のネタを使わない！！　さぁ言ってください！！　前回は２４８位でしたね」

作者「・・・評価の高い順で・・・２７１位・・・」

――――――――――――――――これより下は『後書き』では無く『反省会』です――――――――――――――――

作者「妹キャラはダメでした・・・」

山城「いや、あんまし出てなかったのが原因でしょ」

霧島「・・・いや、作者が問題」

作者「またですか？」

レパルス「だからってヤンデレに手を出す？」

作者「どうか読者の皆様！　私を捨てないでください！！」

比叡「うわ！　読者になきつくなんて最低だ」

作者「・・・これはやはりサービス・・・」

ズズーン！！

大和「私たちはそう言うのは無しの方向で行きます！　これからも『艦隊決戦物語』をよろしくお願いします。ご意見・ご感想をお待ちしてますよ！！」

第２５話　艦隊決戦物語（前書き）

いよいよ戦艦の砲撃戦です。

第２５話　艦隊決戦物語

１９４２年７月１７日３時３５分

憂愁をさそう眼差しを投げかけ始めた太陽。その下を『天皇陛下のため』『愛する家族のため』連合艦隊が、『日本に蹂躙されている中国の開放のため』『フィリピンで苦しむ戦友のため』アメリカ太平洋艦隊が駆ける。

両艦隊は、単縦陣で次第に距離を詰めていく。戦力は以下の通り。

連合艦隊

旗艦戦艦『大和』

第１戦隊戦艦『長門』『陸奥』

第１艦隊旗艦『伊勢』

第２戦隊戦艦『日向』『扶桑』『山城』

第３戦隊『金剛』『榛名』『比叡』『霧島』

アメリカ太平洋艦隊

旗艦『サウスダコタ』

第１７任務部隊

戦艦『ワシントン』『ノースカロライナ』『メリーランド』『ウエストバージニア』『コロラド』『アリゾナ』『オクラホマ』『テネシー』『ペンシルバニア』『カリフォルニア』『ネバタ』

戦艦『大和』

「いよいよですな」

艦長の松田が緊張ぎみに言う。

「敵艦との距離？」
山本の声に艦橋職員の１人が、
「敵艦隊との距離、およそ５万！！」
「取舵いっぱいだ！！」
「とーりかーじ！　いっぱーい！！」
山本の命令が松田を通して反復される。
「この海戦で太平洋艦隊を壊滅して、占領した太平洋やフィリピンの返還を条件に講和が結べればな・・・」
山本の呟き。アメリカの物量に日本は勝てない。ここで敵の主戦力を壊滅させなくては日本は破滅の道を歩くことになる。
あの時と同じ、負けられない一戦。

戦艦『サウスダコタ』

その第３砲塔の上にサウスダコタはいた。そこで自分のレーダーに写る敵が左に転舵するのが見えた。
（ふー、このまま反攻戦になって後ろに抜けられるとまずいからね）
第１６任務部隊の後ろ、５０海里にはフィリピンなどの救援艦隊として１５０隻にもの船団がいる。
だからこのままの進路は不安があった。
（・・・でもこれって・・・）
連合艦隊が舵をきった事によって『Ｔ字戦法』になってしまっていた。だが、『サウスダコタ』も舵がきられ、右に転舵、同攻戦になった。
それにしても何故彼女がここにいるのかと言うと、
「？　サウスダコタ？　何でここいんだ？」
ハワードの戦闘配置が第３主砲塔だからだ。
「え？　そ、それよりハワードは何で砲塔の外出てるの？」
「外の空気すっとこうかなぁって」
ハワードの能天気さにあきれるサウスダコタ。

「砲台長が少し外に出て行っていいってさ、まだ距離あるし」
現在の敵艦との距離は約４万ｍばかしある。『サウスダコタ』の最大射程は約×万ｍ。まだ射程に入るまでに時間がある。
空はまだバカらしいほどの青が支配していた。その時、遠雷のような音が聞こえた。
「ミネアポリスたちかしら・・・」
「どうなってんのかな」
巡洋艦たちが駆けて行った北方には彼女たちが戦争をしていた。それを示すように暗雲のような砲煙が見える。
「・・・なぁ、戦争が終わったら・・・艦を降りようと思うんだ」
え？　と漏れる声。艦を降りると言うことは・・・。
「今まで黙っていてごめん、いつか話そうと思っていたんだけど・・・」
「どうして・・・何か嫌なことがあるの？　それなら相談してよ！」
「サウスダコタ？」
少し必死のサウスダコタ、それにちょっと焦るハワード。
「なんで軍を辞めちゃうの？」
「サウスダコタは勘違いしてないかな？　海軍兵学校（アナポリス）に行って士官になりたいんだ」
だから艦を降りたいって、と付け足す。サウスダコタの頬はこれまでに無いくらいに紅潮する。
「？　どうした？　なんか頬が赤いぞ？　熱でもあるのか？」
「無い！　無い！　無い！大丈夫だから！　ほら砲塔に戻る！　敵が撃ってくるかもしれないんふぁから！」
「それは大丈夫。この距離じゃ射程外だよ。弾はとどか・・・」

ズバアァァアァァン！！

突如として『サウスダコタ』の右約１千ｍ付近に着弾の水柱が高々とそびえる。その数３本。後方を見ると後続の『ワシントン』も

そうだった。
「砲塔に戻るよサウスダコタ・・・」

『サウスダコタ』艦橋

「・・・どうなっている？」
さっきの着弾はなんだ？　巡洋艦たちか？　いや、距離が離れ過ぎてる。まさか・・・。
「『キングフィッシャー』から入電！　敵　先頭艦２隻発砲」
「長官、２隻と言うことは例の新鋭艦では？」
「まさか、敵艦は１６インチ砲搭載戦艦のはずだ！」
「それは予想でしかありません。この水柱の高さ、おそらく・・・１８インチ砲では？」
参謀の返答が帰ってくる間にもまた着弾の水柱。『大和』の最大射程は約４万２千ｍ。対して『サウスダコタ』は３万５千ｍ。
「艦長取舵２０度！　距離を詰めるぞ！！」

戦艦『大和』測敵所

「何やってんだ！！　もっとよく測敵せんか！！」
班長の鉄拳が測敵員を襲う。
「「・・・ッ！！」」
それを見て早川と大和は身をすくめてしまう。
現在『大和』は巡洋艦と同じく交互射撃で１０射もの射撃をしていた。つまり３０発の砲弾が海に沈んでいる。
そしてまた轟音、爆煙を残して１４６０ｋｇの重量を誇る『九一式徹甲弾』を４万ｍ彼方に吹き飛ばされる。
「・・・・・・当たりませんね・・・」
大和の呟き。

「外れたのか？」
視力２．０の人間である早川には地平線に小さくマストが見えるだけである。空にはゴマ粒のような『ゼロ観』が飛び回っている。
『遠弾　下ゲチョイ』
艦内放送が虚しく騒ぎ、ため息が漏れる。
「マレーの時は夜戦だから当たらないのは納得するけど・・・」
「当たりませんね・・・」
「早川！　うるさいぞ！！」
「す、すいませんでした！！」
班長の怒声は弾が外れる度に出てくる。
「クソ・・・なんで当たらん」
班長が呟いたころ、測敵所の下、昼戦艦橋では、
「どうなっているんだ松田艦長」
日本海軍の砲術の権威である松田を見る。
「開戦初頭に起こったスラバヤ沖海戦でも最大射程だと『高雄』たちの砲弾が当たらないと報告もありますし・・・これらから考えると、砲弾の弾道がばらけてしまうようです」
「敵艦隊変進！！　こちらに近づきます！！」
このときに山本の中にはアウトレンジを続けたいと思ってしまった。
「今の距離を保て！」
「とーりかーじ１０度！」
『大和』の巨体が左に舵を取る。
「・・・いかん！　もど・・・」

ズズーン！！

山本がアウトレンジでは効果が無いと思い直し、命令しようとしたときに主砲が咆哮する。
「？　どうしました長官？」

戦艦『伊勢』

第1戦隊の後方、『陸奥』の航跡が左に曲がりだしたとき、
「本艦は直進せよ」
第1艦隊指令の高須四郎中将が命令を下す。
「・・・また面倒な命令を・・・」
伊勢の苦虫を潰したような顔。
「そう言うな・・・お前は少し忍耐を覚えろ」
「その言葉をそっくり返す。そのうち私の射程に敵も入るだろ？」
「高須！　変進しないの？」
ツインテールの武蔵と同じかちょっと上くらいの少女――日向が話しかける。
「しないよ、『大和』や『武蔵』がいくら強くても敵の戦艦すべてと戦うのはちょっとまずいしな、それに第1戦隊がこれじゃ、第2戦隊は撃てないからな」
「私は撃たなくていい、税金の無駄だ」
「そんなこと戦艦の艦魂が言うなよ」
「どうせなら潜水母艦や砲艦の艦魂になりたかった」
その光景を日向はニコニコと見守る。とても面倒くさがりやの姉がここまで会話するのは妹の自分か高須くらいしか居ない。姉はもしかして・・・、そんな思いが日向にも感覚的に伝わる。

戦艦『金剛』

「第1戦隊が変進！　どうしますか！？」
「第2戦隊に続け！」
金剛たち第3戦隊も直進する道を選んだ。
「クソ・・・大和め、バカみたいに射程が長いから撃てねぇじゃねぇか」

「比叡、あなたも女の子なんだから言葉遣いに気をつけなさい」
「そうだよ比叡お姉ちゃん」
「・・・バカに言っても無駄」
「テメェ！　霧島！！」

戦艦『大和』

「舵を戻せ！　敵に背中を見せるな！！」
「ですがアウトレンジが・・・」
「そんなもの！　机上の空論だ！　面舵だ！！」
「・・・おもーかーじ２０度！」
この結果、『大和』『武蔵』『長門』『陸奥』の第１戦隊と『伊勢』『日向』『扶桑』の第２戦隊、『金剛』『榛名』『比叡』『霧島』の第３戦隊で２列になってしまった。

戦艦『サウスダコタ』

「敵５番艦・・・おそらく『イセ』クラスとの距離３万５千ｍです！」
第１戦隊が取舵で離れたために第２戦隊の『伊勢』が近くなったのだ。
「よし！　撃ち方よーい！！　目標敵５番艦！！」
命令と号令が反復される。
『サウスダコタ』に搭載された３基の１６インチ砲が全基、左を向き、砲身が仰角をつける。
「撃ち方用意よしです！！」
「よし・・・ファイヤ！！」

ズズーン！！

『サウスダコタ』から空気を切り裂いて砲弾が飛び出して行った。

第２５話　艦隊決戦物語（後書き）

作者「ここまで読んでくださりありがとうございました！」

大和「さて今日、４月7日は何の日でしょう？」

作者「そりゃ・・・」

ウェールズ「イエスキリストの誕生日でしょ？」

大和「そうじゃなくて・・・」

足柄「　手塚治虫さんが『鉄腕ア×ム』が連載開始しました！　あと『機動戦士ガン×ム』がアニメ化したのもこの日です！」

シャルンホルスト「ベートーヴェンが交響曲第３番『英雄』を初演した日だ」

ヴェネット「ベスビアス山が噴火してナポリが大変だった日！！」

サウスダコタ「国連でＷＨＯが設置された日でしょ」

大和「いや、そうじゃなくて・・・」

山城「千葉テレビで『涼宮ハ×ヒの憂鬱』の２期が始まる」

作者「そうなんですよね！」

大和「ギローン！！」

作者「そ、それもありますが今日は・・・」

大和「私の命日です！」

作者「言われた・・・というか自慢するようなことでは・・・」

ズズーン！！

大和「日本のために亡くなった英霊の皆さんの冥福を祈ります」

サウスダコタ「そういえばこの小説も終わりに向かってるわね」

大和「そうですね、叩けばほこりがでる小説ですからね、最終回に向けて読者の皆さんのご意見、ご感想待ってます！」

第２６話　艦隊決戦物語２（前書き）

えー、感想で『執筆速度を上げます！！』と書きましたが、スイマセン。私も気づいたら高校３年生、受験生になってしまいました。なので更新は１週間に１度、長期の休みがあれば少し早くなるかな？　といった感じです。スイマセン。

それでは最終回も近くなった『艦隊決戦物語』をどうぞ

第２６話　艦隊決戦物語２

１９４２年７月１７日午後４時

「どうだ伊勢、日向？　電探の調子は？」
戦艦『伊勢』『日向』には電探――レーダーが試験的に搭載されていた。それとマレー沖海戦で鹵獲された『薩摩』『息吹』も同様にレーダーが積まれている。ちなみにアメリカ海軍のレーダーと違い、どちらも性能が不安定な代物だった。
「無いよりかはましといった感じだ」
「ふーんそう・・・」

ズバアアァァン！！

「なんだ！？」
突如沸き起こった水柱、敵艦が発砲したのだ。
「て、敵艦発砲！！　遠弾およそ５００！！」
「距離知らせ！！」
「敵１番艦との距離、およそ３万５千！」
「最大戦速！　距離を詰めろ！！」
『伊勢』型戦艦の最大射程は約３万３千ｍ、まだ撃ち返せない。
「日向は自分に戻るんだ！」
日向はその声に慌てて自分に戻っていく。
「早く・・・はや・・・」

ズバアアァァン！！

新たな着弾。『サウスダコタ』の後続の『ワシントン』『ノースカロライナ』たちも撃ちだした。

戦艦『大和』

「『伊勢』『日向』が撃たれてます！！」

今、この距離で撃ってくるということは敵艦は４０ｃｍ砲搭載艦であることは明白。その戦艦に撃たれているのは３５，６ｃｍ砲戦艦の『伊勢』。とても分が悪い。

「長官！！」「おじいちゃん！！」「山本殿！」

順に長門、武蔵、陸奥の３人が転移して来た。

「敵艦隊との距離を詰めることを具申します！」

「おじいちゃん！　日向が！」

「このままでは各個撃破されるだけだと某は思う」

「・・・・・・そうだな、艦長！　距離を詰めよ！！」

「しかし長官！　それでは『大和』の優位性を殺してしまいますぞ！」

黒島が反論の口火を切るが、

「・・・どんな巨砲も当たらなければ意味が無い」

宇垣が黒島を睨み据える。

「面舵２０度！！」

艦長の松田の号令で再び『大和』の舳先が右に流れていく。

戦艦『サウスダコタ』

ズバアアァァン！！

敵１番艦の水柱は凄いが、それが当たる気配は見せなかった。

「敵６番艦を捕らえました！！」

「Ｇｏｏｄ！！　全門斉射だ！」

『サウスダコタ』に搭載された砲身が全門水平に一度なる。砲塔内では砲弾、それを撃ちだす装薬が砲身の中に押し込まれ、砲尾の

扉を閉め、砲身が空を睨み、

ズズーン！！

轟音とともに火焔が『サウスダコタ』の景色を深紅に染める。そしてその砲弾は『伊勢』の周りに着弾。『ワシントン』もそれにならい巨砲が唸る。

戦艦『伊勢』

「主砲撃ち方よーい良し！！」

「テェー！！」

『伊勢』も１２門ある３５，６ｃｍ砲を撃ちだす。後続の『日向』『扶桑』『山城』『金剛』『榛名』『比叡』『霧島』も撃ちだす。

「遠弾５００ｍ！！」

観測機からの入電、

「５００？　これが電探の力か」

「きっと測敵所の連中が泣いているぞ」

高須と伊勢に少し余裕が生まれる。しかし、

ズガアアァァアアァアン！！

急にハンマーで殴られたかのような衝撃、高須の軍服に飛び散る赤い液体、そして床に倒れる血まみれの伊勢。

敵の砲弾が直撃したのだ。

「ひ、被害ほうこーく！！」

「後部艦橋に被弾！　副長戦死の模様！！」

「第５砲塔付近で火災及び浸水発生！！」

「被害復旧いそ・・・」

ズガアアァァアアァアン！！

新たな着弾、怒号を含んだ命令と号令。

「グアッ！　・・・ッ！！」

「伊勢！　しっかりしろ！」

白かった士官服は血で汚れて変色している。

「たか・・・す・・・」

ズガアアァァアアァアン！！

「『日向』『扶桑』被弾！！」

「ひゅ・・・が・・・」

戦艦『扶桑』

完成当時、世界最強の戦艦と呼ばれ、『大和』同様に日本を現す『扶桑』の名を与えられた戦艦は黙々と黒煙を空に立ち上らせていた。

そんな『扶桑』の特徴である細く、複雑な艦橋、その前にある第2主砲塔、砲塔の傾斜にしたがって流れる血液。それを流しているのは扶桑。

「お姉ちゃん！！」

『扶桑』が被弾したのを見た山城。

「しっかり！！」

「あなたに・・・しっかり・・・なんて、言われる・・・思わなかったなぁ」

「もぉ、私はそこまで子供じゃないよ、傷見せて！」

慌てて手当てする山城。

ふと遠くを見ると『コロラド』型戦艦が撃つのが見えた。砲身は

こっちを、見ていた。
「こないでっ！！」
時間の流れが体にまとわり付いて焦りが増徴する。そして轟音、地震のような揺れ。それで山城は砲塔から落ちてしまった。
「・・・ッ！　第1戦隊は何やって・・・」
山城は艦橋の後ろ、そこから一段と高い火柱。そこには第4主砲塔がある。
「！　お姉ちゃん！！」
砲塔の上に登るとぐったりとする扶桑。
「お姉ちゃん！！」
「やま・・・しろ、みんなに・・・あんまり・・・迷惑・・・かけちゃ・・・ダメよ・・・私が・・・居なく・・・なっても・・・それと・・・」
「お姉ちゃん待ってよ！！　そんなこと言わないでよ！！　まるで・・・まるで・・・」
山城の頬をボロボロとこぼれる涙。
「やだよ！！　こんな・・・こんな、バットエンドなんて・・・」
「おわ・・・りじゃ・・・無いわ・・・まだ・・・戦争は・・・続いているのよ・・・」
泣くしかない山城。そんな山城に扶桑は優しくその頭をなでる。そしてその頭に自分の軍帽を被せてあげる。
「団長さん・・・でしょ・・・しっかり・・・しなさい・・・私が・・・居なくても・・・」
「お姉ちゃん・・・」
「あなたは・・・世界・・・最強・・・を、誇った・・・『扶桑』型・・・戦艦の、2番艦・・・私の・・・大切な・・・妹なんだから・・・」
そこで苦しそうに息をする扶桑。
「この・・・戦争を・・・生き抜いてね」
山城は自分の軍帽をだすと扶桑の頭に被せ、扶桑に抱きつく。ど

れくらいそれが経ったのかは分からないが、山城はスクっと立ち上がり、軍帽を被り直してから扶桑に敬礼をする。
扶桑もそれに答礼を返そうとするが、もうそのことをする力は扶桑に残っていなかった。だから、精一杯微笑む。それを見た山城は転移の光に包まれて消えた。
「・・・みんな・・・ごめんね」
その瞬間、『扶桑』の弾薬庫に火が回ったのか、大爆発を起こして『扶桑』は艦体が艦橋真後ろの第４主砲塔の所で折れ、急速にマリアナにその体を没していった。

戦艦『金剛』

「扶桑！！」
帝国海軍の最古参の戦艦艦魂である金剛は扶桑との付き合いも長かった。
「『扶桑』爆沈！！　『伊勢』『日向』は炎上中！！」
「敵７番艦、『アリゾナ』級戦艦に命中２発命中！！」
現在第３戦隊が撃ち合っているのはアメリカ海軍の古参艦の『ネバタ』級などの旧式戦艦。性能も対して差は無いが数が多い。
『金剛』は『アリゾナ』と『榛名』は『オクラホマ』、ここまでは良いが、『比叡』は『テネシー』『ペンシルバニア』、『霧島』は『カリフォルニア』『ネバタ』と２隻ずつ戦っていて劣勢だ。
その時、

ズバアアァァァアン！！

「『比叡』に命中弾！！　脱落するようです！」
「比叡が！？」

戦艦『比叡』

『比叡』の艦首近くの甲板、日の丸のような赤が広がっていた。その中心には比叡。
「ちき・・・しょう・・・」
折角艦隊決戦が出来るというのに。さっきまで自分を撃っていた『テネシー』は照準を『霧島』に移している。首を動かすとそこには『霧島』が見えた。その艦上構造物はズタズタに引き裂かれ、昨日までの威厳を失っていた。
「もしかして・・・俺たち・・・」
比叡の脳裏に最悪の結末過ぎでしまう。

戦艦『大和』

「そんな・・・扶桑さんが・・・」
「扶桑が!?」
観測窓から見えた扶桑の最期。『山城』はまだ全部の主砲を撃っているが、『伊勢』『日向』も殆どの主砲が沈黙してしまっていた。
「早川!! 変われ!!」
班長の怒声。
「は!」
早川が測距儀のレンズに飛びつく。
「敵1番艦との距離、およそ3万m!」
そして『大和』の主砲が咆哮する。それに連れられて『武蔵』『長門』『陸奥』も撃ちだす。
『観測機より、遠弾 500m』
艦内放送が騒ぐ。弾は外れたが、前より大分近づいた。その砲撃に驚いたのか、太平洋艦隊は主砲を第2戦隊から第1戦隊に的を変える。
「左120度! 友軍『薩摩』!!」「北方より第2艦隊接近!!」
まだ海戦の雌雄がはっきりしない混迷の海。その戦場はゆっくり

と黄昏に染まっていく。

第２６話　艦隊決戦物語２（後書き）

作者「ここまで読んで下さり本当にありがとうございます」

大和「最終回、最終回って今度はどんな駄作を書くんです？」

作者「・・・未定です」

サウスダコタ「でも、八八艦隊とか潜水艦のやつをワードで書いてましたよね？　あれは？」

作者「それは全部ホーネット（作者が１２月ごろまで使っていたＰＣの愛称）に入っていて、ホーネットを修理に出した後で、『あ～なんかウイルウスだらけだね～こりゃ初期化すかＰＣ捨てるかどっちかだね～』と電話で言われて、『初期化して下さい』って言ったので全部旅立ちました」

大和「思い出して書くのは？」

作者「え？　めんどくさく・・・」

ズズーン！！

サウスダコタ「そういえば艦魂呼ばないのかしら、作者」

大和「さぁ？　それでは読者の皆さんのご意見、ご感想待ってます！」

第２７話　艦隊決戦物語３（前書き）

昨日（４月１８日）は海軍甲事件、山本五十六大将以下１１名が戦死なされた日です。

本当に関係ありませんが最終回が近づいて来ました。
そこで書き始めには気づかなかったことを考えるようになりました。
それは、『アメリカとどうやったら講和が結べるのか？』です。焦ります、最終回近いので。
こんな作者ですがどうか最後までお付き合い下さい。
では本編をどうぞ。

第27話　艦隊決戦物語3

１９４２年7月１７日午後５時

現在、連合艦隊は戦艦『扶桑』沈没、戦艦『伊勢』『日向』『比叡』『霧島』が大破、アメリカ太平洋艦隊は戦艦『アリゾナ』級戦艦などが中破、もしくは小破と損傷軽微で戦闘が行われていた。

「猿たちは何やっていたのよ！？」

戦艦『薩摩』の艦魂――ウェールズが重巡『利根』『筑摩』以下の第１航空艦隊に居た艦を引き連れて戦場に乱入する。ちなみに巡洋戦艦『伊吹』は排水作業と魚雷によって出来た破孔仮修理にまだ手間取っている。

「閣下、これより我々、第８戦隊、第３水雷戦隊所属の第１１駆逐隊（駆逐艦『吹雪』『白雪』『初雪』）、第１２駆逐隊（駆逐艦『叢雲（むらくも）』『東雲（しのののめ）』『白雲』）は敵艦隊に突撃を慣行致します」

テンプルが細いメガネが掛けられた細目に、長髪の１４・５歳の少女――第８戦隊所属の重巡『利根』の艦魂が報告をする。

「早く行きなさい！」

ハッ、と声と同時に利根が転移、第８戦隊の『利根』を先頭に『薩摩』以外の艦は白い波を作って海を突き進む。

戦艦『サウスダコタ』

急に近づいた『大和』の砲弾に焦燥が募り、今まで攻撃していた『伊勢』たち第２戦隊から１６インチ砲搭載戦艦たちは砲身を第１戦隊に向け直す。

「尾栓よし！！」

１番砲手のハワードが怒鳴るように砲員長に報告し、隣に居るサウスダコタをちらりと見る。それにサウスダコタは微笑み返す。

「伝令！　３番主砲塔、撃ち方用意よーしを伝えろ！！」
砲員長の号令が反復され、旋回手と射手が敵艦に弾が当たるよう砲塔を旋回、砲身の仰角を与える。
その光景を見たサウスダコタは腰のホルスターから大口径リヴォルバーの拳銃を取り出し、彼女の白い手がグリップを握り直す。親指が撃鉄（ハンマー）を親指が引き起こす。それに連動して蓮根のような弾倉が回転する。
腕を上げて砲塔の正面に狙いをつけ、撃つ。その銃弾は砲弾として飛翔する。
『サウスダコタ』から飛び出した3発の砲弾は大きな弧を描いて『大和』の６００ｍくらい遠くに着弾、１５ｍ程の水柱が３本生まれる。

戦艦『大和』

「着弾！　本艦の後方約６００！！」
見張り員の報告に艦橋職員は驚愕の眼差しを投げる。
「敵艦との距離知らせ！！」
松田の声。
「敵艦との距離、３万５千！！」
「３万５千でこんなに正確な射撃が出来るのか・・・」
黒島が驚嘆の声を漏らす。
『水偵より、遠弾６００　下げちょい』
驚嘆の次は落胆。後続の『武蔵』『長門』『陸奥』も悪戦苦闘している。
「・・・何故当たらん・・・」
黄金仮面をあだ名される宇垣参謀長の顔にはほんのわずか、怒りが滲んでいた。その間も『サウスダコタ』の射撃と『大和』の射撃が交差する。そして、

ズバアアァァン！！
ズバアアァァン！！
ズバアアァァン！！

そそり立つ水柱。それは『大和』を囲むようにそそり立つ。
「夾叉されました！！」
つまり、『大和』が敵艦の散布界に入ってしまった。このまま進路を変えなくては敵艦に命中弾を受ける可能性が大きくなる。だが進路を変えてしまうと今までの射撃データの意味が無くなり、また1からやり直しになってしまう。だから我慢の直進。
『サウスダコタ』の砲身が水平から仰角を取る。砲弾が装填された証拠だ。そして9本の砲身がすべて火矢を吐き出す。
全門斉射の爆煙が『サウスダコタ』を包み込む。
それを測敵所から見ていた大和。冷や汗が彼女に流れる。
「大和！！」
早川がレンズから大和に視線を移し、右手を差し伸べる。それに応えるように大和の左手が伸びる。
「早川二曹・・・」
その手は暖かく力強い。
早川は測敵のためにすぐ顔をレンズにくっつけて『サウスダコタ』との距離を測る。でもその間も早川は大和の、大和は早川の温もりを感じあう。
この距離なら1分ちょっとの時間で着弾する砲弾。だがその1分は『大和』の将兵にとって1時間、いや2時間くらいに感じられた。それほど焦燥が生まれていた。
そんな地獄の1分が過ぎる。

ズバアァァン！！

『大和』の艦橋ほどの水柱が『大和』のすぐ近く、１００ｍも無

い所に1発着弾する。
「ヒグッ！」
大和の体がビクリッと反応する。
「大和！　大丈夫か！？」
「へ、平気です・・・あの・・・」
「？　どうした？」
「手・・・離さないで下さいね」
早川は愚問だよ、と小さく笑って大和のすり抜けそうなほど小さい手のひらを握り直す。
「・・・スイマセン、今度は痛いです」
「え？　ごめん」
どこか息の合わない2人だった。

戦艦『陸奥』

「ハアアァァァァ！！」
陸奥の叫びと同時に大太刀が縦に空気を切り裂き、41cm砲弾が飛翔する。現在、『大和』対『サウスダコタ』、『武蔵』対『ワシントン』、『長門』対『ノースカロライナ』『メリーランド』、『陸奥』対『ウエストバージニア』『コロラド』が撃ち合っている。
「某がもたらした帝國の脅威は某が始末をつける！！」
ヤンデレを脱した陸奥。陸奥の言う脅威――『コロラド』級戦艦。本来、ワシントン軍縮条約では『竣工してない艦は廃艦する』と決められていた。各国は『陸奥』を未完成としたが日本は猛反対。和解措置として廃艦予定の艦の廃艦中止するというものだった。
だから本来廃艦予定の『コロラド』『ウエストバージニア』の2隻の建艦続行をしたのだ。
「沈めエエェェェェェェ！！」
陸奥の周りに傾いた太陽が映る白刃が煌く。

戦艦『コロラド』

「貴方に助けてもらった命・・・それは感謝するが、貴方に妹を殺されたことを私は許さない！！」

コロラドの叫びに重なるように主砲が咆哮する。コロラドの言う妹――『コロラド』級戦艦４番艦『ワシントン』。彼女はワシントン条約のせいで標的艦として深海に消えた。そもそもワシントン条約は日本海軍の『長門』型戦艦の高性能さに危機感を感じたアメリカがこれ以上『長門』型のような戦艦を建造出来ないようにしようとしてこの条約を締結しようとしたとも呼ばれる。

「貴方が生まれなかったらワシントンは・・・」

非情は一言。それは非情な一撃として『陸奥』に襲い掛かる。

戦艦『大和』

ズズーン！！

ズバアアァァアアァン！！

主砲発射のすぐ次に轟音と共に『大和』第１主砲塔に１発の４０ｃｍ砲弾が撃ち込まれた。

「キャアアァァアアア！！」

大和の悲鳴、それが測敵所に響く。

「大和！！」

早川が握っていた手にぬるりと生暖かい液体が触れる。

「おい！　大和！？」

振り返ると大和の左の手首から早川の手を塗らした液体が流れ出ていた。早川は手ぬぐいを大和の腕に巻こうとする。

「これくらい・・・平気です。早川二曹は、測敵を・・・」

「早川！　測敵を続けろ！！」

大和と血走った眼差しを投げる班長が早川の顔を測敵機に戻させ

る。その時、
『水偵より、敵1番艦ヲ夾叉！』
その報告で『大和』の士気が盛り上がる。
「主砲全門斉射！！」
松田の怒鳴り声。『大和』の主砲が水平になり、再び空を砲身が睨む。不気味な静寂。

ズズーン！！

大気が張り裂けるような爆音を轟かせて約1，5トンの重量を誇る砲弾を秒速780mの速さで撃ち出す。その間、砲身はまた水平に戻されて砲弾、装薬の順に装填され、砲身が重苦しい音を奏でて仰角を取る。この間約35秒。着弾は約1分なのでその着弾を待って、射撃データを修正した後に発射される。
その間も『サウスダコタ』の反撃で40cm砲弾が着弾する。
その度に『大和』が揺れる。
「くっ・・・被害ほうこーく！！」
「艦首付近で浸水発生！！　ただし微量！」
「第1高角砲被弾！！　火災発生！！」
『大和』に着弾する砲弾のほとんどは主要防護区画（バイタルパート）に吸い込まれ、それほどたいした損害を与えられなかった。
「着弾時間5秒前！！」
艦橋に響いた緊張の声。

戦艦『サウスダコタ』

その時は突如、『サウスダコタ』を襲った。

ズバアアアアアン！！

『大和』から放たれた砲弾が『サウスダコタ』に3発が着弾。3発が着弾。
「ひ、被害ほーこく！！」
「艦中部に被弾！！　煙突がやられ排煙能力が低下！　速力も20ノットまで低下！！」
「艦橋、レーダー室！！　さっきのでレーダーが損傷！！　使用不能！！」
「後部艦橋に被弾火災発生！！　及び左舷側の両用砲2基が使用不能！！」
「第1主砲塔の砲身が架台から外れました！！　射撃不能です！！」
「何だって？」
キンメルの顔が強張る。これで『サウスダコタ』の1／3もの砲戦能力を失ってしまった。
「『ワシントン』被弾！！　火災発生！！　速力も衰えてます！！」
「敵4番艦、『ナガト』クラスが落伍します！！」
「『ノースカロライナ』で火災発生！！　速力も低下してる模様！！」
朗報より凶報のほうが多く飛び交う艦橋。
「艦橋！　こちら砲術長！　さっきの衝撃で射撃指揮装置が旅立ちました！！　主砲の統制射撃が出来ません！！」
キンメルの顔が歪む。
「本艦は・・・」

戦艦『大和』

「敵1番艦、隊列を離れます！！」
その声に艦内から万歳の声。そのまま満身創痍の敵艦に武士の情けと介錯（とどめ）をすることも出来るが、2隻を相手取って苦戦している『長門』『陸奥』の援護をするべきと判断。
『大和』の砲身が『長門』を討たんとする『ノースカロライナ』

に振り向けられる。
『武蔵』はまだ『ワシントン』に手間取っているが、『ワシントン』で発生した火災は消えそうには、無い。
「早川二曹！！　当たりました！！　私の砲弾が当たりました！！」
やはり兵器の魂である大和は着弾に感激していた。これが自分が生み出された理由――存在価値。
（すまん・・・）
早川は心の中で手を合わせると『ノースカロライナ』との測敵を始める。

戦艦『長門』

「ふぅ、大和か・・・」
『ノースカロライナ』の周りに生まれた水柱を確認した長門は『メリーランド』に主砲を移す。
「貴様のような戦艦が私に勝てると思うな！！」
軍刀が一閃、白い残像を残して空気を裂く。それにあわせて主砲が唸る。その時、大きな爆音が鳴り響く。それは『ワシントン』が『武蔵』の弾を受けて停止する所だった。
「賭博以外にもやるやつだな」
長門に不敵な笑みが宿る。だが後方を見たとき、その笑顔が凍りつく。
艦上構造物はメタメタとなり、第3主砲しか射撃をしていない妹がそこに居た。
「陸奥！！」
長門が転移の光に包まれる。

戦艦『陸奥』

『長門』より国民に愛された戦艦『陸奥』の面影はまったく感じ

られない甲板。その一角に倒れ、血に染まった陸奥。近くには真ん中から折れた大太刀。だが陸奥はその大太刀の柄を離そうとはしなかった。
「陸奥！　しっかりしろ！！」
転移した長門が陸奥を抱き起こす。
「あね・・・うえ・・・某は・・・コロラドを・・・ゴホゴホ！！」
陸奥の口から血が流れる。
「気にするな！！　お前はよくやった！！」
長門は包帯を取り出すと陸奥の傷口に巻きだす。
どうやら『陸奥』は落伍するようで、進路が変更される。右に傾斜は在るものの今以上に傾斜が増大する気配は無い。
「後は私に任せろ！！」
「・・・あね・・・うえ・・・」
陸奥の瞳に透明な涙がたまる。
今まで握っていた大太刀が手から抜け、空虚な音が空に響いた。

戦艦『金剛』

『薩摩』の乱入や『ダウスダコタ』から忘れ去られた『山城』が加勢し、金剛たちの戦況も逆転しだした。
北から敵の巡洋艦部隊を一掃して来た第2艦隊はアメリカ太平洋艦隊の右舷越しに、つまり、アメリカ太平洋艦隊を挟みこむ形で航過する。
『金剛』は『高雄』達のおかげで『アリゾナ』を大破に追い込む。
『榛名』は『薩摩』と共に『オクラホマ』を砲撃、大破に追い込み、『比叡』をスクラップ同然に追い込んだ『テネシー』『ペンシルヴァニア』に砲撃を再開する。
また、『比叡』同様に大破した『霧島』を『山城』『利根』『筑摩』が援護をする。
「アメリカの戦艦は撃たれずようわね」

金剛から冗談ともつかない一言が漏れる。その時、視界に第2艦隊以外の巡洋艦が映る。
「あれ？　何かしら？」
そう思った時、
「？　あ！　煙幕なんて卑怯よ！！」
『アリゾナ』達は自身に積み込まれた重油を機関室で不完全燃焼、結果、煙突からおびただしい黒煙が撒き散らされて艦体を隠し、第2艦隊が航過して出来た隙――東北に進路を取って撤退を開始した。

戦艦『大和』

『サウスダコタ』が撤退、『ワシントン』は航行不能で総員退艦中。『ノースカロライナ』もその姿に闘志を感じられない。後一息！　と将兵の誰もが思った。
「敵巡洋艦7隻が突っ込んでくる！！」
その異様な報告に唖然となる将兵。
南国の太陽が別れを伝えようとしても戦いは別れを見せようとはしない。

第27話　艦隊決戦物語3（後書き）

作者「ここまで読んでくださり、本当に感謝です！」

大和「あの・・・最終回ですが・・・本当に考えてないんですか？」

作者「いや、黒鉄先生の作品に凄く感動して『書くぞ！！』と最終回の展開を考える前にキーボードを押してました」

サウスダコタ「・・・・・・合衆国はそう甘くないですよ」

大和「・・・もしかして・・・」

作者「ハイ、読者の皆様に質問です。アメリカと日本が講和を結ぶにはどんなことが起これば講和が出来るか？　です」

大和「・・・艦名やキャラに兵器の募集は分かりますが・・・」

作者「まぁ、いざとなったら『戦いはまだまだ続く！！』みたいなほう・・・」

ズズーン！！

サウスダコタ「駄作者ですね」

大和「それでは読者の皆様、ご意見ご感想待ってます」

第２８話　混迷（前書き）

今回で昼戦は終わりです。ですがまだ物語は続きます。（別に最終回への展開をどうしようか？　と悩んでいるから最終回を伸ばそう、と言う言うとは決してありません）

第２８話　混迷

１９４２年７月１７日４０分

戦艦『大和』が戦艦『サウスダコタ』を落伍させることにした連合艦隊。それに習って大破の状態で遁走を決め込んだ『ノースカロライナ』、『武蔵』と撃ち合っていた『ワシントン』は機関にダメージを負ったのか、少し、前のめりになって停止していた。

新鋭戦艦を失ったアメリカ太平洋艦隊に残った１６インチ砲搭載戦艦は『コロラド』『ウエストヴァージニア』『メリーランド』で勝利は到底、夢に近かった。

戦艦『大和』

『ノースカロライナ』を撃沈するため、４６ｃｍ主砲が９門、水平に戻され、弾・装薬が装填される。

「後一息でアメリカ戦艦を撃沈出来る！　各員の努力の結晶である！！　だが気を抜くな！！」

松田艦長が嬉しそうに伝声管に叫ぶ。

「・・・やりましたな」

宇垣参謀長の顔にも満足げな表情がほんのり見て取れる。

だが、戦争は何が起こるか分からないものである。

「敵巡洋艦！　突っ込んでくる！！」

「何だと！？」

騒然となる艦橋、慌てて双眼鏡で敵を確認する松田。

「敵巡洋艦は７隻！！　重巡３隻！　軽巡４隻！！　と確認せり！！」

『ノースカロライナ』『大和』の間を疾走してきた巡洋艦。これが戦況に微妙な変化をもたらす。

軽巡『ナッシュビル』

ロンドン海軍軍縮条約では巡洋艦の保有トン数が決められた。日本では『高雄』『妙高』型でその数が埋まってしまった。だが戦力の欲しい日本海軍は苦肉の策として『最上』型を１５，５ｃｍ３連装主砲を搭載した重巡サイズの軽巡として竣工させた。そして条約切れと共に主砲を２０，３ｃｍ連装砲に換装して重巡とした。

アメリカは『最上』型に対抗するために重巡サイズの軽巡を作った。それがこの『ナッシュビル』たちである。

「戦艦部隊は何やってんだ！？」

軽巡部隊を指揮するリッチモンド・ターナー少将は投げられる物はすべて投げ、その怒りを発散しようとする。

この部隊は日本の水雷戦隊が『サウスだダコタ』たちに突撃するのを防ぐため、一進一退の攻防を続けていた。

「突撃！　突撃だ！！　ジャップを皆殺しにするために突撃だ！！」

１６・７歳くらいで癖のある黒髪の少女――ナッシュビルも怒鳴り散らす。

この部隊の編成は以下の通り、

軽巡『ナッシュビル』『ボイス』『ホノルル』

防空軽巡『アトランタ』『ジュノー』『サンディエゴ』『サンジュアン』

『大和』の見張り員は『ナッシュビル』たちを重巡と誤認していたのだ。

「目標敵１・２・３番艦！！　準備でき次第に撃ち方始め！！」

『ナッシュビル』に搭載された１５，５ｃｍ砲１５門が火焔を噴出す。その砲、３門を収めた砲塔の上でナッシュビルたちは『ブローニングＭ１９１９重機関銃』を出現させると乱暴に弾丸が収まる

ベルト状の弾装を叩き込み、スライドを引いて射撃を開始する。

ダダダダダ・・・！

ドン！　ドン！　ドン！

ナッシュビルの撃つ射撃音共に『ナッシュビル』の主砲が唸る。全艦が『大和』達に猛射を浴びせる姿はどこか、恐怖を感じさせる。

それに対して『大和』は取舵で『ナッシュビル』から逃げながら副砲を撃ちだした。

午後6時、戦艦『大和』

『大和』以下の第1戦隊は敵の重巡（実際は軽巡）から逃げようとする。6万トン以上の排水量を誇る『大和』が排水量1万トン足らずの『ナッシュビル』から逃げるという奇妙な形になった。

その理由は簡単。『敵の巡洋艦も雷装がされているのでは？』この疑問が司令部に生まれたからだ。

アメリカ軍は魚雷を巡洋艦には積まないと聞くが、それは定かではない。日本（こっち）の巡洋艦は搭載されているから向こうも搭載されているかもしれない。もしや、猛射しながら突っ込んでくるのは魚雷を叩き込むためでは？

この会話が逃げることに『大和』達を導いたのだ。

「・・・ッ！！」

脇腹を抱える大和。

「大丈夫か？」

心配げな早川。『サウスダコタ』よりかは小さい爆音と衝撃が轟く測敵所。『大和』は主砲発射を中止して副砲の発射に勤めている。

「・・・平気です・・・チクッときますが・・・」

大丈夫だと告げるように微笑む大和。だが、額には脂汗、それに顔も少し強張っている。

「クソ、副砲は何やってんだ！？」
班長が測敵所の観測窓から敵の巡洋艦を見る。
『大和』は主砲以外の副砲だけではなく、対空砲弾しか撃てない高角砲まで咆哮する。

「右よし！！」
「左よし！！」
その報告を聞いた班長が、
「テェー！！」

ズン！　ズン！

主砲より遥かに軽い発砲音と共に１２，７ｃｍ高角砲が火を吹く。この高角砲は日本の戦艦に搭載された標準的な砲だ。だが、『大和』の主砲発射の爆風はものすごく、高角砲を損傷させてしまう恐れがあったので爆風よけとして砲塔のようにシールドで覆われていた。
だがこのシールドは装甲では無いので敵の砲弾が当たれば簡単に引き裂かれてしまう。
「早く弾を装填し・・・」

ズガアアァン！！

「ぐあああぁああ！！」「うわあああぁああ！！」
砲弾の断片や爆風が高角砲員に襲い掛かる。
「・・・艦橋、５番・・・こう・・・かくほう・・・被弾・・・使用・・・ふ、のう・・・」
班長が最期の報告をし、部下の血と焦げた床に崩れ落ちてしまう。彼のポケットには血に染まった家族の写真。その写真は彼の血で時間をかけて空と同じ色に染め上げていく。

午後６時４０分、軽巡『神通』

「突撃！！　突撃！！　目標敵巡洋艦！！」

そう叫ぶのは目を血走らせた第２水雷戦隊司令官、田中瀬三（たなからいぞう）少将。

「神通！！　もっと早く走れんのか！？」

「それは機関課に文句を言え！！　それより早く私を敵艦に近づかせろ！！」

乱暴な言葉を言う、長く伸びた黒髪が風になびいている１４．５歳くらいの少女うの――神通。

田中少将指揮の第２水雷戦隊は今まで主体に近づこうとしていた敵の駆逐艦と戦っていた。そこで友軍の戦艦が１隻撃沈で５隻が大破にされたのにアメリカ艦隊は未だに沈没した戦艦は無い、その事実に田中少将と神通は憤慨していた。

「これだから決戦前に夜戦を挑むべきと進言したのだ」

だが、連合艦隊司令部は開戦初頭の『スラバヤ沖海戦』では主砲・魚雷の命中率が戦前の目標に圧倒的に達していなかったので、『決戦前の夜戦で敵の漸減するのは厳しい』と判断。だから決戦後、残敵掃討として水雷戦隊を使うことにしたのだ。

だから日没までは敵の艦船から主体を護衛するように、と命令されていた。

「目標敵１番艦！！」

必殺の魚雷を敵に叩き込む前に猛然と咆哮を続ける『ナッシュビル』に主砲で牽制しようとする『神通』。だが、『ナッシュビル』達は急に砲撃をやめて退避にかかった。

「！！　おい！！　逃げるな！！　どこに行く！？」

神通が叫ぶと、敵艦の砲塔に居るどう見ても残弾が無くなり掛けた重機関銃を握った艦魂が、

「Ｉ　ｏｖｅｒｌｏｏｋ　ｉｔ　ｔｈｉｓ　ｔｉｍｅ！　！　Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｉｔ！　！」

と叫ぶ。日本語に訳すと『今回は見逃してやる！！　覚えていろ

！！』と負けフラグ全快の言葉になる。
だがほおって置く訳には行かないので追撃を始める第２水雷戦隊。

戦艦『大和』

「現状は？」
山本が幕僚たちに聞く。
「現在、敵巡洋艦の攻撃を避けるために取舵を取っていたので敵艦隊を完全に見失いました。しかし、第３戦隊の『金剛』『榛名』『薩摩』と重巡たちで追撃戦を展開中。しかし第２戦隊の『山城』は速度が低いので追撃戦には不参加で我々第１戦隊に合流しようとしています」
「損傷艦は？」
「『陸奥』『比叡』は内地に向けて航行中。『伊勢』『日向』『霧島』は助かるかは・・・あと『伊吹』は応急修理が完了、戦線に復帰する気です」
大丈夫なのか？　と声が飛ぶ。
「ギルバート諸島にいた第９戦隊と第４水雷戦隊は？」
「無線報告は一切ありません。まぁ、何かあれば無線がくると思うので無事だと思います」
第９戦隊所属の『北上』『大井』、第４水雷戦隊は隠密性を高めるために絶対に無電を打つなと厳命してある。
「長官！！　第１１航空艦隊から入電！！」
決戦前にボロクソやられた第１１航空艦隊。
「読み上げてくれ」
「ハ、発　第１１航空艦隊指令官　塚原二四三中将　宛　連合艦隊司令部　我　部隊ノ再編ヲ完了セリ　之ヨリ　攻撃隊ヲ出撃　敵艦隊ヲ攻撃セントス、以上です」
「・・・よほど悔しかったのですな」
「・・・・・・」

戦果を上げられない第１１航空艦隊が面目を保つために出撃させたのだろうと考えた宇垣。

これで大艦巨砲主義の時代が終わるのではと考える山本。そんな２人の思いを乗せた一式陸攻３５機（全機雷装）とゼロ戦２０機が南国の滑走路を離陸して行った。

第２８話　混迷（後書き）

作者「ここまで読んでく下さり、ご苦労さまです」

大和「作者・・・コメントの返信遅くありませんか？」

作者「それは・・・３年になって模試とか授業のスピードがやばいくらい速くなって、気づいたらこうなってしまっただけで・・・」

サウスダコタ「言い訳はそれくらいでいいですか？」

作者「ヒドイ・・・」

大和「と、言うか・・・理由はそれだけですか？」

サウスダコタ「まだあるの？」

大和「オンライン海戦の次はオンライン空戦やってますよ」

作者「わ、悪いですか！？　それで執筆時間が減ったことはありませんし・・・」

大和「本当ですか？」

作者「私が削るのは勉強じか・・・」

ズズーン！！

サウスダコタ「それもどうかと・・・」

大和「こんな作者でも、ご意見・ご感想まってまーす！」

第２９話　海鳥の咆哮（前書き）

本編とまったく関係ありませんが、友達から『エースコンバットＺＥＲＯ』を借りました。
素直な感想は、『難しい』の一言です。
特に接近する敵機に『あ！　やっとロックした！』と思ってもミサイルを撃つ瞬間にすれ違われ、延々とドックファイト・・・。
赤眼黒龍先生の『飛魂～黒い夜叉と空を駆ける少女～』のクーガー中佐は凄いな、と思う今日この頃です。
・・・・・あれ？　落ちが無い？

第２９話　海鳥の咆哮

１９４２年７月１７日午後６時４０分トラック諸島竹島飛行場

海軍の陸上航空隊――第１１航空艦隊の主力が駐留するこの島には部隊の再編を完了した一式陸攻機が胴体内部に魚雷を抱いて待機していた。

「諸君！　なんとしても敵艦に魚雷を叩き込め！　自ら敵艦に爆弾となり、体当たりしても敵艦を葬るんだ！！　かかれー！！」

第１１航空艦隊指令官の塚原中将が非情とも言える命令を下し、搭乗員は小走りに愛機に乗り込む。その顔には悲壮の一文字。

なぜなら『航空機では戦闘行動中の戦艦は撃沈できない』と言われているから。

整備員がエンジンを点火させ、プロペラが旋律をかなで始める。

指揮者のようにタイミングを見計らい、ある兵隊が旗を大きく振る。合奏（りりく）が始める。１式陸攻の鈍重そうな体は揚力で地上からその体を離していく。

トラックから舞い上がった１式陸攻３５機と護衛のゼロ戦たち２０機。第１航空艦隊の報告では敵の空母機動艦隊は壊滅した、とのことだからゼロ戦にはそれぞれ３０ｋｇ爆弾が２発くくりつけられていた。

それらは一路、アメリカ太平洋艦隊を目指して翼を翻す。

戦艦『カリフォルニア』

「・・・ハァ・・・ハァ・・・」

荒い息をするカリフォルニア。頭からは出欠を抑えるために包帯が巻かれている。

『コンゴウ』（ぎりもの）クラスの戦艦を２隻大破にしたのはいい。だが、鹵（うら）

獲艦や重巡の加勢で形勢逆転。重巡が航過して出来た東北(すき)方向を使って命からがら脱出した、と言う感じだった。
現在、この艦隊は『オクラホマ』『ペンシルヴァニア』『ネバタ』と『テネシー』『カリフォルニア』『アリゾナ』に分かれて寄り添うように『アリゾナ』の最大速力の15ノットのスピードで東に航行していた。
その時、カリフォルニアの近くに転移の光が灯る。
「カリフォルニア、傷は？」
転移してきたのは15・6の少女、カリフォルニアと同じ金髪。だがその髪はボブカットにされていた。
「テネシー姉さん・・・」
彼女もまた、至る所に包帯が巻かれていて痛々しい。
「姉さんこそ、大丈夫？」
『テネシー』は『薩摩』『榛名』の砲撃で中破の損害を負っていた。
「私はなんとかね・・・でもレーダーと主砲の半数がちょっとね・・・」
『薩摩(ウェールズ)』の砲撃で『テネシー』はレーダーと第1・第3主砲塔が旋回不能となり、射撃が出来なくなっていた。
「まぁ、アリゾナに比べたらまだましよ」
「どんな感じなの？」
「敵戦艦（金剛のこと）の砲撃と敵巡洋艦たちの砲撃で機関が損傷、最大速力15ノット、しかも主砲は全門射撃不能よ・・・」
「・・・・・」
その言葉に黙るカリフォルニア。昨日まで堂々とした合衆国海軍の戦艦部隊が・・・。
今は出来るのは敵戦艦の撃滅ではなく、敵戦艦からの敗走。これだけだった。
「・・・ッ・・・」
悔しさがカリフォルニアの頬を伝う。

テネシーはそんな妹の頭を優しく抱きかかえる。
「・・・私達は負けたわ・・・でも合衆国は負けないわ。何時か必ず、合衆国はジャップたちを叩きのめす・・・」
それはカリフォルニアに言ったのか、それとも自分に言い聞かせたのか、それを考える前に対空戦闘用意の号令がかかる。
「どうしたの！？」
慌てて空を見ると夕日の中に輝くもの――敵機が見えた。
『敵機来襲！　本艦の６時方向！！　対空戦闘よーい！』

一式陸攻

旧式戦艦たちは増速してこの一式陸攻の攻撃をさけようとする。そのうち一式陸攻３機は最も速度の低い戦艦に狙いを付け、東を向いた戦艦を一度飛び越し、戦艦からして右前方、時計で言うなら２時の方向から機体を海面から３ｍくらいの高さまで持っていく。
「目標敵『アリゾナ』級戦艦！！　雷撃よーい！！　・・・テェ！！」
機体から切り離された魚雷は海面に落ちるとその勢いで沈降、そして魚雷内部の深度計とジャイロスコープで深度と自身の姿勢を制御、内部の空気を燃焼しながら海中を翔る。

戦艦『カリフォルニア』

「沈んで！！」
『カリフォルニア』に搭載された５１口径５インチ対空砲が唸りだす。だが、『霧島』の砲撃で上部構造物を破戒され、その対空砲は敵機を追い払うだけの弾幕を張れない。
そのうち、深緑の機体――一式陸攻が海面を這うように突撃する、そして胴体から鈍く光る鉄の塊がそっと置かれるように落ち、真っ白い航跡を残して速度の落ちている『アリゾナ』

に向かって疾走する。
「・・・・！　アリゾナ！！」
生きるために『アリゾナ』は艦を回頭させる。『アリゾナ』にめがけて死の旋律を奏でる魚雷。
『アリゾナ』の巨体が傾き、段々と右に傾き、面舵をとって回避しようとする。魚雷は『アリゾナ』目指し、白い足跡を残して走り続ける。それを見るカリフォルニアの頬を緊張の汗が一筋流れる。

「弾着時間！！」
一式陸攻の中で弾ける声。だがそれに続く声は聞こえない。

「・・・除けた・・・の？」
カリフォルニアは緊張が少し緩む。
魚雷は『アリゾナ』と最も接近した距離は２ｍ弱。まさに紙一重で魚雷を回避した。が、『アリゾナ』の幸運はそこまでだった。
上空にいたゼロ戦隊が爆撃に入る。ゼロ戦隊は『アリゾナ』に覆いかぶさるように降下、翼に付けられた３０ｋｇ爆弾２発を続々と投下した。

ズガアアアアアアン！！

けたたましい炸裂音。今回、爆弾を投下ゼロ戦は６機、その内７発が『アリゾナ』に命中。艦橋を引き裂き、艦長たちを死傷させた。
そのせいで『アリゾナ』は一時的に命令系統が混乱した。
日本海軍はその一時を見逃さなかった。

「ベティ（一式陸攻のアメリカ軍呼称）が『アリゾナ』を雷撃するつもりだ！！」
見張り員の絶叫。その数１０機ほど。その内２機を『テネシー』『カリフォルニア』の砲弾が一式陸攻の翼を撫でる。その瞬間、そ

の一式陸攻は翼から炎を巻き上げ、揚力を得られなくなった機体は海面に激突、四散する。
残った8機は機体の進路を微調整しながら『アリゾナ』に接近する。
さっきと違ってまったく回避運動が取れない『アリゾナ』。
ついに一式陸攻たちは魚雷を投下していく。
「当たって！！」
カリフォルニアの願い。それは天に届いた。
「機長！　右の主翼から火災発生！！」
「あと少しなのに・・・魚雷投下やめ！！　操縦手！　機体の高度を少し上げろ！！」
機長の命令が機体に反映され、一式陸攻は魚雷を投下することなく、『アリゾナ』に炎を吐きながら向かう。

「なんで？　なんで魚雷を投下しない？」
テネシーが疑問と焦燥の混じった声をだす。
一式陸攻は魚雷を抱いたまま『アリゾナ』に接近する。
「機体を引き起こさない！？　そろそろ引き起こさないと・・・まさか！？」
テネシーが火を吐きながら飛ぶ一式陸攻の意図に思い至った時、

ズガアアアアアアン！！

『アリゾナ』が火焔に包まれる。一式陸攻はもう、帰還が不可能と判断、魚雷を抱いたまま『アリゾナ』に激突することにした。
そして先ほど発射された航空魚雷が『アリゾナ』に襲い襲い掛かり、高々と水柱を吹き上げる。
「そんな・・・」
テネシーはこんな悲劇があったことを思い出す。あの時は乗組員

を含めて真珠湾（パールハーバー）の日曜日を満喫しようとしていた。もちろん私やカリフォルニアやアリゾナも。そんな早朝は戦争と言う惨禍が襲った。私とカリフォルニアはあそこで大怪我を負った。そしてアリゾナは、もう帰らぬ存在になってしまった・・・。

水柱が治まった後、そこには右に大きく傾きを増大させていく『アリゾナ』がいた。

「ありぞ・・・」

友の名前を呼びかけたとき、

ズガアアァァアアン！！

弾薬が誘爆を起こしたのか、『アリゾナ』は大爆発を起こしてマリアナにその巨体を没してしまった。

「アリゾナアアアアアアアアアア！！」

友を殺した憎い敵機を睨みつけ、日本刀に比べて幅の広い両刃の剣を出現させる。それの刃を自分の体で隠すような構え――剣道で言う脇構え

「ハー・・・」

少し息を吐き、それを止め、一閃。闇に沈みかけた空間に白刃が閃光を放つ。それに合わせて放たれた砲弾が基地に帰還しようとする一式陸攻を絡み取る。

だが、それまでだった。何回斬ってもそれっきり命中断は与えられなかった。

「なんで・・・なんで、友達の・・・敵も・・・討てないの・・・」

憎しみの次にテネシーを襲ったのは、何も出来ず、ただ、友を殺されるしかなかった悲しみが彼女を襲った。

戦艦『大和』

「ほう、１１航空艦隊が？」

艦橋に響く山本の嬉しそうな声。
「ハ、先ほど、我　敵『アリゾナ』級戦艦1隻ヲ撃沈セリ、という無電を！」
「つまり・・・航空機によって戦闘行動中の戦艦が・・・」
黒島の顔にも垢と嬉しさが共存する。
「・・・しかし敵は『薩摩』『榛名』の砲撃で満身創痍だった、そのこともお忘れなく」
ただ、宇垣だけは面白くなさそうで、さっきまでほんのりと浮かんでいた喜色の顔は、興ざめだと言わんばかりの無表情に戻っていた。
「さて、夜戦は第3戦隊と第2艦隊や水雷屋にまか・・・」
「それはならんよ艦長」
ご機嫌な山本が松田を制する。
「しかし・・・」
「まだ『大和』は砲撃できる。それに敵には16インチ砲戦艦が5隻、今のままだとこっちは1隻、これでは心もとない。だろ参謀長？」
不貞腐れ気味の参謀長を山本に視線を送る。山本はよほど『敵戦艦撃沈』が嬉しかったのだろう。
「・・・御もっともです」
こうして、『大和』『武蔵』『長門』『山城』は夜戦へと身を投じることになった。

第２９話　海鳥の咆哮（後書き）

作者「ここまで読んでくださり、本当に感謝いたします」

大和「あの・・・良いんですか？」

作者「？　何がです？」

サウスダコタ「航空機で戦艦を撃沈するなんて・・・」

作者「まぁ、航空機が戦艦を撃沈できると戦前の演習の結果から言われてましたし、『アリゾナ』は宇垣中将の言うとおり満身創痍でしたし・・・」

大和「これじゃ、艦隊決戦がもう、起こらないじゃないですか・・・」

作者「そもそももうすぐこの小説終わりますから・・・」

大和「まさか最終回が近いからって・・・」

作者「ソンナコトアリマセン」
→棒読み。
ズズーン！！

サウスダコタ「なんて人ですか！？」

大和「まったくです！　では読者の皆様のご意見とご感想待ってます」

第３０話　決戦（前書き）

ついに３０話です。予定だとあと２・３話くらいで最終回となります。

第３０話　決戦

１９４２年７月１７日午後７時３０分

敗走に移ったアメリカ太平洋艦隊。彼女たちは今、大きく分けて４つの艦隊を組んで退避していた。

内容は戦艦『サウスダコタ』『ノースカロライナ』とターナー少将率いる軽巡部隊、その艦隊の東北に約５００海里の地点にハルゼー率いる機動部隊（空母『エンタープライズ』と重巡３隻と駆逐艦少々）。南には『コロラド』級戦艦３隻。第２戦隊と第３戦隊に撃たれていた『カリフォルニア』たちはスプールアンス少将指揮の駆逐隊が護衛についていた。

戦艦『サウスダコタ』

「俺は残る」

『サウスダコタ』の艦橋では幕僚がターナー少将乗艦の『ナッシュビル』に将旗を建てるべきとの進言を断っていた。

現在、『サウスダコタ』はダメージコントロールのおかげで速力を２５ノットに回復していたが、『大和』『長門』の砲撃で左に傾斜をきたした『ノースカロライナ』はどうやっても１６ノットが最高。

「・・・なんて、こった・・・」

真珠湾を出撃した時にこんな事態が予想できようか？　これでフィリピン奪還作戦は頓挫する。大西洋にいる『ワスプ』たちを呼ばなければならない、いや、その前に合衆国艦隊司令長官のキング大将になん言われ、どんな処分が下るのだろうか、あぁ、煙草がほしい。

太陽が完全に沈んだマリアナ。今、『サウスダコタ』達のレーダーは破壊され、使い物意なら無いから見張り員は空を破らんばかりに見つめている。
「・・・？　て、敵機！　本艦の７時方向！」
見張り員の絶叫。
「艦載機か！？」
艦橋にいるすべての人間に嫌な汗が背中を伝う。
「敵機は水上機！　本艦隊を追尾して来ます！！」
艦載機で無いにしろこれで我々はジャップに居場所を知られた。知られたということは攻撃を受ける。艦橋を見渡すと、自分の胸の前で十字を書いて神に祈る航海長。唖然として動こうとしない参謀。
「砲戦よーい！！　見張り員は水上見張りを厳となせ！！」
ただ艦長の声が闇に弾けただけだった。

砲戦用意のブザーが鳴り響く。それはまだその機能を果たしている第３主砲塔にも響いていた。
「まだやるのか・・・」
小さく悪態をつくハワード。
「・・・ハワード・・・」
力なく倒れているサウスダコタ。彼女の着る真っ白だった軍服は血に染まり、赤黒く染まっていた。そんなサウスダコタの心配げな瞳。
「大丈夫だよ・・・」
倒れたサウスダコタを抱きしめるハワード。
体に纏わりつく濃い静寂の時間。だがそれも永遠と言う訳でもない。
『右前方約２万ｍに敵駆逐艦８隻！！』
『左後方約２２万ｍ！　敵小型艦４隻！！』
『右舷後方！　距離１７万ｍに軽巡１、駆逐艦６！！』
次々と飛ぶ報告。

「・・・かこ・・・まれたの・・・ッ！」
「おい、寝ているよ！　俺がなんとかする！」
起き上がろうとするサウスダコタを止めるハワード。
「砲撃戦よーい！！」
砲塔長の命令。ハワードはサウスダコタに待ってろと言うと自分の仕事に取り掛かった。

「いいか！？　敵艦が反転した瞬間を見逃すな！！　それが魚雷を撃った合図だ！！」
どの国の駆逐艦も戦艦と違って己を守る装甲なんて物は無い。魚雷を撃ってしまえば駆逐艦に出来ることなど敵から逃げる事しかない。
「8千mまで接近したら気をつけろ！！」
前哨戦でキンゲート中将を驚かせる程の射程を見せた酸素魚雷。だが、キンゲートが戦死した今、その実態を知る者は『サウスダコタ』に、居ない。

軽巡『神通』

「敵さん・・・まだ我が軍の魚雷の恐ろしさを知らないようだな」
第2水雷戦隊指令官の田中少将はこれでもかと満面な笑みを顔に浮かべ、自分の髭をいじる。機嫌のいい時の癖だ。
「じゃ、教えて上げないとな」
神通も機嫌がいいのか、背中に流れた漆黒の髪をさっきから指にクルクル巻きながら笑みを浮かべていた。
第2水雷戦隊は水偵の報告を聞くと、必中を喫すべく、『サウスダコタ』たちを包囲するように展開、距離1万2千で一斉に魚雷を発射する手はずだった。
「距離？」
「敵艦との距離、1万3千！」

「雷撃よーい！！」
号令と命令が反復される艦橋。
「距離、１万２千！！」
「撃てぇ！！」
軽巡も他の軍艦あら比べると無装甲に近い。『神通』乗組員にとって身動きのとりにくい時間。押し黙る艦橋職員。笑顔が少し強張る神通。
「敵戦艦発砲！！」
『サウスダコタ』の抵抗。いくら第１主砲塔が沈黙していると言っても１６インチ砲の脅威は変わらない。
敵の射撃データが募るのと『神通』に緊張が募るのがリンクする。
「敵軽巡！　突っ込んでくる！！」
「ちょうどいい・・・」
神通はそう呟き、自分の第１主砲塔に転移する。
「今度は逃がさん・・・」
何も無い空間が光、光が弾けたとき、神通の手には九九式軽機関銃が握られていた。
短い発砲音。『神通』の主砲が１４ｃｍ砲弾を撃ち出し、敵の周りに水柱を出現させる。

軽巡『ナッシュビル』

「クソ、弾が・・・」
残弾が少ない『ナッシュビル』。敵の軽巡はスクッと砲塔に立って機関銃を撃ってくる。本来なら『ブローニングＭ１９１９重機関銃』を乱射する所だが・・・。苦虫を潰したような顔をするナッシュビル。その瞬間、『自分』の脇を何かが通るのを感じた。
「？　なんだ？」
確認するが何も見えない。気のせい？　意識が『神通（てき）』から離れるが、『神通』の砲撃で意識を戻し、射撃を再開するナッシュビル。

軽巡『神通』

「・・・・・・時間です」

水雷長が押し殺したように言ったその瞬間、『サウスダコタ』や『ノースカロライナ』からそれらの艦橋を越えるほどの高さの水柱を生み出す。

「敵1番艦（『サウスダコタ』）の艦首付近に1本命中！」

「敵戦艦（『ノースカロライナ』）の艦尾に1本命中！　敵艦止まります！！」

「さらに重巡2番艦（実際は軽巡『ボイス』）に命中、傾斜増大中！！」

「敵重巡3番艦（軽巡『ホノルル』）、轟沈です！！」

必殺の酸素魚雷の攻撃で『ノースカロライナ』はスクリューを吹き飛ばされ、航行不能。他にも随伴していた軽巡部隊にも魚雷が襲い掛かり、3番艦だった『ホノルル』は左舷に魚雷が集中、噴煙が収まったころにはその姿を、消していた。

「長居は無用だな」

「右前進いっぱーい！　左行進いっぱーい！　とーりかーじいっぱーい！！」

その言葉と共に『神通』の艦体を右に傾きながら左に旋回。第2水雷戦隊の各艦もそれに習い、戦場を離脱していった。

しばしの静寂。それはいつ敗れるのか分からない不気味なほどの静けさだった。

戦艦『霧島』

『カリフォルニア』と『ネバタ』の砲撃で艦橋と煙突はその原型をとどめ居ていない『霧島』。それと浸水が発生しているのか右前方に傾きがあり、艦首の甲板の一部は波に舐められている。『霧島』

は懸命な応急修理が施されたが、その効果を見出すことは不可能に近く、日没後に総員退艦が発令された。
だがそんな『霧島』の第2主砲塔の左側に人影が3つ。
「霧島・・・」
「霧島さん・・・」
「・・・早川・・・」
そこに居たのは早川と大和、霧島。霧島の軍服も戦闘前の真っ白な軍服の面影が感じられないほど血で染め上げられていた。
「もうすぐ私が会敵すると思うので、お早めにお願いします・・・」
大和はそっぽを向き、不貞腐れたように言った。
「分かった、分かった」
何故早川たちが居るのか？　それは測敵所で心配そうに『霧島』の居た方角をチラチラ見ていた早川に痺れを切らした班長が『少しの間なら『霧島』に行っても良いぞ』と言ってくれたので、大和と共に『霧島』に転移したのだ。
「・・・大和」
「？　何ですか？」
日本海軍としては仲間だが、恋愛では敵の霧島。どうしても大和がピリピリしてしまう。
「・・・邪魔だ、消えろ」
「な！　それが満身創痍の艦魂が言うことですか！？　読者はそう言った言葉を求めていませんよ！！」
「チョイ待てよ大和、読者って・・・」
大和は普段ならもう2・3言うところだが、
「敵機が来ないか見張ってます」
そう言うと第1主砲塔の方へ歩き出し、早川たちから遠ざかる。
「霧島、あぁ言ったことは・・・」
「・・・私は本気だ。私は早川が、好きだ・・・だからあいつは、邪魔」
顔少し、ゆがめ、痛みを現す霧島。だが、基本的に無口無表情な

霧島の顔にそれが滲むほどの痛みが走っていた。
「・・・早川、抱きしめて」
それに応えるため、傷に触らないように霧島を抱き上げる。
「・・・キスをして」
霧島の瞳が早川を射る。たしかに霧島は大和と同じく俺を愛してくれている。だが大和と違ってもう、霧島は・・・。
「え！？　それは、ちょっと・・・えーと、他の事は無いかな？」
大和に告白し、接吻までして・・・ここで霧島と・・・と言うのはかなりまずいことだと早川は思っていた。月に照らされた早川の顔は紅潮していた。
そんな純情とも言える早川に気づかれないように笑う霧島。
「・・・なら、私のそばに居て」
小さな、そして大きな霧島の望み。だから霧島を抱きなおす早川。霧島はゆっくりと目を閉じ、早川を感じていた。
霧島の体温はドンドン奪われ、彼女が確実に死に近づいていることを伝える。

『よろしくな、霧島』

早川と出会って、最初に言われた言葉。あの時、私は早川に何も返せなかった。なぜ？　それは私の心臓が破裂しそうなほど拍動していたから。後ほど、原因不明の機関トラブルがあったとも聞いた。
私はその時から、早川と言う人間が好きだった。誰にも早川を取られたくなかった。私の早川であってほしかった。早川と幸せなひと時を過ごしたかった。
だが彼はそれを選ばなかった。
それを私は認めたくなかった。

霧島がゆっくりと目を開ける。そこに早川と、見たくも無かった大和が視界に入る。霧島は痛む腕を動かし、腰に付けられた短刀を

外し、早川の顔の前に突き出す。
「霧島？」
「・・・もってて」
半ば強引に自分の短刀を差し出す霧島。
「・・・私の、形見に・・・して」
少し、霧島と短刀を見比べ、その短刀を受け取った早川。
「・・・まだ居るのか」
今度は大和に視線を飛ばす霧島。
「・・・居なければ、早川と・・・逝けるのに」
「そんなことはさせませんよ」
その時、急に『霧島』の傾斜が増大し、霧島の体が霞みだす。
「早川二曹！！」
「・・・早川、最期に、一つ、聞きたい」
それより、早く『霧島』を離れなければと言いたげな視線を投げる大和。
「なんだ？」
早川の腕の中で霧島と言う存在が消え始める。
「・・・私と大和、どっちをとる？」
霞み行く霧島。だがその瞳に霞は無い。３人の間に音が消え、早川の問いを待つ霧島。
「・・・・・・霧島は、大切な仲間だよ・・・でもごめん。俺は・・・」
早川の口から搾り出すように紡がれた言葉。霧島はしばらく早川を見つめると、大和を見据えるために首を動かす。
「・・・早川を・・・頼んだ・・・」
「大丈夫ですよ・・・心配要りません」
大和と早川が転移の光に包まれる。
「早川・・・待ってる」
「何物騒なこと言ってんですか！？」
それを苦笑いで過ごす早川。

「・・・早川、生きろ」
その声を聞きながら。早川たちは『霧島』を去った。
闇が支配する空間で火焔が灯る。それと共に1隻の戦艦と1人の少女が、闇と同化した海に没した。
――早川、サヨナラ。

戦艦『伊勢』

『サウスダコタ』の砲撃で火災が発生し、『伊勢』は艦内部でもそれが延焼、手が付けれない状態となり、総員退艦が発令された。
そんな『伊勢』の艦橋はもの静かだった。そこには『伊勢』と共に逝くのか、羅信義などに体を縛った人たちが数人居た。
「・・・たか・・・す？」
首だけ動かして暗い艦橋の中を見渡す伊勢。
「大丈夫・・・では無いよな・・・」
「・・・沈むんだな」
体を動かすと刺すような痛みが体を駆ける伊勢。
「・・・日向は？」
「今、内地に向かってるよ」
静かに言う高須。
「・・・高須・・・退艦は？」
「私の判断でお前がこうなったんだ。私が生き残る訳にはいかんよ」
実直な高須。それに面倒くさい奴だと伊勢。
「・・・・・・」
伊勢はふと自分の頭に手をあて、軍帽が無いことを確認すると、その存在を探すように手を動かす。
「ほら・・・」

高須が伊勢の軍帽を手渡す。
「・・・その軍帽、まだ持っていたのか・・・サイズは確か合わなかったはずだが・・・」
伊勢は軍帽を見つめる。
高須が第１艦隊指令官に旗艦『伊勢』に着任した日に記念として伊勢に渡したものだ。だが、サイズが合わなかった。
「片付けるの面倒だから・・・被っていただけだ」
軍帽をもらった時に高須の手と触れた。それは一瞬だったが、暖かい手だった。人間で言う父とはこう言う暖かい存在なのか？　と疑問が湧き、そのことが頭をグルグルと回るようになってしまい、仕事も出来なくなってしまった。
元々、面倒なことが大嫌いな伊勢はそこで『人間のことは考え無いようにしよう』と思っていた。だから早川に思いを寄せる大和に忠告したこともあった。
だが、伊勢はあの暖かさを忘れることが出来なかった。
遠くからエンジン音がする。きっと水偵だろう。
「・・・高須、手をだな・・・」
「たく・・・面倒くさい奴だな・・・」
あの時と、同じ暖かさ。それは一瞬にして安心感に代わって行った。急に伊勢の瞼を闇が覆い出す。だが、その手にはまだ、暖かさが生きていた。

それからすぐ、『伊勢』の弾薬庫が誘爆、『伊勢』は第３主砲塔付近からキールが折れ、艦首と艦尾を天に向け、１機の水偵が海に消えていった『伊勢』を見ていた。。

戦艦『金剛』

第１１航空艦隊は夜間のため、第２次攻撃を中断。巡洋戦艦『伊吹』（最高速力２７ノット）と合流した第３戦隊の『金剛』『榛名』

『薩摩』と第２艦隊。現在『榛名』の最高速力の２６ノットで１１航空艦隊から知らせてきた位置に向かっていた。
その戦力は以下の通り、

第３戦隊『金剛』『榛名』『薩摩』『伊吹』
第４戦隊『高雄』『愛宕』『摩耶』
第５戦隊『那智』『足柄』『羽黒』
第７戦隊『鈴谷』『熊野』
第９戦隊『利根』『筑摩』

※第５戦隊の『妙高』は大破のため、戦場を離脱中。

「そんな・・・霧島と伊勢さんが・・・」
『霧島』『伊勢』が沈んだことはすぐに伝わっていた。
「私が居れば・・・」
「レパルスさんのせいじゃ有りませんよ」
「・・・・・・」
そんな会話を静かに聞く金剛。『金剛』の設計図を流用して作られた『扶桑』型、その改良型である『伊勢』型。金剛にとっていきなり妹が3人居なくなってしまい、大きな穴のようなものが心に出来ていることを感じていた。
「お姉ちゃん？」
泣き出しそうな榛名。金剛は優しく榛名の頭をなでてあげる。
「それにしても植民地上がりが・・・生意気ね」
悪態をつくウェールズ。
「ドイツが嫌い、日本が嫌い、アメリカが嫌い、ウェールズにとって友軍は居るの？」
冗談めかして言うレパルス。
「レパルスさんは猿達を友軍と呼ぶのですか？」

「私にとっての友軍はアニメを愛する人々のことよ♪」
・・・なんとも言いにくい空気が生まれる。
『敵戦艦5隻見ゆ！！　距離2万3千！！』
『砲撃戦よーい！！』
急に慌しく動き出す『金剛』。
「みんな、後一息よ、これが終わったら、みんなでお茶会をしましょう」
そこに居た全員がそれに頷き、転移の光と共に消えた。
「みんなで、美味しいお茶を飲むために・・・」
金剛は呟くと、軍刀をスラリと抜き、白刃に月を映す。

戦艦『大和』

「「・・・・・・」」
どこか焦点の合っていないような早川。そんな早川を見つめる大和。
「・・・早川二曹・・・」
沈黙を破った大和。
「早川二曹は・・・霧島さんと、逝きたかったんですか？」
「・・・・・・分かんない、でも・・・」
「でも？」
「霧島は、俺に生きろって言ってくれた。それにウェールズとも約束しんだ。生きるって」
「・・・分かり、あした、早川二曹」
『前方約2万5千m！！　敵艦隊！！』
その声に早川は15m測距儀のレンズに目を押し当てる。
早川たちの最後の戦いが始まった。

第３０話　決戦（後書き）

作者「ここまで読んでくださり本当にありがとうございます」

大和「こんな小説でも最終回があと2・3で来るんですね」

作者「こんなって・・・」

サウスダコタ「それにしても艦魂呼ばないの？」

作者「・・・そうですね・・・でも番外編も書きたいですし・・・」

大和「それより次回作は？」

作者「ネタが・・・有りません」

大和・サウスダコタ「「・・・・・・」」

→どうしよ・・・といった感じの2人

作者「もう、ネタが尽きました。私には前書きのネタがもう・・・」

ズズーン！！

サウスダコタ「これからどうなるのかしら？」

大和「最終回に向けて読者の皆様のご意見・ご感想を待ってます」

番外編　三二型　行け！！　ＳＯＳ戦隊　萌えレンジャー！！（前書き）

作者「・・・・・・」
→最近やっとニコ動のアカウントを取得してニコ動を見ている作者。

扶桑「・・・・・・」
→マリアナ沖で戦死して頭に輪をつけた扶桑。

作者「・・・そうだ・・・艦魂を呼ぼう・・・」

扶桑「・・・ハァ・・・って！　何言ってんです！？」

作者「まぁまぁ、３０話記念とアクセス数が６万５千人突破したことですし・・・」

扶桑「・・・で？　誰を呼ぶんです？」

作者「零戦先生の所からよく後書きに来て下さっている常陸（旧姓レパルス）さんを呼びます！　扶桑さんもどうぞ」

扶桑「久しぶりに本文ですね♪」

作者「？　アクセス数、６万５千人突破記念の話をやるって山城が・・・」

扶桑「あの子が！？」

作者「えぇ、任せろって」

扶桑「タイトルからして任せられない！　どういうのやるか聞かないと！！」

タタタ・・・。
→走り去る扶桑。

作者「皆様、『艦隊決戦物語』は皆様のご愛読のおかげでアクセス数（ＰＶ）が６万５千人、ユニークアクセスでは２万５千を目前としております。本当にありがとうございます。最終回も近い『艦隊決戦物語』、最後までお付き合いください。
あと、この記念の話は本編とはまったく関係有りません。
それとキャラが崩壊している恐れがあります。
なので、そのことで不快な思いをされても私は一切責任を取りません！！」
→キッパリ

作者「そんなんでもいいという方はどうぞ！」

番外編　三二型　行け！！　ＳＯＳ戦隊　萌えレンジャー！！

２０××年×月××日午後５時

ここは千葉県某所の艦隊決戦中学の近く。周りは田植えが終わった田んぼ。春の柔かさと夏の爽やかさが混じった静かな田舎に建つこのちゅう・・・。

パンパンパン！！
→拳銃の発砲音。

静かないな・・・。

パンパン！！
→なんか発砲音。

本来は静かなんですよ！！　ここ！！　マジで・・・。

パンパン！！

どこかの紛争地域を演出する艦隊決戦中学。部活動は無いのか騒ぎ立てる生徒は居ない。しかし、
「きゃー！！　誰かー！　助けてー！」
と逃げる生徒はいた。その生徒は海軍のたくましいお兄さんが着るような真っ白いセーラー服を着て、髪をポニーテールにした１４・５歳の少女――大和。後、手に黒い塊を右手が持っている。
「逃げるな逃げるな！！」
大和を追う１６・７歳の少年――高須成美（たかすなるみ）。追いかける高須はその手に可愛らしいフリルの付いた『メイド服』を持っていた。

何故、大和が高須に追いかけられているか？　それは読者の皆様の豊かな想像力に任せます。
「さぁ、観念しろ！！　さっさとメイド服に！！」
「こないでー！！　誰か！！」
大和が叫び、走りながら上半身をひねって右手の黒い塊――『モーゼルＣ９６』（ドイツの拳銃）を高須に向け、

パンパンパン！！

と３発撃つ。だが弾は高須には当たらない。モーゼルあるなら助けを呼ぶなとかは言わないでくださいね。
「う、うるさいですね！」
さて読者の皆様・・・。
「無視しないで下さい！！」
「ふふふ、追い詰めたぞ！！」
いつの間にかどこかの教室に入ってしまった大和。本当、いつ追い詰められたのでしょうかね？　教室の中は、整然と並んだ机を紅い光が撫でている。
「クッ・・・あれ？　弾切れ？」
大和はなおモーゼルで抵抗しようとするが、モーゼルの装弾数は１０発。すでに全部の弾丸を撃ってしまっていた。
「さぁ、観念しろ！　おとなしくメイド服を着るんだ！！」
高須が大和に詰め寄り、大和はコンクリートの壁に追い詰められる。壁に追い詰められた大和は壁を背に座り込んでしまう。顔色は、悪い。
高須はセーラー服を脱がすために座り込んだ大和に手を掛ける。変体、嫌、犯罪者である。
「や、やめてください！！」
顔が紅潮した大和。
「良いではないか、良いではないか」

ムカつく笑みの高須。
大和、絶体絶命である。
「そこまでだ！！」
その掛け声と共に、白い人影が高須に飛び蹴りを繰り出す。高須はその蹴りを背中に受け、コンクリートの壁と熱いキスをする。
「○×△・・・」「キャッ！！」
日本語や英語では到底文字に出来ない声を出す高須と小さな悲鳴を上げた大和。
「間に合ったようね」
「もう、大丈夫よ」

突如現れたのは少女が3人。服装は2人は日本海軍の白い士官服、1人は下士官服を着ていた。それぞれ、軍帽、赤・青・黄のマフラーをつけている。
大和は助かった、と言う顔をしていなかった。むしろ、ヤバイ、限りなくヤバイと思う顔だった。
「だ、誰だ！？」
鼻と口の所を押さえて振り返った高須が叫ぶ。
「山城レッド」「翡翠ブルー」「足柄イエロー」
「「「3人合わせて！！」」」

ドガーン！！

「「「SOS戦隊、萌えレンジャー！！」」」
→3人がなんかカッコイイポーズを取っている。
「え、SOS戦隊・・・？」
「あの・・・なんですか？　それ？」
高須に大和も疑問が顔に浮かぶ。
「Sekaiwo（世界を）・・・」

→足柄イエロー。
「Ｏｈｉｎｉｍｏｒｉａｇｅｒｕ（多いに盛り上げる）・・・」
→翡翠ブルー。
「Ｓｅｎｈｉｔａｔｉ（戦妃たち）の戦隊・・・」
→山城レッド。
「「「略して！！」」」
「略すのですか！？」
思わず突っ込んだ大和。
「「「ＳＯＳ戦隊！！　萌えレンジャー！！」」」

ドガーン！！
→九三式一号装薬（日本海軍の主砲弾用の火薬）の爆発。

「「・・・・・」」
硬直する大和と高須とメイド服。
「レッド！！　ブルー！！　２人の視線が痛いです！！」
「心配するなイエロー。正義とは時に受け入れがたいものなんだ」
「そうやイエロー！　己の道を信じるんや！！」
「は、はい！！」
それをやっぱり奇異な目で見つめる大和たち。
「・・・・・・まぁ、いい！　お前達もこのメイド服を着てもらう！！」
バサッと可愛いメイド服をひるがえす。
「・・・そのメイド服・・・なってない！！」
「？　この完璧なメイド服が間違っているだと！？」
「あぁ、そうだ間違っている・・・」
「む、レッドの固有結界か・・・」
翡翠ブルーが小さく呟く。へ？　と大和の声。
「いい？　この青二才！　メイドとは、イギリスのヴィクトリア女王の時代、植民地政策や産業革命で中産階級が力をつけた。その結

果、中産階級の人々は上流階級の人々の仲間入りするために使用人を雇い始めた。
これがメイドだ！
その頃の女性は男性に比べて遥かに安い賃金で雇えた。そのため、メイド雇用は絶頂を向かえた。
しかし、その後、欧州で勃発した第1次世界大戦は国家間の総力戦となった。もちろん国家の一員である女性も国のために借り出された。
これは女性の社会進出の足がかりとなり、女性はメイド以外の職業にも就くようになった。他にも、女性の労働条件の改善などの結果、メイドの利点が低下、以後のメイドは衰退傾向になってしまった・・・・」
「・・・あの、それで・・・・？」
疑問が一杯の高須。作者の私も山城が言わんとしていることが、分からない。
「バカ野郎！！　悟れないのか！？　今日は徹底的に貴様等を矯正する！！」
え？　私も？
「あの頃のメイドが絶頂だった。つまり、メイドの原点があの時代なんだ。あの頃はコスプレとかそう言う物ではなく、ただ単に家事をするための作業服として着用した。
そして機能美を追求した結果、ヴィクトリアンメイド型というものが確立された。
これこそ真のメイド服！　メイド服の原点！！
だが近年のそう言う連中がアレンジを加え、『可愛さ』と言うフリルやレースを付けた事によって本来の作業着としての目的を失わせた！！　それがフレンチメイド型だ。確かにフレンチメイド型はヴィクトリアンメイド型より可愛い。しかしアレでは家事が行えないではないか！！　これでは本末転倒！　なんとも嘆かわしい！！
ちなみに、コスプレ自体を売りにしたフレンチメイド型の家政婦（めいどさん）

を派遣する業者が在るが、本業の家政婦(めいどさん)の服は華美なデザインなどないヴィクトリアンメイド型の場合のお方が多いんだ！」
はぁはぁ、と荒い息をする山城レッド。相当疲れているようだ。
「・・・でも・・・俺は、フレンチメイドのほうが・・・」
「指導オオォォオォオオ！！」
山城の鉄拳が高須に直撃、またコンクリートの壁に頭をぶつける。
山城は高須の胸倉をつかむ。もう、どこかの喧嘩の一場面である。
高須は幸運（？）にも気絶していた。
「なぁなぁ、レッド」
「？　どうしたブルー？」
高須を見下ろしながらブルーこと翡翠が山城レッドに声をかける。
「うちな・・・フレンチメイドのほうがええんやけど・・・」
「ぶ、ブルー！！　お前・・・裏切るつもり！？」
「あのな・・・レッド、時代は流れるんや。飛行機がレシプロ機からジェット機になるようにメイド服もヴィクトリアンメイドからフレンチメイドに移り変わるんだ！」
ガーン！　と効果音が出そうな空気がこの場を充満する。
「・・・い、イエローは・・・どう、思う？」
恐る恐るといった感じに聞くレッド。
「・・・・・・私は・・・」
そこで足柄イエローは口を閉じてフリーズする。それにつられる様に周りもフリーズする。カップ麺だと麺が完全に延びてアウトになるくらい時間が経ったとき、
「両方で！」
その一言で場が凍りつく。
「・・・・・・あの～、助けていただき、ありがとうございます。私はこれで・・・」
なんとか撤退しようとする大和。
「やったら着せて見てどっちがええかイエローに決めてもらうっていうのは？」

「そうね、この際、白黒はっきりとさせないとね」
翡翠と山城の目が妖しく光る。その視線はスッと大和に延びる。
「・・・・・・私？」
「レット・・・ブルー・・・私のために・・・」
涙汲む足柄。その肩を叩いて気にするな！　と声を掛けるレッドとブルー。
「それじゃ、まず脱がさんと・・・」
「え？　ちょ！　スカートに手を掛けないでくださ・・・レッドさん！？　何私のスカーフ取ろうとするんで・・・ブルーさん！！　スカートの中に手を・・・ちょ、そこは！！　らめぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

山城「って言う番外編をやろうと思っているんだけど・・・」
→笑顔な山城

←笑顔全快の扶桑
扶桑「うん、ボッ♪」

番外編　三二型　行け！！　ＳＯＳ戦隊　萌えレンジャー！！（後書き）

満州黒龍江省　虎頭要塞

ここには現在、４５口径４０ｃｍ榴弾砲を始め、ＳＯＳ団所属から５個師団がトーチカなどの防御陣地を構築していた。
そんな要塞の外と違って中は零戦先生の『新太平洋戦争』から来てくださった常陸さんを迎えて楽しい空気が流れていた。
常陸「おじゃましまーす！！」

伊吹「ごゆっくりー！！」
→元気なレパルスたち。

←遠方からそれを見てい大和と山城と作者。

大和「今回は大和（伊）さんたちは来ないんですよね？」

山城「うふふ、来ても今回の警備なら大丈夫よ、なんたって５個師団も投入しているんだから」

大和「なら安心ですね」

作者「では、次のゲストの登場です」

山城「ゲスト？」
ガチャ！
→扉の開く音。

翡翠「来たで～団長」

山城「ブハ！　なんで翡翠が！！」

大和「どういうことです！？」

→作者ににじり寄る２人。

作者「まぁまぁ、団長は翡翠さんと『萌え』について語ってくみては？　あちらの部屋を取っておきました」

作者の勧めで翡翠と山城は別室に移動。

作者「ふ～、これで懸案事項が減りました」

大和「・・・山城さんが人柱に・・・」

作者「二階級特進ですね」

扶桑「ちょ！　妹を殺さない！！」

常陸「小澤～久しぶり～」

作者「あ、感想以来ですね、お久しぶりです」

→扶桑をスルーした作者。

伊吹「常陸は凄いわ！　もう戦艦と砲撃戦やったんだもん」

作者「伊吹さんもマレー沖でしたじゃないですか」

伊吹「・・・・・・あの時はまだ３８ｃｍ砲だったのに・・・ウェールズや常陸は４０ｃｍ砲なのに・・・」

→『の』字を書く伊吹。

常陸「だ、大丈夫よ！　９門も砲門つけてるんだから！」

伊吹「でも・・・２ｃｍ以上小さくなった・・・どうせなら私も４０ｃｍ砲つけたかったわよ・・・グス・・・」

常陸「伊吹・・・小澤！　伊吹を泣かせるなんて！！」

作者「そう言われましても・・・だいたい、３８ｃｍ砲戦艦の『レパルス』に４０ｃｍ砲つけるには艦体の延長しないといけませんし、それすると艦体決戦に間に合わないと思います。だからと言って３８ｃｍ砲のままだと砲弾の生産やらで余計に出費が・・・」

常陸「そこは架空戦記なんだから・・・」

作者「いやいやいや！！　無理ですって！！　史実の日本と同じような感じでの艦体決戦ですから・・・それでもやるんですか？」

伊吹・常陸「「もちのろんッ！！」」

作者「ふる！！　てかいいんですか！？　言っちゃって！？　許可ありませんよ！」

伊吹「一度は言ってみたかったの♪」

→復活した伊吹。

金剛「貴女が常陸さんね、初めまして私は金剛」

常陸「常陸です。旧姓はレパルス」

金剛「じゃ、常陸さんと伊吹、私とお茶しない？」

伊吹・常陸「「賛成です！」」

そして金剛とのお茶会での時間はあっという間に過ぎてしまった。

常陸「伊吹～砲撃戦頑張りなさいよ～」

伊吹「そっちはハワイ攻略戦頑張ってよ！」

２人は別れを惜しみながらも、お互いの健闘を祈って、自分たちの世界に帰っていった。

作者「さて、後片付けです」

大和「次は私達が頑張るときですね。零戦先生のところのように頑張らないと！」

→気合を入れる大和。

作者「そんなに気をつめてると、決戦の時に疲れてサウスダコタにやられます・・・」

ズズーン！！

大和「人がせっかくいい感じだったのに・・・（それにしても本編・・・恥ずかしかったなぁ、早川二曹に見せられません・・・）・・・？　何かを忘れているような・・・」

翡翠「おー、こないな所に居たか大和」

大和「ひ、翡翠さん！？」

翡翠「常陸帰っちゃったのね・・・うちも・・・何ぞ『お持ち帰り』

して帰ろうかなぁ」
→大和ににじり寄る翡翠。

翡翠「うふふ、メイドにスク水、ナース・・・何でもあるわ♪」

大和「や、やめ・・・あ、だからそこはダメです！　い、いやあぁぁぁぁぁぁ！！」

大和の運命はいかに！？　また、人柱となった山城は？　尽きない疑問だが、今回もこれで良かったのだろう。うん。良かったんです。そうに違いありません！！
零戦先生、これで良いでしょうか？　何かあればお願いしま・・・。
うん？　あれは・・・零戦！？　なんか近づいてくる。胴体から黒い塊が・・・あれって６０ｋｇ爆弾！？

ズガアアァァァァアン！！

第３１話　決着（前書き）

次回は恐らく『艦隊決戦物語』の最終回となります。

第３１話　決着

１９４２年７月２７日午後１０時

戦艦『大和』

『右前方約２万５千ｍ！！　敵艦隊！！』

突如響く敵発見の報告。『大和』が慌しく動き出す。

「右砲戦よーい！」

艦長の松田には懸案事項があった。それは『大和』の残弾。それと砲身寿命である。

「艦長、距離１万５千をきったら撃ち方始めだ」

山本の声に松田は応え、前方の敵戦艦を視線に捕らえる。

「『インペラートル・ニコライ１世』のように機関を止めてくれたら、楽なんだろうがな・・・」

松田が言った『インペラートル・ニコライ１世』とはロシア帝国のバルチック艦隊（第２太平洋艦隊）に所属していた戦艦。この艦は日本海海戦に参加し、日本海海戦の２日目にあたる５月２８日に連合艦隊に降伏、日本海海戦の幕を閉じた。松田は敵艦がこのようになってくれれば幸いだと思っていた。

そう思っても敵艦が停船する気配を見せてくれない。後続の『武蔵』たちが先に撃ち出す。『長門』『山城』はどうやら随伴の重巡（軽巡の誤認）に対して砲撃を開始した。

戦艦『サウスダコタ』

最大速力の１２ノットで東に退避中だった『サウスダコタ』と軽巡５隻の艦隊。そこには第２水雷戦隊の雷撃で舵を吹き飛ばされた『ノースカロライナ』の姿は無い。

昼戦で『大和』の砲撃を受け、全体の3分の1の火力を喪失した『サウスダコタ』。だが『サウスダコタ』はまだ戦うことを諦めていなかった。
「砲撃戦よーい！！　用意出来次第に撃ち方始め！！」
キンメルの声を聞いた艦長の顔にはまだ戦うのか、と戦意をなくした色が映し出されている。

第3主砲塔

「しつこい奴らだッ」
砲塔の天蓋を見て呟くハワード。
「サウスダコタ！　ハワード！」
転移の光の後、見慣れた軍服を血で染め上げたコロラドが現れる。
「・・・コロラド・・・さん・・・みんなは？」
サウスダコタの心配げな瞳と視線を絡まらせるコロラド。
「・・・メリーランドとウエストヴァージニアは無事だ」
その言葉に安堵の表情を見せるサウスダコタ。
「他の・・・みんなは？」
ハワードが間を空けることなく質問する。
「・・・それが分からない」
コロラドは『ノースカロライナ』が航行不能で雷撃処分されること無く漂流中(ゆくえふめい)であること。『アリゾナ』が航空機によって撃沈されたことを知っていた。知っていたが、コロラドの口からそれを出すことが出来なかった。
「・・・・・・ハワード・・・砲戦、用意だよ・・・」
あぁ、とハワードは呟き砲尾の閉鎖機に向かう。その姿を見つめるサウスダコタ。
「・・・あいつが気になるのか？」
「・・・・・・はい」
小さく、だがはっきりと答えたサウスダコタ。

「・・・なら生きろ。いいな？」
コロラドの問いに答えるべくサウスダコタが立ち上がろうとする。だがその意思に反して体が言うことを聞いてくれない。
「ほら・・・」
コロラドが肩を貸し、サウスダコタを立たせる。腰のホルスターからリヴォルバータイプの拳銃を血が付いた手で引き抜く。

巡洋戦艦『伊吹』

闇が垂れ込める海面。それを火焔と硝煙が舐める。規則正しくそれは点滅を繰り返す。その数は全部で９つ。点滅と共に轟音と垂れ込めた闇を切り裂く水柱。
第３戦隊は『金剛』『榛名』『薩摩』『伊吹』に第４・５・７・８戦隊が続き、アメリカ太平洋艦隊の旧式戦艦たちは『ネバタ』『カリフォルニア』『オクラホマ』『ペンシルヴァニア』『テネシー』にスプールアンス少将率いる駆逐艦たちが２０隻あまり。
その点滅うち１つが周りの点滅より大きな点滅をする。主砲の全門斉射である。
「ハアアアアアア！！」
掛け声と共に左に向いた砲身から３０，５ｃｍ砲弾が飛翔する。『伊吹』は試験的に搭載された電探の効果も相まってか、他艦より早く『ペンシルヴァニア』級戦艦を狭叉していた。
遠くで灯る発砲炎、敵との距離は大体１万８千前後。
それからすぐにまた光が『ペンシルヴァニア』級に灯る。それは発砲炎では無い。
『敵戦艦二命中弾２発　敵艦ノ艦橋大破ス』
水偵からの報告。
「艦橋・・・大破・・・」
つまり運よく『伊吹』の砲弾が『ペンシルヴァニア』の艦橋を捉えたのだ。これで『ペンシルヴァニア』は隊列を離れ、単独で海域

を離脱しようとしていた。
「・・・当たった？　当たったぁ！！　やったよ！　零戦先生の常陸！！　私もやったわよ！！」
だがその喜びのつかの間の物だった。
ズガァァァァァァン！！
閃光と轟音。今度は『伊吹』の艦橋の根元に直撃、艦橋の倒壊には至らないまでも第２主砲塔が衝撃で旋回不能になってしまった。
重巡『高雄』
「『伊吹』被弾！　落伍するようです！！」
見張り員の叫び。
「・・・今は敵艦に集中だ」
近藤中将の慈悲のカケラも無い命令。だが第２艦隊の重巡１０隻は敵の『テネシー』級戦艦（戦艦『テネシー』）を相手取っていた。戦艦の主砲の直撃を受ければ重巡なんてひとたまりも無い。
月月火水木金金で修練を積んできた第２艦隊は一糸乱れない運動で『テネシー』の砲撃を避けながら肉薄し、魚雷を叩き込もうとしていた。
ズバァァァァァァン！！
「ヒッ！」
そそり立つ着弾の水柱に恐怖が高雄の口から紡がれる。
「高雄！」
「へ、平気。それより敵艦との距離は？」
「・・・大体１万６千くらいかな」
「雷撃よーい！」

艦長の掛け声。艦橋に響く号令。命令どおり動く人々。
「敵艦との距離1万5千！！」
「面舵２０度！　魚雷発射！！」
『高雄』は右に舵をきり、艦体が左に傾く。その時、必殺の酸素魚雷が水を求める魚のように海中に飛び出し、海中を泳ぎだす。

戦艦『大和』

「距離１万５千！！」
早川がレンズを覗きながら叫ぶ。
「敵艦発砲！！」
観測窓から見ていた測敵員が声を上げる。
大和の頬に緊張が走り抜ける。その緊張は痛みとして大和に襲い掛かる。

ズガァァァァァァン！！

響く轟音。轟(とどろ)く激震。
「キャァァァァァァァ！！」「グァッ！」
そのゆれに早川たちは冷たい鉄の床になぎ倒される。
「・・・いってぇ」
床に討った頭を抑えて立ち上がろうとする早川。
『右舷前部に被弾！　浸水発生！』
『3番副砲塔に被弾！　火災発生！！』
その被害報告に頭が一気に覚醒する。火災か延焼して弾薬庫を襲ったら？　さすがの『大和』も無事であるはずが無い。『サウスダコタ』・『大和』に沈没の危機が押し寄せる。
「！　大和！　大和！」
測敵所を見渡すと床に白と乾いた血の色をした服を着た大和。
「やま・・・！」

大和を慌てて抱き起こそうとした早川。だが大和の体から流れる気持悪いほど生暖かい液体が早川の手を濡らす。
「おい！　大和！　しっかりしろ！！」
「はや・・・かわ、二曹・・・」
弱々しい大和の声。
「早川！！　距離知らせ！！」
班長の怒声。
「早川・・・に、そう。測敵を、して・・・ください」
「喋るな！」
「早くしろ！　早川！！」
班長が一段と声を荒げる。
「私は・・・だい・・・じょうぶ・・・です」
そういって無理やり顔を笑顔にする大和。
「少し待ってろ！」
早川は大和を仰向けにして赤の一番濃い所に手ぬぐいを当て、その上に華奢で白い大和の手を載せる。早川は席に付いたあと、一度大和を振り返ってからレンズに目を押し当てる。だが目は敵戦艦を見ているが、早川の全神経は大和に注がれていた。

ズズーン！！

しばらくの不気味な静寂。そして遠くで立ち上る水柱。

『敵戦艦ヲ狭叉』
水偵からの無電。
「全門済射！！」
松田の声が夜戦艦橋に響く。不気味な沈黙。それを破る砲声。
敵戦艦の周りに沸き立つ水柱、と火柱。
『敵戦艦ニ二発命中』

戦艦『サウスダコタ』

「グアアァァァァ！！」
「サウスダコタ！　おい！」
大地震のような揺れ、悲鳴を上げる鉄の音。今までに無いほどの出血を起こすサウスダコタ。
「ゲホッ、ゲホッ！」
サウスダコタが顔を歪めて苦痛を現す。
「・・・はわー・・・ど」
「喋るな！　パールハーバーのドックに入ったら存分に聞くから！　だから・・・」
だが急に『サウスダコタ』は前に傾きだす。どうやら艦首の方向で浸水が発生しているようだ。
実際、『大和』の砲弾は『サウスダコタ』の艦首左舷のヴァイタルパート外に着弾、大量の海水が『サウスダコタ』に流れ込み、もう1発は艦橋を直撃、キンメル大将以下の艦橋職員が戦死してしまい、これ以上の作戦行動に支障をきたしていた。
「ハワード・・・もう・・・」
首を横に振るコロラド。そんな彼女はゆっくりと床にサウスダコタを寝かせる。
「そんな・・・」
ハワードを襲う闇。それはどこまでも続く絶望。
「・・・ハワード・・・聞いて・・・」
あぁ、とハワードが喉から絞り出した声。
「私・・・ハワードのことが・・・好きなの」
「サウスダコタ・・・」
「兵器・・・なのに・・・私は・・・ハワードが、好き」
そこで彼は決めた。
「ハワードは・・・私を・・・愛して・・・くれる？」
だからそれを言葉と行動で示そうとした。

「あぁ、俺もだよ。だから『サウスダコタ』が沈んでも、俺はここに居るよ」
驚きの表情を浮かべるサウスダコタとコロラド。その3人だけの時間が止まったような錯覚が生まれた。

『総員退艦！！』

伝令兵の声。砲塔のハッチを空けて外に出て行く砲員。だがハワードは動こうとしない。傾斜を増していく『サウスダコタ』。
「ダメ・・・だよ、早く・・・たいか・・・ゲホ！　ゲホ！」
吐血するサウスダコタ。ハワードは優しくサウスダコタの口をハンカチで拭いてあげる。
「お前一人で逝かせられるか」
サウスダコタにその言葉は嬉しかった。だが悲しかった。
「コロラド・・・さん」
その一言にコロラドは良いのか？　と目でサウスダコタに問う。
それに頷くコロラド。
「ハワード・・・」「サウスダコタ」
2人の声が重なる。
「・・・なに？」「どうした？」
2人に少し笑みが宿る。
「ハワード・・・私にキスを、して」
「あぁ、もちろん」
それにコロラドはばつが悪そうに2人に背を向ける。
2人の口が重なり、思いを伝える。
それは純粋にお互いを伝える行為。
そっとお互いの口が離れる。
「・・・ありがと・・・」
「別にそんなこと・・・」
その声を聞いて振り返るコロラド。

「・・・ねぇ、拾って・・・」
サウスダコタは目線で自分の拳銃を拾ってくれと訴える。
ハワードは立ち上がり、蓮根型の弾装をしたリヴォルバータイプの拳銃を拾い上げる。
「すまんな・・・」
拳銃を拾ったハワードの腕を掴むコロラド。そして転移の光が灯る。
「おい！　コロラド！」
何が起こったのか理解したハワードはコロラドに抵抗を試みるが、如何せん、艦魂は人より身体能力が高い。
「ハワード・・・お願い・・・生きて」
「でもッ！！」
「私は・・・ハワードが・・・生きて、くれることが・・・嬉しいの・・・」
「それでも俺はお前と！」

「私を・・・愛してくれて・・・ありがとう」

サウスダコタの笑みを見た瞬間、闇に支配された空間に出る。風がある。波を切り裂く音がする。
「ここは『コロラド』よ」
コロラドが下を向いて言う。
「！　早くサウスダコタのところに転移してくれ！　なぁ！　コロラド！！」
それにコロラドは下を向いて黙っている。
「コロラド！　俺を『サウスダコタ』に戻してくれ！　俺はあいつと・・・！」
「黙れ！！」
コロラドの鉄拳がハワードを『コロラド』の甲板に叩きつける。
そしてコロラドの顔を見た。

「私だって・・・サウスダコタと別れるなんて・・・私の艦生の半分も生きていないあいつが私より先に逝くなんて・・・」
コロラドの顔は泣いていた。涙をボロボロと流していた。

ズガアァアアァアアアン！！

北方の洋上に明かりと轟音が響き、静かに消えていった。
「サウスダコタアアァァアァァ！！」
そしてただ、ハワードの声が響くだけであった。

戦艦『薩摩』

「アメリカの戦艦はタフね・・・」
懸命な砲撃を続ける『薩摩』。撃ち合っているのは戦艦『オクラホマ』。そんな『オクラホマ』も殆どの主砲が沈黙していた。しかし完全に沈黙したわけではなく、まだ第2主砲塔が抵抗を見せる。
「植民地の戦艦が大英帝国の最新鋭艦に勝てると思ってるの！！」
咆哮する『長門』型と同じ４１ｃｍ砲。しばらくして着弾の炎が『オクラホマ』に灯る。それはすぐに大きな火柱に飲み込まれる。
『薩摩』の砲弾は『オクラホマ』の３５，６ｃｍ主砲塔の天蓋を貫通、弾火薬庫を襲った。
「・・・・・・」
しばらく『オクラホマ』の居た海域を見ていたウェールズは、
「敵でも、生きていたんだから・・・」
徐(おもむろ)に胸の前で十字を書き、目を閉じる。生きようとしていた乗組員や艦魂。それを奪ったウェールズ。
目を開くと3本の水柱を上げる『テネシー』級戦艦が視界に入った。

重巡『高雄』

「敵戦艦、３本被雷！！」
「おっし！　命中したぞ！！」
「やりました！！」
第２艦隊の雷撃は成功。『高雄』たちが放った魚雷は『テネシー』に命中。確実に傾斜を増す『テネシー』。
「・・・！！　敵駆逐艦突撃してきます！！」
「エッ！？」「何だって！？」

駆逐艦『グリーブス』

今回、駆逐艦たちの指揮を執っていたスプールアンス。彼には１００隻近くの駆逐艦を指揮することになっていたが、後方に居る陸軍の輸送船団の護衛やハルゼーの機動部隊の護衛、日本海軍の伊号潜水艦の攻撃などで手元にいるのは２０隻ほどしか居なかった。
スプールアンスは昼戦で敵の主力を攻撃しようとしていたが、敵の水雷戦隊に阻害され、魚雷をまだ保有していた。
アメリカの駆逐艦は日本の駆逐艦と違って魚雷の装填装置を持っていた無い。撃ったら軍港などで補給しなければならない。
そんな貴重な魚雷を使うときが来た。
「なんとしても敵戦艦を撃沈するんだ！！　突撃！！」
いつもの彼ならありえないほどの怒りが滲む声。
１４隻の駆逐艦を残して『グリーブス』『グウィン』『モンセン』『ニブラック』『ケアにー』『グレイソン』が３７．４ノットの猛速で突撃を開始する。
敵の戦艦たちが副砲を撃ちだす。重巡たちも砲撃を駆逐艦たちに集中させる。
「距離５千！！」
見張り員の掛け声。
「雷撃！！」

スプールアンスの言葉に従って『グリーブス』たちは５３．３ｃｍ５連装魚雷発射管２基から魚雷を海に放つ。その数は６隻合わせて６０本。

重巡『摩耶』

「早く動いてッ！！」

悲鳴を上げる摩耶。日本海軍と違って白い航跡がくっきりと自分を目指してくる。『摩耶』の艦体がゆっくりと魚雷を回避するために面舵を切る。

弾頭に３７５ｋｇもの炸薬を積んだ『ＭＫ．１５魚雷』が２本が『摩耶』を目指す。

「来ないでよ！！」

摩耶の声に反して突進してくる魚雷。摩耶の顔が引きつる。

「摩耶！！」

急に高雄が転移して摩耶を抱きしめる。小さな、でも大きい命が恐怖に震える。

『総員衝撃に備えろ！！』

そんな声が響く。魚雷と『摩耶』が接触する。魚雷の弾頭内の信管が衝撃によって、

ゴツン

「「・・・・・・あへ？」」

魚雷はしっかり『摩耶』に着弾した。しかし『ＭＫ．１５魚雷』は信管が不安定なもので、よく不発弾を生んだ。

「・・・よかった」

高雄が胸をなでおろす。

「お姉ちゃん着てくれてありがと・・・」

額に出た冷や汗を袖で拭く摩耶。だがその時、

ズバアアァァアァアン！！

戦艦『榛名』の艦体に高々と水柱がそそり立ち、『榛名』は急速に速度を落とす。だが被害はそれだけであった。

駆逐艦『グリーブス』

「1発だけか・・・」

「・・・ハイ！　間違いありません！！」

スプールアンスは頭痛のせいか頭を抑える。だがいつまでもそうしている訳にも行かない。

「煙幕を張って退避だ！！　なんとしても『カリフォルニア』たちをパールハーバーに連れ帰るんだ」

『グリーブス』の煙突から重油を不完全燃焼させた黒煙のカーテンを張り、アメリカ太平洋艦隊は闇に消えて行った。

第３１話　決着（後書き）

作者「ここまで読んでくだらり、お疲れ様です」

大和「次で最終回なんですね？」

作者「その予定です」

サウスダコタ「それで今度はどんなの書くの？」
→例によって頭に輪があるサウスダコタ。

大和「次は潜水艦の話でも書きますか？」

作者「・・・用語が良く分かりませんし・・・無理ですね」

サウスダコタ「自衛隊とかは？」

作者「もっと分かりません・・・」

？？？「なら私達の話はどうだ作者」
→陸軍の軍服を着た長髪の少女（１６・７歳くらい）

大和「・・・どなたです？」

ヨヒト「大日本帝國陸軍の『試製４１ｃｍ榴弾砲』の砲魂だ」

作者「お、お久しぶりですねヨヒトさん」

ヨヒト「私達の『砲魂決戦物語』の修正はどうなっている？」

作者「そ、それは・・・」

ヨヒト「どうなんだ？」

作者「・・・修正は・・・」

ヨヒト「修正は？」

作者「・・・・・進んでいませ・・・」

ズズーン！！

ヨヒト「そろそろ私は帰ろう」

サウスダコタ「・・・なんだったの？」

大和「分かりません、それでは読者の皆様、ご意見・ご感想を待ってます」

第３２話　決戦の果て（前書き）

以前にサブタイトルを『艦隊決戦物語』としてしまい、「やべ・・・・サブタイトルどうしよ・・・」となった小澤です（代案は思いつかず『決戦の果て』となりました）。
こんな作者ですが、今まで本当にありがとうございました。

第３２話　決戦の果て

１９４２年７月１８日午前

戦艦『大和』

「報告！！　敵重巡（軽巡の誤認）部隊は第２水雷戦隊の追撃を受けていましたが、先ほど見失ったと無電がありました」

伝声管から響く通信長の声。

「三川中将の第３戦隊はどうなった？」

黒島が垢の付いた顔を手でなすりながら聞く。

「敵駆逐艦の一斉雷撃で回避運動中に敵艦隊を見失い、現在も水偵を使って捜索中です」

「被害はどうだ？」

「戦艦『榛名』大破、航行不能のため、重巡たちが曳航しています。戦艦『金剛』大破、しかし自力航行は出来るもよう、その他の艦は小破ないし中破のようです」

「敵はどれ位の被害を被ったかは分かるか？」

「『オクラホマ』級戦艦を１隻撃沈、『テネシー』級『ペンシルヴァニア』級戦艦をそれぞれ大破、他は中破ないし大破で遁走中です」

それを聞いた山本は夜戦艦橋の窓からまだ闇に沈んだ海を見ながら、

「艦隊を終結させてくれ、後のことは西村君に任せよう」

決戦の終わりを告げた。

軽巡『那珂』

西村祥司（にしむらしょうじ）少将率いる第４水雷戦隊と重雷装艦の『北上』『大井』はギルバート諸島からマーシャル諸島を経由して北上、主隊の東方

約２００海里地点に到達していた。
本来の『漸減邀撃作戦』の場合だと第９戦隊は、主隊の決戦前に重巡と合同で夜戦を仕掛けるはずだったが、その夜戦が中止されたので、こうして主隊の決戦後に戦場に参入して来たのだ。

「・・・艦生には決断を迫られる時がある」
第４水雷戦隊の旗艦『那珂（なか）』の重巡などと比べると小さい艦橋に声が漏れる。
「その決断は１度きりで、一度決めてしまえばもう、後には戻れない。」
その艦橋には複数の艦橋職員に混じった少女が３人と士官服を着た５０歳半ばの男性が円と緊張した空気を作っていた。
「それが指揮官、その命令で部下や己、または国家の興廃が決まる」
静かに呟いているのはこの『北上』の艦魂、北上。長門のように髪はセミロングで年は１４・５歳。周りの少女も同じくらいの歳だ。
「すなわち、我々はあらゆる事態を想定し・・・」
「北上さん・・・」
翔鶴のように髪をおだんごにした少女――『那珂』の艦魂が那珂の話を止める。
「？　どうしました？」
疑問が満載の那珂。
「・・・演説は良いから私のジョーカーを引いて」
「そうだ北上、３０分くらい喋ってるぞ」
順に那珂、西村少将。今４人は、『ババ抜き』をしていた。
「姉さんがやろうって言い出したのに・・・ほら、ちゃっちゃと引く！」
陸奥のように長髪の少女――大井が呆れた口調で喋る。
「ま、待って！！　もう少し！！」
「もぉ、姉さんはそうやって何時までも悩んでいるから長門参謀長のようになれないのよ」

北上も長門のように賭博を死ぬほど愛している。だが長門のように賭博への愛情と実力は比例していない。
「そこ！！　喋るな！！」
「地の文に突っ込んでないで早く選択してよ北上さん」
那珂の手に握られる2枚のトランプ。
ドッチダ？　北上の頭を掠める文字。
左か・・・ん？　前回は確か左だった、と言うことは・・・いや！　待て！　右と見せかけての左か？　・・・ハッ！　それを読んだ右だな！！　この勝負もらったぞ那珂！！　・・・うーん、でもなぁ・・・。
「敵大艦隊発見！！　前方およそ2万！！」
見張り員の報告。
「敵の機動部隊か！？」
西村の緊張した声。この西村艦隊の作戦目標は敵の残存艦隊の殲滅。夜戦や昼戦で逃した機動部隊や戦艦部隊の後始末をすることになっていた。
「・・・いえッ！！　敵艦隊の数は１００隻以上！！　恐らく輸送船団です！！」
これらの船団はフィリピン奪還を目指すアメリカ陸軍の将校や戦車・重砲に食料と燃料を積んでいた。
「機動部隊じゃないの・・・」
残念そうに言う大井。
「だが見逃す事は出来ん。さて、一旦お開きだな、さぁ、帰った」
西村は自分の戦闘帽を被りなおして双眼鏡を自分の目に押し当てる。
「ふ、ふふふ、運が良かったわね那珂」
「・・・北上さんにだけには言われたく無いですよ・・・」
呆れを通り越した目の那珂、冷や汗ダクダクの北上、それを苦笑いで見つめる大井。
「じゃ、みんなの奮闘を期待しているよ」

西村の声を聞いたあと、２つの転移の光が灯った。

「・・・なんだ？　あれ」

「陸軍の俺に聞くなよ、どうせ友軍だろ？」

闇の中を動く『何か』。どうやら近づいてくるようだ。その時、ブザーがけたたましく騒ぎ出す。

『敵襲！！　ジャップだ！！』

慌しく動き出す輸送船団。もちろん護衛の駆逐艦が３０隻居るが、夜戦に化け物並み秀でている日本海軍と違い、レーダーも搭載していないアメリカ海軍の駆逐艦は圧倒的に不利だった。

「さて、覚悟してもらうぞアメ公ども！！」

冷や汗から不敵な笑みが顔に出ている北上。

彼女と妹の大井の２人はこの日のために改装されていた。

『九三式酸素魚雷』の凄まじい破壊力を手に入れた日本海軍はこれを海戦で一気に発射、敵艦隊を一網打尽にしよと考えた。

その思想が形になったのが『北上』『大井』の２隻。彼女達には４連装魚雷発射管がそれぞれ１０基、４０本の魚雷の運用が可能と言う反則的な軍艦だ。

「テェー！！」

艦長の叫び声でスイッチの入った魚雷が発射管の中から圧搾空気で押し出される。２隻で８０本。それが装甲が無い輸送船や駆逐艦を襲った。

戦艦『大和』

「・・・終わりましたな」

空が星条旗から日章旗に変わろうとする時、西村少将から敵の輸

送船およそ３０隻以上撃沈、撃破２０隻以上と無電が飛んで着ていた。
「長官、これで敵のフィリピン奪還を阻止いたしました。作戦は成功です！！」
嬉しそうな黒島先任参謀。
「バカを言え、今回の作戦はアメリカ太平洋艦隊の壊滅が目標だ！我々は戦術で勝ったが、作戦では我々の負けだよ」
はぁ、と小さく返す黒島。
「アメリカは強い。いずれこれ以上の大艦隊が押し寄せるぞ、その時までに修理を建艦を早めなくてはならない」
「そうですね、長官」
松田が山本の顔を伺うと少し、何かを思い出しているような顔だった。

「・・・終わったんですね」
「終わったな」
また新しい日差しが注ぎ込まれる測敵所。
「これで戦争は終わるのでしょうか？」
「・・・・・・分からないな。二曹の俺じゃ上が何を考えているのか分からないからな」
ジリジリと昨日のように昇る朝日。だが昨日の違ってそれを見る人数は減っていた。
「・・・・・・」
早川は霧島から渡された短刀を右手に持ち、それを見つめる。この前、一緒に笑っていた彼女達、でも、もう居ない彼女たち。
「・・・逝ってしまったんだな・・・」
いつもどおり霧島や陸奥、榛名たちが転移して来て大和と壮絶なバトル（？）をする日常。だが太陽はいつも通り昇るのにその日常はもう来ない。

いつも通り空に上がる太陽が少し忌々しい。
「・・・・・・早川二曹・・・」
大和が小さい声を上げる。
「私は生き残れました・・・早川二曹と一緒に」
「・・・・・・」
その言葉に何時かの夢が蘇る。
「生きてるからには、逝ってしまった人の分まで生きるんです」
いつの間にこんなに大きくなったのだろうか？　と早川の頭に疑問が横切る。
「あ！　そろそろ部屋に行かないと・・・長門さんに怒られてしまいますね」
小走りに早川の脇を通りずぎる大和。
そうだ、大和が言ったように、俺たちは霧島達（あいつら）の分まで生きなくてはならないんだ。
決意を新たに早川が立ち上がった時、
「きゃ！！」
大和の小さい悲鳴。
「ど、どうした！？」
慌てて振り返る早川。
「・・・・・・転んじゃいました・・・」
そこには平らな鉄の床で転んでしまった大和が居た。なんで転んだのであろう？
「たく・・・ほら・・・」
早川が優しく大和に手を差し出す。それに少し照れたよう様に手を重ねる大和。
その一部始終を、ゆっくり高度を取る太陽が、眺めていた。

第３２話　決戦の果て（後書き）

作者「今まで『艦隊決戦物語』を読んで下さり、本当にありがとうございました」

大和「誤字脱字や順位が低いのをキャラが原因だと言ったり最後がなんか一度見たことある落ちですしそれから・・・」

サウスダコタ「まぁそんな事は読者の皆様が知っているんだから・・・それで今度は何を書くのですか？」

作者「・・・・・・未定です・・・」

大和・サウスダコタ「「・・・・・・」」

？？？「だったら私の小説を書くんだ作者」

大和「確か・・・ヨヒトさん」

ヨヒト「私の小説を書くんだ」

作者「前回は『私たち』の小説でしたよ・・・って軍刀抜かないでください！！」

ヨヒト「じゃ、三八式歩兵銃はだめか？　（ちなみに着剣しているぞ）」

？？？「そこ！　待て！」

？？？「そうそう待ってよ！！」

大和「今度はドイツ海軍のシャルンホルストさんにイタリア海軍のヴェネットさん・・・どうしました？」

シャルンホルスト（以下シャルン）「次作はこの私、『シャルンホルスト』の物語を・・・」

ヴェネット「私にもっとパスタを食べさせろー！！」

大和「・・・とりあえずヴェネットさんは帰りましょう・・・」

ヨヒト「ドイツ人に主人公が務まるか」

シャルン「短編ヒロインが舐めたことを・・・」

ヨヒト「貴様よりかは台詞が多いぞ、私は」

シャルン「貴様こそキャラがおかしいから作者が修正に困っているのだろう」

ヨヒト「話し合いでは決着がつかなそうだ・・・実力行使とさせてもらおう」

ガシャ！

→『三八式歩兵銃』のボルトを操作する音。

シャルン「望むところだ劣等種」

ガシャ！

→『Ｋａｒ９８ｋ』のボルトを操作する音。

大和「え？　あの・・・」

ガチャ・・・。
→扉の開く音。

翡翠「ＳＯＳ団率いて遊びに攻めて来よったよ扶桑」

クイーン・エリザベス（以下ＱＥ）「邪魔するぞ」

瑞穂「遊びに来ましたよ足柄さん」
→零戦先生のＳＯＳ団のメンバー。

パンパン！！

翡翠「あのー」

ヨヒト「弾もってこい弾！！」

シャルン「機関銃！！　弾幕張れ！！」

ダダダ、ダダダ・・・ドガーン。

ＱＥ「すまんが・・・」

ヨヒト「ふふふ、『オイ車（１２０トン戦車）』の１０糎加農砲の威力はどうだ！！」

シャルン「クソ、戦車か。『マウス』を呼べ！！　１２．８ｃｍ戦車砲で敵の度肝を抜くんだ！！」

瑞穂「あのちょっと・・・」

ドガーン！！　ズズーン！！

ヨヒト「試製四式噴進砲持って来い！！」

シャルン「パンツァーファウスト持って来い！！」

３人「「「・・・・・・」」」

ヨヒト・シャルン「「行く・・・」」

バキ！

ドゴ！！

グチャ（？）！！！

翡翠「いや～ちーとばかし殺(や)り過ぎたかな～」

ＱＥ「団長、人の形をしていません」

足柄「あ！　よく来て・・・くれましたね・・・（あの赤黒い物体は何なんだろう・・・）」

瑞穂「足柄さん始めまして、ＳＯＳ団『突撃１番隊長』の瑞穂です」

足柄「始めまして、足柄です。突然で悪いんですが突撃１番隊長って何ですか？」

瑞穂「・・・・・・」

足柄「・・・スイマセン、さっきの質問忘れてください」

山城「おぉ、同志諸君！！」

伊吹「皆さん来てくださってありがとうございます」

QE「レパルスか、海戦で疲れたであろう」

伊吹「イエイエそんなぁ」

QE「それでは英国自慢のこのメイド服を早速、大和に・・・」
→可愛らしいフリルなどが付いたフレンチメイド服を取り出すQE。

山城「早まるな！！　本場イギリスならヴィクトリアンメイドだろ！！」

翡翠「レッド・・・その考えは古くさい、今はフレンチメイドや・・・そろそろ認めたらどう？」

山城「ぶ、ブルー！　イエローはどうだ？　なぁ・・・」

足柄「フレンチメイドのほうが好きです」
キッパリ。

山城「即答された・・・」

翡翠「やっぱ、メイドはフレンチメイドだな」

山城「そ、そんな事・・・」

瑞穂「まぁとりあえず大和さんに来てもらいましょう」

大和「もう嫌ですよ!!　お嫁に行けなくなってしまいます!!」

長門「お!　みんあ盛り上がっているな」

大和「最近出番が少ない長門さん・・・お願いです助けてください!!」

長門「最初の方に私が気にして居る事が・・・そうだな・・・そうだ!　私の悲願の夢だった他の艦魂と勝負・・・おまけに大和の助けとして7日間ポーカー大会をしよう!!」

大和「おまけって・・・」

長門「さぁ、行くぞみんな!!　山城と足柄とレパルスも来い!あと武蔵や北上を呼ばなくては・・・うふふふ・・・」

→スイッチの入った長門。

翡翠「あ!　ちょ!　うちはやりたくない!!」

QE「おい!　我を放せ!!　大和にコスプレが・・・」

瑞穂「う～」

伊吹「しょうがないな～」

山城「長門！　離して！　お願い！！」

足柄「スイッチの入った長門参謀長を止められはしませんよ団長・・・」

大和「・・・助かったぁー・・・。

皆様、今まで『艦隊決戦物語』を読んで下さり、本当にありがとうございました。皆様のおかげで無事（？）に完結することが出来ました。

作者がこの小説を投稿した時、

『やべぇ、読者数が少ない・・・やっぱ連載を辞めようかな・・・』

と言っていました。ですが、ＰＶアクセス数７万３７４人、ユニークアクセス数２万５千５５３人となる事が出来ました。読者の皆様、本当にありがとうございました」

作者「おー大和、挨拶ご苦労様です」

大和「今度は作者ですよ」

作者「今まで読んでくださり、ありがとうございます。これからは『艦隊決戦物語』の誤字脱字の修正を行って行きます」

大和「それが終わったらどうするんです？」

作者「・・・・・・予定ですが、以前削除した『砲魂決戦物語』の投稿をやるかも知れません」

大和「思えば去年の１０月、黒鉄先生の作品にはまって思いつきで書き始めたんですよね、それからいろんな人に迷惑掛けて・・・」

作者「も、申し訳ありません」

大和「それでは皆さん、今まで・・・」

作者「それでは皆さん、『艦隊決戦物語５２型』でお会いしましょう！！」

大和「５２型？」

作者「はい５２型！　定期テストが近いんで投稿は来月くらいかと」

大和「内容は・・・」

作者「『艦隊決戦物語』の続編です。あ！　べ、別にキャラ考えるのが面倒とかそう言うんじゃ無く・・・」

ズズーン！！

大和「まったく、最終回、最終回って『銀×』ですか・・・。さて読者の皆様、艦魂作家の皆様、今まで本当にありがとうございました。そしてこれからも『艦隊決戦物語』を、どうか、宜しくお願い致します」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2618f/

艦隊決戦物語

2010年10月8日13時22分発行